

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 695 集

ふしつだて
伏津館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 695 集

伏津館跡発掘調査報告書

2019

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

2019

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

伏津館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査





遺跡遠景（北西から）



遺跡遠景（西から）

巻頭カラー1 遺跡遠景



通路俯瞰（北西から）

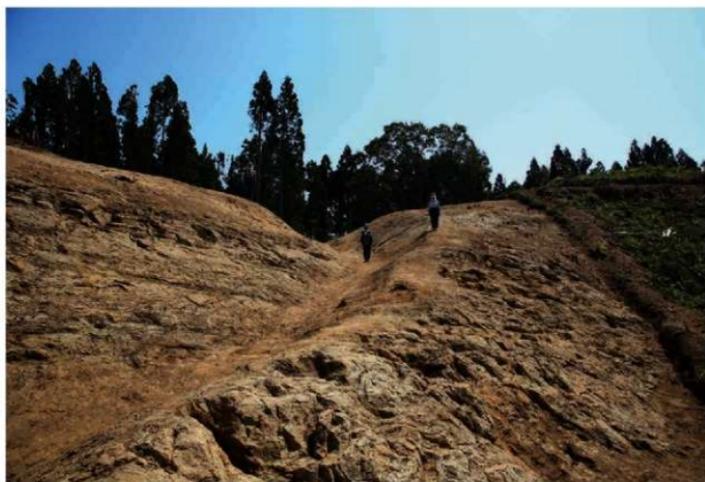


通路俯瞰（南東から）

巻頭カラー2 調査前俯瞰



巻頭カラー3 平成25・26年度調査区全景（直上・上が北）



SD 01 堀跡



土塁 1

巻頭カラー4 検出遺構 1



S B 02 掘立柱建物跡



S B 04 掘立柱建物跡

巻頭カラー5 検出遺構2



調査区全景（北西から）



調査区全景（直上・上が北）

巻頭カラー6 平成29年度調査区全景



出土した茶道具



出土した文房具

巻頭カラー7 出土遺物1



出土した青銅製鍍金目貫



出土した青銅製花瓶

巻頭カラー 8 出土遺物 2

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県九戸郡野田村の三陸沿岸道路建設に関連して平成25・26・29年度に発掘調査を実施した、伏津館跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代の狩り場、弥生時代の集落、古代の集落、そして室町時代には城館が造営されていたことが明らかとなり、長年に亘ってこの土地が利用されてきたことが分かりました。また、室町時代の出土遺物からは、該期の三陸沿岸地域の交易ルートを考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、野田村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県九戸郡野田村大字野田第21地割79-1ほかには所在する伏津館跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、三陸沿岸道路施工に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導・調整のもとに、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードはJG50-2353、遺跡略号はFD-13・FD-14・FD-17である。
- 4 年度ごとの野外調査及び室内整理期間、遺跡略号、調査担当者は次の通りである。

年度	遺跡略号	区分	期間	面積	担当者
H25	FD-13	野外調査	2013.09.02～11.28	7,300	北田 勲・三好孝一・村上祐
		室内整理	2013.12.01～2014.03.31	-	三好孝一
H26	FD-14	野外調査	2014.04.10～08.18	7,000	北田 勲・伊藤 武・佐々木あゆみ
		室内整理	2014.12.01～2015.03.31	-	伊藤 武
H29	FD-17	野外調査	2017.10.16～12.07	850	北田 勲・藤田崇志・佐藤桃子
		室内整理	2018.01.01～2018.03.31	-	佐藤桃子

- 5 本報告書の作成は、北田・三好・伊藤が本文原稿、北田・三好・伊藤・佐々木・佐藤が遺構図化、北田・三好・伊藤が遺物図化を行い、各々に文責を記した。また1調査に至る経過は三陸国道事務所、VI自然科学的分析は1を株式会社加速器分析研究所、2-1を古代の森研究会、2-2・3を株式会社古環境研究所、4を公益財団法人元興寺文化財研究所が行った。全体の編集は北田が行った。
- 6 業務委託は、以下の通りである。

項目	委託先	委託内容
(1)	北宋調査設計株式会社	座標原点の測量・地形測量 (H25・26)
(2)	東邦航空株式会社	航空写真撮影
(3)	株式会社加速器分析研究所	放射性炭素年代測定
(4)	古代の森研究会	炭化材同定
(5)	株式会社古環境研究所	貝類同定
(6)	公益財団法人元興寺文化財研究所	金属製品の保存処理・目録成分分析
(7)	岩手県立博物館	金属製品の保存処理
(8)	花崗岩研究会	石器類石材同定

- 7 本書では以下の地形図を使用した。
 - ・1/25,000 地形図陸中野田】(国土地理院)
 - ・1/50,000 地形図陸中野田】(国土地理院)
- 8 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関・方々から御指導・ご助言・ご協力をいただいた(敬称略・五十音順)。

井上雅孝(野田村教育委員会)、大立目一((公財)京都市埋蔵文化財研究所)、菅野文夫(岩手大学)、木村孝一郎(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、佐伯博光((公財)大阪府文化財センター)、佐々木和久(久慈市商工観光課)、島崎久恵((公財)大阪府文化財センター)、新海正博((公財)大阪府文化財センター)、早田勉((株)火山灰考古学研究所)、塚本敏夫((公財)元興寺文化財研究所)、寺前公基((公財)日本習字教育財団観峰館)、箱崎和久(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、平尾政幸((公財)京都市埋蔵文化財研究所)、藤澤良祐(愛知学院大学)、降矢哲男(一般財

団法人今日庵茶道資料館)、水野和雄(福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館前館長)、南孝雄((公財)京都府埋蔵文化財研究所)、森村健一(堺市立泉北すえむら資料館)、早稲田大学図書館

- 9 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果の一部については、平成25・26・29年度調査概報(岩埋文第630・647・692集)、現地説明会資料、平成25・26年度野田村考古学フォーラム資料、発掘された日本列島2018等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

凡 例

- 1 遺構図の用例は次の通りである(凡例図参照)。
 - (1) 遺構実測図の縮尺は曲輪・土塁・切岸・武者走り状遺構平面図1/200・1/300、同断面図1/60・1/100、堀跡1/60・1/200、掘立柱建物跡1/60・1/80・1/100、塹穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構・炭窯の平面・断面図1/40・1/60、溝跡平面図・断面図1/40・1/60・1/100、焼土・柱穴状ビット平面・断面図1/30・1/40で表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各国版にスケール及び縮尺を付した。
 - (2) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した。
 - (3) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。
 - (4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- 2 遺物実測図の用例は次の通りである(凡例図参照)。
 - (1) 遺物実測図の縮尺は、陶磁器1/2・1/3・1/6、中世土器1/2・1/4、石製品1/2・1/3・1/4、金属製品1/2・2/3、銭貨2/3、縄文・弥生土器・土師器1/3、石器2/3・1/3、土製品1/2等で表した。
 - (2) スクリーントーンを使用して、遺物の状態を表した。
- 3 写真図版の用例は次の通りである。
 - (1) 遺物写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。
 - (2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

	焼土(弱)	K20%
	焼土(強)	K40%
	炭化物	K60%
	柱あたり	K60%

遺物使用トーン凡例

	石器黒色範囲	K80%
	石器磨痕	K50%
	石器破痕	K30%

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地・環境	2
1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	2
(1)地 形	2
(2)基本層序	5
3 歴史的環境	6
III 調査・整理の方法	11
1 野外調査の方法	11
(1)調査の方法	11
(2)野外調査の経過	11
2 整理の方法	13
(1)遺構の整理	13
(2)遺物の整理	13
(3)遺物写真の撮影	13
(4)整理の経過	13
3 広報活動	14
IV 平成25・26年度の調査	15
1 概 要	15
2 縄 張 り	16
3 遺 構	22
(1)曲輪1の遺構	22
(2)曲輪2の遺構	49
(3)切岸1周辺の遺構	58
(4)SD01堀跡周辺の遺構	63
(5)曲輪3周辺の遺構	64
(6)曲輪6・7の遺構	73
(7)北側緩斜面の遺構	78
(8)南側谷部の遺構	78
4 出土遺物	82
(1)縄文・弥生時代	82
(2)室町時代	82

V	平成29年度の調査	97
1	概要	97
2	遺構	99
	(1)弥生時代	99
	(2)古代	102
3	出土遺物	114
	(1)弥生時代	114
	(2)古代	114
VI	自然科学的分析	132
1	放射性炭素年代測定(AMS測定)	132
2-1	樹種同定(1)	138
2-2	樹種同定(2)	140
3	貝類・動物遺存体同定	143
4	目貫の成分分析	145
VII	総括	147
1	縄文・弥生時代	147
2	古代	147
3	室町時代	150
	(1)伏津館の変遷	150
	(2)室町時代後半の出土遺物	151
	報告書抄録	217

図版目次

凡例図	第40図	S D02堀跡、土塁2、曲輪3(1)	66
第1図 三陸沿岸道路事業図	第41図	曲輪3(2)	67
第2図 遺跡位置図	第42図	曲輪3(3)	68
第3図 周辺の地形図	第43図	S D02堀跡、土塁2、S K21土坑	70
第4図 地形分類図	第44図	武者走り状遺構1(第1期)	71
第5図 基本層序柱状模式図	第45図	曲輪4、武者走り状遺構1(第2期)	72
第6図 周辺の遺跡	第46図	曲輪6・7	74
第7図 現況地形測量図	第47図	北側緩斜面・南側谷部	75
第8図 縄張り図	第48図	その他の遺構(1)	76
第9図 調査区全体図	第49図	その他の遺構(2)	77
第10図 曲輪1(第1期)	第50図	その他の遺構(3)	79
第11図 曲輪1(第2期)、土塁1(1)	第51図	土砂崩れ痕1・2	80
第12図 曲輪1造成方法模式図	第52図	縄文・弥生土器、石器	82
第13図 曲輪1、土塁1(2)	第53図	陶磁器(1)	84
第14図 曲輪1、土塁1(3)	第54図	陶磁器(2)、土器	86
第15図 曲輪1、土塁1(4)	第55図	陶磁器(3)	87
第16図 S B01掘立柱建物跡(1)	第56図	森島中良著「借字帖・香風来亭集」掲載の 硯拓影	89
第17図 S B01掘立柱建物跡(2)	第57図	石製品(1)	90
第18図 S B04掘立柱建物跡(1)	第58図	石製品(2)	91
第19図 S B04掘立柱建物跡(2)	第59図	石製品(3)	92
第20図 S B05・06掘立柱建物跡	第60図	金属製品、銭貨	94
第21図 S B07掘立柱建物跡	第61図	平成29年度調査全体図	97
第22図 S B04周辺の遺構(1)	第62図	東壁・南壁断面	98
第23図 S B04周辺の遺構(2)	第63図	S I05竪穴住居跡	99
第24図 曲輪1(第1期)の遺構	第64図	S I05出土遺物	100
第25図 S B05・06周辺の遺構(1)	第65図	S I01竪穴住居跡(1)	101
第26図 S B05・06周辺の遺構(2)	第66図	S I01竪穴住居跡(2)	102
第27図 S B07周辺の遺構(1)	第67図	S I01出土遺物(1)	103
第28図 S B07周辺の遺構(2)	第68図	S I01出土遺物(2)	104
第29図 S B07周辺の遺構(3)	第69図	S I02竪穴住居跡(1)	105
第30図 曲輪2(1)	第70図	S I02竪穴住居跡(2)	106
第31図 曲輪2(2)	第71図	S I02出土遺物(1)	107
第32図 曲輪2の盛土・整地土範囲平面図と 断面模式図	第72図	S I03竪穴住居跡	108
第33図 S B02掘立柱建物跡	第73図	S I03出土遺物	109
第34図 S B03掘立柱建物跡	第74図	S I04竪穴住居跡	110
第35図 曲輪2のその他の遺構	第75図	S D18溝跡	111
第36図 切岸1周辺の遺構	第76図	S I04・S D18出土遺物	112
第37図 S D01堀跡、土塁3、武者走り状遺構2、 曲輪5	第77図	S F14焼土	113
第38図 S D01堀跡、土塁3、武者走り状遺構2	第78図	伏津館の変遷(第1期)	148
第39図 曲輪5	第79図	伏津館の変遷(第2期)	149
	第80図	曲輪2・S B02・03掘立柱建物の想定図	150
	第81図	室町時代の遺物集成	152

表 目 次

第1表	周辺の遺跡分布表	8	第10表	H25・26石器観察表	126
第2表	遺構名対応表	14	第11表	H29弥生土器観察表	126
第3表	柱穴状ピット計測表	117	第12表	H29石器観察表	127
第4表	H25・26陶磁器・土器観察表	120	第13表	H29土器観察表	128
第5表	H25・26石製品観察表	124	第14表	H29土製品観察表	131
第6表	H25・26金属製品観察表	124	第15表	H29石製品観察表	131
第7表	H25・26銭貨観察表	125	第16表	H29金属製品観察表	131
第8表	H25・26貝類・動物遺存体観察表	126	第17表	H29琥珀観察表	131
第9表	H25・26縄文・弥生土器観察表	126			

写 真 目 次

巻頭カラー1	遺跡遠景		写真図版16	S B07周辺の遺構(2)	172
巻頭カラー2	調査前俯瞰		写真図版17	S B07周辺の遺構(3)	173
巻頭カラー3	平成25・26年度調査区全景		写真図版18	S B07周辺の遺構(4)	174
巻頭カラー4	検出遺構1		写真図版19	S B07周辺の遺構(5)、 遺物出土状況	175
巻頭カラー5	検出遺構2		写真図版20	曲輪2	176
巻頭カラー6	平成29年度調査区全景		写真図版21	S B02掘立柱建物跡(1)	177
巻頭カラー7	出土遺物1		写真図版22	S B02掘立柱建物跡(2)	178
巻頭カラー8	出土遺物2		写真図版23	S B03掘立柱建物跡(1)	179
写真図版1	米極東空軍撮影航空写真	157	写真図版24	S B03掘立柱建物跡(2)、 S K08土坑	180
写真図版2	国土地理院撮影航空写真	158	写真図版25	曲輪2のその他の遺構	181
写真図版3	現況	159	写真図版26	切岸1、S D03溝跡	182
写真図版4	土塁1(1)	160	写真図版27	S D01堀跡(1)、土塁3	183
写真図版5	土塁1(2)、曲輪1	161	写真図版28	S D01堀跡(2)、武者走り状遺構2、 土塁2、S K21土坑	184
写真図版6	S B01掘立柱建物跡(1)	162	写真図版29	S D02堀跡	185
写真図版7	S B01掘立柱建物跡(2)	163	写真図版30	曲輪3	186
写真図版8	S B04掘立柱建物跡(1)	164	写真図版31	武者走り状遺構1、曲輪6・7	187
写真図版9	S B04掘立柱建物跡(2)	165	写真図版32	S K01-06-07・09陥し穴状遺構	188
写真図版10	S B04周辺の遺構(1)	166	写真図版33	S K03-05-11陥し穴状遺構	189
写真図版11	S B04周辺の遺構(2)、S D17溝跡	167	写真図版34	S K03-05-10-11-19陥し穴状遺構	190
写真図版12	S B05・06掘立柱建物跡	168	写真図版35	S W01-02炭竈跡、 南側谷部基本層序ほか	191
写真図版13	S B05・06周辺の遺構	169			
写真図版14	S B07掘立柱建物跡	170			
写真図版15	S B07周辺の遺構(1)	171			

写真図版36	北傾緩斜面の遺構	192	写真図版49	平成25・26年度出土遺物(2)	205
写真図版37	S I 05竪穴住居跡	193	写真図版50	平成25・26年度出土遺物(3)	206
写真図版38	S I 01竪穴住居跡(1)	194	写真図版51	平成25・26年度出土遺物(4)	207
写真図版39	S I 01竪穴住居跡(2)	195	写真図版52	平成25・26年度出土遺物(5)	208
写真図版40	S I 02竪穴住居跡(1)	196	写真図版53	平成25・26年度出土遺物(6)	209
写真図版41	S I 02竪穴住居跡(2)	197	写真図版54	平成25・26年度出土遺物(7)	210
写真図版42	S I 03竪穴住居跡(1)	198	写真図版55	平成25・26年度出土遺物(8)、 平成29年度出土遺物(1)	211
写真図版43	S I 03竪穴住居跡(2)	199	写真図版56	平成29年度出土遺物(2)	212
写真図版44	S I 04竪穴住居跡(1)	200	写真図版57	平成29年度出土遺物(3)	213
写真図版45	S I 04竪穴住居跡(2)	201	写真図版58	平成29年度出土遺物(4)	214
写真図版46	S D18溝跡	202	写真図版59	平成29年度出土遺物(5)	215
写真図版47	S F14焼土・東壁・南壁断面	203	写真図版60	平成29年度出土遺物(6)	216
写真図版48	平成25・26年度出土遺物(1)	204			

I 調査に至る経過

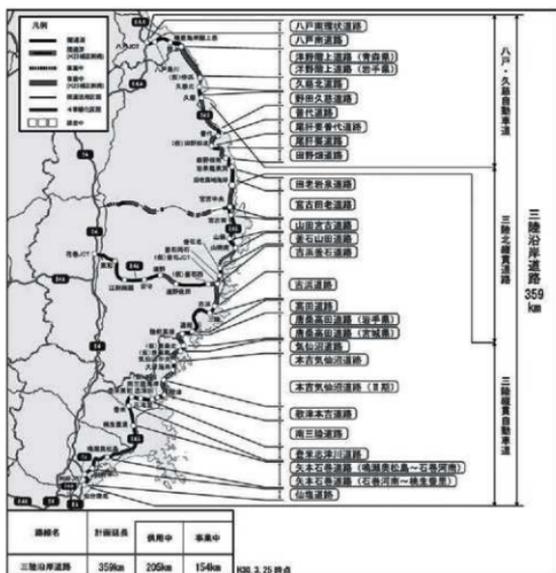
伏津館跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(晋代～久慈)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年12月18日付け国東整陸二調第853-2号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月31日に試掘調査を行い、平成26年2月15日付け教生第1562号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、各年度の平成25年4月1日、平成26年4月1日、平成29年4月3日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



国土交通省東北地方整備局ホームページから転載

第1図 三陸沿岸道路事業図

II 遺跡の立地・環境

1 遺跡の位置

伏拝館跡は岩手県九戸郡野田村大字野田第21地割79-1ほかの所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図 NK-54-18-4(八戸4号)「陸中野田」の図幅に含まれ、北緯40度06分38秒、東経141度48分28秒に位置する。

遺跡は、野田村北部の中心市街地西側に位置しており、野田村役場から西に約800mの独立した丘陵上に立地している。現況は山林で、標高は27～55mである。遺跡は、宇部川の支流である北側の秋田川と南側の明内川に挟まれている。

第2図に示した通り、野田村は岩手県の北東部に位置し、九戸郡内では南東端に位置している。九戸郡の近世における群像は、北は三戸郡、西は二戸郡、南は岩手郡・閉伊郡に接していたが、平成18年に新制久慈市の発足(山形村と合併)によって、野田村と軽米町、洋野町(種市町と大野村が合併)、九戸村に分けられた。現在の九戸郡は、久慈市が離脱したことによって野田村を含む二町二村となっている。

野田村は、1889(明治22)年の町村制によって南にある玉川村と合併して発足した。江戸時代初期までは、西は上戸鎮村と下戸鎮村(現久慈市)、南は玉川村に接しており、北東の藩営牧野三崎野と宇部川中流域の宇部村(いずれも現久慈市)も村域に含まれていた(平凡社 1990)。現在は、東部は太平洋に面し、北～西部は久慈市、南部は下閉伊郡普代村・岩泉町に接しており、東西約11.3km、南北約13.8kmの村域で、総面積は80.83km²である。西部は北上高地に属し、東は海岸段丘が続き、宇部川・泉沢川・玉川・安家川などの河川が西から東へ流れ、太平洋に注いでいる。宇部川・泉沢川の下流域にわずかに平地が見られるが、8割近くを山林原野が占めている。

参考文献

平凡社 1990 『岩手県の地名』

2 地理的環境

(1) 地形

遺跡の所在する野田村は、南北に長い卵形をした北上山地の東側を縁取る三陸海岸北部地域に位置している。

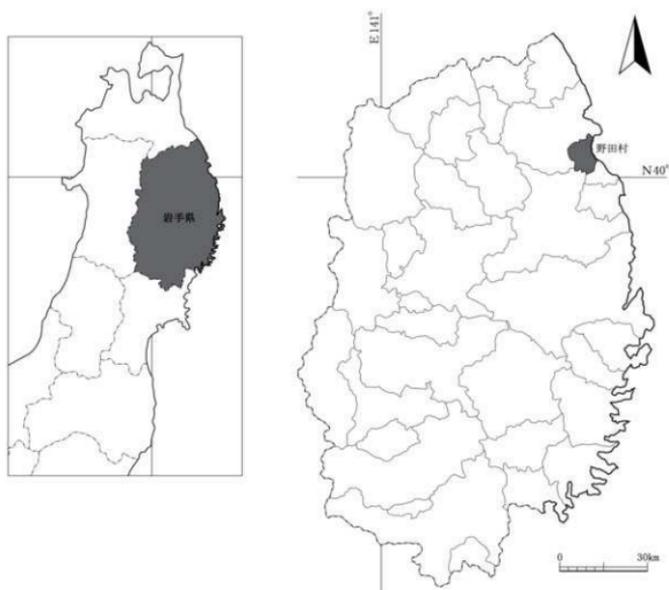
三陸海岸の海岸線の北半部は、あまり細かな湾入が見られず、切り立った海食崖が続くのに対し、宮古より以南では海岸線は屈曲に富み、数多くの湾入と岬が連なるリアス式海岸が発達している。

三陸海岸北部と南部の地形的差違は、鮮新世末を中心に進行した北上山地の曲隆に伴う海岸部の沈降が南部ほど大きかったことが最大の要因となっている。さらに海岸部が隆起に転じ、海成段丘の形成されはじめる中期更新世以降、海成段丘群の分布から推定すると、北部ほど隆起量の大きい傾動運動(宮古南方では沈降傾向)が進行したと推定される。

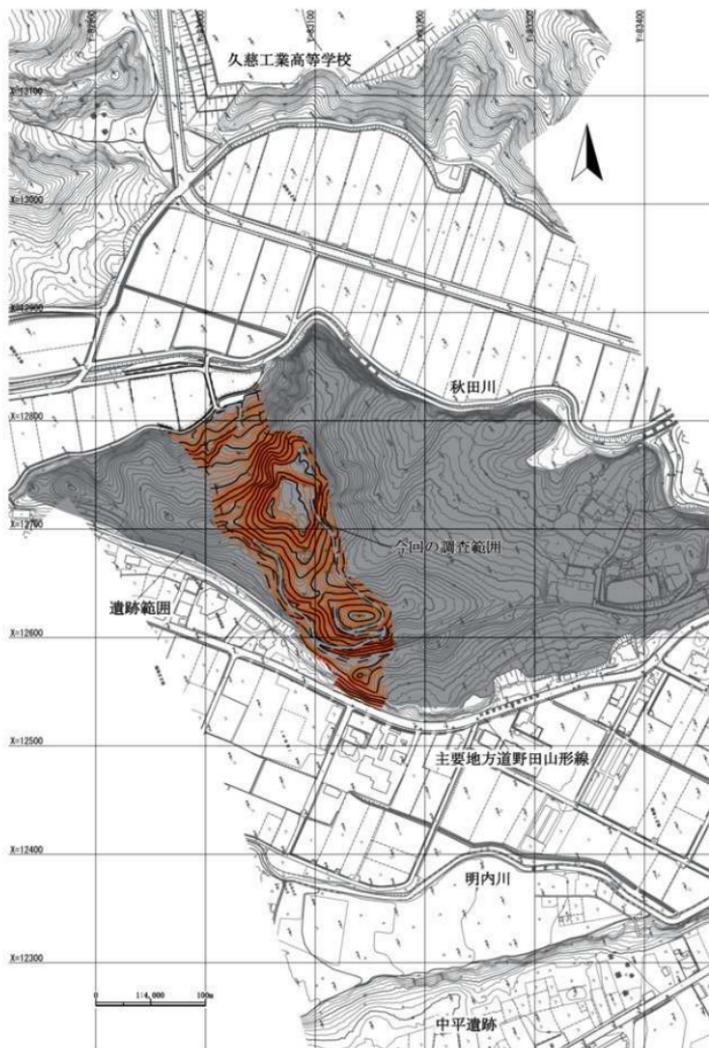
北部の海岸部は、中・古生層の硬岩からなる南部海岸に比較し、侵食されやすい花崗岩や白亜紀層が海食台形成に好都合であったと推定される(2005小池)。

このように、三陸海岸北部では、海食崖の発達する直線的な海岸線と、その背後に更新世中・後期の海成段丘群が発達する。このため、海岸に沿っては広い台地状の平坦地が開け、河川は深い谷となって海に注いでいる(2005小池・宮内)。

三陸海岸北部の野田村地域はまさに典型的で、やや弧を描く海岸線である十府ヶ浦の背後には水無



第2図 遺跡位置図



第3図 周辺の地形図

面からなる海成段丘群が発達し、本遺跡が乗る台地状の平坦地が開けており、また明内川や泉沢川によって開析された段丘が河川沿いに認められる地形となっている。北側の野田港付近や南側の玉川などは海食崖が発達している。

平野は、十府ヶ浦に注ぐ宇部川の流域と、明内川、泉沢川、玉川、安家川の流域に若干見られ、この部分を中心に住宅が密集している。また、主要道もこの平野部分に整備されている。

第3図に遺跡周辺の地形、第4図に地形分類図を示した。前述の通り、遺跡の北側を東流する秋田川と南側を東流する明内川に挟まれた地形となっていることから、両河川による下方侵食によって開析されて残った河岸段丘と考えられる。現在の秋田川は、コンクリートで護岸されて遺跡のすぐ北側を流れているが、それ以前の侵食作用によって遺跡北側の急傾斜の崖地形を形成している。また、明内川は現在、遺跡から南側へ離れており、南側の段丘とのほぼ中央を流れているが、北側と同じく遺跡南側斜面上に急傾斜の崖地形を残している。ただし、北側よりも早い段階に南側へ流れを変えたことから、小さな平野ができたと考えられる。現在、主要地方道野田山形線が東西に走っているが、ここは盛岡城下から野田通代官所(現久慈市宇部町)を結ぶ野田街道と考えられており、江戸時代はもちろんそれ以前から沿岸部と内陸部を結ぶ道として利用されてきたと考えられる。

引用参考文献

- 岩手県企画開発室 1977 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中野田』
 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城雅彦編 2005 『日本の地形3 東北』(株)三秀舎
 小池一之 2005 『2リ阿斯海岸の発達する三陸海岸』『日本の地形3 東北』(株)三秀舎
 宮内崇徳 2005 『2(2)北上山地北部を崩り込む高位段丘群』『日本の地形3 東北』(株)三秀舎

(2) 基本層序

第5図に調査区北側の平成25・26年度調査区と調査区南端の平成29年度調査区の基本層序柱状模式図を示した。調査区北側の中世城館が構築された部分は、盛土や切り土などの普請が行われており、



第4図 地形分類図

図示した通りではない。中世以前の層序が確認できるのは、北側緩斜面や南側谷部、城館部分の盛土下層の旧表土以下に限られる。北側緩斜面や南側谷部においても、中世の城館造成による斜面上位からの流入土やそれ以前の斜面崩落土によって乱れている箇所が多い。中世の遺構は、表土直下で確認されることから、城館廃絶後は堆積土がほとんど発達しておらず、遺構形状が良好に残存している。

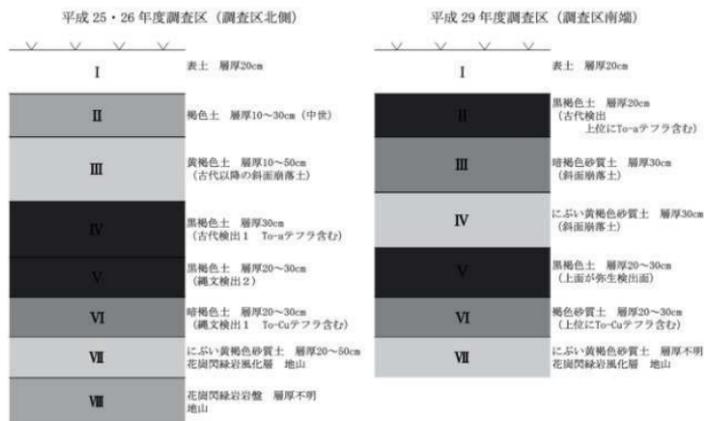
北側緩斜面では基本層序のほとんどを確認することができるが、斜面裾部においては表土直下に流入土・斜面崩落土が堆積している(写真図版36左下)。Ⅵ層に To-Cuテフラの混入が認められるが、北側緩斜面で検出された陥し穴状遺構はこれを切っていることから、掘り込みはⅤ層中と見ることができる。また、北側緩斜面北西側には To-Cuテフラを堆積する土砂崩れ痕1・2が検出されており、縄文時代前期中葉以前から斜面崩落が進んでいたと考えられる。この層位以下からは、遺構遺物ともに確認していない。

南側谷部でも、基本層序Ⅳ～Ⅶ層の堆積状況が確認できる。陥し穴状遺構はやはりⅤ層中からの掘り込みであると考えられる。また、表土直下には南側の丘陵からの斜面崩落土が認められ、中世城館側の斜面裾部には盛土や切り土など造成に関わる堆積が認められた。

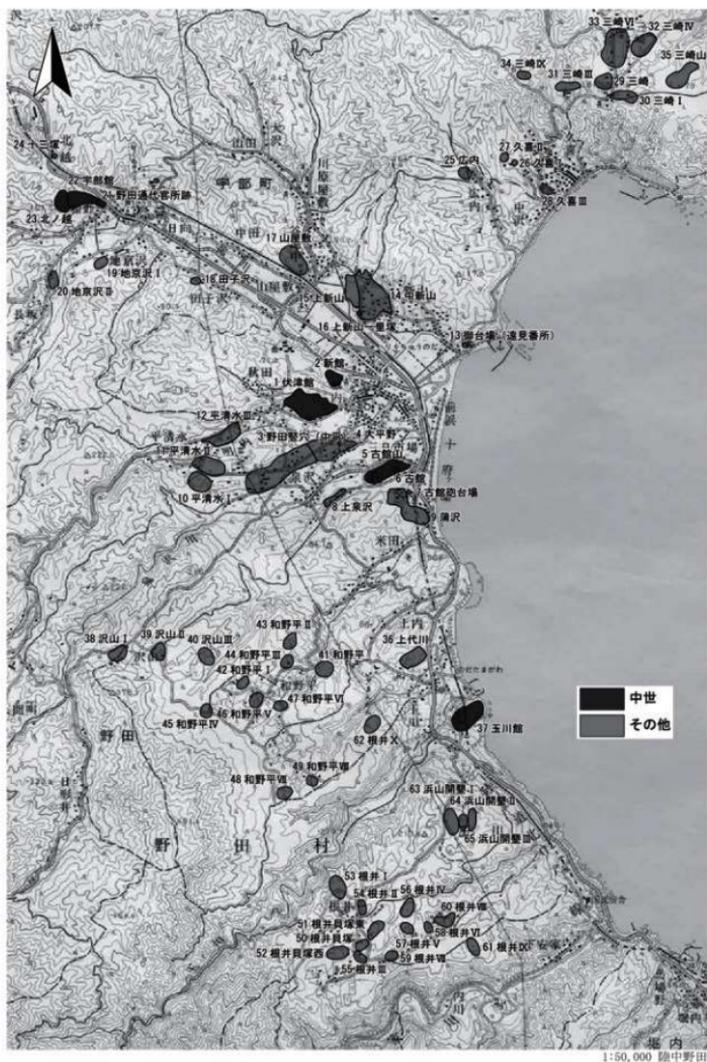
調査区南端の平成29年度調査区は、南側谷部から小高い丘陵を挟んだ飛び地である。このため、調査区北側の基本層序とは若干異なる。ただし、こちらも北側と同様に丘陵斜面からの崩落土が堆積しており、Ⅱ層黒褐色土とⅤ層黒褐色土の間に暗褐色及びにぶい黄褐色砂質土が堆積している。古代検出面までの堆積土は薄く、斜面下位は厚さを増すが表土直下に検出される。Ⅲ・Ⅳ層は斜面下位にのみ堆積しており、直下のⅤ層上面が弥生時代の遺構検出面となる。これより下層からは遺構遺物ともに確認していない。

3 歴史的環境

第6図、第1表に周辺の遺跡を示した。岩手県遺跡台帳(平成30年3月31日現在)によると、野田村には計46箇所の遺跡が登録されている。これと久慈市分の19箇所を加えた計65箇所を図表で掲載した。



第5図 基本層序柱状模式図



第6図 周辺の遺跡

3 歴史的環境

第1表 周辺の遺跡分布表

No.	遺跡No.	所在地	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	調査経緯	文献	備考
1	JG50-2353	野田村	伏津跡	城跡跡	縄文・弥生・古代・中世	陥し穴状遺構、壘穴住居跡、曲輪、堀跡、土塁、切印、武器土器、石器、陶器、瓦葺、茶臼、鏡、石鏡、金属製品など	59年調査、本報告	若手部文化館調査報告書(若手部文化館調査報告書第60号-64号-66号(複製))	伏津跡(上野田城)と統合して伏津跡(上)とする
2	JG50-2327	野田村	新館	城跡跡	中世	平場、土塁	59年調査、H24調査	野田村文調第3集	
3	JG60-0258	野田村	野田壘穴(中平)	集落跡	縄文・古代	壘穴住居跡、陥し穴、縄文土器、土師器、須恵器、鉄器	野田村教委 日考協 草間(1965) 野田村教委 草間(1969) 若手部学会 草間 H21.10.13～H21.10.23 発掘調査(縄文証人)、H24.9.20 縄文証人、H24.12.17～H25.1.11 発掘調査(縄文証人)	野田村中平遺跡(野田村教委 草間(1969) 日考年誌(日考協 1970)「中平・上明内調査概況(野田村教委 若手部史学 No.58)「若手部史学」1972)	昭和 28.4.5 指定史跡
4	JG60-0306	野田村	太平野	縄文・古代	壘穴住居跡、陥し穴、土坑、溝跡、土器	H21.12.7～H21.12.10発掘調査、H24.9.19(縄文証人)、H24.11.15～H24.12.14発掘調査(縄文証人)	野田村教委 青藤(1970) 葛藤 熊谷・高橋・小田野(1981～1984)	野田村文調第1村教委(1987) 若手部調査報告第3集(附録 1987)	
5	JG61-0033	野田村	吉原山	集落跡	縄文・古代	土師器、縄文(前期)瓦葺、柱跡	野田村教委 青藤(1970) 葛藤 熊谷・高橋・小田野(1981～1984)	野田村文調第1村教委(1987) 若手部調査報告第3集(附録 1987)	
6	JG61-0033	野田村	吉原	城跡跡	中世	堀	S59調査、壕溝		
7	JG61-0035	野田村	吉原砲台跡	砲台跡		砲台跡	S59調査、壕溝		
8	JG60-0367	野田村	土原沢	散布地・集落跡	縄文・古代	陥し穴状遺構、壘穴住居跡(古代)、縄文土器、土師器	H24(若手部試掘)、H26-27縄文調査	若文調第674集(若文調 2017)	
9	JG61-0076	野田村	藤沢	散布地	縄文・古代	壘穴住居跡、陥し穴、土坑、土器、石器、動物遺体	H24.10.16～18(若手部試掘)、H24.11.7～H24.12.26(若手部調査)	若文調第611集(若手部 2004)	縄文
10	JG60-0241	野田村	平清水1	散布地	縄文	縄文土器(後期)、土器	若教委(2000)	若文調第112集(若手部 2004)	縄文
11	JG60-0224	野田村	平清水2	散布地・集落跡	縄文・古代・平安	縄文土器(前期)土師器、石器、石鏡、滑石石、石製産物品、壘穴住居跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	H13.6～10(若手部調査 若教委 2000)、若文調(2001～2002)	若文調第112集(若手部 2004) 若文調第649集(若文調 2004)	縄文
12	JG50-2275	野田村	平清水3	集落	縄文・古代	土師器、兼手刀	H1289発掘 H25調査		
13	JG51-1192	野田村	新台場(遠見巻所)	砲台跡	土原		S50調査		
14	JG51-1032	野田村	中新山	散布地	縄文・古代	土師器、縄文土器、兼手刀	若教委(2007) H25(縄文証人)	若文調第128集(若手部 2008)	
15	JG50-1308	久慈市	上新山	集落跡	古代	土師器、壘穴住居跡	S52調査		
16	JG51-0051	野田村	上新山一里塚	一里塚	江戸		H25新発		
17	JG50-0361	久慈市	山所敷	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、壘穴住居跡	S49調査、H13(縄文証人)		
18	JG50-1300	久慈市	田子沢	散布地	縄文	縄文土器(前・後期)、石器			
19	JG50-0171	久慈市	地原沢1	散布地	縄文	縄文土器(後期)			
20	JG50-0097	久慈市	地原沢2	散布地	縄文	縄文土器(後期)			
21	JG50-0121	久慈市	野田通 代官所跡	中世	中世・近世	土塁	H36北ノ越遺跡及び7字部跡の発掘調査の際に確認		
22	JG50-0028	久慈市	宇部館(八幡館)	城跡跡	中世	二重堀切、土塁、平基、腰郭		若文調第654集(若文調 2016)	
23	JG50-0027	久慈市	北ノ越	集落跡	縄文・平安・中世	陥し穴、壘穴住居跡(縄文・平安)、壘穴建物跡(中世)、壘穴住居跡跡(中世)	H25.5.20～21、23(若手部)直井研施設に係る試掘調査により調査結果見、H26.5～9(若手部調査、H27(縄文証人))	若文調第654集(若文調 2016)	
24	JG45-2072	久慈市	十三塚	散布地	縄文	縄文土器(後期)、塚			
25	JG41-2192	野田村	宮内	散布地	縄文	縄文土器(中世)、石器	日考年 草間(1966)	日考年19(日考年 1971)	
26	JG41-2178	久慈市	久壽1	散布地	弥生	弥生土器			
27	JG41-2166	久慈市	久壽2	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)、土師器			

『岩手県中世城館跡分布調査報告書』によると、伏津館は野田村野田字伏津沢に所在し、標高50mの山頂に2郭。土塁と空堀がある。また、伏津館は安倍の臣、伏津新九郎忠信が居館としていたと記載されている(岩手県教委 1986)。伏津新九郎忠信については、『野田村の歴史ものがたり』にも記載されている(野田村 1989)、伏津館についての文献は皆無で館主など詳細は不明である。

野田村内では、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査が増加しており、調査成果の蓄積が近年急増している。

新館遺跡は、平成24年度に防災集団移転促進事業に伴う調査が行われ、16世紀以前の最高所に30×40mの楕円形の範囲で巡る堀跡のほか、16世紀代と考えられるテラス状遺構や掘立柱建物跡などの遺構が確認された。また、太平通寶(初鑄976年・北宋)や金を施した漆塗りの革製品である甲冑と見られる札が出土しており、AMS年代測定の結果、16世紀頃(安土桃山時代)に製作された可能性がある。新館は、16世紀末の野田城破却後に野田政親が館を設けた場所とされており、報告書ではこの可能性を指摘している(野田村 2013)。

宇部館跡・北ノ越遺跡は、平成26年に三陸沿岸道路建設事業に伴う調査が行われ、宇部館からは土塁2箇所、切岸2箇所、堀跡2条が確認され、形態的特徴から16世紀後半～末の普請と推定している。堀堆積土からは、16世紀代の明代の輸入染付皿や石製塔塙が出土している。また、堀を挟んだ西側の北ノ越遺跡からは、中世の堅穴建物跡6棟や掘立柱建物跡2棟、墓坑4基が確認されており、出土遺物から宇部館普請時期と同一の16世紀代と推定している(岩埋文 2016)。

蒲沢遺跡は、平成24年度に防災集団移転促進事業に伴う調査が行われ、古代の堅穴住居跡14棟のほか、縄文・弥生時代の堅穴住居跡6棟、陥し穴状遺構12基などが確認された。古代の堅穴住居跡は、古墳時代後期～奈良時代(7世紀前半～8世紀初頭)と考えられており、土師器の年代観から、I期(7世紀前半)、II期(7世紀中葉～後半)、III期(7世紀後半～8世紀初頭)に分けられている(野田村 2015)。

上泉沢遺跡は、平成26年度に三陸沿岸道路建設事業に伴う調査が行われ、古代の堅穴住居跡7棟のほか、縄文時代の陥し穴状遺構60基が確認された。古代の堅穴住居跡は重複せずに見つかっており、出土土師器から古墳時代後期～末に比定される5棟、奈良時代後半の1棟、出土遺物がなく不明な1棟に分けられている。古墳時代後期～末の堅穴住居跡は、大半が焼失していることから廃絶時の状況を良好に残しており、遺物が一括して出土している(岩埋文 2017)。

この他にも、震災復興個人住宅建設に伴う調査が中平遺跡、大平野遺跡、古館山遺跡などで複数回行われている(野田村 2014・2016)。また、平清水Ⅲ遺跡では報告書は未発行であるが平成25年度にはバイオマス発電所造成工事に伴う調査が行われ、古代の堅穴住居跡60棟が確認されており、特に土坑墓からは蕨手刀が出土している。三陸沿岸道路建設関係では、平成26・27・29・30年度には中平遺跡、平成28年度には上代川遺跡が調査されており、今後刊行予定となっている。

参考文献

- 岩手県教委 2018『岩手県遺跡情報検索システム(平成29年度データ)』CD-ROM版
 岩手県教委 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
 岩埋文 2016『宇部館跡・北ノ越遺跡発掘調査報告書』岩埋文調査報告第654集
 岩埋文 2017『上泉沢遺跡発掘調査報告書』岩埋文調査報告第674集
 野田村教委 2013『新館遺跡発掘調査報告書』野田村埋文調査報告第3集
 野田村教委 2014『中平遺跡84・128・309地点 大平野遺跡20地点 古館山遺跡61地点発掘調査報告書』野田村埋文調査報告第4集
 野田村教委 2015『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋文調査報告第5集

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査の方法

(1) 調査の方法

今回の調査は、委託者との事前の打ち合わせから、伐採木の搬出ルートとなる西斜面部と北緩斜面部の調査を最優先とするよう伝えられていたため、この箇所を先行し、平成25年度は残りの期間を最高所にある曲輪1・2部分の表土除去・検出などに当てた。平成26年度は、前年度終了部分より上部の城館本体である曲輪1・2、曲輪3～5や堀跡の主要な遺構精査を中心として行った。また、平成29年度は林道を挟んだ調査区南端の調査を行った。

調査区内の平場と斜面の調査については、当初から中世の城館跡であることが想定されており、斜面部にも前時期の隠れた平場や堀などが検出される可能性があった。このことから、平場については通常通り表土除去して平面的な調査を実施し、斜面についてはトレンチ調査を優先して、遺構が確認された場合について面的な調査に切り替える手法で行った。なお、トレンチ調査については、城館の遺構とされない斜面の場合、記録写真と層序の確認のみで終了としている。ただし、遺構が集中すると考えられる曲輪3より上部は、斜面部についても表土除去した上で通常調査を行っている。

各遺構の調査方法については、土坑やピットなど小型の遺構は二分法で行い、堅穴住居跡などの大型の遺構や複雑な堆積を呈する遺構は、随時四分法を用いて行った。また、各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図はCUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行い、微細図・断面図は手取りで図化した。

遺構・遺物の写真撮影については、キヤノンEOS 5D Mark II (デジタルカメラ・1200万画素)と中判6×7、6×4.5(モノクローム)を使用した。また、平成26年7月17日には、調査区全体の航空写真撮影を実施した。

また、調査区全体の微地形を記録するために平成25年10月11日と、平成26年7月12日に地形測量のためのセスナによる空中写真撮影を行っている。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、焼土・微細図は1/10、その他の遺構や土層断面なども種類や規模により1/50、1/100などの縮尺を用いて遺構実測図(第一原因)を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。遺構外遺物は、出土地点・基本層位(または近接するセクション層位)を記入して取り上げた。

(2) 野外調査の経過

<平成25年度>

9月2日午後から調査を開始した。現場設営を行い、9月4日から北側の雑物撤去を開始した。久慈森林組合による伐採作業がまだ南側や曲輪1・2部分で続いていたため(9月10日終了)、雑物撤去は、北側緩斜面、西側斜面、南側谷部、曲輪1・2部分と進め、9月20日まで行った。また、9月9日からは、北側緩斜面の試掘も並行した。北側緩斜面には、長さ10～15m、幅1mのトレンチT1～

6を傾斜に沿って6本入れた。9月20日からは、中段と西側急斜面にも同様にトレンチT7～11、曲輪1・2部分にはトレンチT12～22を入れ、10月4日まで確認作業を行った。9月19日から重機による表土掘削を北側緩斜面部から開始。その後、西側尾根部、南側谷部、曲輪1・2部分と調査終了まで断続的に進めた。

10月は天候不順が続き、週に1～2日間の現場閉鎖となり、作業が停滞する。10月8日、基準点設置。10月11日、現況地形測量のための航空写真撮影。10月16日、台風の影響で調査区外から立木が数本倒れる。調査区内からの土砂流出など被害なし。10月17日、北側緩斜面部と西側急斜面部の部分終了確認。10月18日、久慈森林組合による台風で倒れた倒木の伐採。10月30日、北側緩斜面部の精査に目処がつき、曲輪1の表土除去に移行。

11月2日、野田村及び県教委調査の平清水Ⅲ遺跡と合同開催で、現地見学会を行う(一般約50名参加)。11月2週目、調査区南側丘陵の試掘を行ったが遺構・遺物なし。11月前半、他現場と重機稼働が重なり、手配出来ず。11月3週目、南側谷部の表土除去を行い、陥し穴状遺構・炭窯を検出、精査を行う。曲輪1では、検出から精査に着手、中世陶磁器がまとまって出土する。11月4週目、曲輪2の重機による表土除去。南側谷部400mの精査は終了する。また、最終週は越年準備も並行して進める。11月27日、終了確認。11月28日、平成25年度分の調査を終了し、撤収する。

10月は台風などによる天候不順が続き、思うように作業が進まなかった。作業日数53日間、荒天による現場閉鎖は5日間であった。

<平成26年度>

4月10日午後から2カ年目の調査を開始した。現場設営を行い、4月11日は越冬のために設置していたブルーシートや土のう袋を取り除いた。4月17日から曲輪1の西側斜面、S D01堀跡周辺の表土除去を開始。曲輪1・2は粗検出を行い、曲輪2から精査を進める。4月下旬～5月前半、曲輪2で確認したS B02・03建物、S D01堀跡の精査を行う。

5月1日、野田村教委井上雅孝氏(旧滝沢村から出向)・盛岡短期大学荻田慶信氏来訪。5月後半、曲輪2の建物精査が概ね終了し、曲輪1の検出作業に移行する。5月最終週～6月前半、曲輪3・S D01堀跡の精査。5月末で重機による表土除去が終了。

6月5日、盛岡市教育委員会室野秀文氏現地指導。6月前半、天候不順が続くが曲輪1の精査を中心に進める。6月後半、武者走り状遺構1の精査。曲輪1の精査と並行して、曲輪2の盛土整地層のトレンチ掘削を行う。

7月3日、前年度に出向、調査頂いた(公財)大阪府文化財センター三好孝一氏の現地指導。7月前半、曲輪1の精査と並行して現況準備を進める。7月7日、中村華人期限付調査員による建物の構造について現地指導。7月12日(土)に予定していた現地説明会が、台風の影響で7月16日に順延。7月12日、地形測量のための航空写真撮影。7月16日(水)、現地説明会を開催し一般103名に参加頂く。7月17日、調査区全体の航空写真撮影。7月2～3週目、曲輪1の第2期面のだめ押しを行う。7月後半、曲輪1の盛土整地層を重機で除去。曲輪1第1期面の遺構検出。7月27日(日)、岩手考古学会の現地見学会。7月後半～8月前半、曲輪1第1期面の精査。

8月1日、曲輪1の第1期面から目貫が出土。8月6日、終了確認。8月18日、平成26年度分の調査終了。調査資材を上泉沢遺跡へ移動。

6月は梅雨前線による天候不順が続いたが、概ね順調に調査を行った。作業日数70日間、荒天による現場閉鎖は14日間であった。

＜平成29年度＞

10月16日午後から3カ年目の調査を開始した。10月16・17日、現場設営と主要地方道野田山形線への落石防止のための安全対策を行った。10月17～20日に試掘、重機による表土除去。排土を下から上へ上げるために、重機を待機させて作業を進める。10月下旬、古代の堅穴住居跡4棟を検出、精査に入る。

11月1日から、中平遺跡の調査も並行して進める。11月2週目、遺構精査と並行して包含層の掘り下げも進めるが希薄。11月20～22日、前年度まで2年間出向、調査頂いた(公財)大阪府文化財センター伊藤武氏による現地指導。11月最終週、斜面下位から弥生前～中期の堅穴住居跡1棟を検出、精査を進める。

12月6日、終了確認。12月6～7日、重機による埋め戻し。12月7日、資材搬出し調査を終了した。天候は安定しており、順調に調査を行った。作業日数34日間、現場閉鎖は1日間であった。

2 整理の方法

(1) 遺構の整理

遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が平面図を作成した。断面図は、担当調査員が第二原因を作成し、トレース図化を行った。平面図及び断面図のレイアウトなどは調査員が行った。

遺構図版は各普請のまとまりで分け、その中で遺構の種類順に掲載した。遺構名は現場段階で命名したものをそのまま使用し、登録抹消となった場合は欠番としている(第2表参照)。

(2) 遺物の整理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付した。観察表の()内数値は残存値、< >内数値は推定値である。

陶磁器や土器は水洗乾燥後、遺物の種類で仕分けた後、注記を行った。その上で、遺物種類ごとに接合作業を行い、復元作業、掲載遺物の選別、登録、写真撮影、実測、拓影、トレース、版組の手順で行った。

石製品は、水洗・注記を行った後、種類ごとに接合作業を行い、実測等作業を進めた。

金属製品・銭貨は、水洗乾燥後に調査員が全点を観察し、大半を全掲載した。金属製品については、実測等を完了した後に(公財)元興寺文化財研究所・岩手県立博物館で保存処理を行った。銭貨については実施していない。

(3) 遺物写真の撮影

遺物写真は、当センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ(EOS5D)を使用した。

(4) 整理の経過

整理作業は、下記の期間で実施した。

- ・平成25年12月1日～平成26年3月31日(1～2名体制)
- ・平成26年12月1日～平成27年3月31日(2名体制)

第2表 遺構名対応表

調査遺構名	現場遺構名	備考
曲輪 1	曲輪 1	H26 調査
曲輪 2	曲輪 2	*
曲輪 3	曲輪 3	*
曲輪 4	曲輪 4	*
曲輪 5	曲輪 5	*
曲輪 6	曲輪 7	H25-26 調査
曲輪 7	曲輪 6	*
上段 1	上段 1	H26 調査
上段 2	上段 2	*
上段 3	上段 3	*
切岸 1	切岸 1	*
武蔵走り状遺構 2	武蔵走り状遺構 2	*
S B 01	S B 01	H25-26 調査
S B 02	S B 02	H26 調査
S B 03	S B 03	*
S B 04	S B 04	H25-26 調査
S B 05	S B 05	H26 調査
S B 06	S B 06	*
S B 07	S B 07	*
S D 01	S D 02	*
S D 02	S D 06	*
S D 03	S D 03	*
S D 04	S D 04	*
武蔵走り状遺構 1	S D 05	*
S D 06	S D 06	*
S D 07	S D 07	*
S D 08	S D 08	*
S D 09	S D 09	*
S D 10	S D 10	*
S D 11	S D 11	*
S D 12	S D 12	*
S D 13	S D 13	*
S D 14	S D 14	*
S D 15	S D 15	*
S D 16	S D 16	*
S D 17	S D 14	*
S D 18	S D 16	H29 調査
S F 01	S F 01	*
S F 02	S F 15	H26 調査
登録痕跡	S F 03	*
*	S F 04	*
*	S F 05	*
S F 06	S F 06	H26 調査
S F 07	S F 07	*
S F 08	S F 08	*
S F 09	S F 09	*
S F 10	S F 10	*
S F 11	S F 11	*
S F 12	S F 12	*
S F 13	S F 13	*
S I 01	S I 01	H29 調査

柱状ビット分は第3表に記載

調査遺構名	現場遺構名	備考
S I 02	S I 02	H29 調査
S I 03	S I 03	*
S I 04	S I 04	*
S I 05	S I 05	*
S K 01	S K 01	H25 調査
登録痕跡	S K 02	*
S K 03	S K 03	H25 調査
S K 04	S K 04	*
S K 05	S K 05	*
S K 06	S K 06	*
S K 07	S K 07	*
S K 08	S K 08	H26 調査
S K 09	S K 09	*
S K 10	S K 10	*
S K 11	S K 11	*
S K 12	S K 12	*
S K 13	S K 13	*
S K 14	S K 14	*
S B 03 礎上 1	S K 16	*
S B 03 礎上 2	S K 17	*
S K 18	S K 18	*
S K 19	S K 19	*
S K 20	S K 20	*
S K 21	S K 21	*
登録痕跡	S K 22	*
P 171	S K 23	*
S K 24	S K 24	*
S K 25	S K 25	*
S K 26	S K 26	*
S K 27	S K 27	*
S K 28	S K 28	*
S K 29	S K 29	*
S K 30	S K 30	*
S K 31	S K 31	*
S K 32	S K 32	*
P 172	S K 33	*
P 173	S K 34	*
S K 35	S K 35	*
S K 36	S K 36	*
S K 37	S K 37	*
S K 38	S K 38	*
S K 39	S K 39	*
登録痕跡	S K 39	H29 調査
S K 40	S K 40	H26 調査
S K 41	S K 41	*
S K 42	S K 42	*
S K 43	S K 43	*
S K 44	P 159	*
S W 01	S W 01	H25 調査
S W 02	S W 02	*
土砂崩れ痕 1	S D 01	*
土砂崩れ痕 2	S D 02	*

・平成30年1月4日～平成30年3月31日(1名体制)

3 広報活動

- ・調査概報「平成25年度発掘調査報告書」岩埋文第630集 2014年3月発行
- ・調査概報「平成26年度発掘調査報告書」岩埋文第647集 2015年3月発行
- ・調査概報「平成29年度発掘調査報告書」岩埋文第692集 2018年3月発行
- ・平成25年度現地見学会資料 2013年11月2日
- ・平成26年度現地説明会資料 2014年7月16日
- ・野田村考古学フォーラム-平成25年度遺跡報告会-資料 2014年3月1日
- ・野田村考古学フォーラムⅡ-平成26年度遺跡報告会-資料 2015年3月14日
- ・平成30年度発掘された日本列島展 開催
- ・「発掘された日本列島2018」p36～37掲載 2018年6月発行

IV 平成25・26年度の調査

1 概 要

平成25・26年度の2カ年の調査から、室町時代後半(15世紀後半)の城館に関する遺構が多数確認された。検出された普請遺構は曲輪7箇所、堀跡2箇所、土塁3箇所、切岸1箇所、武者走り状遺構2箇所、作事に関する遺構は掘立柱建物跡7棟、焼土13基、土坑27基、溝跡15条、建物分も含む柱穴状ビット167個である。またこの他に、北側緩斜面及び南側谷部から、縄文時代の陥し穴状遺構10基、平安時代末の炭窟跡2基も検出している。

中世城館の普請に関する遺構は、最高位にある曲輪1とその北側に位置する曲輪2を取り囲むように設けられている。大規模な造成を行っているのはこの2つの曲輪のみで、その他の腰曲輪などに位置付けられる平場は自然地形をそのまま利用しているか、もしくは一部を盛土して使用していることが分かった。また、曲輪1は西辺と南辺に高さ2mを超える土塁、曲輪1と曲輪2の間には高さ約5mの切岸が普請されており、その他にも堀や土塁を巡らせて防御性を高めている。調査区内と調査区外の現況山林部分の縄張りを観察すると、城館廃絶後に山体斜面が崩落している箇所が多数確認されており、これによって失われた普請遺構も相当数あると考えられる。

中世城館の作事に関する遺構は、大半が曲輪1と曲輪2に集中して確認されている。曲輪1には掘立柱建物跡5棟、曲輪2には掘立柱建物跡2棟が検出され、これに付属する焼土・土坑・溝跡が確認された。また普請にも関わるが、作事遺構は盛土整地層を挟んで計2面から検出されており、城館の主要な部分が大規模に作り替えられていることが分かった。これによって、第1面は小さな曲輪を並べた簡素な戦時のための軍事的な城館(第1期)から、第2面は大型の掘立柱建物跡を有する領内を支配する在地領主の居館(第2期)へと変遷する城館の様子が捉えられた。

出土遺物は、白磁や青磁、天目の中国産陶磁器の他、古瀬戸の水筒・鉢・瓶・壺、珠洲系陶器壺、越前壺、風炉、瓦質鉢などの国産陶器、石硯・温石・石鉢・茶臼の石製品、目貫・花瓶などの金属製品、渡来銭を主体とする銭貨がある。中世遺物の大半は室町時代後半の15世紀後半に位置付けられ、種類・出土量ともに豊富であり、伏拝館館主の教養と財力を示す資料である。また、16世紀代に比定される遺物がないことから、本城館の廃絶時期が15世紀代に収まることも端的に示している。

次項では、調査内容を遺構、出土遺物ごとに記載する。なお、検出遺構は普請された曲輪や切岸、堀ごとにとままりを持つことから、下記の通り各普請遺構→各作事遺構の順序で記載を行っている。上述した中世以外にも縄文時代の遺構・遺物、平安時代の遺構が確認されており、検出遺構は北側緩斜面・南側谷部にまとめて記載した。

- | | |
|------------------|--|
| (1) 曲輪1の遺構 | 曲輪1、土塁1、S B01・04~07建物、S K24~32・35~44土坑、S F06~14焼土、S D6~15・17溝、P114・147・152・160・162~170柱穴状ビット |
| (2) 曲輪2の遺構 | 曲輪2、S B02・03建物、S K12~15・20土坑 |
| (3) 切岸1の遺構 | 切岸1、S D03溝、S K08・18土坑 |
| (4) S D01堀跡周辺の遺構 | S D01堀、土塁3、曲輪5、武者走り状遺構2 |
| (5) 曲輪3・4周辺の遺構 | 曲輪3・4、S D02堀、土塁2、武者走り状遺構1、S K21土坑 |
| (6) 曲輪6・7の遺構 | 曲輪6・7 |
| (7) 北側緩斜面の遺構 | S K01陥し穴、S W01炭窟、土砂崩れ痕1・2 |

(8) 南側谷部の遺構 S K 03-07・09-11・19陥し穴、S W 02炭窟

2 縄張り

伏津館の縄張りについては、「岩手県中世城館跡分布調査報告書」(岩手県教委 1986)に概略図が掲載されており、「明内地区の標高55mの独立丘陵一帯に遺構が認められる。遺構は西側と東側に分けられる。西側の頂部に40m四方の主郭があり、その北側にも不整形な郭が続いている。主郭の南側には土塁があり、その西側には大手と推定される通路が残っている。丘陵東側の先端部には東西45m南北25mの平場があり、さらに東突端に向かって三段の削平地があり、その一部には土塁も残っている。丘陵中央付近にはわずかであるが堀切状の遺構も認められる。東側と西側の遺構をそれぞれ独立した館とする見方もあるが、確定ではない」と記載されている。

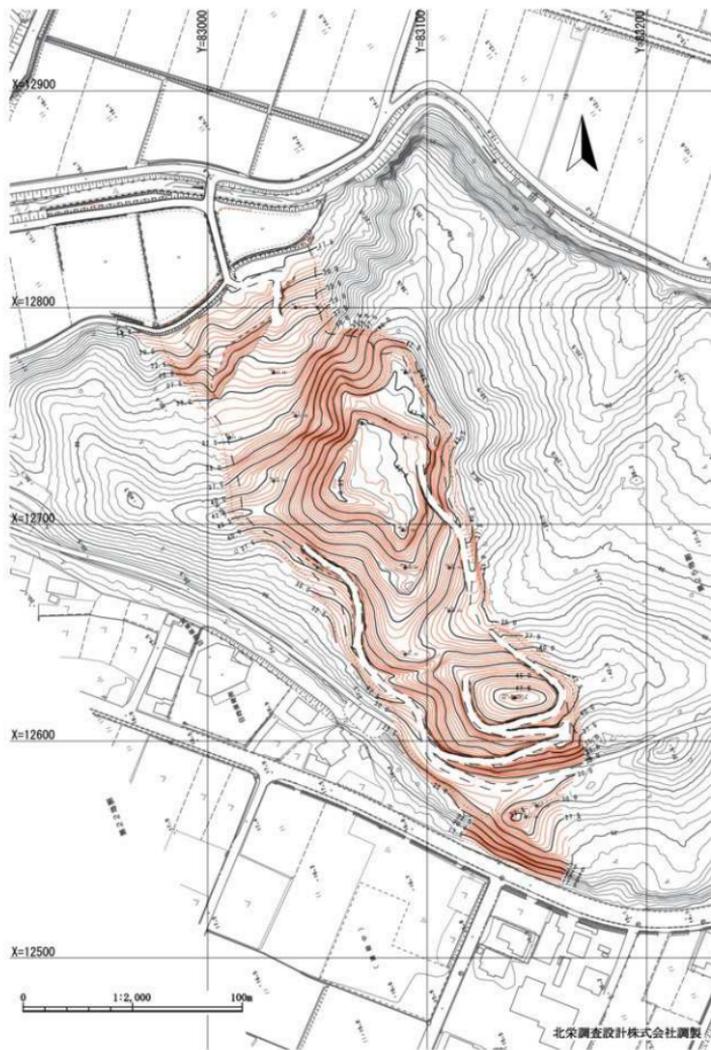
また、沼館愛三著の「南部諸城の研究」(沼館 1981)によれば、野田城について、「本城は九戸郡野田村城内にあり」とし、「居館 今野田村城内と称する所で、今の城内は、居館の区域と其外周に発達した聚楽である。この居館は東西二百三十米、南北二百米の略方形の屋敷であった。三閉伊路程記には「城内は七十軒折廻四丁程の町なり」云々とあり、今は遺構として特記すべきものがない」としている。さらに、「本城 居館地城内西側高地である。標高四十米である。東西に長く、南北に狭く共経始簡單である」と記しており、記載の居館が前述の野田城、本城が前述の伏津館と思われる。

野田城の擬定地には、「野田系図」及び「海辺家系図」の記載から、古館、新館も含まれており、また、近年の調査成果から宇部館もこれに当たると考えられる(岩文壇 2016)。調査以前の岩手県遺跡台帳では、東西の丘陵を個別の遺跡として登録し、西側の丘陵を伏津館、東側の丘陵を野田城としてきたが、平成29年度データから西側と東側の丘陵一帯を統合して伏津館と呼称することに変更されている。ただし、今回調査を行った西側丘陵については、南側に構築された堀切によって狭義の城館縄張りとは完結しているものと判断しており、東側丘陵については本書には掲載していないことをお断りする。

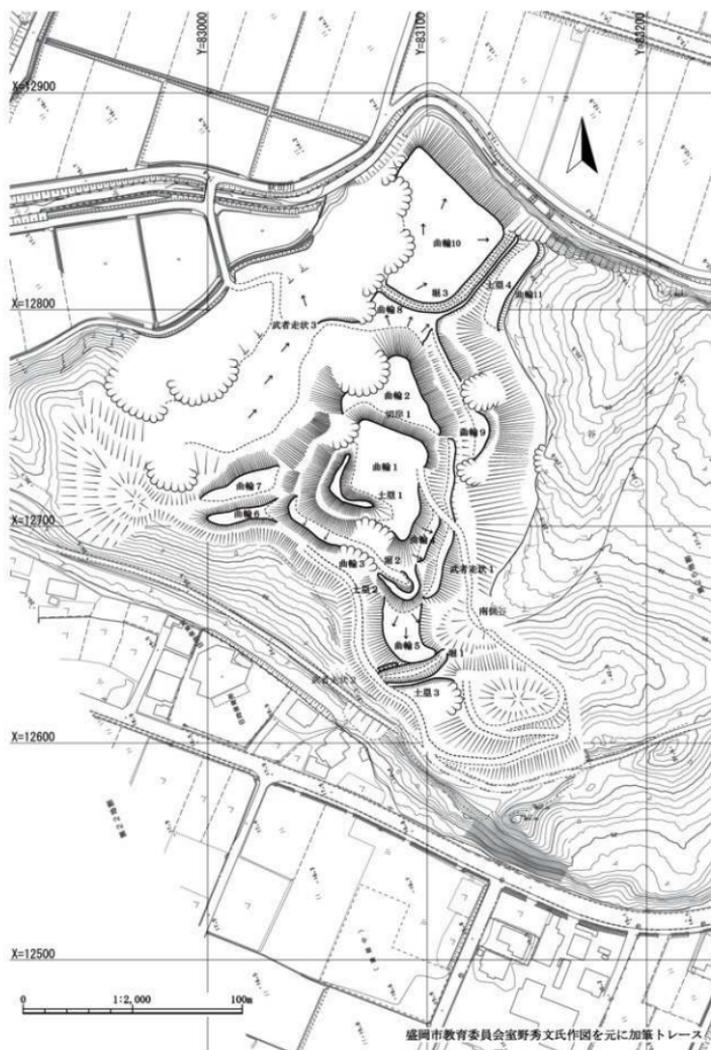
第7図に現況地形測量図、第8図に伏津館の縄張りを示した。縄張り図を作成するにあたり、平成26年6月に盛岡市教育委員会室野秀文氏から現地指導を頂き、室野氏作成の縄張り図の原因をご提供頂いた。第8図はこれを元に浄書を行ったものである。

館は大きく3段の曲輪で構成されており、今回の調査範囲には最高所の曲輪1と次の曲輪2や土塁1・2、曲輪1と2の間にある切岸1、腰曲輪と見られる曲輪3・4、通路状の武者走り状遺構1・2、南側のやや広い曲輪5、南側の尾根を分断する堀1、曲輪3と繋がる堀2、西側の瘦せ尾根から連絡する曲輪6・7と城館の主要な部分が含まれていた。南側の丘陵と城館本体を区切る堀1が普請されていることから見れば、これが城館の南端と考えると良いだろう。北から東側にかけは秋田川の浸食によって崖地形が形成されており、自然の要害を呈している。縄張りの中で虎口や門を想定できる微地形は確認できなかったが、大手を考えるのであれば、やはり西側瘦せ尾根筋から曲輪6、曲輪3、堀2、武者走り状1を通り、曲輪2へ達するルートと、南側谷から堀1、曲輪5、武者走り状1を通して曲輪2へ上がるルートが考えられるが、南側谷の東には秋田川が流れていることを考慮すれば、伏津館の大手は西側であると考えられる。曲輪2から、曲輪1へのルートは今回の調査からは分からなかったが、曲輪1の北東隅付近から最も有力である。なお、城館の周辺は至る所で土砂崩れが起きており、すでに失われた普請の痕跡も少なからず存在したのではないかと見られる。

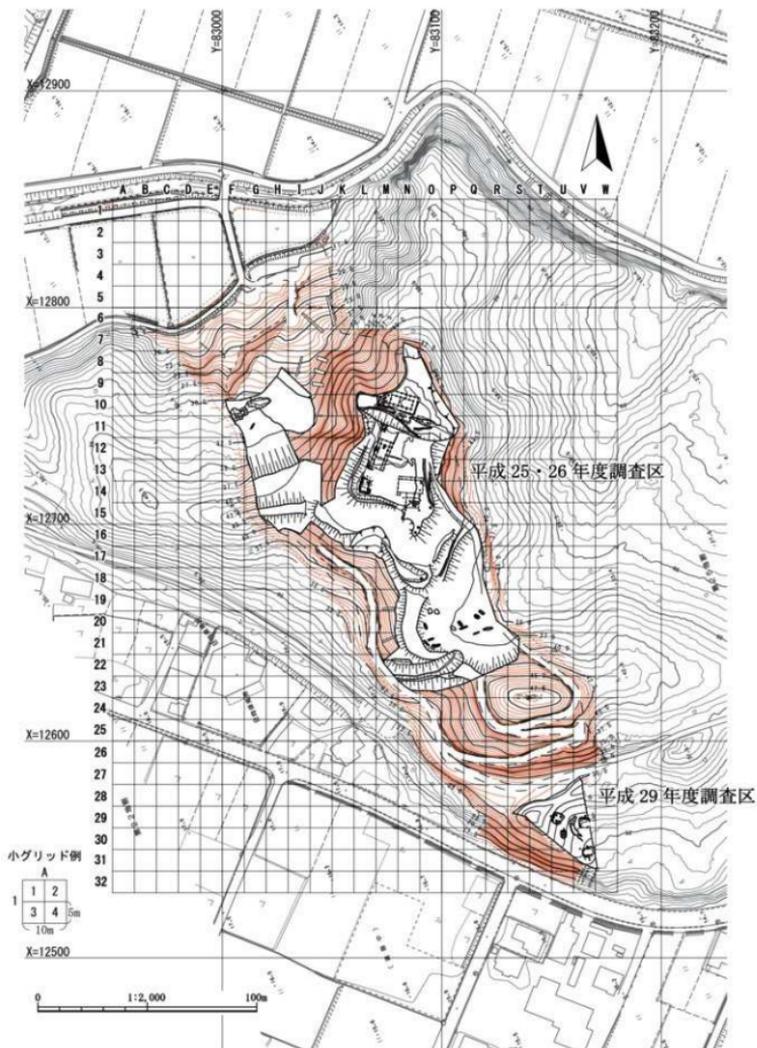
現在、遺跡範囲のすぐ南側を東西に走る主要地方道野田山形線は、藩政時代に盛岡城下から野田通代官所(現久慈市宇部町)を結ぶ野田街道と考えられている。この明内川沿いの道が、中世にも利用されていたと考えれば、交通の要所であるとともに東に見える太平洋、現在の国道45号付近を通過してい



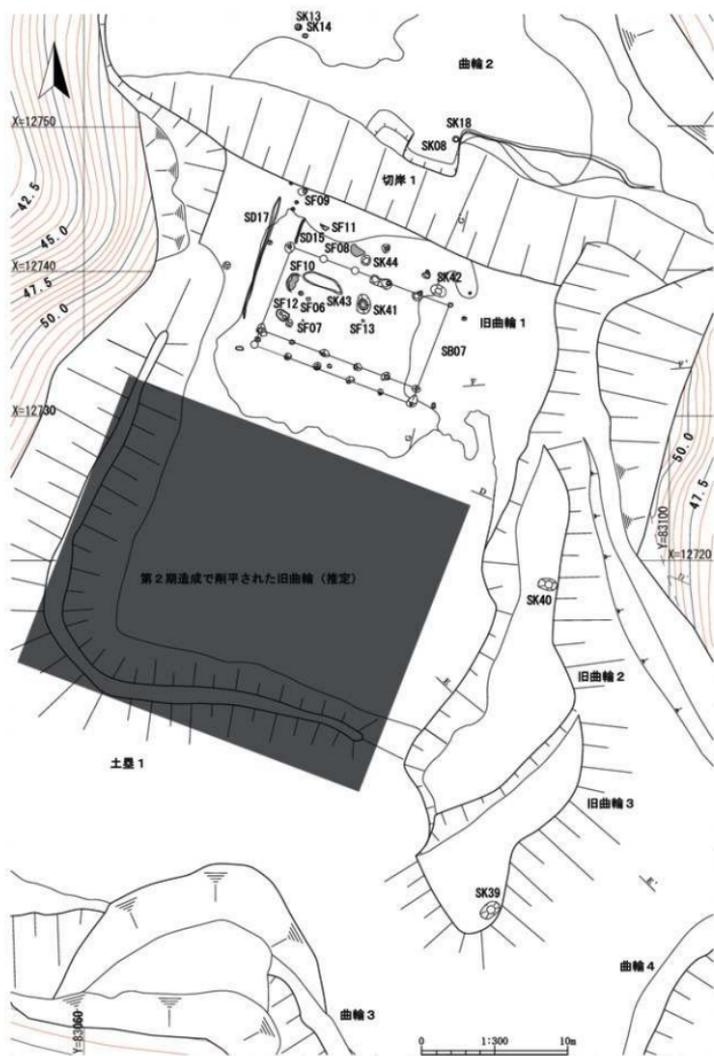
第7図 現況地形測量図



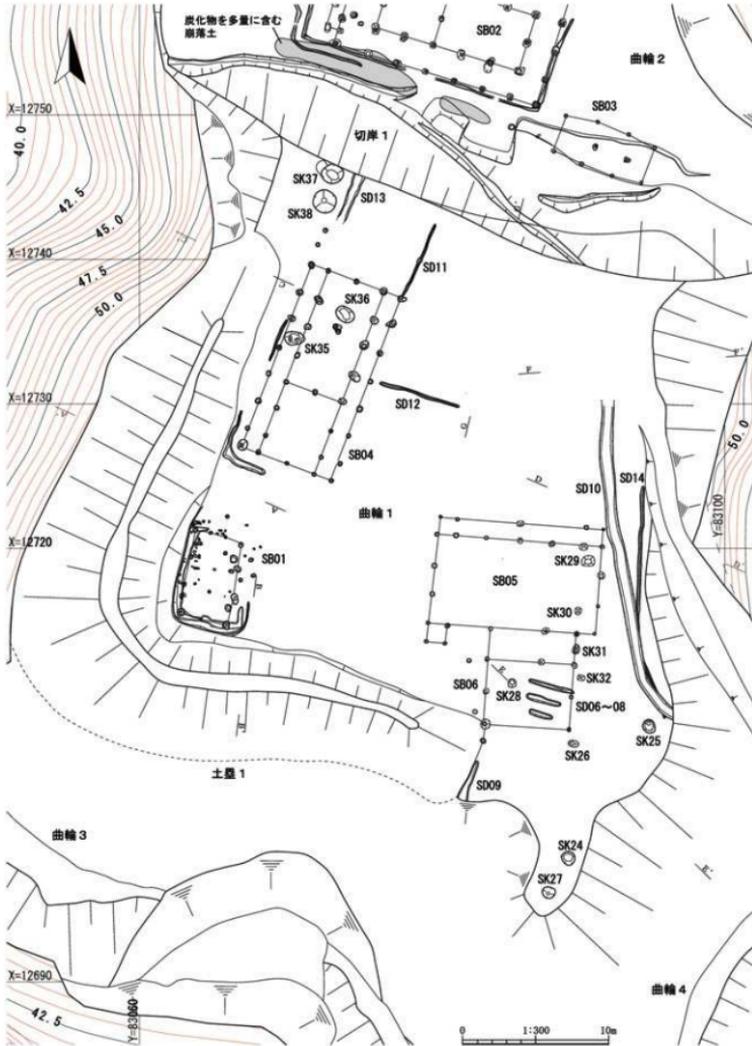
第8図 縄張り図



第9図 調査全体図



第10図 曲輪1 (第1期)



第11図 曲輪1(第2期)、土塁1(1)

たであろう浜街道に視みを利かせることができ、野田市街地を一望できる丘陵に伏洋館が築かれたことは非常に理にかなった立地であると考えられる。

3 遺構

(1) 曲輪 1 の遺構

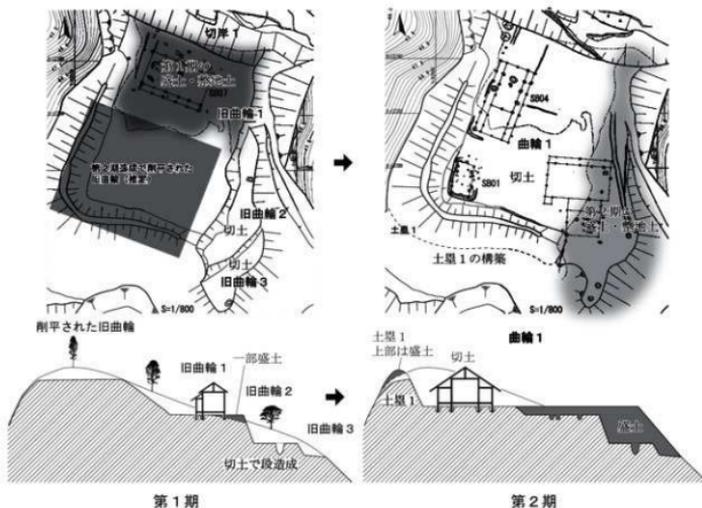
① 曲輪

曲輪 1 (第10・11図、写真図版5)

曲輪 1 は、本遺跡で最も標高の高い箇所に造成された方形の平坦面である。南北約33m、東西約32mの規模で、標高51.6～53.2m、西辺と南辺に沿って高さ約2mの土塁1がL字形に構築されている。南東端はやや張り出しており、調査終盤で分かったが第2期の盛土整地層下に第1期の旧曲輪1～3が確認された。曲輪1の北側には切岸1の急斜面下に曲輪2、土塁1を挟んだ南側には曲輪3・S・D 02堀、南東側には曲輪4や武者走り状遺構1があり、東側は自然地形の斜面の上へさらに盛土をして急傾斜を形成している。

第12図に曲輪1の造成方法模式図を示した。第1期は、最も高い箇所に削平された曲輪1箇所があったと推定される。この曲輪は、第2期に至って削平されたことから痕跡は全く残っていないが、第2期に旧曲輪1～3を埋め立てた盛土の土量からみれば、妥当と考えられる。曲輪の高さは、土塁1断面A(第13図)の4層旧表土層が第2期面から高さ2mの位置にあり、さらに内部に20°の傾斜で上がっていることから、城館築造以前の山体頂部はさらに0.5～1.0m上部に存在したと見られる。削平された曲輪の平坦面も0.5m程高い位置にあったと推定される。

旧曲輪1は、第2期面の直下に造成された曲輪である。第1期とした曲輪1の遺構の中で、旧曲輪



第12図 曲輪 1 造成方法模式図

2・3に作られたSK39・40を除く遺構はすべてこの造成された曲輪に構築された。曲輪1北側中央に切岸1まで南北に設定した断面Gから、曲輪の中央付近は12層にぶい黄褐色シルト、13層黄褐色砂質シルトが剥き出しにされた切土であったことが分かる。斜面下側には、城館築造以前の旧表土層である10層黒色シルトや12層までの漸移層である11層暗褐色シルトの自然堆積層が残っており、その後斜面の高い部分を削り取り、斜面の低い箇所に埋めた9層黒褐色シルトと黄褐色粘土質シルトの互層で構成される盛土層、8層暗褐色シルトの盛土層、7層黄褐色地山ブロックを含む褐色シルトの盛土層が人為的に堆積して平坦面を形成した上で、6層黄褐色粘土質シルトを4～10cmの厚さで敷設し整地を行っていた様子が断面から読み取れる。ただし、盛土整地は曲輪北側の切岸1側のみで、南側は盛土と切土の残存ラインから、前述の削平された曲輪が広がっていた可能性が考えられる。

旧曲輪2・3は、曲輪1南東側の盛土層下から確認した平坦面である。2段ある曲輪のうち、上が旧曲輪2、下が旧曲輪3になる。旧曲輪2は南北26.0m、東西2.5～6.0mでほぼ平坦、旧曲輪3は北東から南西16.0m、北西から南東3.0～6.5mでやや傾斜している。断面Dでは、花崗閃緑岩の風化層直上の12層に旧表土層の黒色から黒褐色シルトが確認されることから、城館築造以前から急傾斜で堆積層が形成されにくかったと考えられる。断面Dからは、14層明褐色から黄褐色の花崗閃緑岩の岩盤層を切土して旧曲輪1の平坦面を構築した状況がよく分かる。その後、第2期造成に至って上部曲輪を切土した2～7層地山土主体の盛土層が堆積しており、いずれも人為的な理立て痕と観察される。また、断面Eを見ると旧表土層は観察されず上部曲輪を削った計14層の地山土主体の盛土層で構成されているのが分かる。

以上2つの断面観察から、切土によって発生した土を丘陵の斜面に盛った場合、当然盛土の下部には黒褐色に変質した旧表土層が見られるはずであるが、断面Eの曲輪1東側盛土についてはその旧表土層が観察できない。このことから、丘陵の斜面に直接切土によって発生した土を盛って、第2期の曲輪1を造成したのではなく、盛土造成の前段階に、丘陵斜面上部を一旦切土し、旧曲輪2・3の狭い平坦面を造り出していたことが理解できる。

これらの盛土層下から確認された平坦面である旧曲輪2・3から、土坑を2基(SK39・40)検出している。この2つの土坑はSK39から銭貨がまとも出土している状況と形状・規模が近似していることから、墓坑であった可能性がある。

旧曲輪1～3は、曲輪1の第2期造成によって埋め立てられた。断面Gからは、第1期の旧曲輪1整地層である6層の上に2層明黄褐色粘土質シルトによる盛土が敷かれた様子が確認できる。上面は整地されたと考えられ、第2期の活動によって1層の硬化面が形成されている。最後に構築された第2期面には、土塁1に沿って獨立柱建物群が構築され、多くの土坑や溝跡など作事遺構が確認されており、居館としての機能が強化されたと考えられる。(伊藤・北田)

②土 塁

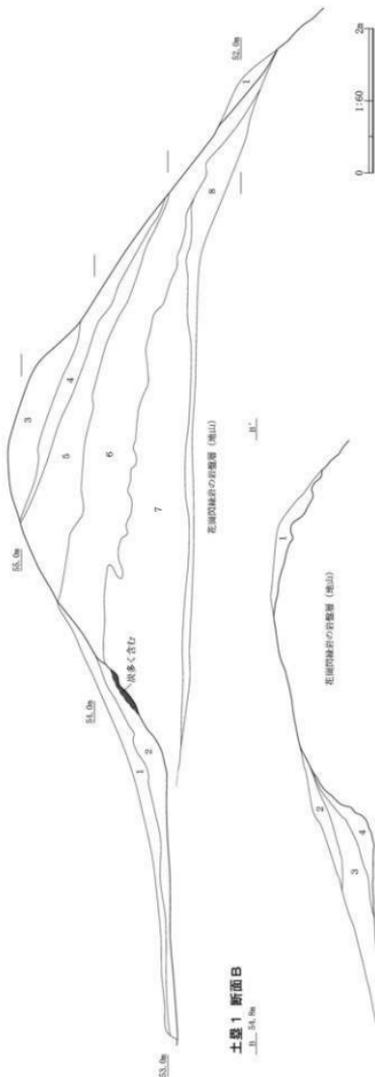
土塁1(第11・13図、写真図版4・5)

第2期の曲輪1の西辺から南辺に沿って構築された、L字形の人為的に土盛りした遺構である。西辺は全長約30.0m、上幅0.6～1.5m、基底幅5.0～11.0m、南辺は全長約25.0m、上幅0.6～1.2m、基底幅6.0～9.0mで西辺北端と南辺東端は急斜面側へ大きく崩落しており、城館が機能していた時期は曲輪端付近まで繋がるように構築されていた可能性がある。

3箇所で断ち割った断面のうち、断面A・Cは西辺、断面Bは南辺に設定した。断面Aは1～8層に区分できる。1層は灰黄褐色シルトの表土で土塁東側と西側に堆積しており、土塁上部は流出して

土層1 断面A

A. 15.0m



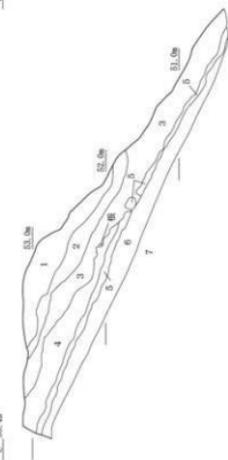
土層1 断面B

B. 15.0m



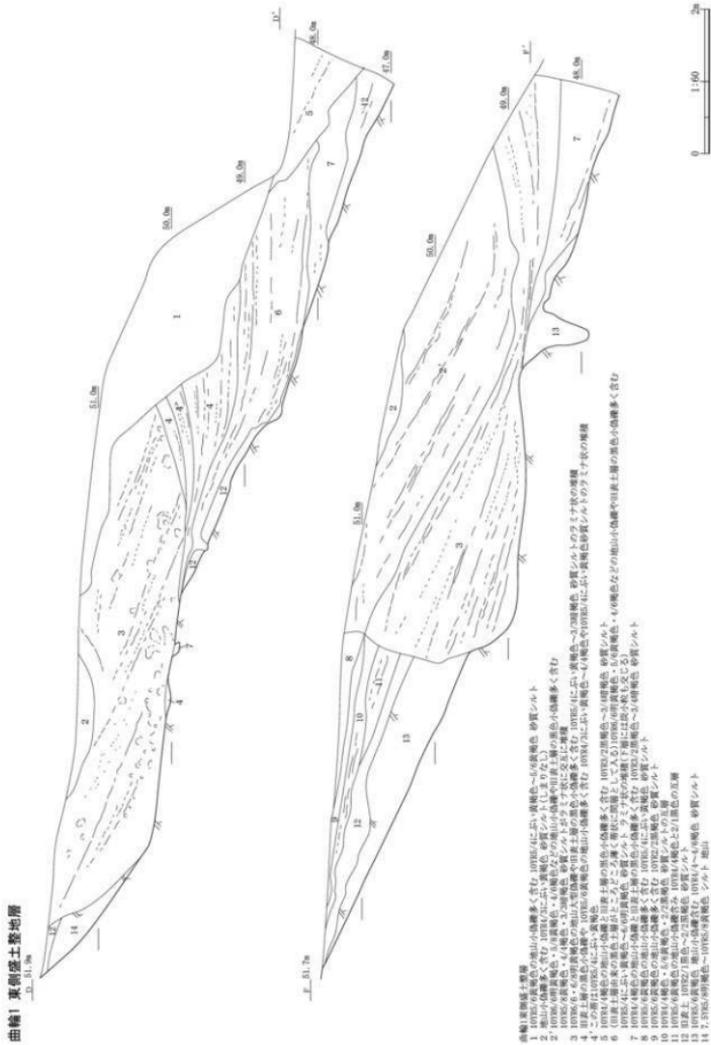
土層1 断面C

C. 15.0m



第13図 曲輪1、土層1(2)

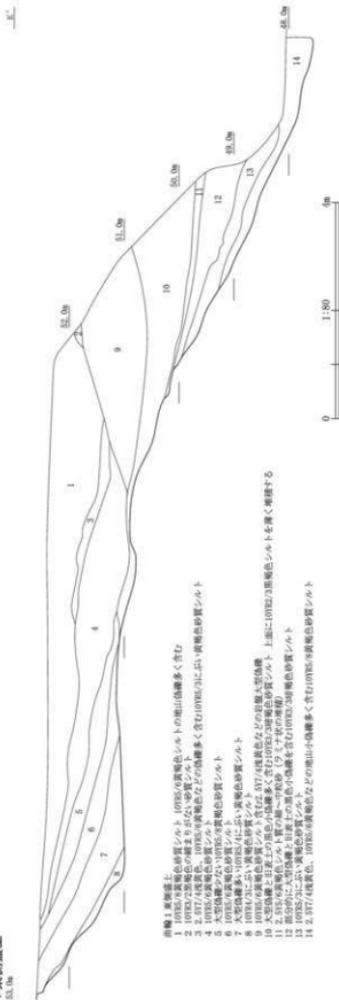
- 土層1 断面A
- 1 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 2 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 3 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 4 10182年産褐色土質シルト 中位の田産土層
 - 5 10185年産褐色土質シルト
 - 6 10185年産褐色土質シルト
 - 7 小礫混じる10184年産褐色土質シルト 堆山
 - 8 小礫混じる10184年産褐色土質シルト 堆山
- 土層1 断面B
- 1 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 2 小礫混じる10184年産褐色土質シルト 堆山
 - 3 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 4 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 5 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 6 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 7 10185年産褐色土質シルト 表土
- 土層1 断面C
- 1 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 2 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 3 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 4 10182年産褐色土質シルト 中位の田産土層
 - 5 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 6 10185年産褐色土質シルト 表土
 - 7 10185年産褐色土質シルト 表土



第14図 曲輪1、土型1(3)

曲輪 1 東側盛土

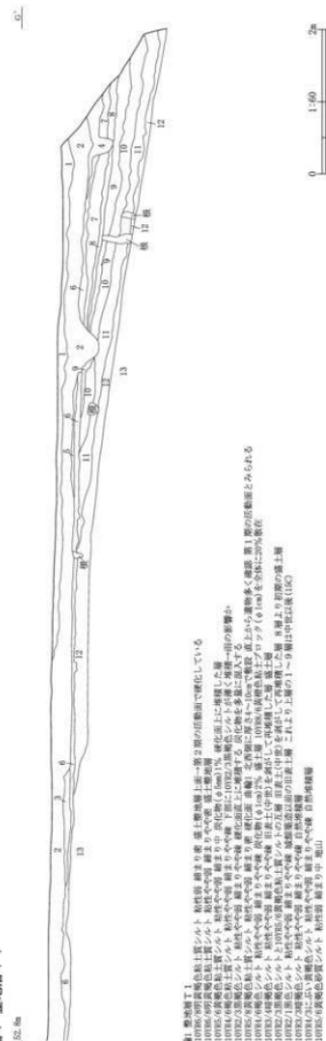
-G. 53.0m



- 曲輪 1 東側盛土
 1 10785の黒褐色土質シルト、10785の黒褐色シルトの堆山が盛土多く含む
 2 10782の黒褐色土質シルトの崩れりかた、砂質シルト
 3 10785の黒褐色土質シルト
 4 10785の黒褐色土質シルト
 5 水質粘土質シルト、10785の黒褐色土質シルト
 6 水質粘土質シルト、10785の黒褐色土質シルト
 7 水質粘土質シルト、10785の黒褐色土質シルト
 8 10781の土質、黄褐色土質シルト、337の黒褐色シルトの崩れりかた、砂質シルト
 9 10782の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 10 水質粘土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 11 10782の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 12 10782の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 13 10782の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 14 土質粘土質シルト、10785の黒褐色土質シルト、20の堆山が盛土多く含む、10785の黒褐色土質シルト

曲輪 1 盛土層 T 1

-G. 52.0m



- 曲輪 1 盛土層 T 1
 1 10785の黒褐色土質シルト、粘付質、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 2 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 3 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 4 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 5 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 6 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 7 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 8 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 9 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 10 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 11 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 12 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト
 13 10785の黒褐色土質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト、崩れりかた、砂質シルト

第15図 曲輪 1、土盛 1 (4)

残存していない。2層は、黄褐色から褐色シルトで土塁の盛土層や基底部が崩落した層で土塁東側にもみ認められる。土塁の最も高い箇所には、3層にぶい褐色砂粒砂～シルトで構成される盛土層が堆積しており、上部が斜面側へ大きく流出していると考えられる。盛土層は前述の通り、削平された曲輪を切土して土塁1側に盛り上げたものと見られ、崩落以前は現在よりも0.5～1.0m位高かったのではないかと推定している。4層以下は旧表土層から地山層で構成される基底部となる。前述の曲輪1の項目でも触れたが、4層旧表土層が第2期面から高さ2mの位置にあり、さらに内部に向かって20°の傾斜で上がっていることから、本来の城館築造以前の山体頂部はさらに0.5～1.0m上部に存在したと考えられる。5層褐色砂粒砂～シルトや6層黄褐色から褐色砂粒砂～シルト、7層褐色粘土質シルト、8層明黄褐色中粒砂～粘土質シルトは本来の山体堆積層で、土塁東側を第2期面まで削り出したことによって残存した層位と捉えることが出来る。

土塁1西辺北端に設定した断面Cは、計7層で構成される。こちらも断面A同様に旧表土層である5層の上に盛土をして土塁を構築したと見られるが、西側斜面が大きく崩落していて断面C部分も西に向かって盛土が滑り落ちている。1層黄褐色粘土質シルトと2層褐色粘土質シルトは第2期に土塁を構築した際の盛土層、3層にぶい黄褐色粘土質シルトと4層黒褐色シルトは第1期の旧曲輪1を整地した際の盛土整地層であると考えられる。

断面Bは1～4層に区分できるが、盛土層や旧表土を含む岩盤層より上部の土塁基底部は斜面側へ崩落、流出しており残存していない。1層は部分的に残存する表土、2～4層は盛土層を含む基底層が土塁北側の内部へ崩れて堆積したものである。曲輪1の第2期面へ崩落していることから、S B01の遺物の一部は土塁崩落土下から出土している。

土塁1は西辺と南辺にL字形に構築されていることから見ても、西側の根柢依いの侵入と南側S D01から曲輪3を通っての侵入に備えていたことは明白である。第2期には、曲輪1の東斜面は急傾斜、北側は秋田川と秋田川沿いの急峻な崖地形によって敵の侵入を阻む設計となっていた。ただし、第2期に至って曲輪1を拡大して居館としての機能を強化していったことから、曲輪1と曲輪2は一体とした空間の主郭に移行したと考えられる。また、伏拝館は東西南北の四方へ見晴らしの利く独立丘陵に立地しており、強風に晒されることの多い地形であることから、西辺と南辺に風除けの機能を併せ持つ土塁1を設置し、これに沿う形で建物を構築した可能性もあろう。(北田)

③掘立柱建物跡

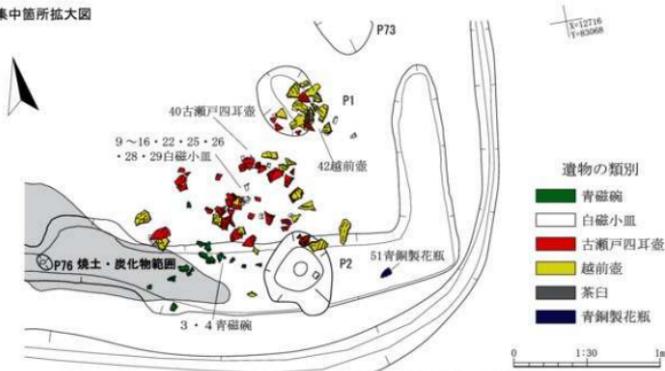
S B01掘立柱建物跡(第16・17図、写真図版14・15)

曲輪1(第2期)北西隅のX=12718・Y=83065付近に位置する。曲輪1北西隅で土塁1に沿う形で構築された掘立柱建物である。平面形は南北に長い長方形を呈し、主軸は北から東へ9.5度傾く。四周に幅0.3から0.7m、深さ0.05から0.1mの壁溝を巡らせるが、附近の地盤が北東部に向かって低くなるため、北辺と東辺はその方向に行くに従って浅く細くなりそのまま消滅する。

規模は、梁行2～3間の長さ3.24m、桁行3間の長さ5.73m、壁溝を含めると東西4.5m、南北6.5mを測り、梁桁の長さから求められる床面積は18.57㎡となる。壁溝およびその周辺には炭・焼土・炭化材を多量に含むシルト層が堆積していたため、建物が罹災したことが想定されるが、床面が全面に赤変している状況は確認できなかった。

建物の周辺からは計21個の柱穴状ビットを確認し、このうち12個が主柱穴と認識した。P73・74のように補修に伴う柱穴の掘り換え痕と考えられるものもあり、また北側の梁行が3間に対して南側の梁行が2間と柱筋がきれいに整っていない様子が見られる。これはS B02に付属するS B03にも共通

遺物集中箇所拡大図



第17図 SB01掘立柱建物跡(2)

する状態で、直線的に並ばずに中央付近がやや膨らみ形となっている。ただし、これは柱穴の並びから見ているもので、実際に柱が立てば上部は揃っている可能性も大いにありうる。

各柱穴掘り方の平面形は円形から不整形円形を呈し、大きさは直径0.1mから0.5mまで様々ある。このうち、南西側のP10は炭化した柱根が残存しており、直径約0.15m、残存する長さ0.15mを測るクリ丸太材が成立した状態で検出された(VI-2樹種同定参照)。柱穴は長径0.5m、短径0.44m、深さは0.3mである。また、南東側のP2から、直径0.15m、深さ0.25mを測る円形の柱根が確認されている。

また、床面中央からやや北に寄った位置から長径0.4m、短径0.25m、深さ5cm前後のごく浅い不整形のくぼみが検出された。この中には焼土や炭の混じったシルト層が堆積し、これを除去したところ、岩盤が被熱し赤変している状況が確認されたため、ここに灼けない火処が設けられていたことが想定される。この焼土1は長径0.18m、短径0.12mの不整形円で、深さ2~3cmまで強変被熱している。この焼土が本遺構に伴うとすれば、建物の床面は土間であった可能性が高い。

建物南東側のピット2以南から南辺細溝部にかけての位置では、多量の炭化物を含んだ先述の埋土層を挟んで、数多くの陶磁器などが出土した(第17図)。その状況から一括投棄されたものとみなされるが、確実に焼土層内から出土したものはなく、また、遺物に被熱痕跡が観察されないことから、建物の焼失とは直接的な関係はなく、鎮火後時間を経ずして破片を一気に投棄されたものと解釈される。

なお、床面には花崗岩、珩岩、チャート、砂岩を中心とする円礫が散在していた。この中には、被熱痕跡を留めるものも多く、建物と共に火にさらされた状況を推測させるものも多いが、特に北西側で壁溝に沿うような形で、土塁の斜面に積み重ね合わされていた石列は、建物側が特に強く被熱していたため、建物の壁に接するようにして設置されていた往時の状況を表しているものとみなされる。その他の円礫は、南東部壁際において長軸に沿うようにして東西に2点が並んで検出されたうち、東側の1点が焼土層の上から検出された以外、焼土層中あるいはその下の床面に着着した状態であった。したがって、板屋根の上に重石として乗せられていたものとは考え難く、他の用途に供されたことを考えておかねばならない。

このほか、家屋の上屋や壁を考える際の参考となるのは、燃焼状態にも左右されるであろうが、焼土層内に板材と思われる幅広の炭化物が存在していなかったこと、木舞を含むものはもちろん、土壁材に関連するような焼土塊が一切含まれていなかったことが挙げられる。

前述の遺物集中箇所を中心に、1・2天井坑、3青磁碗、9～16・22・25・26・28・29白磁小皿、38古瀬戸梅瓶、40古瀬戸四耳壺、41珠洲系陶器壺、42越前壺、51青銅製花瓶、53鉄製盤が出土した。

本遺構について放射性炭素年代測定を実施したところ、P10出土炭化柱材(構架材)から1319calAD-1352calAD(52.5%・1 σ)、西側壁溝出土炭化材から1285calAD-1302calAD(37.4%・1 σ)、もしくは1367calAD-1382calAD(30.8%・1 σ)の年代値を得ている(VI-1参照)。

本建物は、SB04と並ぶ位置にあり、またSB02に対するSB03と同じ位置付けから、SB04を主屋とする付属屋であったと考えられる。また、床面に焼土1が形成されていることから、土間の作業場もしくは倉庫的な性格が想定される。

隣接する主屋であるSB04も罹災して廃絶した状況が確認されており、同一の堆積状況を示すことから同時に焼け落ちた可能性が高い。遺物集中箇所から出土した陶磁器が熱を受けていないことから、失火によるものとは考えにくく、自ら焼いたこと(住宅検断)も考慮しなければならない。(三好・北田)

SB04掘立柱建物跡(第18・19図、写真図版8・9)

曲輪1(第2期)北西側のX=12730・Y=83070付近に位置する。土塁1西辺に沿って広がる、表土直下の大きな炭化物・焼土範囲として検出した。南側に約6m離れて軸線をほぼ同じにするSB01があり、本建物の付属屋と考えられる。第1期面のSB07掘立柱建物と重複しているが、第2期面で確認された本遺構が新しい。また、SK35・36土坑と重複しているが本遺構が新しい。

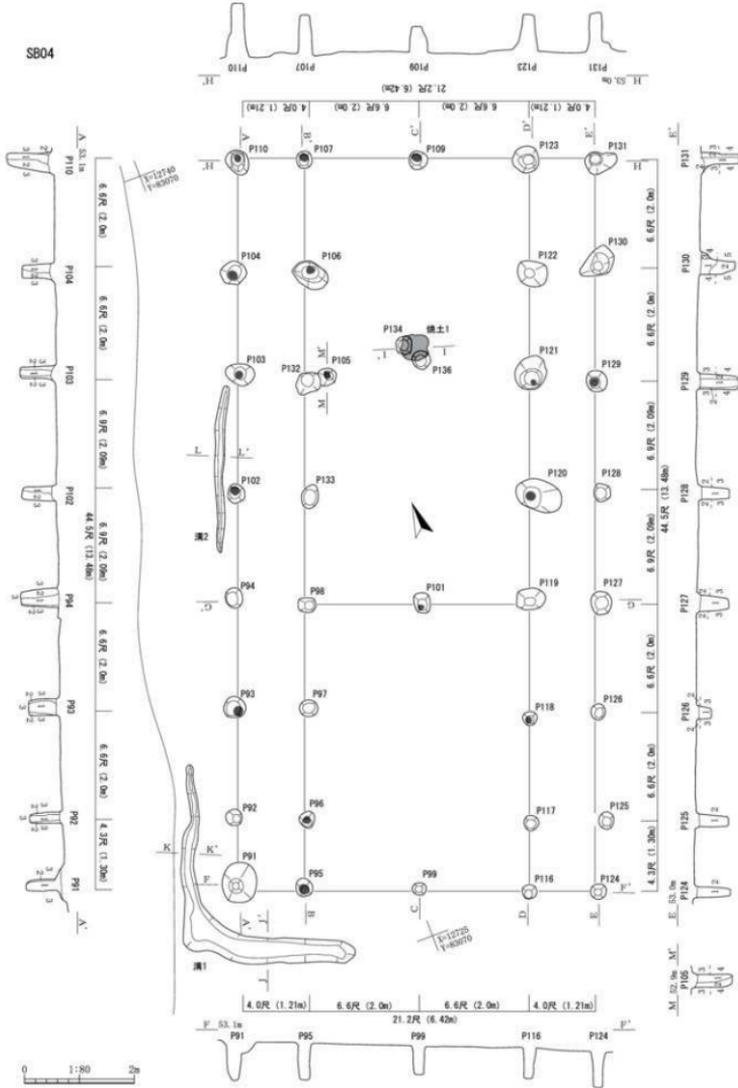
規模は、梁行2間の長さ132尺(4.0m)、桁行7間の長さ445尺(13.48m)で、西面、東面の2面に庇が付く建物である。主軸方向は北東-南西方向、N-20°-Eである。計35個の柱穴で構成されると考えられ、身舎内を4間と3間に分けるように間仕切りの柱穴が設けられている。

身舎の柱間寸法は、桁行側は6.6尺(2.0m)が多用されており、北から4間目が6.9尺(2.09m)、南端が4.3尺(1.30m)となる。梁行側は、身舎が6.6尺(2.0m)、底が4.0尺(1.21m)となり、梁桁いずれも6.6尺(2.0m)基準で設計されたと考えて良いと思われる。桁行側の南端が4.3尺(1.30m)となっていることから、南面に庇が付く三面庇の掘立柱建物の可能性もある。柱穴は直径0.3～0.6m程度の円形基調で、炭化した柱根が残存しているものがある。また、柱痕跡がはっきりと残る、もしくは残った柱材が腐食して空洞となっている柱穴もあることから、柱を抜き取らずに建物が焼失して廃絶したことを示している。P121とP131に残存していた炭化した柱材について樹種同定を行ったところ、クリ材が用いられていたことが分かった(VI-2樹種同定参照)。

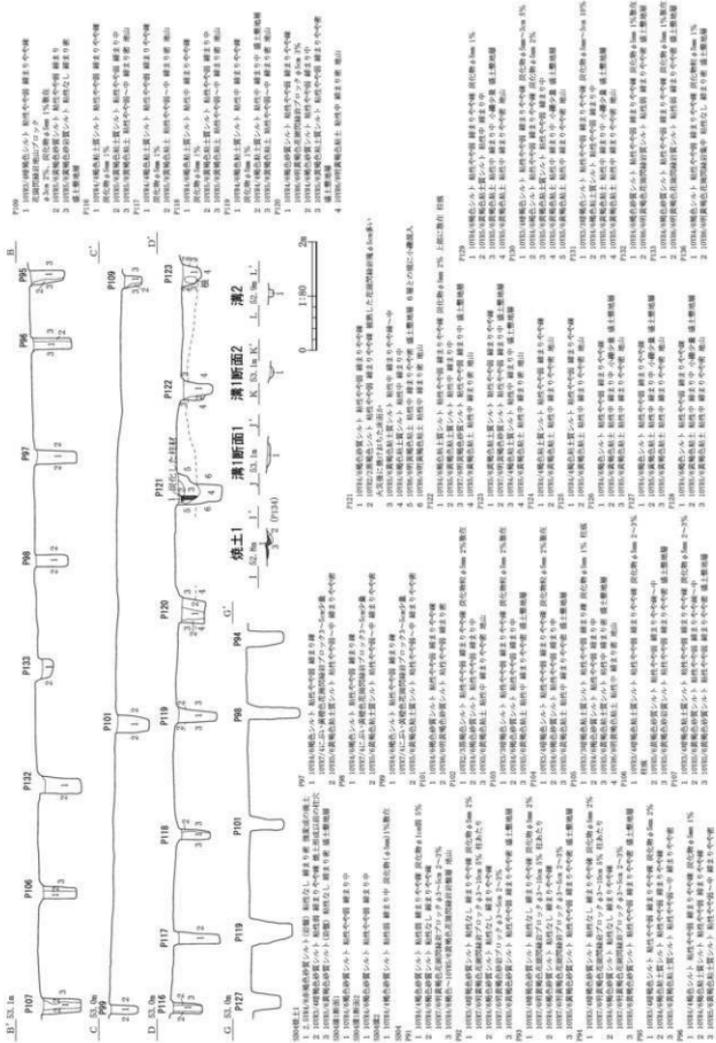
また、後述するSB02と同じく身舎と庇の柱に規模の違いは認められないことから、一連した上屋構造を持つ入母屋造の建物であった可能性がある。これは、本遺跡ではSB02に次ぐ規模の大型建物で、切妻の建物に比べてより高い技術で構築されたと見ることが出来る。

身舎の2つの空間のうち、北側の梁行2間、桁行4間の空間の中央北寄りに焼土1基を確認した。焼土1は、0.44×0.44mの不整形の強変焼土で、深さ2cm程被熱している。この焼土が本遺構に伴うかであるが、もし伴うのであればこの空間は土間であった可能性が出てくる。しかし、問題はこれが囲炉裏であった場合は、天井の梁から囲炉裏に鍋を吊さなければならない、柱の位置から見ると北へ0.5m程ずれていることになる。ずれていても五徳などを用いていた可能性もあるが、現時点では不明としておきたい。ただ、この空間が土間であった場合、南側の梁行2間、桁行3間(もしくは2間)の空

SB04



第18図 SBO4掘立柱建物跡(1)



第19図 SBO4掘立柱建物跡(2)

間はより格式高い空間として板間であった可能性がある。

遺物は、2天目壺、3・4青磁碗、7青磁香炉、8青磁水注、15・17～19・22・24・30～32・35白磁小皿、36古瀬戸水滴、37古瀬戸鉾目付大皿、38古瀬戸梅瓶、39土師質風炉、40古瀬戸四耳壺、41珠洲系陶器壺、42越前壺、45温石、47石鉢、48・49茶臼、52鉄製引手、54板状青銅製品、55不明板状青銅製品が建物範囲から多量に出土している。特に、茶臼は建物南東側のP118～120付近に集中して出土しており、その場で破砕したような状態で検出した。

本遺構について、放射性炭素年代測定を実施したのでVI-1を参照されたい。このうち、検出時にS B04を覆っていた褐色炭・焼土混シルト層出土の木炭(構築材)から1,420calAD-1,440calAD(68.2%・1 σ)、P121出土炭化柱材から1,396calAD-1,417calAD(49.2%・1 σ)、P131出土炭化柱材から1,360calAD-1,387calAD(43.6%・1 σ)の年代値を得ている。(北田)

S B05掘立柱建物跡(第20図、写真図版12)

曲輪1(第2期)の南東隅に位置する掘立柱建物である。梁行3間の東西棟で、建物の軸はN-4°-Eと僅かに東偏する。柱間寸法は、東側柱筋が南から2.0m(6.6尺)、2.09m(6.9尺)、2.0m(6.6尺)、西側柱筋が南から2.0m(6.6尺)、2.0m(6.6尺)、2.15m(7.1尺)と、それぞれに微妙な違いがみられるが、おおよそ2.0m(6.6尺)を基本として設計されていたことが窺われる。桁行については、南側柱筋と北側柱筋とは柱間数が異なり、南側柱筋は5間、北側柱筋は6間とする。その柱間寸法は、南側柱筋が東から1.3m(4.3尺)、2.12m(7.0尺)、3.79m(12.5尺)、2.94m(9.7尺)、1.3m(4.3尺)、北側柱筋が東から1.15m(3.8尺)、2.21m(7.3尺)、2.21m(7.3尺)、2.33m(7.7尺)、2.09m(6.9尺)、1.18m(3.9尺)で、北側柱筋の方が1尺弱ほど短い。この北側柱筋のさらに北側には1.15m(3.8尺)隔てて柱列が認められる。柱位置は建物の北側柱筋に揃えるが、2つの柱穴が間引かれている。おそらく建物北面外側に縁が付属していたと考えられ、これにより、建物は床張りの構造であったことが復原できるが、建物内からは床束等の痕跡のほか、間仕切りの柱穴等も検出できなかった。なお建物南西隅の南面側にも、1.3m(4.3尺)四方の張り出し部が認められるが、こちらは建物に付属する施設であったか不明。

柱穴の多くは小規模で、直径0.2～0.4m程度の円形である。深さは0.5～0.6m程度のものや0.2m程度のものもあるが、0.4m前後のものが多い。埋土は岩盤の小偽礫や炭を含む褐色や暗褐色のシルトや砂質シルトである。

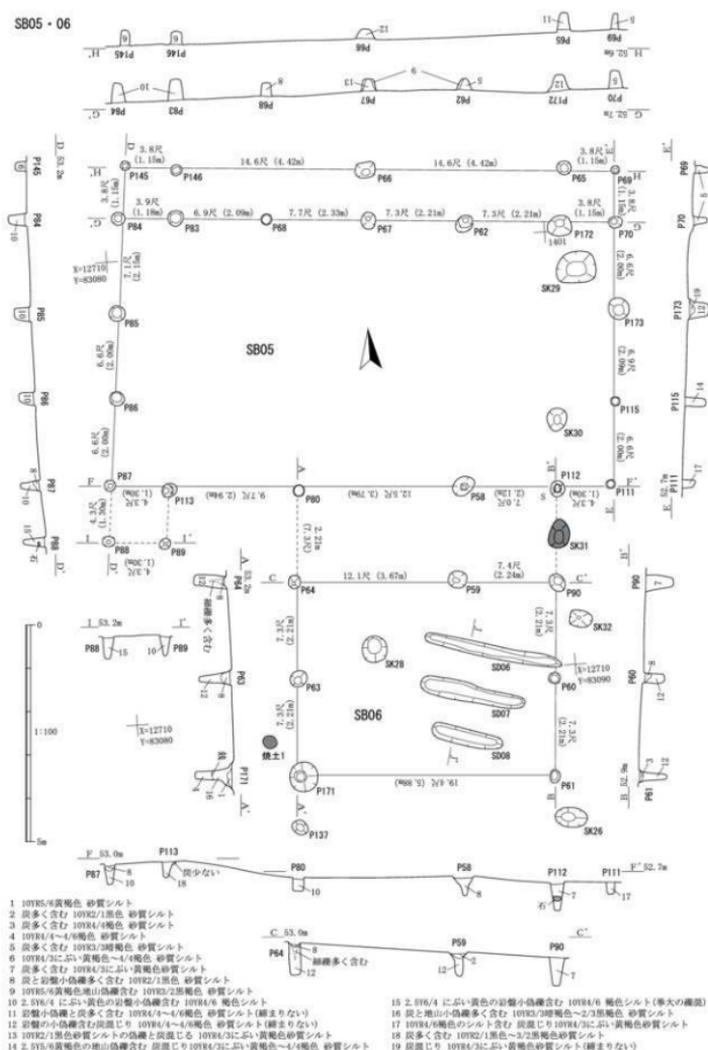
遺物は、38古瀬戸梅瓶片、42越前壺片を建物範囲から出土している。

本遺構について、放射性炭素年代測定を実施したのでVI-1を参照されたい。このうちP68埋土出土炭化材から1,272calAD-1,288calAD(68.2%・1 σ)の年代値を得ている。想定される第2期の遺構としては、想定される15世紀後半とずれが生じるが、測定値は伐採年代と捉えている。

S B06掘立柱建物跡(第20図、写真図版12)

S B05の南側に並行する掘立柱建物である。梁行は2間で、柱間は両側柱筋ともに2.21m(7.3尺)等間である。桁行についてはS B05と同じく、南側柱筋と北側柱筋とは柱間数が異なり、南側柱筋は1間、北側柱筋は2間とする。柱間寸法は、北側柱筋が東から2.24m(7.4尺)、3.67m(12.1尺)の、合わせて5.91m(19.5尺)であるのに対して、南側柱筋は5.88m(19.4尺)で、北側柱筋に比べ0.03m(0.1尺)ほど短い。ただしこれは机上での計測値であり、意図的に長さを変えたものではないと考えている。なおS B06の北側柱筋に対応するS B05の南側柱筋には、柱筋を揃えるように柱が設けられている。またS B05とS B06との間隔が、S B06の梁行柱筋の柱間寸法と全く同じ2.21m(7.3尺)であることか

SB05・06



第20図 S B05・06掘立柱建物跡

ら、S B05を本屋棟としてS B06が接合する曲り家風の建物であった可能性も考えられる。

柱穴は、直径0.3～0.4m程度の円形で、S B05と特に違いは見られないが、深さはS B05に比べやや深く、どれも0.5m以上ある。埋土は岩盤の小偽礫を含む炭混じりの褐色や黒色の砂質シルトなどである。南西隅の柱穴(P171)のみ他に比べやや大型で、直径は0.64～0.68mを測る。深さは0.88mで、中位から判読不可の76青銅製銭貨(○通寶)1枚が出土した。また、47石鉢片、74淳化元寶、77○○元寶(判読不可)が建物範囲から見つかっている。

(伊藤)

S B07掘立柱建物跡(第21図、写真図版14)

曲輪1(第1期)北西側のX=12735・Y=83070付近に位置する。第2期盛土整地層を掘り下げた第1期整地層上面で検出した。当初は、第1期面には建物はなく、南側底部分のみを検出していたことから、欄列かと考えていた。第2期面のS B04掘立柱建物と重複しているが、第1期面に確認された本遺構が古い。また、S K36・41・43土坑、S F06・07・10・12・13焼土と重複しているが、本遺構建築以前の古い遺構と考えられる。

規模は、梁行1間の長さ20.37m(6.15m)、桁行6間の長さ38.07m(11.51m)で、南面の1面に庇が付く建物である。主軸方向は北西-南東方向、N-70°-W。計18個の柱穴で構成されると考えられ、このうち15個と付属する1個の計16個を検出した。間仕切りの柱は検出されておらず、身舎内がどのような空間に仕切られていたかは分からない。

身舎の柱間寸法は、桁行側7.67m(2.30m)に揃えられており、南面に位置する庇の出は3.77m(1.12m)と前者の半分ほどになっている。南面西端の庇に伴う柱は検出できず、やや外れたP105のみを確認した。また、北面桁行のP153とP161の間2個は検出できなかった。柱穴は、直径0.3～0.6m程度の円形基調で、抜き取りのためか上端が広がっているものが多い。おそらく、第2期の盛土整地層を普請する際に、建て替えることから抜き取ったものと推定される。深さは0.8m程度が多く、中には1m程になる柱穴もある。身舎と庇の柱穴を比較すると、庇の柱穴は底径が小さいものが多い傾向がある。柱痕跡は黄褐色～褐色のシルト質で、柱根は残存していない。これら柱穴は、第1期の盛土整地層による平坦面が形成された後に構築されており、埋土には整地土が多く含まれている。

庇部分の柱穴が身舎の柱穴より規模が小さいことから、片面に庇の付く入母屋風の建物というより、切妻の建物の南面に下屋が付属する構造であった可能性もある。これから、第2期のS B02やS B04のような大型の建物と異なり、より簡素な建物であったと見られる。

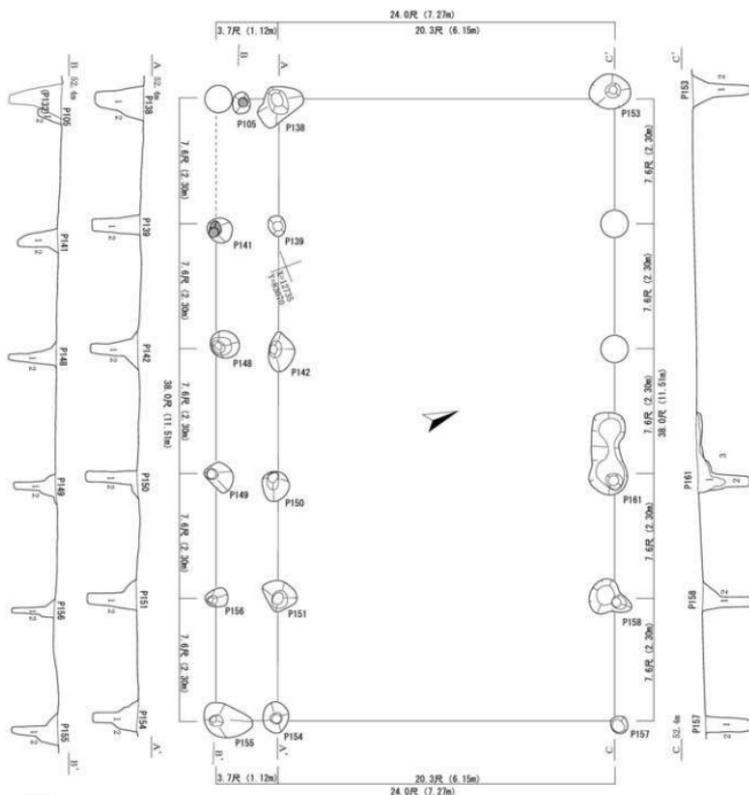
本建物プランの西側から50万装具の鍍金された青銅製目貫を出土した。また、遺構内北西側の第1期面から56熙寧元寶と57判読不可の青銅製銭貨、中央付近から58判読不可の○○通寶、59判読不可の青銅製銭貨(銚銭)、P138埋土から判読不可の青銅製銭貨(銚銭)が見つかった。

これらの出土遺物と、本遺構が第1期面で確認されたことから、建築以前の土坑・焼土の時期からまもなく構築され、第2期の盛土整地層が普請されるまでの間存続した建物と考えられる。

④土坑

S K24土坑(第26図、写真図版13)

曲輪1(第2期)南東側のX=12700・Y=83090付近に位置する。規模・形状は長径1.0m、短径0.93mの略円形で、深さは1.08mを測る。埋土は5層で構成されており、1～4層は廃絶後に流入した層、5層は使用時からの堆積層と考えられる。底面付近の5層中から90貝類など64.8gが出土した。内訳は、イガイ・エゾワスレ・イノシシ上右3歯・その他不明貝片である。出土した貝類などから、本遺



P138

- 1 10T84/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 2 10T86/6明黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや硬 地山

P139 ~ P139

1 なし

- 1 10T85/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや硬 地山

P141

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱

締まりやや硬

- 2 10T85/6黄褐色粘土 粘性中

締まりやや硬

P142

- 1 10T84/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 2 10T86/6明黄褐色粘土 粘性中 締まりやや硬 地山

P143

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 2 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山

P149

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 2 10T86/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 地山

P150

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 地山ブロック少量

- 2 10T86/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山

P151

- 1 10T84/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 地山ブロック ϕ 1cm 10%

- 2 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山

P153

- 1 10T84/4褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中

- 2 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 地山

P154

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 2 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山

P155

- 1 10T84/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 灰化物(ϕ 5mm)1%

- 2 10T84/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 3 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山

P156

1 なし

P157

- 1 10T85/6黄褐色粘土 粘性中 締まり硬 地山

P157

- 1 10T82/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 上部に地山ブロック少量混入

- 2 10T84/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 地山断移層

P158

- 1 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 盛土敷地層と同一

- 2 10T82/3暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

P161

- 1 10T85/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 盛土敷地層と同一

- 2 10T84/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

- 3 10T86/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 地山断移層

第21図 S B07掘立柱建物跡

構は廃棄土坑(ゴミ坑)として使用されたと考えられる。また、本遺構の埋土2層中から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施したところ、1,414calAD-1,431calAD(68.2%・1 σ)の年代値を得ている。炭化材はおそらく、焼失した建物跡の構造材から本遺構埋没時に流入したものと考えられる。よって、これを伐採年代と捉えれば、15世紀後半に廃絶したことに符合するものと考えられる。

(北田)

S K 25土坑(第26図)

曲輪1(第2期)南東側のX=12709・Y=83095付近に位置する。平面形は長径0.95m、短径0.8mの楕円形で、深さは約0.2mを測る。埋土は炭を多く含む褐～暗褐色の細粒砂～シルトである。出土遺物なし。

S K 26土坑(第25図、写真図版13)

曲輪1(第2期)南東側のX=12706・Y=83090付近に位置する。S B 06の南東隅に近接する土坑である。平面形は長径0.74m、短径0.45mの楕円形で、深さは0.1mを測る。埋土は炭が少量混じる褐～暗褐色の細粒砂～シルトである。出土遺物なし。

S K 27土坑(第26図、写真図版13)

曲輪1(第2期)南東端のX=12696・Y=83089付近に位置する。北東約2mにはS K 24が隣接する。平面形は長径0.88m、短径0.79mのやや歪んだ円形を呈する。深さは0.34mで、埋土は下層が炭と地山の小偽礫を多く含む暗褐～黒褐色の砂質シルト、上層が黄褐色の砂質シルトである。隣接するS K 24が廃棄土坑(ゴミ坑)であることから、本遺構も同種の性格を持つ可能性もある。出土遺物なし。

S K 28土坑(第25図)

曲輪1(第2期)東側のX=12710・Y=83086付近、S B 06内の北西寄りに位置する。平面形は長径0.6m、短径0.56mのほぼ円形で、深さは0.18mを測る。埋土は焼土を多く含む混じりの赤褐～褐色の砂質シルトであったが、遺構自体には被熱痕跡は認められなかった。出土遺物なし。

S K 29土坑(第25図、写真図版13)

曲輪1(第2期)東側のX=12720・Y=83091付近、S B 05内の北東隅に位置する。平面形は長辺0.9m、短辺0.72mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。深さは0.15mで、埋土は下層が炭や地山の小偽礫を含む黄褐色の砂質シルト、上層が焼土と地山の小偽礫を多く含む黒～黒褐色の砂質シルトである。SK28と同様、遺構自体には被熱痕跡は認められなかった。出土遺物なし。

S K 30土坑(第25図)

曲輪1(第2期)東側のX=12715・Y=83090付近、S B 06内の南東隅に位置する。平面形は長径0.55m、短径0.45mの一方がやや尖り気味の円形を呈する。深さは0.12mで、埋土は炭と岩盤の小偽礫を多く含む黒色の砂質シルトである。出土遺物なし。

S K 31土坑(第25図、写真図版13)

曲輪1(第2期)東側のX=12713・Y=83091付近、S B 06の北東隅、S B 05との中間に位置する。平面形は長径0.67m、短径0.5mのやや尖り気味の楕円形を呈する。深さは0.2mで、埋土は下層が炭と岩

3 遺構

盤の小礫を多く含む黒色の砂質シルトで、上層が炭を多く含む褐色の砂質シルトある。遺構の壁面から底面まで全体が、被熱によって赤褐色に変質する。出土遺物なし。

S K32土坑(第25図)

曲輪1(第2期)東側のX=12711・Y=83091付近、S B06の東側に近接する。平面形は長辺0.5m、短辺0.4mの一方が丸くなった隅丸長方形を呈する。深さは0.1mで、埋土は炭と岩盤の小礫を多く含む黒色の砂質シルトである。出土遺物なし。

S K35土坑(第22図、写真図版10)

曲輪1(第1期)西側のX=12733・Y=83070付近に位置する。規模・形状は長径1.4m、短径0.95mの不整形円形、断面皿形で深さは0.16mである。S B04のプラン内で確認したが、建物よりも古い土坑と考えられる。底面が赤褐色に強変被熱しており、埋土にも炭化物が混じることから何らかの作業が行われたと見られる。出土遺物はないが、所属時期はS B04よりも1時期古い第1期の遺構と考えられる。

S K36土坑(第22図、写真図版10)

曲輪1(第1期)西側のX=12735・Y=83074付近に位置する。規模・形状は長径1.32m、短径1.0mの楕円形、断面皿形で深さは0.3mである。S B04のプラン内で確認したが、建物よりも古い土坑と考えられる。埋土中に地山ブロックが認められることから、人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はないが、所属時期はS B04よりも1時期古い第1期の遺構と考えられる。

S K37土坑(第22図、写真図版10)

曲輪1(第2期)西側のX=12747・Y=83074付近に位置する。規模・形状は長径1.5m、短径1.32mの略円形、断面は鍋底形で、深さは0.97mである。S B04北側で、切岸1へ下る斜面肩部で、S K38と並んで確認した。埋土6層に多量の炭化物を含んでいることから、城館廃絶時には開口していたと考えられる。その後は自然堆積と考えられる流入土が堆積している。埋土下位の6層中から、風炉の破片を出土しており、堆積状況も含めて第2期の遺構と考えられる。

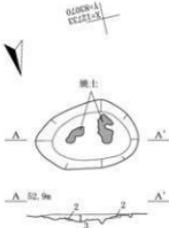
S K38土坑(第22図、写真図版10)

曲輪1(第2期)西側のX=12745・Y=83073付近に位置する。規模・形状は長径1.6m、短径1.55mの円形、断面は皿形で、深さは0.43mである。S B04北側で、切岸1へ下る斜面肩部で、S K37と並んで確認した。S K37の埋土下位6層で確認した火災後の初期流入土が埋土上位の2層に堆積していることから、並列するS K37とはやや時間差があることが分かる。上部に火災による炭化物を含んでいることから第2期の遺構と考えられる。出土遺物なし。(北田)

S K39土坑(第24図、写真図版19)

曲輪1(第1期)東側のX=12697・Y=83087付近、盛土下から確認した旧曲輪2に位置する。平坦面の南端に位置する。平面形は長径1.45m、短径0.9mの楕円形を呈する。深さは1.05mで、埋土は小礫や崩れた岩盤の礫を多く含むオリーブ褐色の砂質シルトで、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。底面付近から銭貨11枚が重なって出土した。11枚のうち判読できたのは、77開元通寶、87嘉祐通寶

SK35



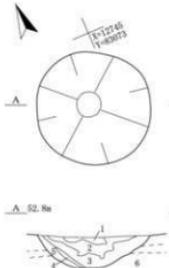
SK35

- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR7/6明黄褐色砂質ブロック(φ5cm)3% 一般あり
炭化物(φ1) (φ10~5cm)5%散在
- 2 5YR4/6黄褐色シルト 粘性弱 締まりやや硬 微塵状土
- 3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬 盛土盛地層

SK36

- 1 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中
- 10YR7/6明黄褐色砂質ブロック(φ3~5cm)10%散在
- 2 10YR6/6明黄褐色シルト・砂質 粘性なし 締まり密
盛土盛地層

SK38



SK38

- 1 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 炭化物粒(φ5mm)1%
- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
炭化物(φ5mm~3cm) 炭化物層→火災時の初期流入土
- 3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
炭化物(φ5mm)1%以下 火災前にすでに埋藏していた際の流入土
- 4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 5 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 使用時の初期流入土
- 6 10YR5/6黄褐色砂質シルト 土上から50cm→盛土盛地層
その下に10YR4/6褐色シルトの目録土。さらに下は10YR5/6黄褐色シルトの地山

P130

- 1 10YR3/6暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 炭化物粒(φ5mm)1% 植物体
- 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱→中 締まり中
- 3 10YR6/6明黄褐色砂質土中 粘性なし 締まり密 盛土盛地層

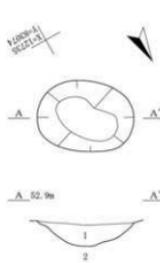
SD11

- 1 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中
- 3 10YR6/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり密 盛土盛地層

SD12

- 1 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 締まり中
- 2 10YR7/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり密 盛土盛地層

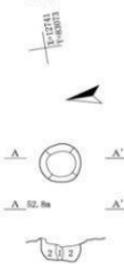
SK36



SK37

- 1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 炭化物(φ5mm)1% 炭焼後の流入土
- 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まり中や硬 炭化物(φ1cm)2% 炭焼後の流入土
- 3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中や硬 炭化物(φ1cm)5% 炭焼後の流入土
- 4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まり中や硬 炭化物(φ1cm)1% 炭焼後の流入土
- 5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 微塵状砂土ブロック 6層と同様の堆積
炭化物層 中世火災時の初期流入土層
- 7 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり密 盛土盛地層
- 8 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 炭粒(φ5)の初期土
→野焼き後に炭渣か? 炭化物(φ5mm)2%
- 9 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中→やや硬 地山

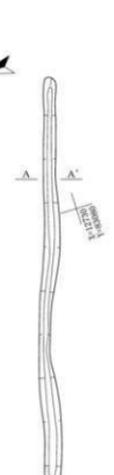
P170



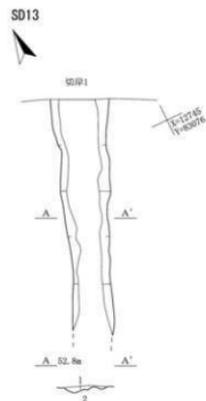
SD11



SD12



第22図 S B04周辺の遺構(1)



SD13
 1 10%以下褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中
 炭化物(φ 5mm)1%以下 用炭燼少
 2 10%以下明黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まり密
 盛土整地層

第23図 SB04周辺の遺構(2)

S K42土坑(第27図、写真図版15)

曲輪1(第1期)西側のX=12739・Y=83083付近に位置する。曲輪1の整地層T1を掘削した際に、トレンチ断面で確認した。規模・形状は、長径0.85m以上、短径0.75mの楕円形で、深さは0.25mを測る。埋土は、第1期面を覆った第2期の盛土整地層で、明黄褐色粘土質シルトで人為的に埋め立てられている。検出状況から、開口した坑をそのまま埋め立てた様子が窺える第1期の遺構である。出土遺物はなし。

S K43土坑(第27図、写真図版15)

曲輪1(第1期)西側のX=12740・Y=83077付近、S B07内の北西寄りに位置する。規模・形状は、長径2.95m、短径0.8mの不整な長楕円形で、深さは約5cmを測る。埋土は、第1期面を覆った第2期の盛土整地層で、明黄褐色粘土質シルトで人為的に埋め立てられている。S K42と同様に、検出状況から開口した坑をそのまま埋め立てた様子が窺える第1期の遺構である。出土遺物はなし。

S K44土坑(第27図、写真図版15)

曲輪1(第1期)西側のX=12740・Y=83079付近、S B07の北側に近接する。規模・形状は、長径0.7m、短径0.63mの円形で、深さは0.26mを測る。埋土は、第1期面を覆った第2期の盛土整地層で、明黄

でその他は判読不可3枚、銚銭6枚である。底面から銚銭がまとまって出土したことから、墓坑であった可能性が高い。同じく旧曲輪1で確認したS K40と規模・形状が類似することから、同時期に併存していたと考えられる。

S K40土坑(第24図、写真図版19)

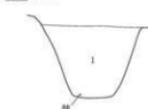
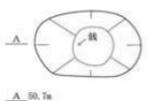
曲輪1(第1期)東側のX=12719・Y=83092付近、盛土下から確認した旧曲輪1に位置する。平面形は長径1.3m、短径0.8mの楕円形を呈する。深さは1.1mで、埋土は下層が地山の偽礫を多く含む黄褐色の砂質シルト、上層が黒色の旧表土層や黄褐色の地山の偽礫を多く含む黒褐色の砂質シルトで人為的な一括埋戻し土と見られる。S K39の北側に約22m隔てて位置しており、規模や形状、位置関係から、S K39と同時期に併存していた墓坑と考えられる。出土遺物はなし。(伊藤)

S K41土坑(第27図、写真図版15)

曲輪1(第1期)西側のX=12737・Y=83080付近、S B07内の中央やや北寄りに位置する。平面形は長径1.35m、短径0.95mの不整な楕円形で、深さは0.38mを測る。埋土中位の3層に強変焼土が形成されており、現地性と考えられる。4層にも焼土粒が混じることから、繰り返し火が焚かれていた可能性がある。埋土2層の炭化物があり、1層盛土整地層で人為的に埋め立てられたと考えられる。S B07が土間であれば付属する可能性もあるが、明らかでない。出土遺物なし。

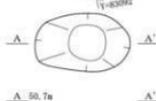
褐色粘土質シルトで人為的に埋め立てられている。S B07に付属する柱穴の可能性もあるが不明である。出土遺物はなし。

SK39



SK39
1 小礫や明れた岩盤礫多く含む
2 S16/6オリーブ褐色砂質シルト

SK40



SK40
1 黒色目直土層や10TK5/6黄褐色の
堆山礫層多く含む10TK/1黒褐色
砂質シルト
2 堆山礫層多く含む10TK/3L2.5L1
黄褐色砂質シルト

0 1:60 2m

第24図 曲輪1(第1期)の遺構

⑤焼土

S F06焼土(第27図、写真図版16)

曲輪1(第1期)西側のX=12739・Y=83075付近、S B07内の西側中央に位置する。規模・形状は長径0.3m、短径0.26mの不整形円で、被熱した深さは2cm程度である。赤褐色に強変、被熱しており、第1期整地層上面に形成された現地性と考えられる。S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性はある。

S F07焼土(第27図、写真図版16)

曲輪1(第1期)西側のX=12736・Y=83075付近、S B07内の西側やや南寄りに位置する。規模・形状は長径0.12m、短径0.1mの不整形円で、被熱した深さは2cm程度である。赤褐色に強変、被熱しており、第1期整地層上面に形成された現地性と考えられる。S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性はある。

S F08焼土(第27図、写真図版16)

曲輪1(第1期)西側のX=12741・Y=83080付近、S B07の北側に近接する。規模・形状は、長径0.9m、短径0.62mの不整形で、被熱した深さは5cmと厚い。赤褐色に強変、被熱しており、第1期整地層上面に形成された現地性と考えられる。S B07に近接するが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性はある。

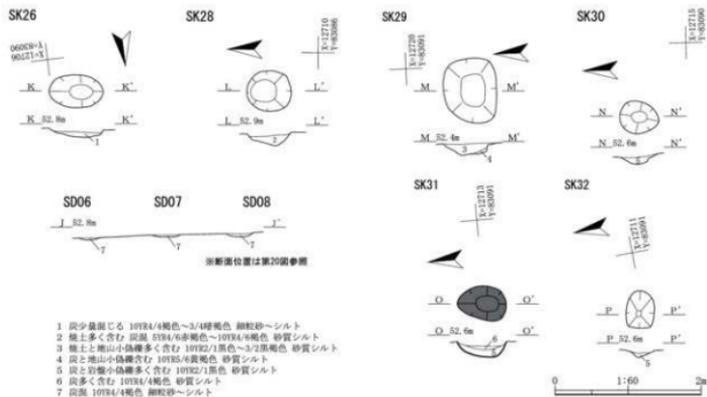
S F09焼土(第27図、写真図版16)

曲輪1(第1期)西側のX=12746・Y=83075付近に位置する。第2期面のS D13と重複しているが、本遺構が古い。規模・形状は、長径0.66m、短径0.48mの不整形の範囲に明黄褐色粘土質シルトを整地した上面に、暗赤褐色が長径0.32m、短径0.26mの楕円形に強変、被熱した範囲を有している。第1期面の他焼土と同時期と考えられる。

S F10焼土(第28図、写真図版17)

曲輪1(第1期)西側のX=12737・Y=83075付近、S B07内の西側やや南寄りに位置する。長径0.9m、短径0.63mの不整形円形の掘り込み底面に、径0.28mと径0.2mの2つの円形、赤褐色の強変被熱痕が認められる。焼土は黄褐色粘土の整地層上面に形成されており、S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性はある。形状が近接するS F12と近似しており、同じ性格を持つ遺構の可能性はある。

3 遺構



第25図 S B05・06周辺の遺構(1)

S F11焼土(第28図、写真図版17)

曲輪1(第1期)西側のX=12743・Y=83076付近、S B07の北側に近接する。北半は盛土層を確認するために入れたトレンチ、西側は重複する径0.28mの円形ピットに切られており、残存値で長径0.48m、短径(0.27)mの不整形で、被熱した深さ4cmを測る。赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。焼土は褐色粘土の整地層上面に形成されており、S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性ある。

S F12焼土(第28図、写真図版17)

曲輪1(第1期)西側のX=12740・Y=83075付近、S B07内の西側やや北寄りに位置する。長径1.3m、短径0.7m以上の楕円形の掘り込み底面に、長径1.06m、短径0.48mと0.5mの雪だるま形の赤褐色に強変した現地性被熱痕が認められる。焼土は明黄褐色粘土の整地層上面に形成されており、S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性ある。

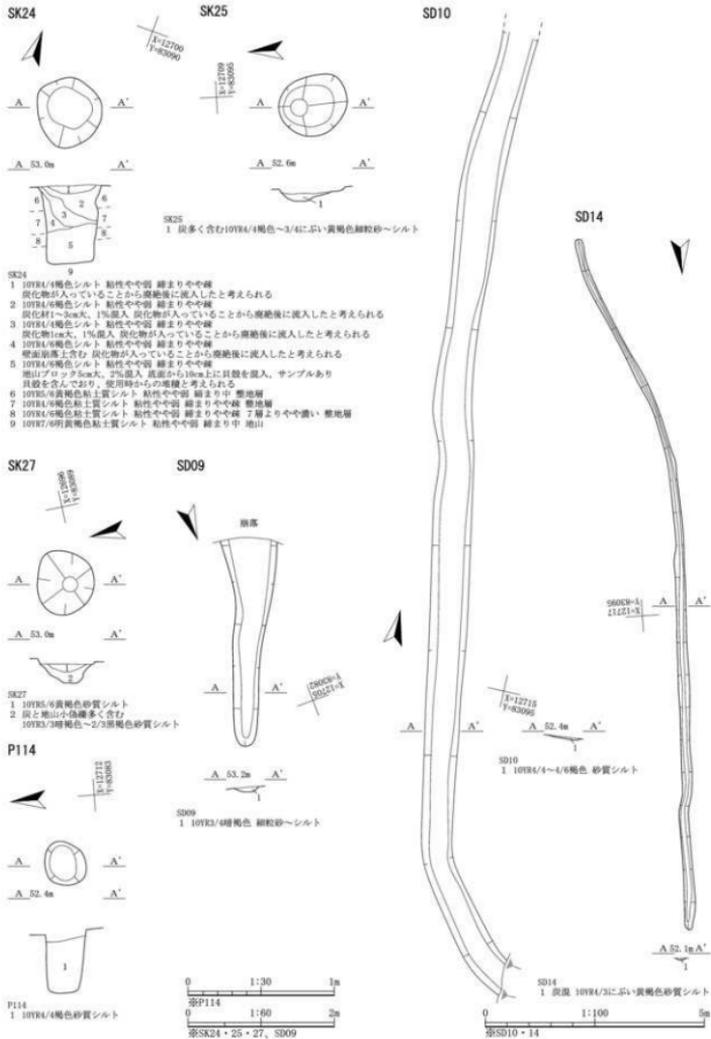
S F13焼土(第28図、写真図版17)

曲輪1(第1期)西側のX=12737・Y=83079付近、S B07内の中央に位置する。規模・形状は、長径0.21m、短径0.15mの不整形で、被熱した深さ2cmを測る。赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。焼土は黄褐色粘土の整地層上面に形成されており、S B07の範囲内にあるが付属せず、建築以前の被熱痕の可能性ある。(北田)

⑥溝跡

S D06・07・08溝跡(第20・25図)

曲輪1(第2期)東側のX=12710・Y=83087付近、S B06内に位置する。溝というよりは、東西方向にのびる浅い溝状の窪みである。長さはS D06が3.2m、S D07が2.4m、S D08が1.7mで、それぞ



第26図 S B05・06周辺の遺構(2)

3 遺構

れは約0.7m隔てて等間隔に並ぶ。深さはどれも2～4cm程度と非常に浅い。埋土は炭が混じる褐色の細粒砂～シルトである。出土遺物なし。(伊藤)

SD09溝跡(第26図)

曲輪1(第2期)南東側のX=12705・Y=83082付近に位置する。遺構南側は崩落して失われており、残存する規模は長さ2.9m、幅0.35～0.75m、深さは7cm程度と浅い。遺構は、S B06南西側のP137ビット付近から南へ向かって延びている。土塁1の南辺端を通り、標高の低い南側の斜面方向へ延びていることから、S B06の雨垂れから流れた雨裂痕と考えられる。出土遺物なし。

SD10溝跡(第26図)

曲輪1(第2期)東側のX=12715・Y=83095付近に位置する。曲輪1の東端を南北に走る浅い溝として検出した。SD14と重複しており、本遺構が新しい。規模は長さ13.5m以上、幅0.5m、深さは3～5cm程度と浅い。遺構はS B05・06の東側にあり、これらから流れた雨水を東斜面ではなく、より南側に逸らすために設けられたと考えられる。おそらく、SD14が埋まったため、新たに作り直したと考えられる。出土遺物なし。

SD11溝跡(第22図、写真図版11)

曲輪1(第2期)西側のX=12745・Y=83080付近に位置する。規模は長さ5.42m、幅0.15m、深さは8cm程度と浅い。遺構は、S B04北側のP131ビットから北へ向かって延びている。埋土には周辺から流入した褐色砂質シルトが認められ、標高の低い北方向へ延びていることから、S B04の雨垂れから流れた雨裂痕と考えられる。出土遺物なし。

SD12溝跡(第22図、写真図版11)

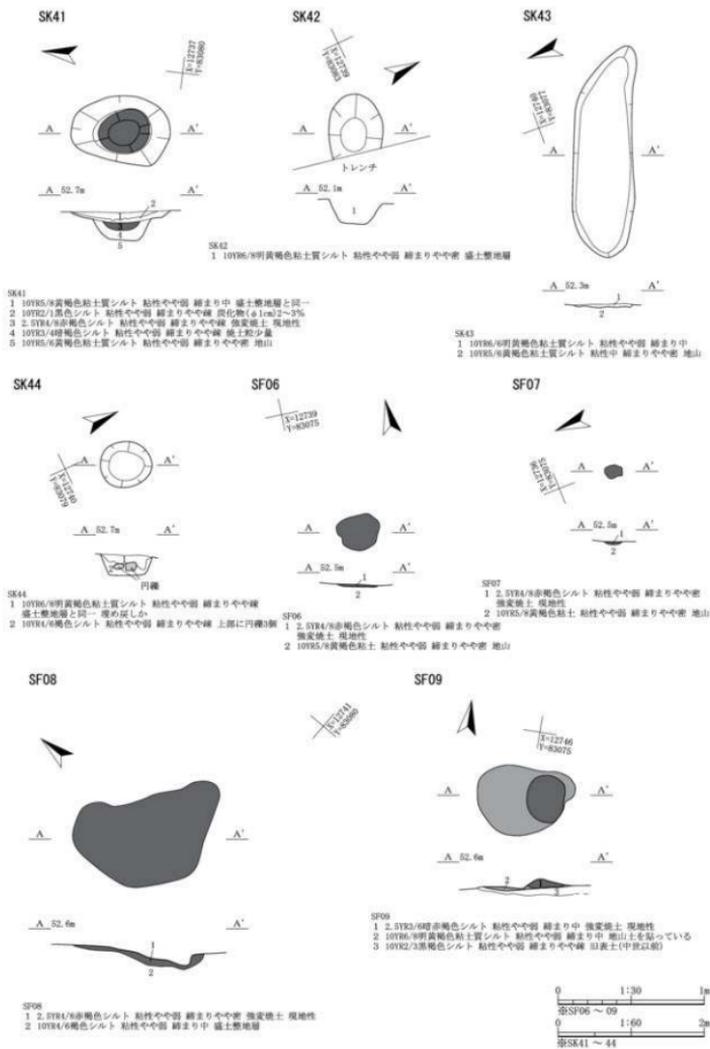
曲輪1(第2期)西側のX=12730・Y=83080付近に位置する。規模は長さ5.65m、幅0.2m、深さは5cm程度とこちらも浅い。遺構は、S B04東側のP128ビットから東に向かって延びている。埋土には周辺から流入した褐色砂質シルトが認められ、標高の低い東方向へ延びていることから、S B04の雨垂れから流れた雨裂痕と考えられる。出土遺物なし。

SD13溝跡(第23図、写真図版11)

曲輪1(第2期)西側のX=12745・Y=83076付近に位置する。規模は長さ3.5m、幅0.8m、深さは10cm程度と浅い。遺構は、S B04北側のP107・110ビット付近から北へ向かって延びている。西隣にはSK37・38があり、S B04から流れた雨水がこれらの土坑へ流れ込むのを防ぐために設けられた排水溝の可能性がある。出土遺物なし。

SD14溝跡(第26図)

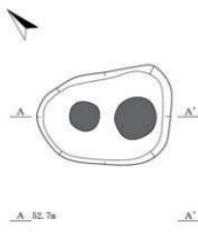
曲輪1(第2期)東側のX=12717・Y=83095付近に位置する。曲輪1の東端を南北に走る浅い溝として検出した。SD10と重複しており、本遺構が古い。規模は長さ9.8m、幅0.15m、深さは3cm程度と浅い。遺構はS B05・06の東側にあり、これらから流れた雨水を東斜面ではなく、より南側に逸らすために設けられたと考えられる。出土遺物なし。



第27図 SB07周辺の遺構(1)

3 遺構

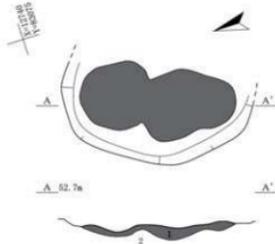
SF10



SF10

- 2.5YR4/6赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 強変地土 現地性
- 10YR5/9黄褐色粘土 粘性やや弱 締まりやや密 地山

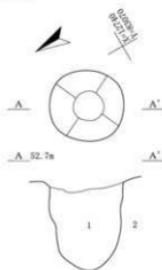
SF12



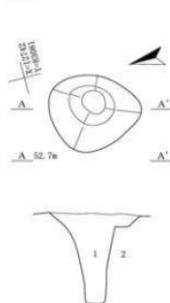
SF12

- 2.5YR4/6赤褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 強変地土 現地性
- 10YR5/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 盛土整地層

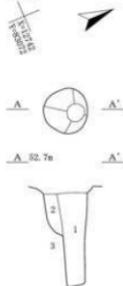
P147



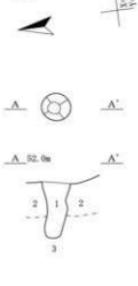
P160



P152



P163



P147

- 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 10Y2/2黒褐色シルトを混入
- 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

P152

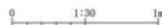
- 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山ブロック少量混入
- 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中
- 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

P160

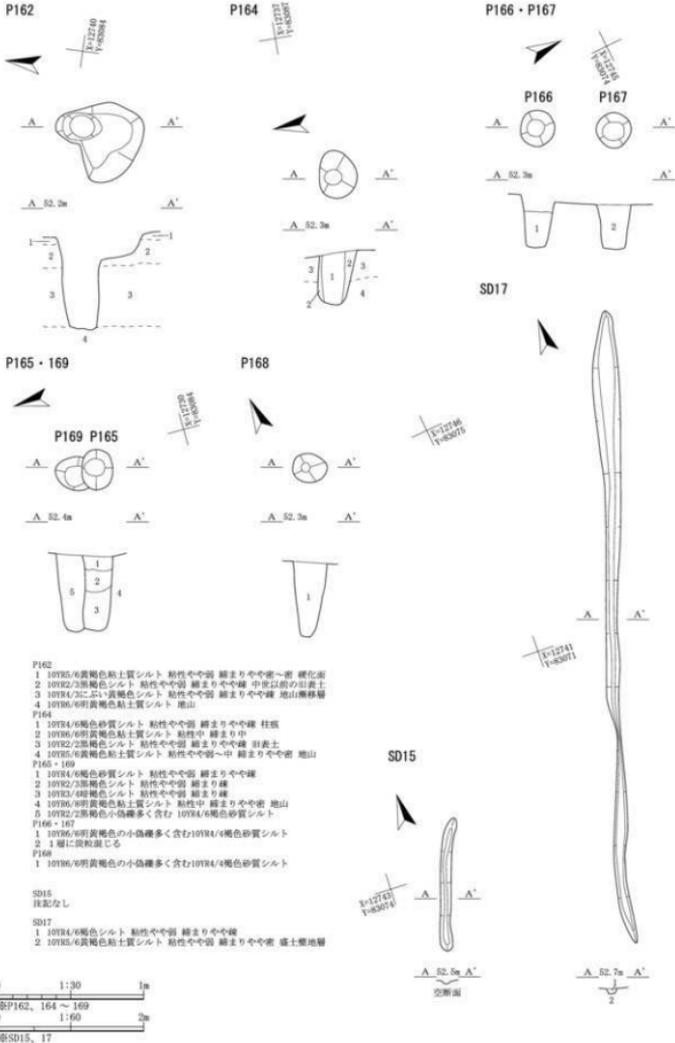
- 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 盛土整地層と同一 種の戻し土
- 10YR3/6暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山層移層

P163

- 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 盛土整地層と同一
- 10Y2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 江底土
- 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山



第28図 S B07周辺の遺構(2)



第29図 S B07周辺の遺構(3)

3 遺構

S D15溝跡(第29図)

曲輪1(第1期)西側の $X=12743 \cdot Y=83074$ 付近に位置する。規模は長さ1.85m、幅0.15m、深さは4cm程度と浅い。遺構は、S B07北西隅のP153ビット付近から北へ向かって延びている。埋土には周辺から流入した褐色シルトが認められ、標高の低い北方向へ延びていることから、S B07の雨垂れから流れた雨裂痕と考えられる。出土遺物はなし。

S D17溝跡(第29図、写真図版11)

曲輪1(第1期)西側の $X=12741 \cdot Y=83071$ 付近に位置する。規模は長さ8.75m、幅0.15~0.35m、深さは8cm程度と浅い。遺構は、S B07西側のP138ビット付近から北へ向かって延びている。埋土には周辺から流入した褐色シルトが認められ、標高の低い北方向へ延びていることから、S B07の雨垂れから流れた雨裂痕と考えられる。出土遺物はなし。

⑦柱穴状ビット

P114柱穴状ビット(第26図)

曲輪1(第2期)東側の $X=12712 \cdot Y=83083$ 付近に位置する。S B06北西隅のP64から西に約1mにある。規模は長径0.31m、短径0.28m、深さは0.4m。S B06北辺の柱通りに揃う位置にあるため付属する柱穴の可能性もある。出土遺物なし。

P147柱穴状ビット(第28図、写真図版18)

曲輪1(第1期)西側の $X=12740 \cdot Y=83070$ 付近に位置する。径0.5m、深さ0.56mの円形で、褐色シルト主体の単層で構成される。建物に付属すると考えられるが、平面形からは認められず不明である。出土遺物はなし。

P152柱穴状ビット(第28図、写真図版18)

曲輪1(第1期)西側の $X=12742 \cdot Y=83072$ 付近に位置する。長径0.32m、短径0.3m、深さ0.66mの略円形で、褐色シルトと黄褐色粘土質シルトの地山土で構成される。S B07と柱筋が通っており、何らかの張り出し的な施設を構成する可能性もあるが、対応する柱穴が確認されなかった。出土遺物はなし。

P160柱穴状ビット(第28図、写真図版18)

曲輪1(第1期)西側の $X=12742 \cdot Y=83081$ 付近に位置する。長径0.63m、短径0.52m、深さ0.63mの不整な円形で、褐色粘土質シルトの単層で構成される。S B07の北側に位置しており、付属施設を構成する柱穴と考えられるが、対応する柱穴は確認できなかった。出土遺物はなし。

P162柱穴状ビット(第29図、写真図版10)

曲輪1(第1期)西側の $X=12740 \cdot Y=83084$ 付近に位置する。長径0.6m、短径0.56mの不整な抜き取り痕とも思える西側に、長径0.26m、短径0.2m、深さ0.62mの楕円形柱穴のあるビットである。褐色粘土質シルトの埋め戻し土で構成され、1層硬化面の上から掘り込まれている。S B07の北側に位置しており、P158とも柱筋が通るが、対応する柱穴は確認できなかった。出土遺物はなし。

P163柱穴状ビット(第28図、写真図版10)

曲輪1(第1期)西側のX=12738・Y=83087付近に位置する。第1期の盛土整地層を掘り下げる段階で検出した。径0.2m、深さ0.38mの円形で、盛土整地層と同一の褐色砂質シルトの単層で構成される。S B07の北東側に位置しており、付属施設を構成する柱穴と考えられるが、P164以外に対応する可能性のある柱穴は確認できなかった。出土遺物はなし。

P164柱穴状ビット(第29図、写真図版10)

曲輪1(第1期)西側のX=12737・Y=83087付近に位置する。長径0.34m、短径0.26mの楕円形で、深さ0.36mのビットである。褐色砂質シルトの柱抜き取り痕と明黄褐色粘土質シルトの2層で構成される。S B07の東側に位置しており、付属施設を構成する柱穴と考えられるが、P163以外に対応する可能性のある柱穴は確認できなかった。出土遺物はなし。

P165・169柱穴状ビット(第29図)

曲輪1(第1期)西側のX=12730・Y=83084付近に位置する。P165は長径0.28m、短径0.21m、深さ0.52mの楕円形、P169は長径が残存値で(0.18)m、短径0.23m、深さ0.53mの楕円形で重複しており、P165の方が新しいビットである。P165は、P169の抜き取り痕の可能性もあるが不明である。S B07の東側に位置しており、付属施設を構成する柱穴と考えられるが、P155などと柱筋が通らず、他に対応する可能性のある柱穴は確認できなかった。出土遺物はなし。

P166・167柱穴状ビット(第29図)

曲輪1(第1期)西側のX=12745・Y=83074付近に位置する。第2期のSD13と重複しているが、本遺構が古い。P166は径0.24m、深さ0.32mの円形、P167は径0.24m、深さ0.32mの円形で約0.3m離れて並んで確認した。P166は褐色砂質シルトの埋め戻し土、P167はこれに炭化物粒を含んでいる。出土遺物はなし。

P168柱穴状ビット(第29図)

曲輪1(第1期)西側のX=12746・Y=83075付近に位置する。長径0.24m、短径0.2mの楕円形ビットで、深さは0.52mを測る。褐色砂質シルトの単層で、埋め戻し土と考えられる。出土遺物はなし。

P170柱穴状ビット(第22図)

曲輪1(第2期)西側のX=12741・Y=83073付近に位置する。規模・形状は長径0.56m、短径0.53mの円形、断面は鍋底形で、深さは0.22mである。S B04の北側に付属する柱穴とも考えられるが、不明である。第2期面にあり、室町時代後期に属すると考えられる。出土遺物なし。(北田)

(2) 曲輪2の遺構

①曲輪

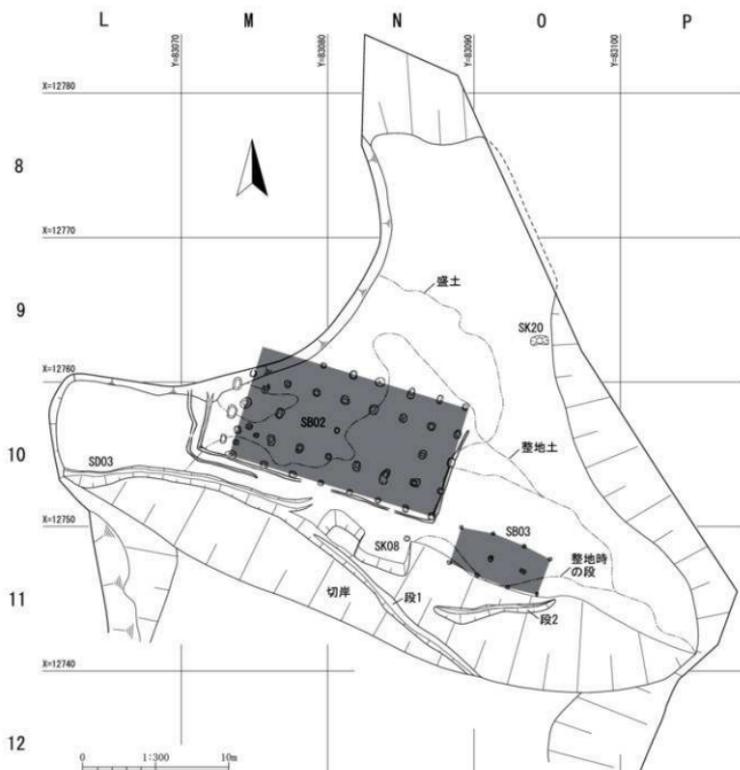
曲輪2(第30～32図、写真図版20)

曲輪1の北側の平場である。曲輪1よりも約5m低く、標高は約47.5mである。切土と盛土、また最終的な整地によって造成された平場で、曲輪1側は丘陵の緩やかな斜面を大きく切土し、北と東側の斜面は切土によって発生した土で盛土している。これによって形成された平場の平面形は三角形で、

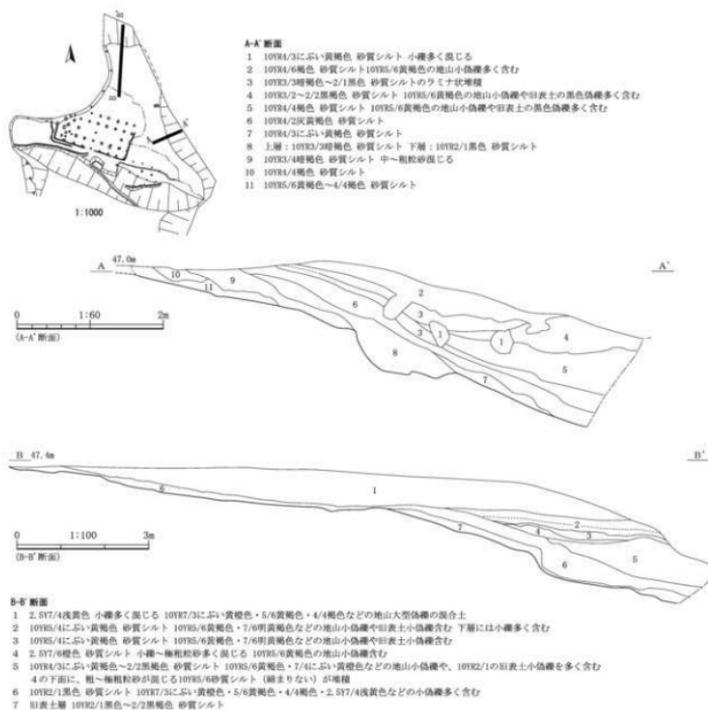
面積は当初750㎡ほどあったと思われるが、北西側が後世の崩落により、抉られるように大きく失われている。この崩落箇所も盛土であった可能性もある。切土造成の際には、S B03検出箇所で見出した小さな段や、斜面裾で見出したS K08とした大きな掘り込み、また面的にも若干削り過ぎた箇所も一部に見受けられる。こうした掘り過ぎた箇所を含めて、第2期直前の整地によって修正して平坦にした後に建物を建築している(第32図)。

建物は、この平場の曲輪1側の斜面裾に寄るように建てられており、北側には遺構がない空白地が広がっている。

曲輪2に盛土の状況を確認するために、2箇所を断面を設定した(第31図)。断面Aは曲輪2の北端に設定したトレンチで、計11層で構成される。1～7層は曲輪2を造成した際に埋め立てた盛土層、8層は旧表土層、9～11層は自然堆積層で11層以下は花崗閃緑岩の岩盤層となる。上部は盛土による



第30図 曲輪2(1)



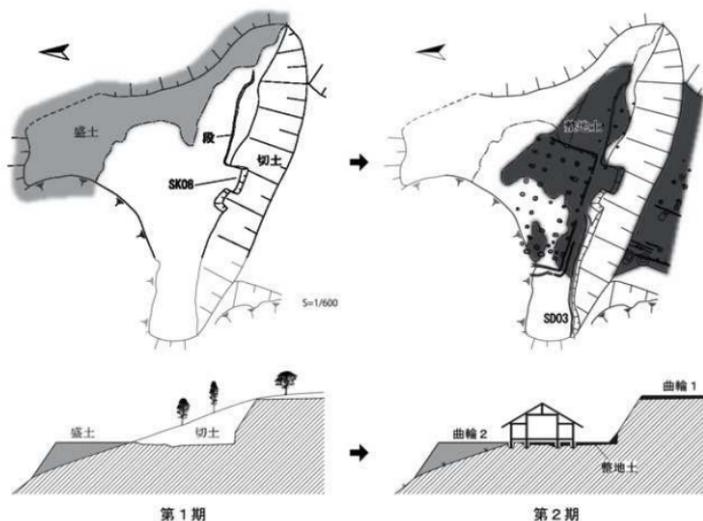
第31図 曲輪2(2)

平坦面がもう少し広がっていたと考えられるが、崩落によって流出して失われている。断面Bは曲輪2の東側に設定したトレンチで、計7層で構成される。1～6層が盛土層、7層が旧表土層、7層以下は自然堆積層で花崗閃緑岩の風化層から岩盤層となる。調査区外の曲輪2東斜面は急斜面となるため、平坦面の造成に加えて斜面をさらに急傾斜にする意図があったものと考えられる。東斜面下には小規模の曲輪や通路状の痕跡が確認できる。(伊藤・北田)

②掘立柱建物跡

S B02掘立柱建物跡(第33図、写真図版21・22)

曲輪2の中でも曲輪1寄りの切岸裾に位置する。桁行7間、梁行4間の、4面に庇を付すいわゆる5間4面の掘立柱建物で、周囲には細溝が2条件う(溝1・2)。切岸の方向に沿った東西棟で、軸の振れはN-70°-Wである。柱筋はどこもきれいに通っており、庇の柱位置も身舎の柱筋に揃う。身



第32図 曲輪2の盛土・整地土範囲平面図と断面模式図

舎内の西から2間目の柱筋上には間仕切りの柱が設けられていることから、身舎内が2つの空間に仕切られていたことが復原できる。

身舎の柱間寸法は、妻側柱筋も平側柱筋も基本的に2.0m(6.6尺)であるが、東から2間目の柱間だけが2.09m(6.9尺)となる。ただしこれは机上での計測値であり、現地では全長約10mの中での僅か9cmの差で、5間に配分すれば1間につき柱間が2cm弱広がる程度の値である。計画当初から明確な意図をもって差を付けたものなのか疑問であるが、本書ではそのまま2.09mとしておきたい。庇の柱間は、上記のとおり身舎と柱間を描えることから、身舎の柱間寸法と同じ2.0m(6.6尺)を基本とするが、身舎の東から2間目に対応する柱間のみ2.09mとなる。庇の出は、南・北・東面が1.91m(6.3尺)と身舎の柱間に比べやや狭くなるが、西面のみ2.42m(8尺)と身舎の柱間よりも広くとる。このやや広い西面庇内からは、以下の報告する土坑を3基(SK12~14)検出している。

柱穴は直径0.4~0.8m程度の円形、もしくは楕円形ものがほとんどで、都城に見られるような隅丸方形のものは少ない。深さは0.5~0.7m程度で、中にはP14のように0.8mを超えるものもある。身舎と庇の柱穴とに規模の違いは特に認められない。柱掘方の埋土は岩盤の偽礫を多く含む黄褐色や褐色の細粒砂~シルトで、柱穴のほとんどからは柱痕跡が明瞭に認められた。その柱痕跡は炭が多く混じるにぶい黄褐~褐色の中粒砂~シルトで、柱根は全く残っておらず、また立っていた柱が朽ちて土壌化したような状況でもなかった。柱の腐った部分が周囲の土で充填されたというよりは、この原理を利用するなど、何らかの方法により垂直方向に柱を引き抜き、そこに周囲の土が混入して柱状の痕跡として残ったと考えた方がよいかもれない。溝2の南西角で検出したP57は、全く埋まらずに、大きな偽礫の下は空洞の状態であった。P40とP41の柱痕内の一部残っていた柱材について樹種同定

を行ったところ、クリ材が用いられていたことを併記しておく(Ⅵ-2-2樹種同定参照)。

また柱穴の中には、P43やP44のように、2基の柱穴が重なったような状態のものがあり、一見建物の建て替え、あるいは柱の交換が行われたことを示しているように思われた。P44についてはその2つの柱穴の関係が明らかになるように南北方向に断ち割り、断面観察を行った。その結果、柱の痕跡が残っていたのは西側一方のみで、東側については、柱痕跡はもちろん抜き取り痕跡や掘り直しの痕跡もないことが確認できた。これによって、S B02には建て替えや柱の交換はなかったと判断した。この一見建て替えや柱の交換を示していると思われる柱穴については、建築当初の柱位置の微調整によるものと考えている。

上記のとおり、身舎と庇の柱穴に規模の違いが認められないことから、屋根は身舎と庇の部分が一体型の、入母屋造であったと推定できるが、そうした場合、先述の西面庇の出が問題となる。南・北・東面の庇の出は同じなので、北東と南東角の隅木は45°に入れることができるが、北西と南西角の隅木については、西面庇の出が大きいため、45°に入れることができず振隅となってしまう。したがって屋根は単純な入母屋造にはできず、西面のみ複雑な構造をしていたと考えられる。西面以外の3面は一体型の入母屋造風の屋根で、西面のみ非一体型の庇を付けていたとも考えられるが、SB02が建てられた時期とほぼ同じ時期の、1413年に再建された奈良県の春日大社着到殿のように、庇の出が異なる場合でも、比較的簡単な構法によって隅木を真隅に架けて入母屋造風に造る場合もあり、どちらとも判断できない(左下写真)。上記のとおり、西面の庇においても、柱穴に身舎との規模の違いが認められないことから、一体型の屋根であったと考えたい。

この西面庇のさらに西側からは、庇の柱筋からさらに西側に1.12m(3.7尺)隔てて1条の柱筋を検出した。建物に伴う溝2が、建物の西面では南面で見られるように庇の柱筋に沿わずに、柱筋から大きく隔てて掘られていることも密接に関連していると思われる、ここに何らかの特殊な施設が組み込まれていたことが窺える。柱穴は身舎や庇とは柱筋を揃えず、それらの柱間中央に位置する。平面形は長径0.65~0.9mの楕円形で、平面規模は身舎や庇の柱穴に比べやや大型になるが、深さは0.4m程度と明らかに浅い。特に南側のP46は深さ0.25m程度しかない。目隠し塙のような施設の可能性も考えられるが、建物に近すぎることで、また柱穴が浅く強風に耐えられないことから、その可能性は低い。階段状の施設の可能性も考えられるが、柱筋が揃っていないため、階段を昇ったところに柱が立つことになり、機能的に使い難い。また建物西側は崩落するほどの斜面となっており、こちら側から建物への出入りが想定できないことから、これもまた可能性が低い。P46~48が縁東の柱穴で、その上に出の長い縁が設けられていたと考えるのが最も可能性が高いように思われる。その場合、建物本体との柱筋が揃っていないくても、且つ浅い柱穴でも構造的に、また使用上も影響がない。曲輪2の北西側にひらけていることから、その眺望を楽しむような、溝2まで達するくらい広い縁が設けられていたと考えれば、溝1・2の位置が建物から西側に大きく離れていることも理解できる。また、後述する西面庇の柱筋上に位置するSK12としたものが、この縁東からの根太を受ける柱穴だった可能性も出てくる。



奈良県春日大社着到殿(1413年に再建) 北田撮影

その溝1~3については、建物の南・東・西の3面にのみ見られ、北面には見られないことから、南側に位置する切岸斜面からの雨水や土砂の処理

を目的としたものだったことが容易に推測できる。内側の溝2・3については、建物の柱穴と切り合っていることが特徴的で、類似した細溝は、東北地方の中世城館で検出される「堅穴建物」のいくつかにも認められる。「周溝」としているもので、これについては青森県八戸市所在の根城の調査報告(1)で、周溝と壁との間の堅くしまった「裏込め」の存在から、「板壁の痕跡と推測される。」との見解が示されている。溝が建物から離れている西側においても、その南西角から板壁を支えていたと考えられる柱穴P57が検出されていることから、溝2については板材の痕跡としてまず間違いないと考えている。なお切岸からS B 02までの土層堆積状況の観察によって、溝2の外側に、岩盤の偽礫を多く含む黄褐色～褐色の細粒砂～シルトが高さ0.2mほどに盛り上がっている状況が確認できた。その土層状の盛り上がりについては、庇南側柱の柱穴検出時に、それを除去しないと完全に柱穴を検出できないことから、除去すべきかどうか判断に悩み、掘削に躊躇したという経緯がある。記録には留めていないが、その時点で、確かに柱穴に沿って帯状にのびていたことも確認している。おそらく、庇の柱を立てた後に、その柱に沿って板材を張り、さらに外側に最初から意図的に土を盛って土層状の高まりを作り、雨水・土砂の浸入を防いでいたと考えられる。外側の溝1については、溝2とは異なり、土層外側の雨水を流す排水溝、あるいは雨落ち溝であったと思われる。

S B 02の柱穴からは46靨と39瓦質の風炉が出土している。46靨は間仕切りの柱穴P45から出土した。断面観察のために掘り下げた南半部からの出土であったため、柱痕跡内からなのか、周りの掘方内からなのか詳細な検証ができなかったが、どちらかと言えば柱痕跡、つまり柱抜取り穴内に後に流れ込んだような状況であった。空間的な位置は、遺構検出面と柱穴底面とのほぼ中間に浮いたような状態で、視面を下にしていた。これらの状況から、視は据え置かれたような地鎮など祭祀に関わるものではないと判断した。39風炉は大型片で、北側柱筋のP34から出土した。柱穴掘り下げを開始してすぐの、柱痕跡埋土最上層からの出土であり、建物廃絶後に流れ込んだものであったと考えられる。

本遺構について放射性炭素年代測定を実施したところ、P40出土炭化柱材から1.361calAD-1.387calAD(40.2%・1 σ)の年代値を得ている(VI-1参照)。

引用文献

- 1) 青森県八戸市教育委員会 1993 「根城一本丸の発掘調査—八戸市埋蔵文化財調査報告書 第54集

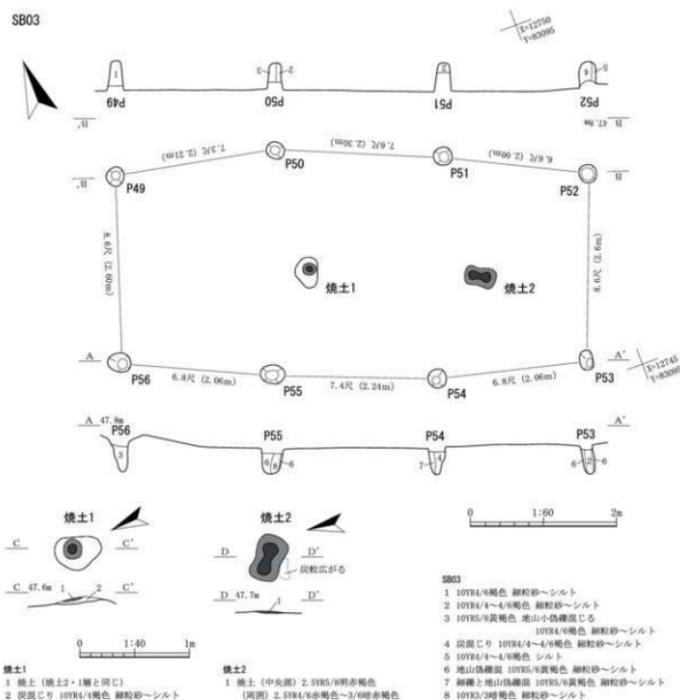
S B 03掘立柱建物跡(第34図、写真図版23・24)

S B 02東側の切岸の裾、X=12747・Y=83092付近に位置する。S B 02と同様に切岸と平行に築かれた掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間と非常に小規模な東西棟で、主軸の振れはS B 02とよく似たN-70°-Wである。柱穴は小さく、平面形は直径0.2～0.3m程度の円形で、深さも0.4m前後しかなく浅い。最も深いP56でも0.45mである。柱筋はまっすぐに通っており、桁行中央の柱間がやや外側に出る。また各柱間寸法も全く揃っていない。柱間寸法は南側柱筋が西から2.06m(6.8尺)、2.24m(7.4尺)、2.06m(6.8尺)、北側柱筋が西から2.21m(7.3尺)、2.30m(7.6尺)、2.00m(6.6尺)で、妻の柱間は東西共に2.60m(8.6尺)である。柱穴埋土は締まりのない褐色や黄褐色のシルト、あるいは細粒砂～シルトなどである。おそらく屋根を架けただけの簡易な建物であったと考えられる。

この建物内部から、被然により赤褐色に変質した部分を2箇所検出した(焼土1・2)。鍛冶工房のような性格の建物であった可能性も考えられるが、周辺からも鍛冶に関するような遺物は全く出土していない。

焼土1は、建物内の中軸線上やや西寄りに位置する。掘り込まれた遺構ではなく、床面上に炭の混じった土が被っているような状態であった。遺構の平面形は一部崩れた楕円形で、南北0.43m、東西0.30

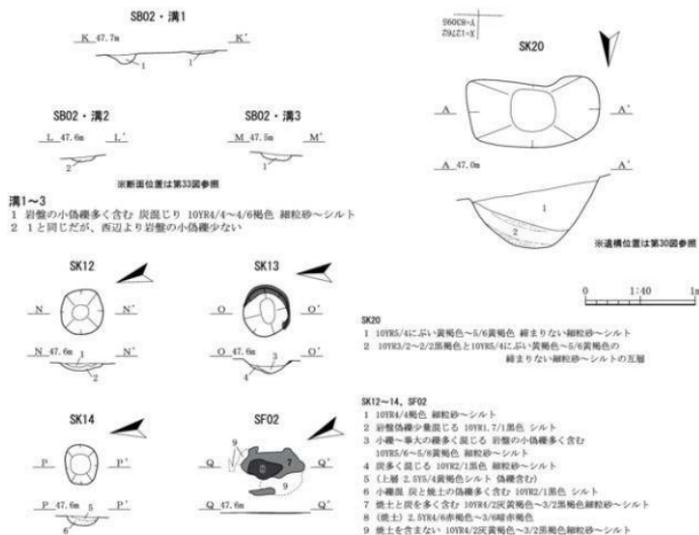
SB03



mを測る。炭が混じった褐色の細粒砂～シルトが0.05mの厚さで堆積しており、その中央付近が被熱によって赤褐色に変質している。熱を受けた部分は、直径0.2m弱の円形で、周囲が赤褐色～暗赤褐色、中央部が明赤褐色であった。

焼土2は、焼土1と同じく、建物内の中軸線上の東寄りに位置する。遺構の土が全く認められない焼土のみの遺構である。焼土の平面形は長さ0.43m、幅0.28mの歪んだ楕円形を呈する。被熱の状況は前記焼土1の被熱部と全く同様で、周囲が赤褐色～暗赤褐色、内側が明赤褐色であった。その内側の明赤褐色部は落花生のような形をしており、熱の中心が2箇所あったことが窺える。なお、焼土の南側の小範囲に炭粒の広がりが見られた。

本建物は、SB02に隣接し軸線と同じくすることから、SB02を主屋とする付属屋であると考えられる。床面には焼土1・2があることから、土間の作業場的な性格を有すると推察される。



第35図 曲輪2のその他の遺構

③土 坑

S K12土坑(第35図、写真図版25)

S B02南西隅、西面庇柱筋上のX=12756・Y=83074付近に位置する。平面形は直径0.4mの円形で、深さは0.07mと非常に浅い。埋土の下層は岩盤の偽礫が少量混じる黒色シルトで、上層が褐色の細粒砂～シルトである。前述したとおり、縁束と考えたP46からの(根太)材を受けるS B02に伴う柱穴であった可能性も十分考えられる。出土遺物はなし。

S K13土坑(第35図、写真図版25)

S B02の西面庇内X=12757・Y=83075付近に位置し、S K12の北東側に近接する。平面形は直径0.42～0.45mの円形で、深さは0.13mを測る。埋土は小礫～拳大の礫や岩盤の小偽礫を多く含む黄褐色の細粒砂～シルトや炭が多く混じる黒色の細粒砂～シルトで、遺構の南と東側の肩部が被熱によって赤褐色に変質する。出土遺物はなし。

S K14土坑(第35図、写真図版25)

S B02の西面庇内X=12756・Y=83075付近に位置し、S K13の南側に近接する。平面形は長径0.36m、短径0.3mの楕円形で、深さは0.09mを測る。埋土は炭と焼土の偽礫を多く含む小礫混じりの黒色シルトで、その上層には黄褐色シルトの偽礫も混じる。出土遺物はなし。

以上S B02の西面庇内で検出した土坑3基(S K12が建物に伴う柱穴だとすれば3基)については、

3 遺構

S B02を全面床張りの構造であったと復原していることから、S B02とは若干の時期差がある遺構と考えざるを得ない。ただし、遺構の掘り込み面がS B02と同じであることから、それほど時間的には隔てておらず、おそらくS B02建築直前くらいの時期の遺構と考えている。

S K20土坑(第35図、写真図版25)

S B02の北東側斜面肩部、X=12763・Y=83094付近に位置する。S B02より北側で唯一の遺構である。平面形は、長辺1.2m、短辺0.6mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。深さは0.55mで、下層に黒褐色とにぶい黄褐色～黄褐色の細粒砂～シルトが互層となって堆積し、その上ににぶい黄褐色～黄褐色の細粒砂～シルトが堆積する。両層ともに締まりがない。

曲輪2を形成する盛土の上面から掘り込まれているが、遺物が出土していないため、S B02・03と同時期の遺構であったかは不明である。(伊藤)

④焼土

S F02焼土(第35図、写真図版25)

S B02の西面底内X=12760・Y=83076付近、S K13の北側に位置する。前記3基のような掘り込まれた遺構ではなく、焼土等の薄い堆積である。0.7m×0.45mのおおよそ楕円形の範囲に、灰黄褐色～黒褐色の細粒砂～シルト、あるいは炭や焼土を多く含む灰黄褐色～黒褐色の細粒砂～シルトが厚さ0.01mもないほど薄く堆積しており、その中央部が被熱によって赤褐色～暗赤褐色に変質している。出土遺物はなし。

(3) 切岸1周辺の遺構

①切岸

切岸1(第36図、写真図版26)

曲輪1と曲輪2の間、X=12738～12753・Y=83061～83105の範囲に位置する人工的な切土、旧曲輪1への盛土で構築した急斜面である。標高は、上部の曲輪1が約52.5m、下部の曲輪2が約47.3mで比高差は約5.2mを測る。中央付近の傾度は約45度であるが、S D03が設けられている斜面の西半部はさらに勾配が急で、斜面途中に立つことすらできない。第1期の城館として機能していた当時は、おそらくこの急勾配な斜面を迂回するようにして曲輪2と曲輪1を行き来していたと考えられるが、通路状の遺構が存在する可能性が高い曲輪1東斜面は、中世以降の崩落と伐採道の設置によって失われており、互いをどのように移動していたのか解明することができなかった。

曲輪1の項目で記載した通り、城館は第1期から第2期へと大きく改変が行われている。本遺構についても、第1期では人工的に急斜度の斜面を造成して、曲輪2から旧曲輪1への敵の侵入を阻む目的から、曲輪1を造成して居館としての機能を強化させるとともに、曲輪1を主郭上段、曲輪2を主郭下段という一体とした空間へ作り替えることによって、上段と下段を繋げる役割を果たすようになったと考えられる。

後述するS K08は性格不明の遺構であるが、S B02建築以前の遺構であることから、切岸1が機能していた時期からS B02などを建築する直前の第2期直前に構築された遺構の可能性もある。

また、切岸の機能が失われた第2期の遺構として、S D03(後述)、切岸1の急斜面から細い窪み状の段2条を検出している(段1・2、第30図参照)。幅は共に0.6～0.7m程度で、斜面の地山とは異なり、流れ落ちた締まりのない土が混入していたため容易に検出できた。段1は曲輪1から曲輪2まで達す

3 遺構

るもので、斜面を斜めに南東から北西方向のSD03に向かって下っている。もう一方の段2はSB03の南側にある。曲輪1までは達しておらず、斜面の途中から前者の段1とは逆方向の東方へ向かって下っている。

両者の位置が、曲輪2に建つ建物の位置と対応している。特に段2とSB03とはそれが顕著であり、また段1は斜面裾に設けられたSD03に向かってのびていることなどから、切岸斜面を流れ落ちる雨水が直接曲輪2上の建物に入り込まないようにするための排水溝を兼ねていたと考えられるが、上記のとおり、第2期の曲輪1と曲輪2をつなぐ通路が見つかっていないことから、特に段1については日常的には通路として使っていた可能性も十分考えられる。

②溝跡

SD03溝跡(第36図、写真図版26)

第2期の切岸1西半部の裾に設けられた溝で、 $X=12751 \cdot Y=83062 \sim 83079$ に位置する。長さ11.5m、幅約0.7~0.8mで、深さは深い箇所、曲輪2の面から0.2mほど掘り込まれている。埋土のはほとんどは岩盤の偽礫を含んだ細粒砂~シルトで、明確な流水堆積は認められなかった。雨水が流れたというよりも、斜面からの大量の土砂によって短期間のうちに埋まったという状況が窺える。

本遺構は第2期のSB02-03が構築されたのと同時に設置され、曲輪1から流れ落ちる雨水等を受け、西側に排水するという役目を多少は果たしていたと思われるが、斜面からの流入土が多く、かなり早い段階で埋まってしまったと考えられる。おそらく、SB02が機能して間もない時期には既に埋まっており、何らかの形で機能は維持するものの、その原形は留めていなかったと考えられる。

本遺構上部からSB02にかけては、曲輪1と切岸の多量の崩落土が堆積しており、崩落土中には曲輪1から流出した多量の炭化物とともに44火鉢片など落下した遺物が出土した。

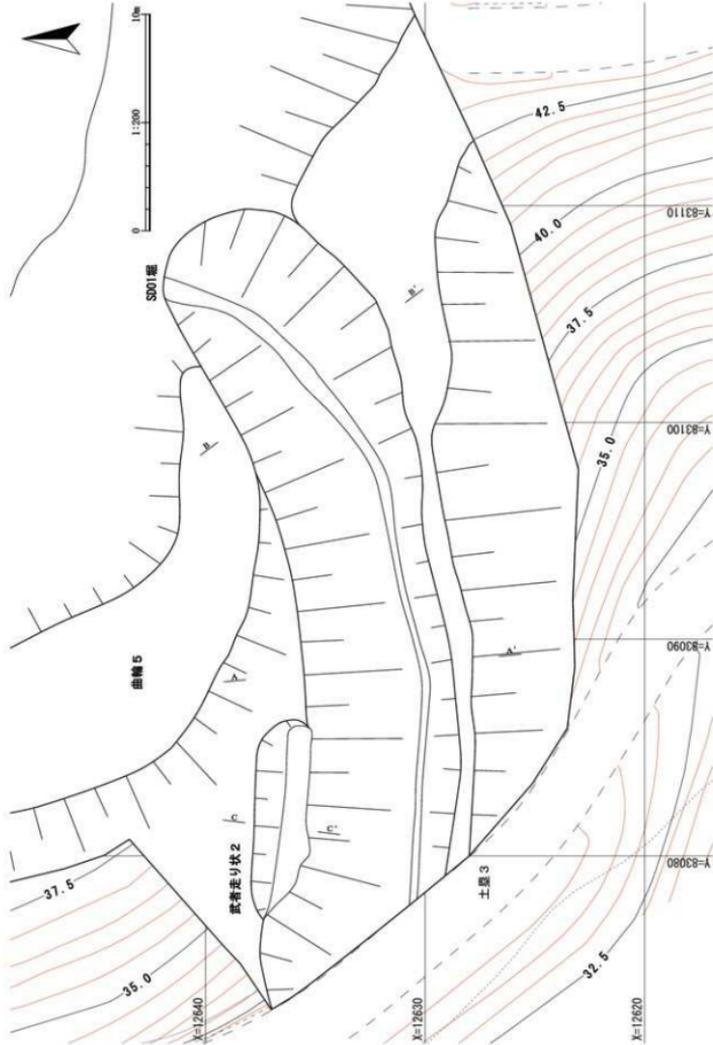
③土坑

SK08土坑(第36図、写真図版24)

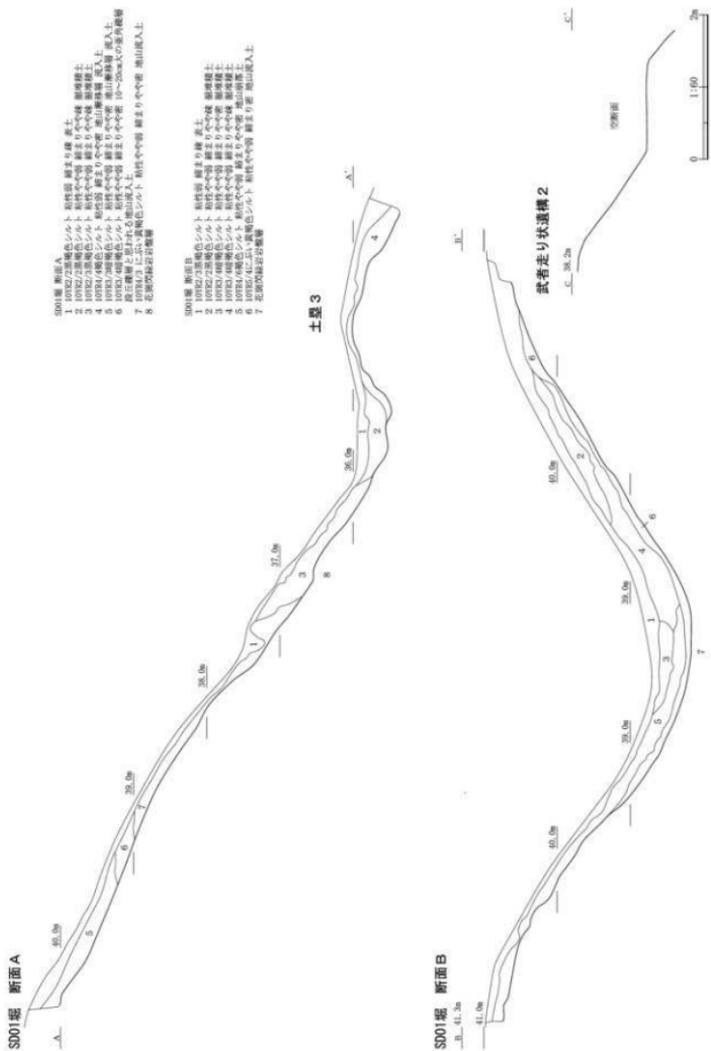
上記切岸1の裾に位置する第2期以前の遺構で、 $X=12749 \cdot Y=83084$ 付近に位置する。斜面の途中から地山を掘り込んで築かれた大型の遺構である。検出した当初は後世の掘乱しと思われたため、遺構検出後直ちに掘削を始めたが、遺構下部の埋土が途切れることなく北へと続き、SB02の柱穴のベース層となっていることが掘削途中で明らかとなってきた。つまり、SB02よりも明らかに一時期古い遺構であり、SB02とは同時に掘削すべきでなかったことが判明した。このためちょうど切岸の裾付近まで掘削した段階で、一旦作業を中断することとした。なお、厳密には図面上にもSB02と一緒に表現すべきでないが、SB02と重複しないことから、それを承知の上で切岸裾に前身遺構として図示した。

遺構の平面形は方形で、北に向かって開口する。東西の幅は3.3~3.8mで、南北は切岸1裾まで約2.5mを測る。深さは南壁で約1.8m、東西の壁はほぼ垂直に掘られている。埋土には自然堆積を示すような状況は見られず、人為的に水平に埋められている様子が観察できた。おそらく掘削後直ちに埋められたと考えられる。一旦掘り直しが行われたような状況も窺われるが、北側の遺構との関係から、埋戻しという一連の工程の中での部分的な掘削であったと考えている。

土層堆積状況の観察から、上記のとおり、北側のSB02やこの土坑の北東隅で検出したSK18のベース層となる整地土が、この遺構内に及んでいること、またその整地がなされた段階、つまりSB02やSK18が築かれるときには、このSK08とした掘り込みが完全に埋められていたことが確認できる。



第37図 SDO1跡跡、土塁3、武者走り状遺構2、曲輪5



第38図 SD01地跡、土塁3、武者走り状遺構2

なお後述するS B03の下部には、整地土の下面に地山を削ってきた高低差約0.2mの段が見ついている。この段は掘削を途中で中断したS K08の東壁から続いており、両者が同時に掘削されていたことが明らかである。段はS B03を建てるためには必要なく、S B03を建てる前には完全に整地され、埋められている(第32図)。まさにこのS K08と同じ状況である。

本遺構は第2期のS B02・03などを曲輪2に建築する直前段階で構築されたと考えられるが、性格は不明である。これら、S K08やS B03下層の段については、整地に関連するものとも考えられるが推測の域を出ない。(伊藤・北田)

S K18土坑(第36図)

S K08の北東隅 $X=12749 \cdot Y=83085$ 付近に位置する。土坑というよりはピットとすべき小規模な遺構である。平面形は直径0.4mの円形で、深さは0.45mを測る。SK08の埋土上面から掘り込まれていることから、この遺構が構築される以前にS K08が完全に埋められていたことがわかる。埋土は、下層が岩盤の小偽礫を多く含む黄褐色の細粒砂～シルトで、上層が黒色シルトの偽礫が混じる褐色の細粒砂～シルトである。出土遺物はなし。(伊藤)

(4) S D01堀跡周辺の遺構

①堀跡

S D01堀跡(第37・38図、写真図版27・28)

曲輪5南側の $X=12628 \sim 12640 \cdot Y=83073 \sim 83110$ の範囲に位置する。縄張りでは堀1とした遺構で尾根筋を分断するように構築されており、北側は曲輪5、東側は南側谷部へ、西側には作業道があり、調査区外へと延びるがそのまま斜面の傾斜に沿って下っていくと考えられる。規模は長さ37m以上、幅6～8m、断面Aでの傾斜角度は 36.5° 、断面Bは 35.0° 、断面形は残存からV字形からU字形であるとされる。断面Aは7層で構成される。1層表土以下は黒褐色シルト主体の2・3層と、地山流入土の4～7層に分けられる。尾根筋に位置する遺構であることから、廃絶後の堆積土は少なく、曲輪5もしくは土塁2方向からの流入土が主体となっている。断面Bは6層に分けられ、1層表土、2～4層が黒褐色シルト主体の堆積土、5・6層が地山流入土となる。断面Bも断面Aと同じく堆積土は少なく、廃絶後に堀跡を埋めるほど覆ってはいない。両断面から、堀跡は花崗閃緑岩の岩盤層を掘り込んで構築しており、当時も岩盤層が剥き出しの状態であったと考えられる。南側には土塁3が存在したと考えられるが、廃絶後の崩落と盛土の流出によって基底部のみが認められるのみである。傾斜から考えて、土塁2の盛土は南西方向に流れたと考えられるが、断面Aの2・3層や断面Bの2～4層は堀方向へ流れた土塁3の盛土の可能性がある。土塁3の構築に当たっては、S D01の掘削土を利用したと考えられる。

土塁3とS D01、S D01と曲輪5の実効堀幅は残存値で7.5～8.5m、実効法高は6.0～9.0mを測り、土塁3が崩落する以前の実効堀幅は10m程度になると見られる。尾根部を南側谷部から西側斜断面まで分断しており、堀切として機能していたと考えられる。出土遺物はなし。

②土塁

土塁3(第37・38図、写真図版27)

調査区南端のS D01堀南側、 $X=12623 \sim 12632 \cdot Y=83078 \sim 83110$ の範囲に位置する。尾根を分断する堀切である、S D01堀の南側に接するように普請された。規模は、全長30m以上、基底幅は5m程

度と考えられ、西側はS D01堀に沿って調査区外へと延びる。断面Aから、1層表土の下には4層褐色シルトが堆積しており、その下は花崗閃緑岩の岩盤層となる。S D01堀構築時に、掘削した土を南側に盛り上げて敷き締めた敷き土塁と考えられるが、盛土は土塁の基底部を残して崩落し、S D01堀と南西方向の南側斜面へ流出したと見られる。残存している土塁上幅は0.7~2.5m、堀底からは35~40°の傾斜がある。出土遺物はなし。

③曲輪

曲輪5(第39図)

調査区南側の土塁2とS D01堀の間、 $X=12638\sim 12670$ ・ $Y=83080\sim 83103$ の範囲に位置する南側へ延びる尾根の頂部である。西側斜面と南側谷部に挟まれており、S D01堀によって分断されているが調査区外の南側小丘陵部分へと尾根続きになっている。規模は南北の長さが約28mで、15m東へL字に折れ曲がっている。盛土など普請に関わる痕跡は確認されず、自然地形を利用したものと考えられる。武者走り状遺構1伝いに曲輪1へ繋がっており、南側にS D01堀を控えていることから曲輪1・2に次ぐ広さを持つ腰曲輪として機能していたと考えられる。作事遺構、出土遺物はなし。

④武者走り状遺構

武者走り状遺構2(第37・38図、写真図版28)

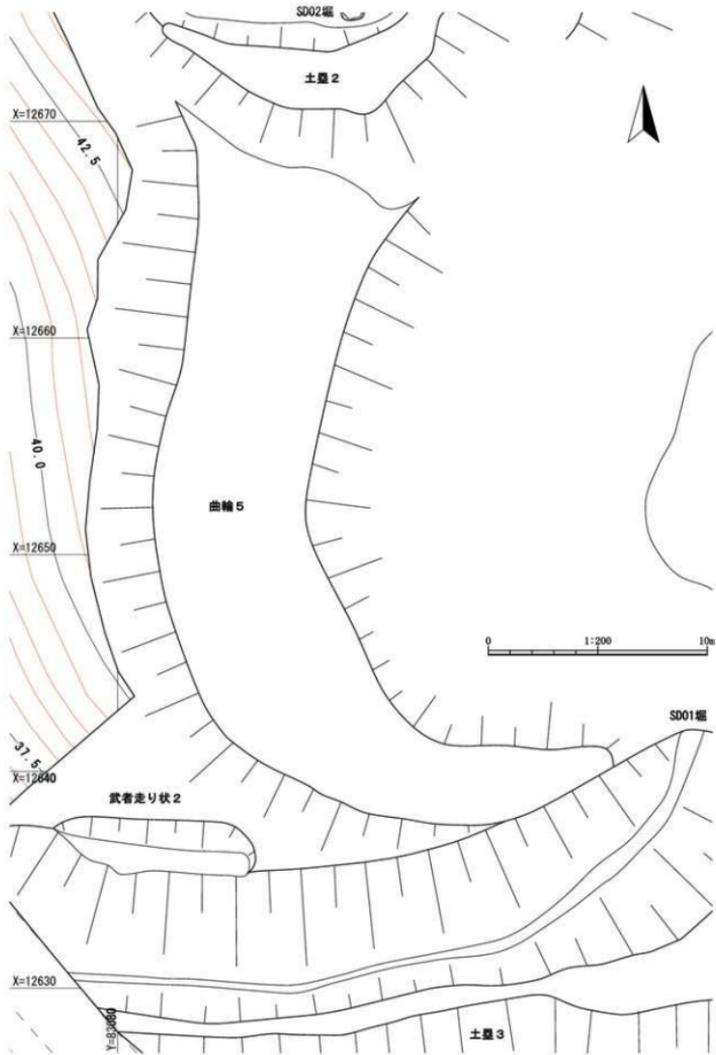
調査区南側の曲輪5とS D01堀の間、 $X=12635\sim 12639$ ・ $Y=83076\sim 83086$ の範囲に位置する通路状の遺構である。規模は全長9.3m、幅2.5mで、底面の幅は残存値で1.0~1.5mである。S D01堀に沿うように構築されており、西側斜面から曲輪5に至る通路として構築されたと考えられる。斜面を切り土して岩盤層まで削り、平坦面を作り出している。S D01堀との新旧関係は不明であるが、堀が機能していた時期よりも新しい第2期の遺構ではないかと考えられる。出土遺物はなし。(北田)

(5) 曲輪3周辺の遺構

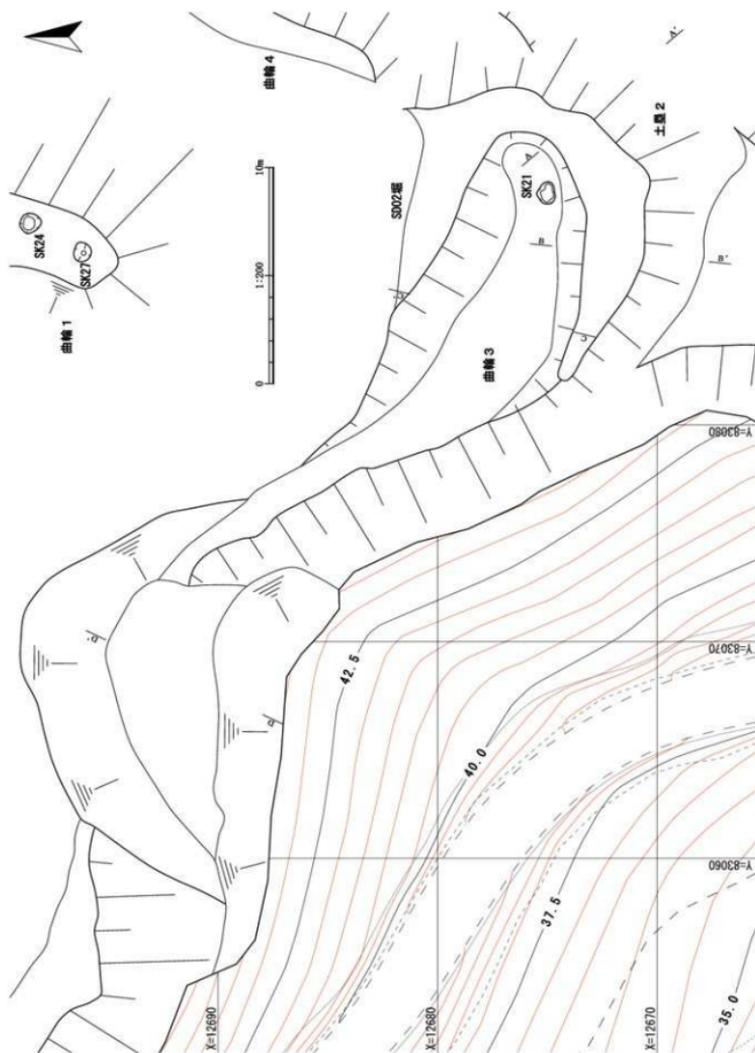
①曲輪

曲輪3(第40~42図、写真図版30)

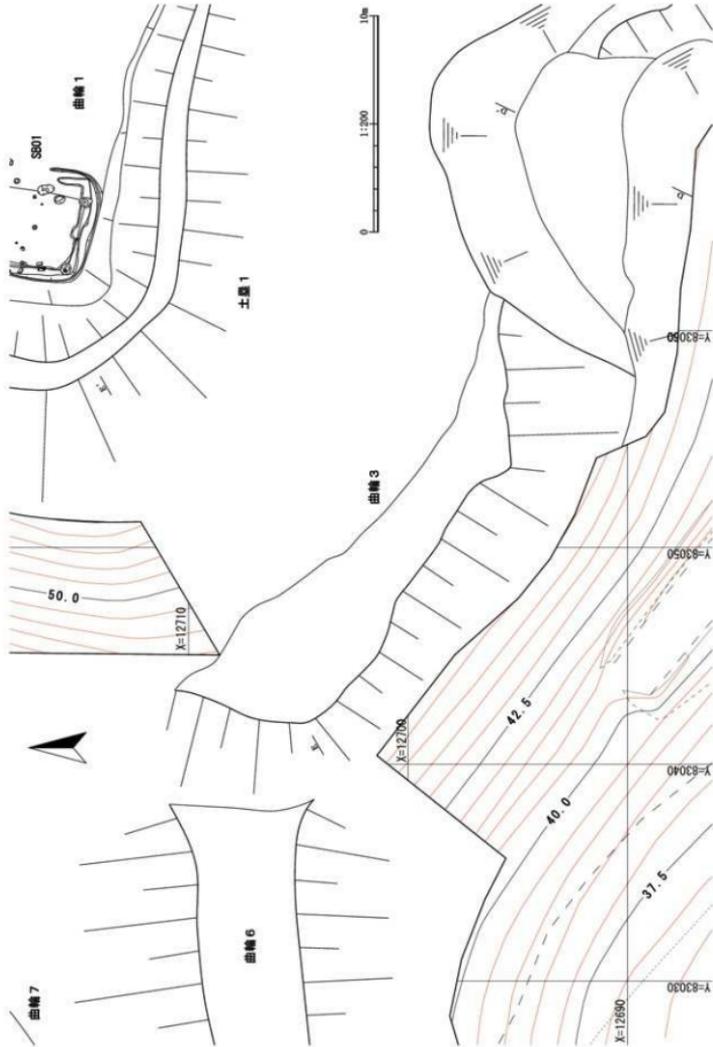
曲輪1南側斜面下の $X=12670\sim 12710$ ・ $Y=83040\sim 83096$ の範囲に位置する。規模は、全長60m、幅2.0~5.7mで、中央付近は後世の大規模な崩落によって失われている。南端部は、S D02堀底面と曲輪3が繋がっており、周囲を土塁2で囲まれている。崩落部分の断面Dは10層で構成され、1層は近年の崩落土、2~4層は中世以降の崩落土である。5層黒褐色シルト・6層暗褐色シルトは中世の上部流入層、7層褐色シルトは中世の盛土層、8層褐色砂質シルトと9層暗褐色砂質シルトは中世以前の堆積層、10層褐色砂質シルトは地山漸移層となる。8・9層も動いていると見られ、城館が造営された中世以前も崩落を繰り返していたと考えられる。城館造営時には、曲輪3を構築するために再度この部分を7層で整地したが流出、廃絶後に1~6層などが堆積したと見られる。曲輪3は土塁1南側の斜面下に位置することから考えると、1~6層は城館廃絶後に土塁1が崩落して曲輪3に流れ込み、5・6層が初期崩落土、2~4層は中世以後の崩落土、1層は近年の崩落土と順次堆積していったと理解できる。また、断面Eは地山である6・7層花崗閃緑岩風化層及び岩盤層を除く、5層で構成される。1層表土、2~5層はにぶい黄褐色シルトで、堆積土はいずれも土塁1が城館廃絶後に崩落したものと考えられる。断面E付近は、曲輪6・7など西側へと続く瘦せ尾根に繋がる箇所であるため、7層花崗閃緑岩岩盤層が底面に広がっており、流出したが本来は盛土をして平坦部を形成して



第39図 曲輪5

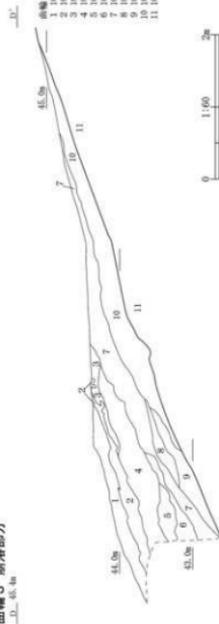


第40図 SD02遺跡、土壘2、曲輪3(1)



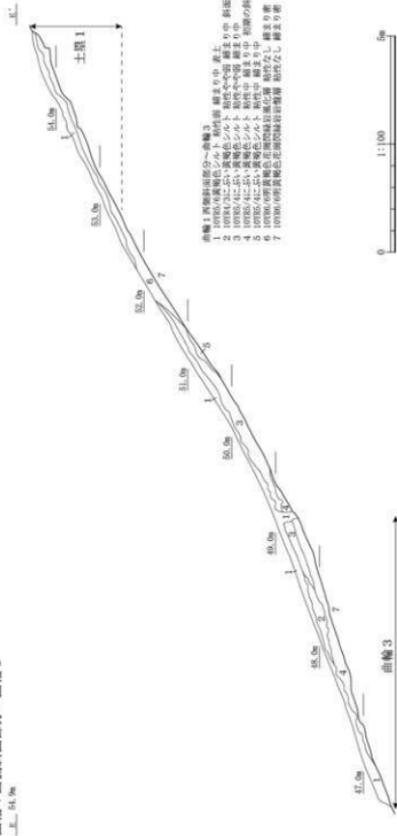
第41図 曲輪3(2)

曲輪3 崩落部分



- 曲輪3 崩落部分
- 1 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 2 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 3 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 4 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 5 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 6 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 7 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 8 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 9 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 10 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 11 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線

曲輪1西部斜面部分～曲輪3



- 曲輪1 西部斜面部分～曲輪3
- 1 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 2 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 3 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 4 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 5 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 6 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線
 - 7 10182の遺構彩色シメント 附帯中穴遺構 崩落り線

第42図 曲輪3(3)

いた可能性もある。上部の土塁1付近は、削り出した花崗閃緑岩岩盤層の基底部に盛土を行っていて、盛土が流出したことから表土直下が地山となっている。西斜面は岩盤層のために滑りやすく、約30°の急傾斜であるため、曲輪3から容易に登ることは困難である。

斜面崩落土である褐色土中から、38古瀬戸瓶子片2点を出土した。上部にある曲輪1の土塁1が途切れる南端部分が崩落して、落下したものと考えられる。また、同じく崩落土中から、97石礫1点が出土した。

曲輪4(第44図)

曲輪1南東側斜面下の $X=12682\sim 12698$ ・ $Y=83096\sim 83105$ 付近に位置する。斜面下側には、武者走り状遺構1が北東から南西方向に走っている。規模は全長17.5m、幅1.0~2.0mで、平坦面は斜面に沿って傾斜している。本来は平場を形成していたと考えられるが流出しており、急斜面の傾斜が緩くなる箇所という検出状況である。おそらく斜面を削り出した盛土で構築されていたと考えられる。作事遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

②堀跡

S D02堀跡(第40・43図、写真図版29)

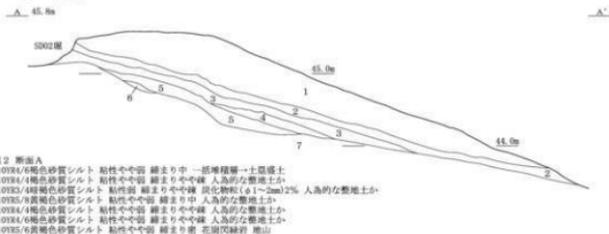
曲輪1南側斜面下の $X=12670\sim 12686$ ・ $Y=83078\sim 83095$ の範囲に位置する。縄張りでは堀2とした遺構で、規模は全長19.0m、幅3.0~8.0m、底部幅2.0~5.5m、約0.5mで、底面は曲輪3と共通している。東端は土塁2に囲まれており、西に向かうにしたがって曲輪3へと変化する。断面Cは8層花崗閃緑岩岩盤層(地山)を除く7層で構成されている。埋土はいずれも上部もしくは土塁2から流入した崩落層で形成されており、黄褐色や褐色砂質シルトが堆積している。このうち上部からの崩落は、曲輪1南東端が崩れてS D02に流れ込んだと考えられる。S D02は、土塁2が崩落流出する以前の実効法高は1~2m深く、幅広U字形の断面形状を呈していたと考えられる。遺物は出土していない。

③土塁

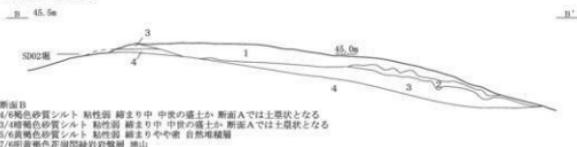
土塁2(第40・43図、写真図版28)

曲輪1南側斜面下の $X=12665\sim 12686$ ・ $Y=83078\sim 83097$ の範囲に位置する。S D02堀の東端部を囲うように検出した。規模は全長約30m、基底部幅4.0~5.0mで、S D02をU字形に巡っている。上端幅は残存値で0.8~3.3mあり、かなりの部分を崩落流出していると考えられることから、検出した形状は残存した土塁基底部付近と見られる。断面A・B2箇所を設定した。断面Aは7層花崗閃緑岩岩盤層の地山を除く、計6層で構成される。1層褐色砂質シルトは土塁の残存した盛土層、2~6層褐色や黄褐色の砂質シルトは人為的な盛土整地層である。断面Bは4層花崗閃緑岩岩盤層の地山を除く、計3層で構成される。1・2層褐色・暗褐色砂質シルトは土塁基底部を形作る盛土、3層は構築以前の自然堆積層である。これら2つの断面から、断面Bは当初から土塁として作られていたが、断面Aは土塁以前に前段階の普請がなされていることが分かった。これから考えると、土塁下から確認した花崗閃緑岩岩盤層を削って作った遺構は、隣接する武者走り状遺構1が第1期にはS D02及び曲輪3と通路状に連結していたのではないかと推察される。このことから、第1期には小規模な土塁であったものを、第2期に至って通路を埋め立てた上で規模の大きい土塁に作り替えたと考えられる。出土遺物はなし。

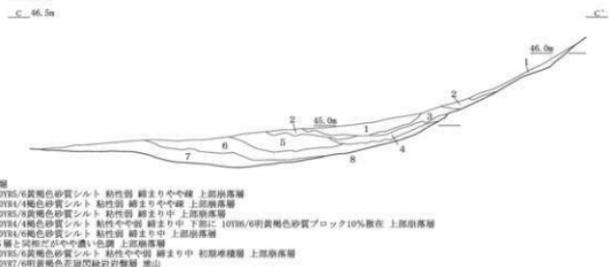
土壘2 断面A



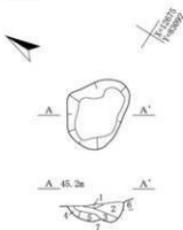
土壘2 断面B



SD02堀

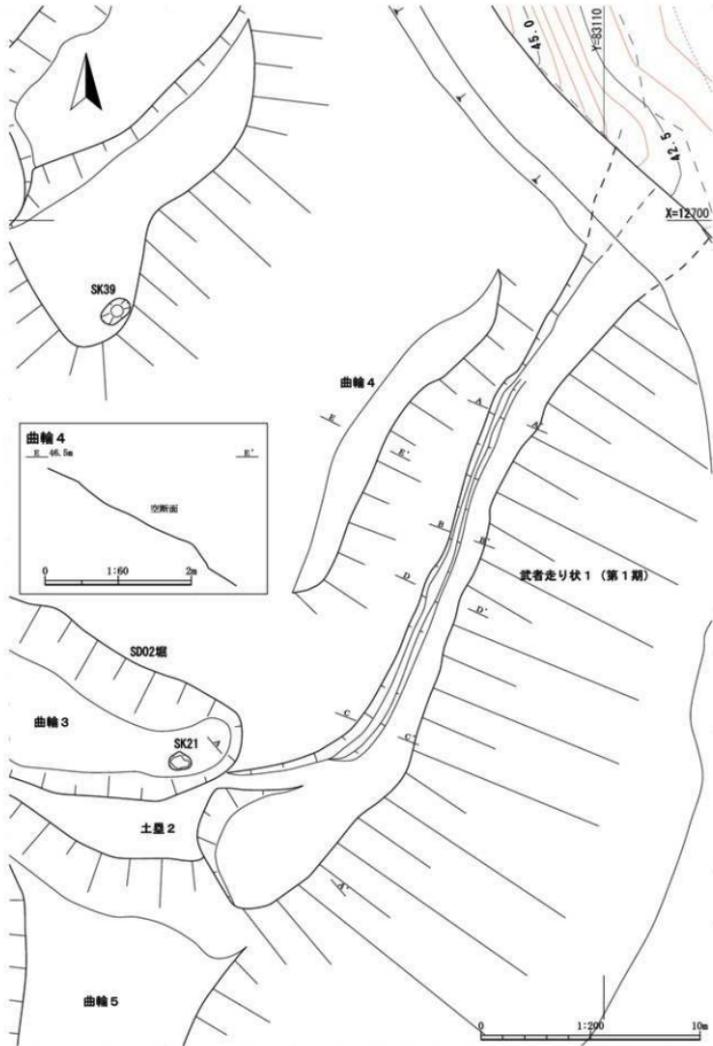


SK21

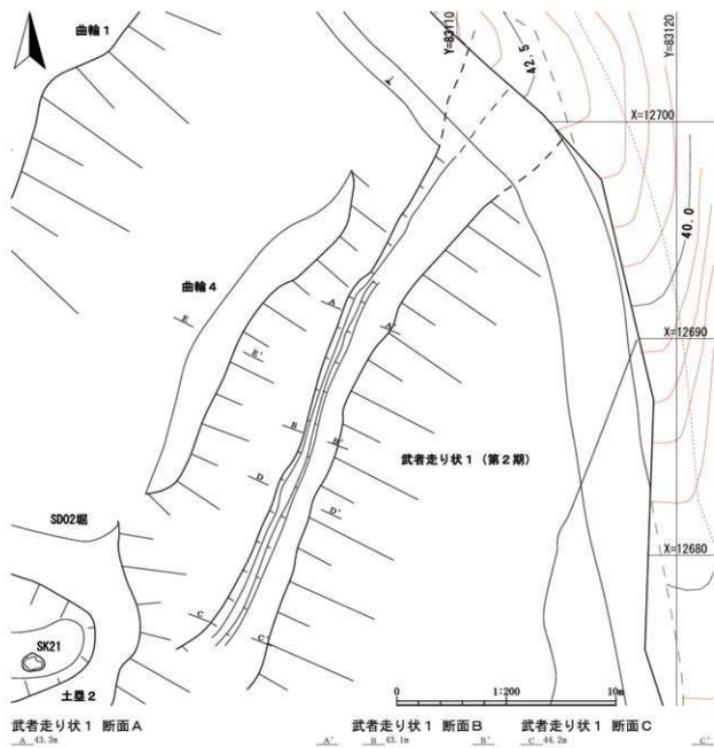


0 1:60 2m

第43図 SD02堀跡、土壘2、SK21土坑



第44図 武者走り状遺構1(第1期)



武者走り状 1 断面A

A-43.3m

武者走り状 1 断面B

B-43.1m

武者走り状 1 断面C

C-44.2m



武者走り状 1 断面D

D-43.3m

空断面

武者走り状遺構 1 断面A

1 1912K/4層褐色シルト 粘性やや弱 締まり強 層中に屈状の流入単位が認められる

上部からの流入層

2 1912R/3層褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや強 初原堆積土

3 1912R/6層黄褐色粘土質シルト 粘性弱 締まり弱 地山

武者走り状遺構 1 断面B

1 1912K/4層褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中強 断面A 1層と同じ

2 1912K/3層褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中強 砂層を挟み上部から堆積

3 1912R/3層褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりや中強 初原堆積土 断面A 2層と同じ

4 1912R/6層黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや中強 断面A 3層と同じ

武者走り状遺構 1 断面C

1 1912K/4層褐色シルト 粘性やや弱 締まり強 断面A 1層・断面D 1層と同じ

2 1912R/3層褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中強 上部からの流入土 屈状に堆積

3 1912R/6層黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや中強 砂層を挟み屈状の上層からの流入土 一単位大きい

4 1912K/3層褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中強 砂層を挟み屈状にして堆積 断面D 2層と同じ

5 1912R/3層褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりや中強 初原堆積土

6 1912R/6層黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり強 地山 断面A 3層・断面D 4層と同じ

第45図 曲輪4、武者走り状遺構 1 (第2期)

④武者走り状遺構

武者走り状遺構1(第44・45図、写真図版31)

曲輪1南東側斜面下の曲輪4より下、 $X=12672\sim 12699$ ・ $Y=83095\sim 83115$ の範囲に位置する。規模は調査区内で全長35.0m、幅1.5～3.5m、標高は西端43.2m、中央42.6m、東端42.2mでほぼ水平に斜面を横断している。西側は曲輪3・5、東側は調査区外の斜面部を回り、曲輪2まで繋がる通路の機能を果たしていると考えられる。第1期と第2期で西端の曲輪3及び曲輪へ繋がる箇所が作り替えられており、2時期存在する。第1期は西端の土塁2に食い込むような空間を持ち、曲輪3とはスロブ状の通路で連結されている。この時期は、SD02と土塁2の規模が小さく、曲輪3としての機能が優先されていたと考えられる。第2期に至ると、土塁2を高く土盛りすることでSD02の堀としての機能を強化し、より防御性を高めたと考えられる。土塁2の規模を拡大するに伴い、本遺構西端に作られていた部分を埋め立てたと考えられる。これは、曲輪3伝いの敵の侵入に備えて遮断する意図があったと推察される。

遺構の断面形状を観察すると、階段状に掘削されており、上段がやや狭く、下段が平坦に整えられているのが分かる。通常、通路が階段状では使いづらいと考えられることから、下段を作り足したが、流水による影響で一度埋まった通路を再度構築したのかもしれない。

横断面をA～Dの4箇所を設定した。断面Aは、地山は3層明黄褐色粘土質シルトで花崗閃緑岩風化層である。2層は黒褐色シルトの初期堆積土、1層は暗褐色シルトで上部からの流入土が堆積したと考えられる。断面Bは計4層で構成されており、2層暗褐色シルト以外は断面Aと同一の堆積状況である。断面Cは計6層で構成されるが、構成内容はほか2箇所とはほぼ同一である。遺構範囲からは、柵列などの作事遺構は確認されなかった。出土遺物はなし。

⑤土 坑

S K21土坑(第43図、写真図版28)

曲輪3南東端の $X=12675$ ・ $Y=83092$ 付近、SD02掘跡底面に位置する。長径0.48m、短径0.38m、深さ12cmの不整形で、上部からの流入土である6層の埋土で構成される。埋土の状況から、開口した坑だが性格は不明である。遺物は出土していないが曲輪3に構築されていることから、城館と同一時期に比定される。出土遺物はなし。(北田)

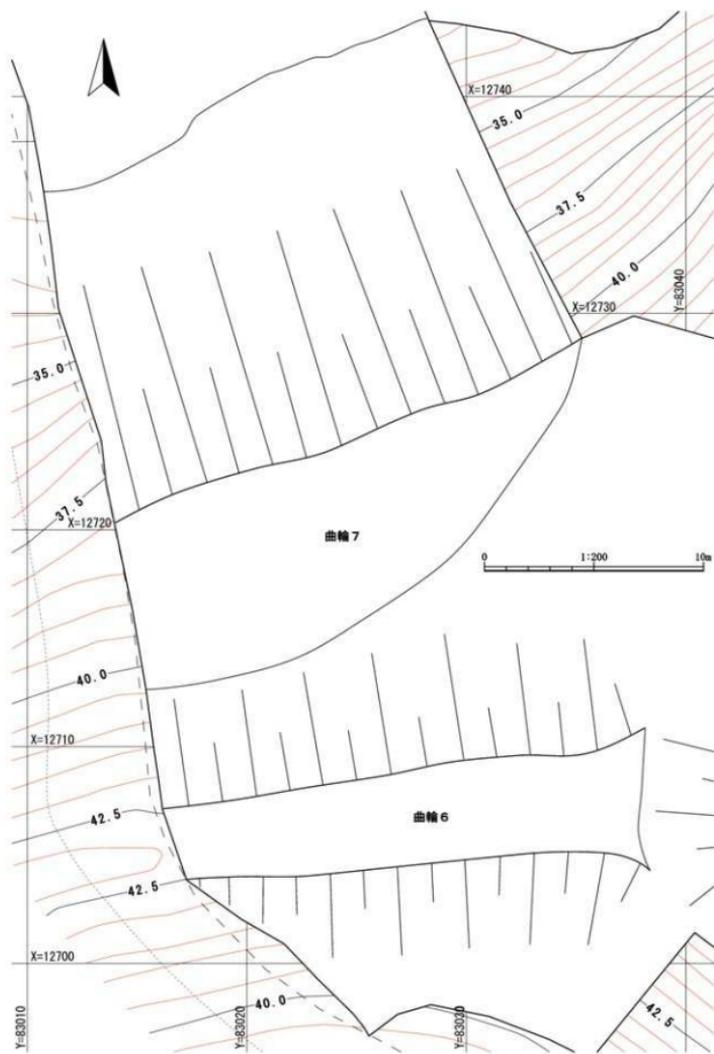
(6) 曲輪6・7の遺構

曲輪6(第46図、写真図版31)

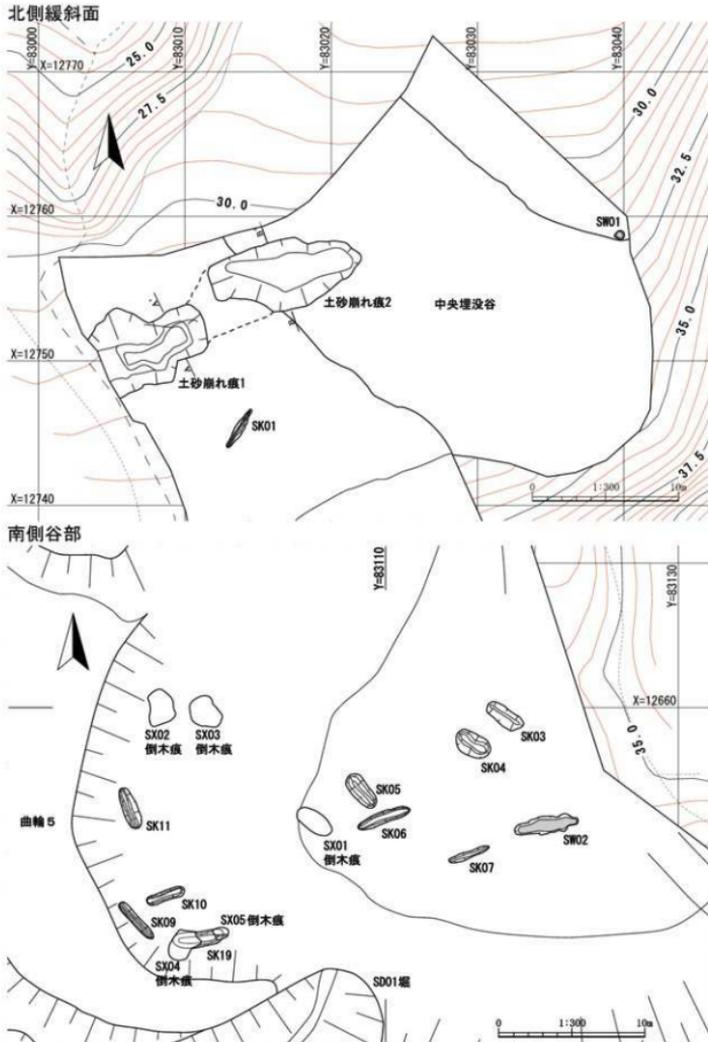
調査区西側の曲輪3の一段下、 $X=12704\sim 12710$ ・ $Y=83016\sim 83040$ の範囲に位置する西側へ延びる狭せ根柵の頂部である。北側斜面下には、曲輪7が位置している。曲輪6は西側の調査区外へと延びており、約50m西まで続いている。調査区内の長さは21.5m、幅3.5～6.0mである。盛土など普請に関わる痕跡は確認されず、自然地形を利用したものと考えられる。曲輪3へと繋がる連絡曲輪と考えられ、通路として使用されたと見られる。作事に関わる遺構は検出されなかった。出土遺物はなし。

曲輪7(第46図、写真図版31)

調査区西側の曲輪6北側斜面下、 $X=12712\sim 12730$ ・ $Y=83015\sim 83035$ の範囲に位置する。北側斜面のうち、緩傾斜となる中腹にあり、平坦部は少なく北側へと傾いている。曲輪7の東側、土塁1の西斜面は大きく亀裂が入っており、地滑りに伴う痕跡が確認できる。本曲輪も西側の調査区外へと延び



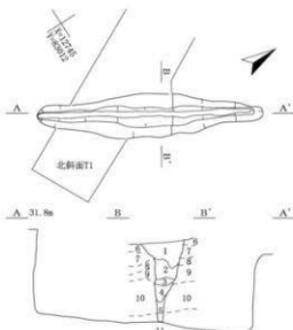
第46図 曲輪6・7



第47図 北側緩斜面、南側谷部

3 遺構

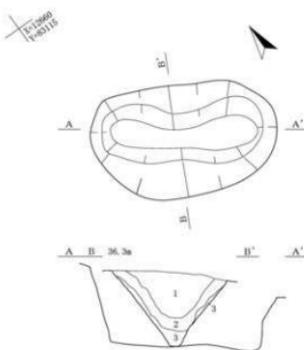
SK01



SK01

- 1 10YR1, 2/1黒色 粘性やや弱～中 締まり硬 下部にTe-Cu銅屑土若干混入(6層厚)
 - 2 10YR2/1黒色 粘性やや弱～中 Te-Cu銅屑土若干混入 (6～7層厚)
 - 3 10YR3/3黒褐色 砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 (9～9層厚)
 - 4 10YR2/3黒褐色 粘性中 締まり中 (9層厚)
 - 5 10YR3/4黄褐色 4～6層色 粘性やや弱 締まり中(10層厚)
 - 6 10YR2/1黒色 粘性やや弱 締まり硬 10YR7/6黄褐色 Te-Cu混入
 - 7 10YR2/1黒色 粘性やや弱～中 締まり硬
 - 8 10YR4/4褐色 砂質 粘性やや弱 締まり硬
 - 9 10YR2/3黒褐色 粘性やや弱 締まり硬
 - 10 10YR2/3黄褐色 砂質 粘性やや弱 締まり中～やや弱 地山
 - 11 10YR4/4褐色 酸化砂質 地山
- ※1～5陥し穴層様上

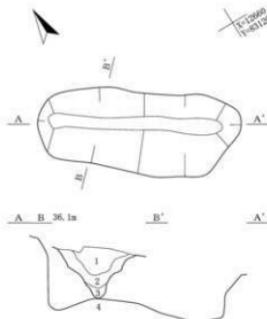
SK04



SK04

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり中
- 3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中

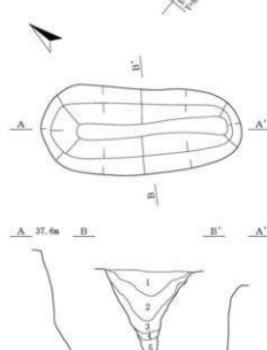
SK03



SK03

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 上部2層やや明るい
- 3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり中よりやや密
- 4 10YR6/9明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山

SK05



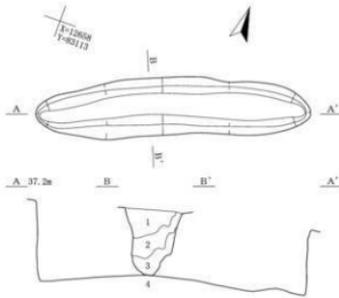
SK05

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり中
- 3 10YR3/4黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 變層様上
- 4 10YR2/4～3/2暗褐色粘土質シルト 粘厚層様上
- 5 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まり中



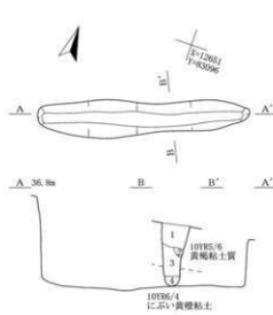
第48図 その他の遺構(1)

SK06



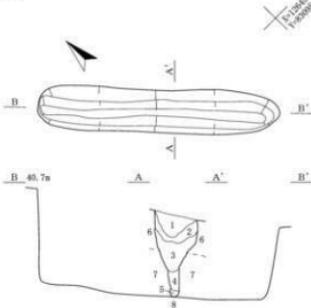
- SK06
 1 10YK2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり弱
 2 10YK2/3黒褐色シルトと10YK3/4暗褐色シルトの混合土 粘性中 締まり中
 3 10YK3/4暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱
 4 10YK5/6黄褐色土 粘性中 締まり中 地山
 ※1~3層は1穴埋し、1・4層は基礎取戻

SK07



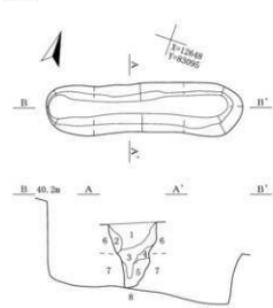
- SK07
 1 10YK2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり弱
 2 10YK3/4黒褐色シルト 粘性中 締まり中
 3 10YK5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山起源 硬砂層土
 4 10YK5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱に10YK2/2黒褐色シルトを含む 初期堆積土

SK09



- SK09
 1 10YK2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 2 10YK2/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 3 10YK4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱
 4 10YK4/6褐色シルト 粘性やや弱~中 締まりやや弱
 5 10YK2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 花崗岩の混入土
 6 10YK4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 地山
 7 10YK5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱 地山
 8 10YK5/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり弱 地山

SK10



- SK10
 1 10YK2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 2 10YK3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 3 10YK2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 4 10YK4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 5 10YK5/6黄褐色シルト 粘性やや弱~中 締まり中 地山層基土
 6 10YK4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 地山
 7 10YK5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱 地山
 8 10YK5/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり弱 地山



第49図 その他の遺構(2)

3 遺構

ており、約20m西まで続くと思われる。調査区内の長さは24.0m、幅9.0mで弧を描く。普請に関わる痕跡は確認されず、自然地形を利用したものと考えられる。作事に関わる遺構も検出されなかった。出土遺物はなし。(北田)

(7) 北側緩斜面の遺構(第47図)

①陥し穴状遺構

S K01陥し穴状遺構(第48図、写真図版32)

調査区北側緩斜面のX=12745・Y=83012付近に位置する。規模・形状は、長さ3.1m、幅0.6mの溝状、深さは1.1mである。出土遺物はないが6層のTo-Cuテフラを混入する黒色土を掘り込んでおり、また2層中には廃絶後に崩落した6層To-Cuテフラを混入する黒色土が堆積していることから、To-Cuテフラが降下したとされる約5,500年前より新しい縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

②炭窯跡

SW01炭窯跡(第50図、写真図版35)

調査区北側緩斜面のX=12759・Y=83040付近に位置する。規模・形状は長径0.68m、短径0.64mの不整形円で、底面までは8cmの深さである。底面全体に2～3cmの厚さで炭化物層が形成されている。炭化物層下の底面は暗赤褐色に弱変の焼土層を形成しており、一部壁面まで薄く焼土化している。

3層中の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、1083calAD～1125calAD(38.6%、1 σ)の測定結果を得た。出土遺物は皆無なことから、この年代値から11世紀後半～12世紀前半の遺構と捉えたい。遺構の規模から、製鉄(精錬)に使用する炭を生産するというよりは、小鍛冶のような作業に使用する炭を作っていたのかもしれない。出土遺物はなし。

③その他

土砂崩れ痕1・2(第47・51図、写真図版36)

調査区北側緩斜面のX=12747～12759・Y=83003～83022付近に位置する。規模・形状は、土砂崩れ痕1が長さ7.5m以上、幅5.6m、深さ1.2m以上、土砂崩れ痕2が長さ10.4m、幅4.8m、深さ1.1m以上を測り、いずれも不整形を呈している。このうち土砂崩れ痕1は、西側の調査区外へと延びている。当初は堀跡を想定して精査を行ったが、平面形が整っておらず底面も凹凸が見られること、部分的に深くまで落ち込む箇所が認められること、断面に同一層位の段差(ズレ)が確認されることから、花崗閃緑岩の風化層に雨水が流れ込み、土砂崩れが発生した自然現象の痕跡と考えられる。土砂崩れが発生した時期は、上部にTo-Cuテフラが混入していることから少なくとも約5,500年前以前の縄文時代前期中葉以前と推定され、中央埋没谷はこれ以前にすでに埋没していたと見られる。土砂崩れの痕跡を1・2としているが、本来は一連で繋がっており、土砂崩れでできた割れ目に黒褐色土が堆積してできたと考えられる。出土遺物なし。(北田)

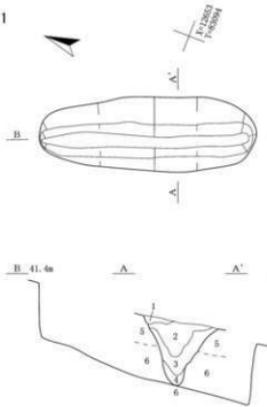
(8) 南側谷部の遺構(第47図)

①陥し穴状遺構

S K03陥し穴状遺構(第48図、写真図版33・34)

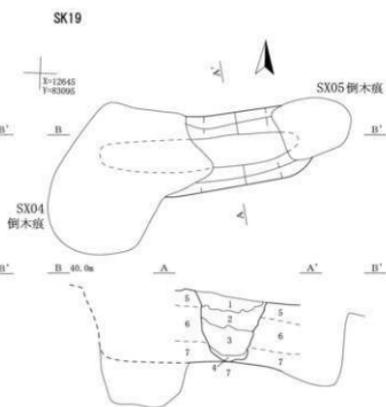
調査区南側谷部のX=12660・Y=83120付近に位置する。規模・形状は、長さ2.75m、幅1.15mの開

SK11



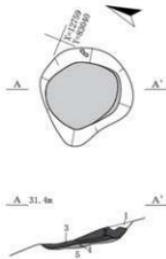
- SK11
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
 - 2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
 - 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
 - 4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性中 締まり中
 - 5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト(δ5m) 10% 地山崩落層
 - 6 10YR2/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 地山
 - 6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや硬～密 地山

SK19



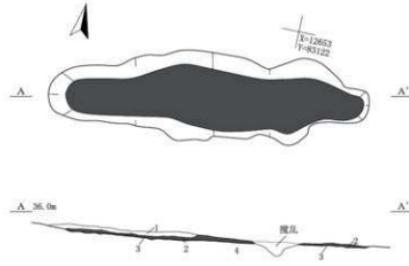
- SK19
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 陥し穴堆積層
 - 2 10YR2/3黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 陥し穴堆積層
 - 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 陥し穴堆積層
 - 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性中 締まり中～やや硬 陥し穴堆積層
 - 5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中～やや密 地山崩落層
 - 6 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中～やや密 地山崩落層
 - 7 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性中 締まり密 地山

SW01

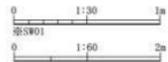


- SW01
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり硬 斜面崩落土
 - 2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり硬 炭化物層
 - 下に10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まり硬 すじ状に侵入
 - 3 10YR1/7/1黒色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや硬 炭化物層(δ1～2m)多量
 - 4 10Y3/4暗褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり硬 倒受の粘土層
 - 5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性中 締まり中

SW02



- SW02
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まり弱
 - 2 10YR1/7/1黒色シルト 粘性弱 締まりなし 炭化物層
 - 3 10YR4/6暗褐色シルト 粘性弱 締まり中 黄土層 厚さ1cmに満たない
 - 4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中



第50図 その他の遺構(3)

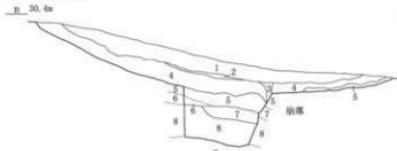
土砂崩れ痕 1



土砂崩れ痕 1

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり度
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり度 10YR6/6明黄褐色火山灰 (To-Cu)アララ 機織器土
- 3 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まりやや弱
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり度～中 10YR6/3明黄褐色山風化花崗閃緑岩ブロック (φ 1cm) 下部に多く含む
- 5 10YR2/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR6/8明黄褐色山風化花崗閃緑岩ブロック (φ 5cm) 層状状に多く含む
- 6 10YR5/4にがい黄褐色シルト 花崗閃緑岩風化層 堆土
- 7 10YR4/1褐色砂質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 堆土 風化した花崗閃緑岩が土壌化
- 8・5層土砂崩れ痕の初期堆積層

土砂崩れ痕 2



土砂崩れ痕 2

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり度 To-Cu)アララ下層黒色土
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり度 10YR5/8黄褐色To-Cu)アララ(φ 3cm)少量含む
- 3 1層と同じ地層の層に成れ込んじと思われる
- 4 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱～中 締まり度 To-Cu)アララ下層黒色土
- 5 10YR3/4黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり度 10YR7/8黄褐色風化花崗閃緑岩ブロック(φ 1~3cm)全体に混入
- 6 5層と同じだがブロックの混入少ない
- 7 10YR3/4黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり度
- 8 10YR3/2暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中
- 9 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱～強 花崗閃緑岩 堆土
- 10 5~8層は土砂崩れ痕初期堆積土

第51図 土砂崩れ痕 1・2

口部が崩落して楕円形に近い溝状で、深さは0.7mである。底面に堅い粘土層があることから、底面の中央が掘り残されていて、やや盛り上がっている。出土遺物はないが近接する遺構の年代を考えると、縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K04陥し穴状遺構(第48図、写真図版33・34)

調査区南側谷部の X=12660・Y=83115付近に位置する。規模・形状は、長さ2.55m、幅1.56mの開口部が崩落して楕円形に近い溝状で、深さは1.03mである。形状や崩落状況がS K03とはほぼ同じで、開口部がかなり崩落している。S K03などの近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K05陥し穴状遺構(第48図、写真図版33・34)

調査区南側谷部の X=12660・Y=83115付近に位置する。規模・形状は、長さ2.74m、幅1.22mの開口部が崩落して楕円形に近い溝状で、深さは1.2mである。形状や崩落状況がS K03・04とはほぼ同じで、開口部がかなり崩落している。近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K06陥し穴状遺構(第49図、写真図版32)

調査区南側谷部の X=12658・Y=83113付近に位置する。規模・形状は、長さ3.75m、幅0.8mの溝状で、深さは0.9mである。黒褐色シルト主体の埋土で構成されており、S K09などの近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K07陥し穴状遺構(第49図、写真図版32)

調査区南側谷部の X=12651・Y=83096付近に位置する。規模・形状は、長さ2.9m、幅0.55mの溝状で、深さは0.85mである。検出面の傾斜に対して、底面はほぼ水平に構築されており、東側が浅くなっている。壁面の崩落は楕円形に近い溝状より進んでおらず、S K03～05とは若干時期が異なる可能性もあるが、概ね近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K09陥し穴状遺構(第49図、写真図版32)

調査区南側谷部の X=12645・Y=83095付近に位置する。規模・形状は、長さ3.5m、幅0.58mの溝状で、深さは1.13mである。遺構上部の崩落が進んでおり、やや広がっている。また、検出面の傾斜に対して、底面はほぼ水平に構築されており、東側が浅くなっている。S K10などの近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K10陥し穴状遺構(第49図、写真図版34)

調査区南側谷部の X=12648・Y=83095付近に位置する。規模・形状は、長さ2.7m、幅0.65mの溝状で、深さは0.8mである。南壁が大きく崩落しており、3・5層が崩れて堆積している。S K09など近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K11陥し穴状遺構(第50図、写真図版33・34)

調査区南側谷部の X=12653・Y=83094付近に位置する。規模・形状は長さ2.96m、幅1.03mの溝状で、深さは0.97mである。遺構上部の崩落が進んでおり、東西にやや広がっている。S K10などの近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

S K19陥し穴状遺構(第50図、写真図版34)

調査区南側谷部の X=12645・Y=83095付近に位置する。東西を風倒木痕によって攪乱されており遺構の全形は不明だが、規模・形状は、長さ3.0m以上、幅1.02mの開口部がやや広い溝状で、深さは0.9mである。遺構上部の崩落が進んでおり、やや広がっている。S K10などの近接する遺構と同年代の縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。出土遺物はなし。

②炭窯跡

S W02炭窯跡(第50図、写真図版35)

調査区南側谷部の X=12653・Y=83122付近に位置する。規模・形状は、長さ4.38m、幅1.25mの不整な長楕円形で、底面までは10cmの深さである。底面のほぼ全体に2～8cmの厚さで炭化物層が形成されている。炭化物層下の底面は薄く焼土化しているが、1cmにも満たない。

2層中の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、1047calAD-1089calAD(39.1%、1 σ)の測定結果を得た。出土遺物は皆無なことから、この年代値から11世紀後半の遺構と捉えたい。当地域は砂鉄が豊富に採取できる花崗岩帯に位置することから、製鉄に関連する遺構の可能性もある。出土遺物はなし。(北田)

4 出土遺物

(1) 縄文・弥生時代

① 縄文・弥生土器(第52図91~96、写真図版55)

91・92の縄文土器2点と、93~96の弥生土器4点の計6点を掲載した。

91は口縁部に8条の原体側圧L、胴部には単軸絡条体第1A類L・Rの木目状燃糸文を施す高さ21.4cmの縄文時代前期末葉の円筒下層d1式に相当する土器である。また、92は2破片あり、外傾する口縁部に異方向羽状L R・R L非結束を施すことから、縄文時代後期中葉後半に位置付けられる。

93は甕の口縁部で、頸部に横走する沈線より上に縄文R L縦位を施す。94は2破片あり、いずれも重層する横位沈線と弧線文を施す甕口縁部。95は頸部に沈線、口縁に重層する弧線文を施す甕口縁部である。96は口縁に沈線、以下を縄文L R施文する。これらは、いずれも弥生時代中期後半の川岸場式に相当すると考えられる。

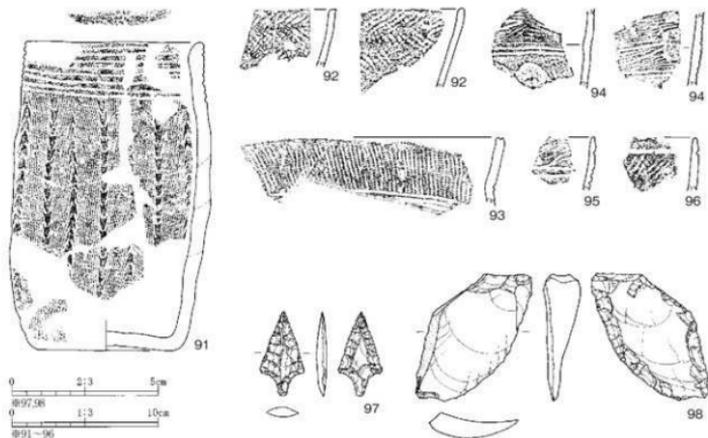
② 石器(第52図97・98、写真図版54)

石器2点が出土、掲載した。97石鏃は有茎で頁岩を素材としている。98はスクレイパー類で、腹面側の両側縁に二次加工が施される。時期は不明だが、出土土器から縄文時代前期末葉、縄文時代後期中葉後半、弥生時代中期後半のいずれかの可能性がある。(北田)

(2) 室町時代

① 陶磁器(第53・54図1~39・43・44 第55図40~42、写真図版48~51)

輸入陶磁器と国産陶器に大別される。輸入陶磁器には中国大陸製の天目茶碗・龍泉窯系青磁・閩江流域産白磁がある。天目茶碗は1と2に示す2点を図化した。ともに底部を欠く口縁部から体部にかけての破片である。器形は大同小異で、高台脇の切り回しは鋭角をなす。口縁部から体部にかけては



第52図 縄文・弥生土器、石器

天目釉が施され、口縁部外面上半には一部杵目状に窯変した部分も観察される。外面に施された釉は下半にまで及ばず、2ではこれが垂れ下って釉溜まりを形成している。

胎土中には、芥子粒状の微細な黒色粒が含まれ、磁器質に焼成されることや、濃い茶色から黒褐色を呈した釉薬を二重掛けしていること、一部に杵目状の窯変が観察されること、見た目よりも重く感じられることなどから輸入品とみなされる。したがって、産地は中国大陸福建省周辺に求められるが、建窯の製品と比較して胎土が白みを帯びること、釉の厚みが少ないことなど異なる部分も観察されるため、その周辺に所在する傍系の窯で焼成された倣建窯系製品と考えられる。

これらの時期については不明であるが、他の共存遺物からみた場合には、おおむね15世紀後半代以前に廃棄されたものと考えられる。

青磁は3から8に示す6点を図化した。器種には碗・香炉・水注が見られる。碗には3から6に示す4点がみられ、うち5は口縁部の一部が遺存する小片となるため、表面と断面を図化するのみとした。これらの中で、3と6の見込には、それぞれ枝菊紋と幾何学花紋の印花紋が施され、うち、全形のうかがえる3には、磁胎中に細かな空隙が観察されること、釉調はガラス質だが、濁って透明度が低いこと、さらに、全面施釉後、高台内面のみを釉剥ぎとし、その周辺を土見せとしていること、釉の中に粟粒状の気泡が入ったいわゆる泡沫星が観察されることから、倣龍泉窯系青磁に分類される。つづいて、底部のみが遺存する6は、釉調が透明感を持つガラス質をなし、磁胎中に空隙が観察されないため、龍泉窯系青磁とみなされる。

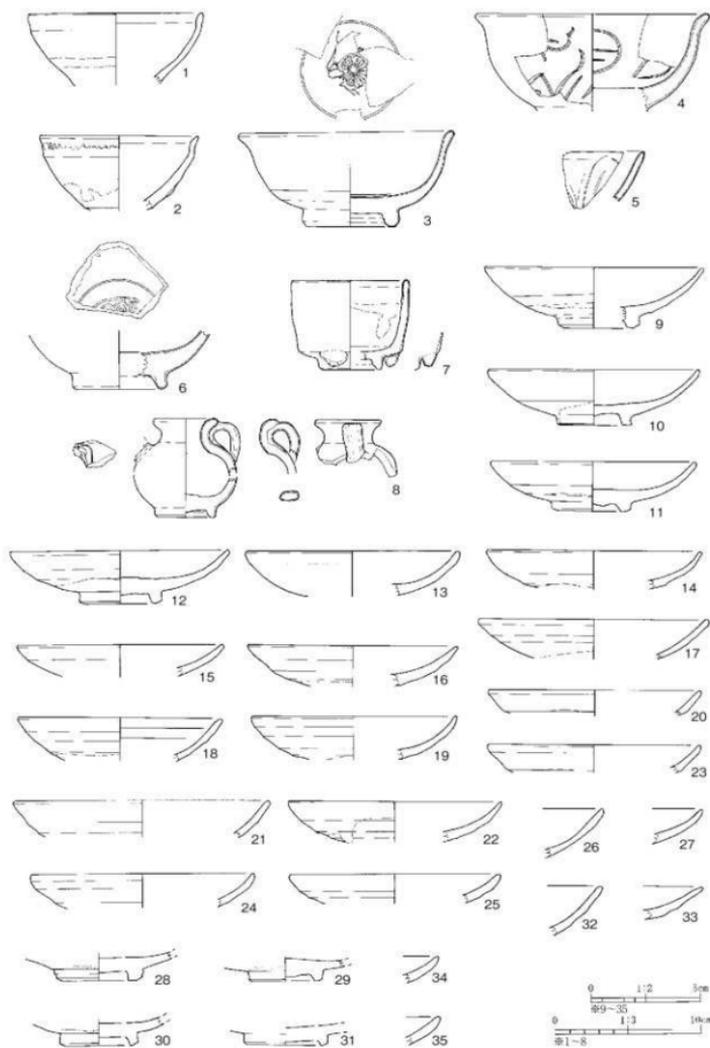
底部内面が欠損する4は、内外面に簡略化された意匠不明の図柄が片切彫風の技法で施され、見込みには線紋が一糸めぐらされている。釉調はガラス質の鈍い光沢を有するものの、発色は暗く、かつ、濁り、また、器面には虫喰状の針孔のような窪みが観察されることや、底部附近の焼成状態が赤褐色を帯びた酸化焼成のまま完全な還元状態に至っていないなど粗雑さが目立つことにより、3と同様、倣龍泉窯系青磁と考えられる。口縁部のみが遺存する5は、上記2点のような端反とはならず、上の方へやや内湾しながらのびて端部へと続く。外面にはやや丸みを帯びた鎚連弁紋が施され、磁胎には薄い透明なガラス質の釉薬が掛けられており、その発色や釉調などから龍泉窯系の製品とみなされる。

これらの時期は、5が口縁部の形態や鎚連弁紋の表現法などから14世紀代に位置づけられ、そのほか6が15世紀前半代、そして、3と4が、天文五(1536)年の天文法華の乱により焼失した京都堀川六条に所在した本圀寺の焼土層出土資料に類品が見られるため、15世紀後半以降、それが焼失する以前までの中におさめられる。

7の香炉は全形がうかがえるものである。やや上方に広がる筒形を呈し、底部には高台とは別に乳足状の脚部が3ヶ所に貼付されている。しかし、それらの下端部は高台より高く、正置した場合には接地しない。釉調は若干濁ってはいるものの発色は鮮やかで、磁胎も灰色味が強いことなどを併せて考えるならば、15世紀前半代頃までの龍泉窯系製品と考えられる。

なお、内面は半分以下が露胎のままとされるのに対し、上位には濃淡二種の釉薬が掛けられるとともに、その境に段差が形成されていることから、二重掛けによる施釉が行われたと類推される。さらに、口径、高さとも10cmに満たない小形品であるため、その用途は置いて香を焚くばかりではなく、掌中に納めて香を嗜む間香炉として使用された可能性も指摘される。

8の水注は、注口部などが一部欠損するものの、ほぼ全形がうかがえるまでに復原できた。器高7cm弱の小形品で、釉調は濁ったガラス質をなし、色調は黄緑色を呈するとともに、部分的には細かい泡のような泡沫星が観察される。また、磁胎の色調は黄色味が強く、部分的に空隙を生じ、さらに、



第53圖 陶磁器(1)

高台内面のヘラ削りに注目するならば、真正な龍泉窯製品は平滑に仕上げられるのに対し、中央部が削り残されて胃金状の突出部が形成されているばかりか、この部分には施軸が及ばず露胎のまま仕上げられている。これらの諸様相から倣龍泉窯系青磁とみなされ、製作時期は15世紀後半以前に位置づけられる。

なお、本来、小形の水注として製作されたものではあるが、その大きさや、他の共存遺物の組成から類推した場合には、いわゆる見立て道具として一輪挿しに用いられた可能性も指摘される。

白磁は9から35の27点を図化した。器種はすべて小皿で、器形にはそれぞれ大同小異があるものの、体部下半から底部にかけての部分が露胎とされることを含めて、各個体とも形態・製作技法・焼成など細部に至るまで共通性が高い。全形のうかがえる9から12の3点を含め、底部の遺存するものが8点含まれるため、最低8個体以上存在したことが確実である。類品は、京都や堺でもまとまって出土する傾向が高いことにより、複数個を一単位として流通させていた可能性が指摘されている。

なお、これらの製品は、近年の研究により、中国大陸福建省閩江流域に分布する諸窯の製品であることが明らかにされるとともに、列島内においては15世紀後半以降に輸入量が急増することから、この段階の示準的資料として位置づけられている。

また、通常みられる当該資料は、割高台や下駄高台に成形されるものを常とし、本例のような輪高台とされる例は少ない。さらに、見込みには本例のような芥子粒状の降灰が全面に付着する例も少なく、その代わりに矩形を呈した重ね焼き痕をとどめる場合が多い。しかし、今回の資料に関しては、12以外にこの重ね焼き痕が観察されないことにより、量産品ではあるが厚鉢の最上段に置かれた数少ない製品を意図的に選択し、入手していた結果を反映しているものと考えられる。

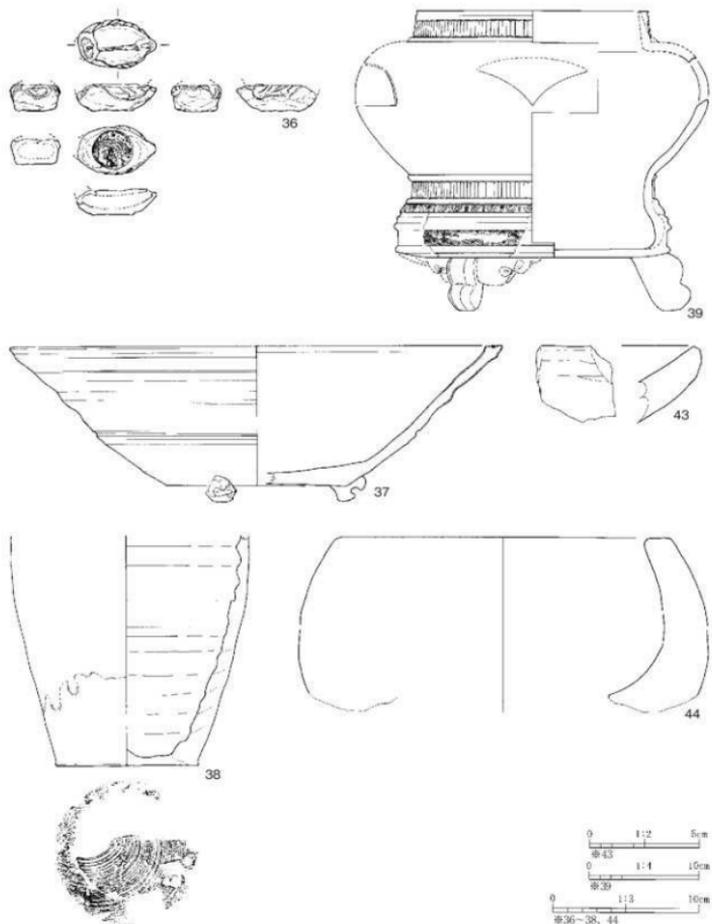
国産陶器には古瀬戸や越前焼とともに、秋田県大仙市大畑・松山腰窯産とも推測される資料がある。古瀬戸は、第54・55図に示すような製品で、器種には36の水滴のほか、37の鉢、38の瓶や、40の壺がみられる。36の水滴は、水鳥を象った瀟洒な製品である。背面から頭部にかけての部位が接合面より剥離して欠失しているが、その剥離面の観察から、当初扁平な小皿状の円盤を作成し、その後、口縁端部両側縁を双方から折り曲げることにより逆台形の体部と中空部とを形作り、その後、背・羽根・頭の各部位に相当する粘土貼り付けて全体形を整え、最後に尾の部分に穿孔を行って仕上げられた状況を非常に良くみて取れる。底部は回転糸切痕を残したままで、体部から上位には鉄軸が施される。

37の皿は、破片数は少ないが、各部位を図上にて合成し旧状に復した。その形態から藤澤氏の言う鉦目付大皿に相当する製品で、体部外面にはヘラ削りを施し、その中央には一条の凹線がめぐらされるとともに、底部外面の周縁には、切り込みを有する塊状の脚を三方に貼付する。内外面の体部上位から口縁部にかけては明緑灰色を呈する軸が施され、内面底部にはその部位にのみ灰被りが観察されないため、その範囲が重ね焼きの痕跡を示していると判断される。

38は、底部から体部中位にかけての部位が遺存する破片で、欠失部が多く全形はうかがえないが、体部の形状が、上方に向かってやや広がりながらのび、筒状をなすことから類推して瓶、いわゆる梅瓶に相当するものと考えられる。体部内面には明瞭な凹凸を持つ轆轤引きの痕跡が観察され、底部外面には回転糸切痕を止める。外面体部下半から底部上位にかけては黄緑色を呈する軸が施され、一部には釉溜まり状の部分も観察される。

40はほぼ全形のうかがえる四耳壺である。体部上位に最大径を有し、肩部には横位の耳を貼付するなどの形態的特徴を有することから、祖母襖茶壺と称される製品とみなされる。

底部外面際が露胎とされる以外、体部下半から口縁部上端部にまで全面にわたって塗り掛けによる鉄軸が施され、図示していないが肩部から体部下半にかけては軸の垂れ下りも一部に観察される。



第54図 陶磁器(2)、土器

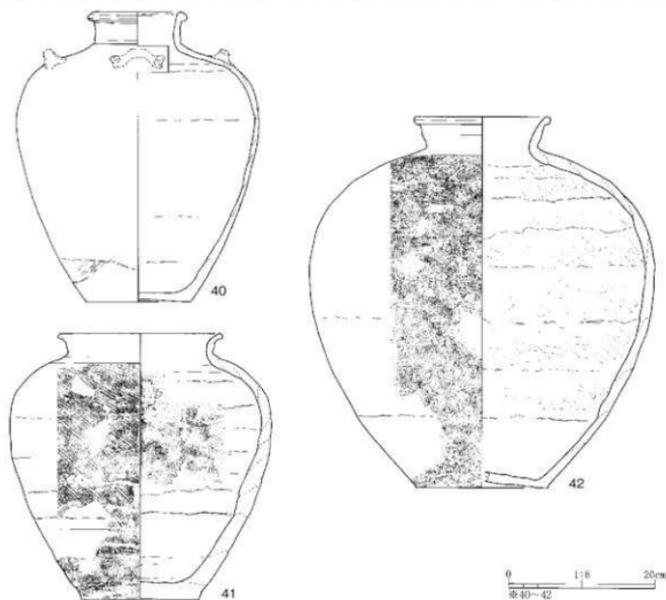
なお、この製品は、古瀬戸と比較して胎土や釉調に若干相違する部分もあるため、中国大陸南部地域で製作された福建・広東系茶褐釉壺の可能性も指摘されていることを記し、向後の研究を俟ちたい。これら古瀬戸の型式を藤澤分類にあてはめるならば、36の水鳥を象った水滴が古瀬戸後期様式後Ⅲ期

から後Ⅳ期古段階、37の鉦目付大皿が古瀬戸後期様式後Ⅲ期、そして、38の瓶は藤澤分類による瓶子Ⅱ類に区分されるとともに、丈長となる体部の形態的特徴などから、古瀬戸後期様式後Ⅲ期から後Ⅳ期古段階に位置づけられる。さらに、40の壺については、玉縁状をなす口縁部の形態、体部全体の形状などから看取される諸様相から、古瀬戸後期様式後Ⅱ期頃に相当するとみなされよう。

これらの時期に関し藤澤氏は、40の壺を14世紀末から15世紀初頭と最も古く位置づけ、続いて37の鉦目大皿を15世紀第2四半期、36の水滴と38の瓶を、15世紀第2四半期から15世紀中葉にかけての時期とらえており、一方、関西の消費地からみた年代観に沿うならば、京では先述した京都堀川六条本園寺焼土層出土遺物に近似する資料が含まれていることを根拠として、15世紀後半から1536年までの間、堺では15世紀後半を中心とする時期と、やや新しい時期にまで下げる傾向にある。

41は各部位の破片が揃い、ほぼ全形がうかがえるまでに復原された壺である。底部外面には離れ砂が付着し、体部内面には凹凸の激しい単位の大きな当て具痕が観察され、表面には左上がりの平行タキが施される。それらの痕跡から叩き締め技法を用いて製作されたことは確かだが、器壁は極めて厚く、粘土紐の接合単位も圧接が不充分なため、各所で乾燥時や焼成時の空隙を生じ、さらには、この成形技法の不完全さとも相まってか、肩部を中心として大きな焼き影れが各所に生じるなど、全体的に鈍重な感を受けるものである。

焼成は堅緻で、体部上半から肩部にかけては薄い自然釉と灰被りが観察され、焼き上がりの色調は表面が暗赤褐色、断面が灰褐色を呈する。胎土中には長石を中心として石英や、黒色を呈した礫を含む



第55図 陶磁器(3)

み、その大きさは5mm以下をはかる。

これらの諸様相と共伴遺物の年代観から産地を推定した結果、まずは器形を度外視して、表面の色調や焼き上がりは備前焼に近似するが、断面の色調と質感とはそれと合致せず、また、胎土中に長石を多量に含むものの、信楽焼のような吹出軸の体をなしてはおらず、さらには越前焼や珠洲焼とも様相を違え、ましてや常滑焼などとは全く異なっている。

視点を変え周辺地域の諸窯との比較を行った結果、焼成・形態など、細部に至るまでの諸特徴が酷似する資料を、秋田県大仙市に所在する大畑・松山腰窯出土品の中に見いだすことができ、そのほかにも、同じく大仙市西板戸遺跡出土の壺にも類例があることを追認した。

ただし、これらの資料と比較した場合に課題となるのは、本例の共伴遺物が15世紀後半代を中心とする時期なのに対し、それらが13世紀前半代に位置付けられていることである。したがって、今後、本出土例が伝世品であることを視野に入れながら検討すべき新たな課題を提起することともなった。42は越前焼の壺である。先の例と同じく破片とはなっているが、各部位の破片が接合して全形がうかがえるまで復原できた。全体形は、中央部がやや押し上げられた平底から倒卵形の体部を形づくり、そこからやや上方に開く短い頸部を付したのち、端部を外方に向け玉縁状に成形するというものである。

調整は、内面の底部から体部下半がナデ、そこから上位の体部が左上がりの指頭圧痕となり、外面は下半がナデ、上半には板か布状工具を用いた横方向の回転ナデに近似した擦過痕が観察され、頸部から口縁部にかけては回転ナデにより仕上げられる。

なお、底部と体部の下位と上位には、製作時の乾燥単位が段や細い糸状の空隙となって明瞭に観察されることから、数回に分けて成形されたことをうかがわせる。

胎土には1cm以下の長石、石英などを含み、色調は灰色を交えた橙色から褐色を呈する。焼成は全体的にやや甘く、硬質には仕上がっていない。

時期については、体部の肩が張り最大径を中央部附近に有すること、頸部が外反していることなどの諸特徴に着目し、これを木村氏の分類に従って区分するならば、IV-2期に相当するものと考えられ、その実年代を1430年から1450年の中に納めることが可能となる。

②土器(第54図39・43・44、写真図版49・50)

焼成技法により土師質と瓦質に焼成されたものに二分される。土師質のものには、ほぼ全形のうかがえる風炉1点があり、瓦質焼成のものには鉢2点がみられる。

39に図示した土師質の風炉は、体部上半の一部を欠損するが、破片となった各部位と既知の資料からその形状を類推して復原図化したものである。ただし、土師質焼成された資料にはこれに該当する例がみあたらないため、以下の報文は瓦質土器の例を援用する。

器形は、側方に猫脚を付した平らな底部から体部下半で一旦すぼまった後、一条の凸帯紋を境として大きく肩の張った体部上半へと続き、その上には直立した短い口縁部が形作られる。

猫脚基部の両脇は加飾され、体部下半にはくびれ部に凸帯紋に挟まれる形で連子紋を施し、その下位には粘土紐を貼付したのち押捺により複弁連弁紋を表し、さらに、内凹紋と凸帯紋を挟んで2条の雲紋あるいは唐草紋をめぐらせている。口縁部外面には上下の突帯紋の間に連子紋がめぐらされ、体部上半には通気孔を兼ねた半月形と銀杏の葉に類する紋様を象った火窓を交互に配している。

器壁の厚さは1cm前後をはかり、胎土は精良で、器面調整には横方向を主とするヘラミガキが施される。色調は灰橙色から橙色を呈する部分が多く観察され、焼成はやや甘い。

なお、北東北地方での類品の出土例は、青森県尻八館で確認された資料があり、それと本例とを比較するならば、透かし窓の形状は異なるものの、形態や紋様構成など細部に至るまでが酷似し、さらに、大和で生産された奈良風炉と比較した場合においても、器形や紋様という主要な部分のみならず、器壁の厚さや、器面に施されたヘラミガキの遺存状況、精良な胎土を用いて製作されているなど、細かな部分についてまで相違はなく、異なるのはただ焼成技法のみに限られる。したがって、ここでは土師質土器として報告するが、はじめにも述べたとおり、器形的には瓦質土器とまったくたがわず、さらには、今回出土した共伴遺物には、被熱痕跡をとどめる資料も多数認められるため、本来は瓦質焼成とされたものが二次焼成を受けることによって器表面が荒れるとともに吸着させた炭素分を失い、現状のような土師質に見まがうがごとき状態となった可能性も考慮しておく必要があろう。

時期については、共伴遺物との関係や、出土地の状況から15世紀後半代に廃棄されたものとみなされる。この年代観は、本例に酷似する尻八館例に検討を加えた水澤氏が、Ⅳ類と区分してその時期を14世紀末から16世紀前半とするとともに、これらを最も手の込んだ高級品と位置付けた論考や、時期は15世紀代に入るとし、金属器を模倣した製品と解釈する立石氏の考察、さらに、15世紀前半代には形態分化が進行し、それ以降16世紀にかけて出土量が増す傾向にあるとした佐藤氏の見解とも趣向をきたさないばかりか、既知の資料に今回の新例を加えることにより、使用時期の一定点を提示することを可能とした資料としてその持つ意味は大きい。

瓦質土器には43と44の2点の鉢がみられる。ともに浅鉢の口縁部から体部にかけての部位が遺存するもので、小片となることや、紋様が施されていないことなどから特徴を見いだせない。よって製作時期は不明ながら、共伴遺物の年代観より、廃棄されたのは15世紀後半代と判断される。

③ 石製品(第57～59図45～49、写真図版52・53)

石硯、温石、石鉢各1点のほか、石茶臼二組分が破片となって出土した。これらいずれの製品も欠損部が多いため全形はうかがえない。

46の石硯は、長方形様を呈するが、上下端が欠失していることにより全形は不明である。断面形は、横方向のみの所見では下辺がわずかに短い逆台形を呈する。

表面には琵琶を正面から表した意匠を業理に平行する形で陽刻し、胴の中央部上半を海、下半を陸、胴縁部を硯縁にみだてて硯面を構成する。さらに、その上位には棹から糸口が刻み出され、右方には糸巻きの表現が二か所遺存している。しかし、そこから上位に位置すると考えられる海老座は確認できない。

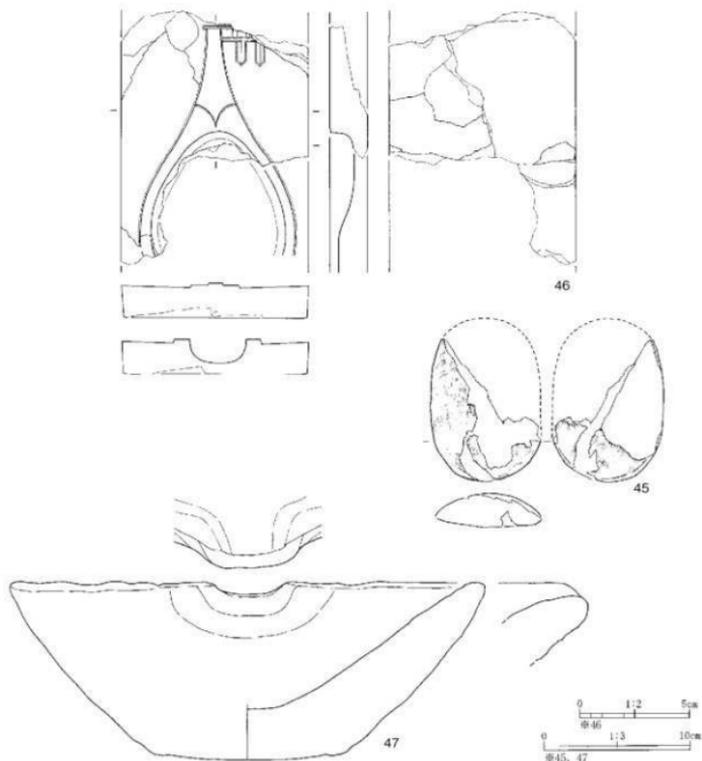
また、全体的に外縁から内側に向かって、茶褐色から緑褐色に暈状をなした被熱痕跡と思われる変色部が観察され、これと風化により業理に沿って層状に剝離しながら破損したと推定される。

生産地については、その形態から中国大陸の琴様硯にも類似することから、研(硯)譜の中に類例を求めたが、琵琶を表現する例が確認できなかった。よって、出土資料との比較を行った結果、硯縁が平らに仕上げられるという形態的特徴から列島内で製作された可能性が高まり、使用される石材の採取推定地からみてもそれとみなすことに矛盾はない。

なお、考古資料ではないが、早稲田大学図書館所蔵の森島中良著



第56図 森島中良著『惜字帖・香風采琴集』掲載の硯拓影(早稲田大学図書館所蔵)



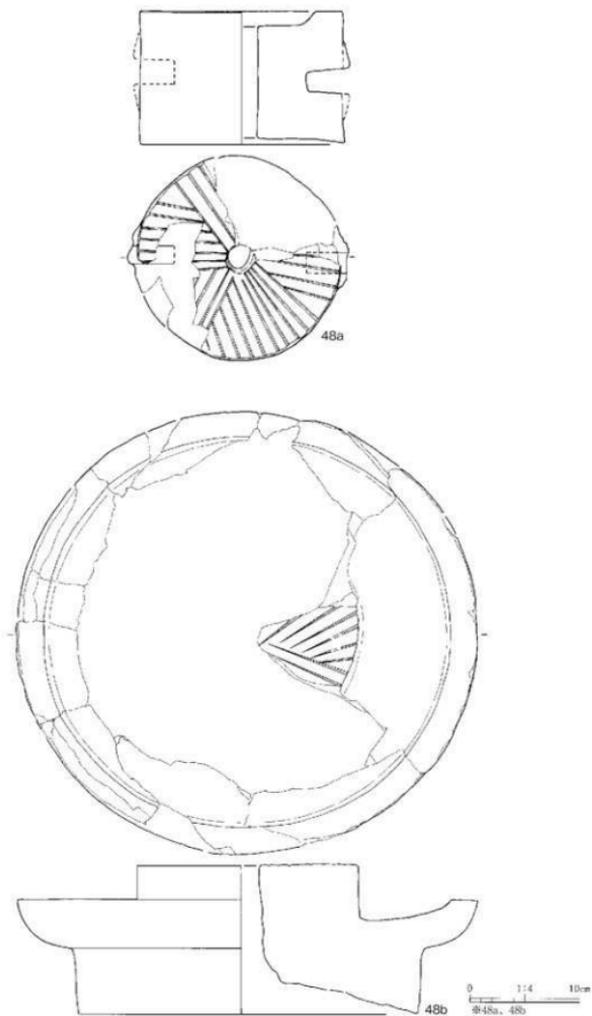
第57図 石製品(1)

『措字帖・香風來亭集』(文化元年(1804年)頃)に近似する資料が掲載されていることを参考として記しておく。

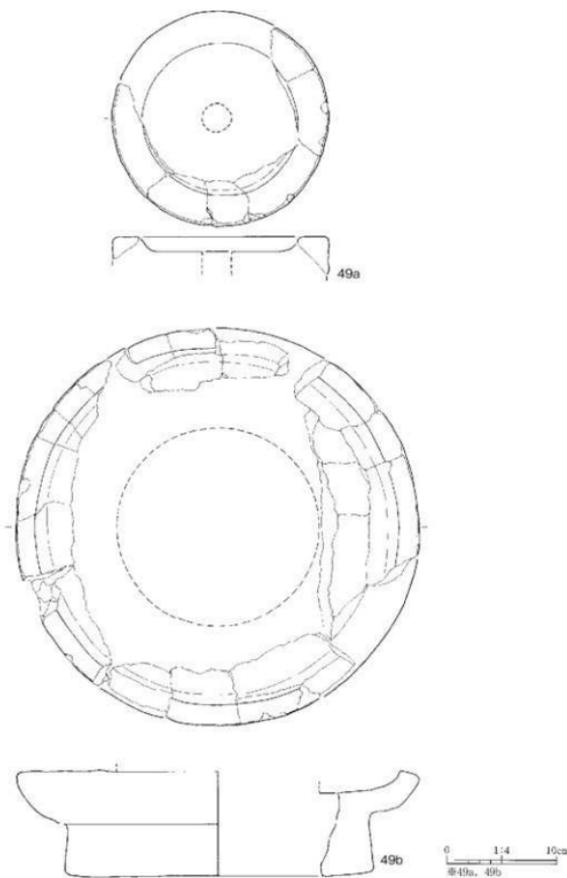
時期については、視陰と視隅の角度が直角に近いことにより、水野氏の分類に従うならば16世紀代となるが、他の共伴遺物から15世紀後半までに廃棄されたとみなしておくほうが、被熱痕跡を止めることも相まってよりふさわしいと思慮される。

45は温石である。黒緑色を呈した蛇紋岩を亀の甲羅状に加工研磨したもので、表面には研磨の際の線状痕と、摩耗による鈍い滑沢が観察される。また、一部に赤変した部分が観察されるため、被熱したことは確かだが、それが使用時点のものなのか、廃棄された段階のものなのかは断じがたい。

なお、内湾する部分を確認できないため、しばしば見られる石鍋などを転用したものではなく、当



第58図 石製品(2)



第59図 石製品(3)

初より温石を意図して製作されたものと判断される。

時期については、これのみでは判断材料に乏しく明らかにできないが、出土状況などから鑑みて15世紀後半代まで使用されていたものと想定される。

47は全形のうかがえる石鉢である。笠状の素材の内側を削り込むことによってくぼみ部を作出し、

口縁部の一か所に片口状の注口部を設ける。内面は使用により滑らかとなり、一部には擦痕も観察される。

時期は、先述の温石と同様の事由から、それと同じ15世紀後半代までとみなすことが可能となる。

48と49はそれぞれaとbで一組をなす石茶臼で、全体的な様相は48の方がより旧状を止めている。

48aは上臼で、下面には側縁に至るまで不均等に6分画された主溝が刻み込まれ、そこに組み合わせられる副溝の数は6条と9条を数え齊一性に欠ける。

ふくみは7mmをはかり、芯棒挿入孔を中心として約二分の一の範囲には製作段階に伴う輻引きの痕跡が観察され、そこから外方は使用により鈍い滑沢を有す。

側面の中位には挽き手挿入孔が穿たれ、その周囲には二重にかさねた柃形の紋様を陽刻した台座が設けられ、さらに、その対面にも同様の予備孔が作り出されている。上面は周縁を残して一段深く彫りくぼめられ、その中央には茶葉を挿入する円形の孔が穿たれている。

また、他の石茶臼にも共通して観察される様相であるが、外縁部が赤変しているものや、角の部分から剥離したような破片が互いに接合する関係にあり、その状態から火熱によって破砕したと推察される。

なお、目数を6分画するのは近世の東北地方通有の事例であるが、本例もこれにたがわず、今回の出土例からその淵源が少なくともこの段階にまで遡ることを示した。

48bは上記のものと同組み合わせの下臼である。接合により皿の外周部分がほぼ全周するまでに復元され、臼の部分も旧状がうかがえるまでに図上復元することができた。擦り合わせ面は一部が遺存するのみとなり、そこには2単位分の条溝が確認されるが、分画単位を復元するまでには至らない。

上面は、先の例と同じく擦り面の二分の一弱に輻引きの痕跡が観察され、そこから外方には鈍い滑沢が観察されとともに、この部分はほぼ水平に整えられ、製作時の輻引きの細かな凹凸を除いてふくみのような湾曲は作り出されてはいない。底面は上げ底気味に大きく削り込まれ、その中心部には芯棒挿入孔を貫通させる。

49aはもう一方の上臼である。上端部周縁の約三分の二程度しか遺存しておらず、この部分以外の様相をうかがうことはできない。

49bは上記の49aと一対をなすとみられる下臼である。皿部周縁がほぼ全周するまでに接合できたが、そこから上位については復元するには至らなかった。破片の一部には脚部の断片が観察される部分も存在し、そこからうかがえる形態は、先の49aとは異なり平らに成形されたものとなる。

なお、これら3点とは直接接合する関係にはないが、6分画に復元される条溝が刻まれた全体の二分の一弱が遺存する擦り合わせ部の破片が出土している。これについては、出土した石茶臼片総体量と比較して、これらと別個体とは考えられず、したがって、本来は48bあるいは49aかbいずれかと同一個体のものであったとみられる。

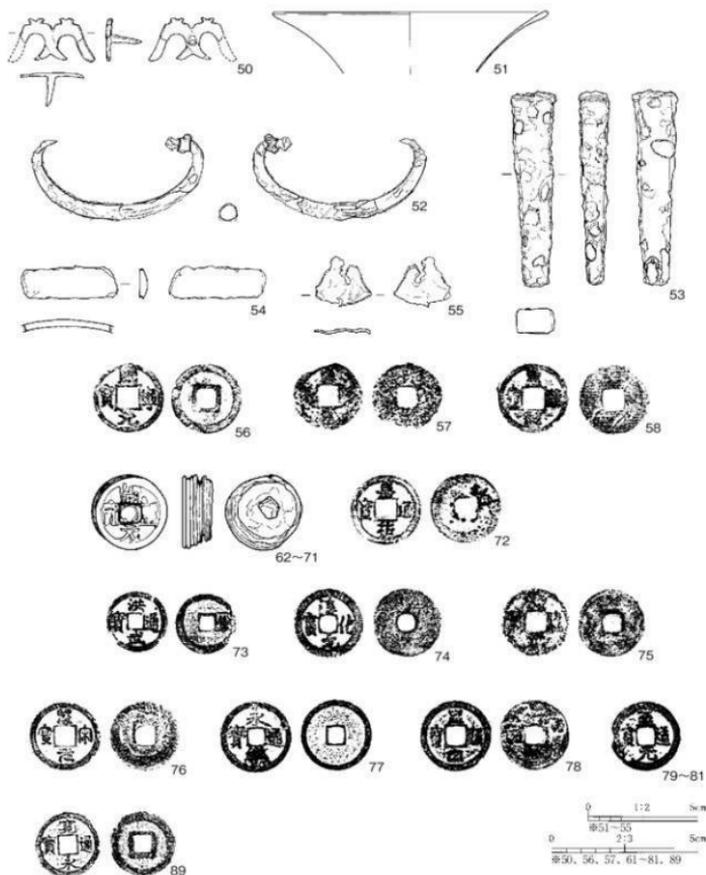
これらの材質は、45の温石が北上山地にも分布域が存在するとされるものの、採取地の特定には至らないとされる以外、46の石硯が北上山地の中生代三疊紀からジュラ紀にかけて形成された層中にみられる頁岩、47の石鉢と破片を含めた石茶臼のすべてが、北上山地などに分布する新生代古第三紀に堆積した野田層群中の凝灰岩とされ、附近では野田港の北東部に突出する大唐の倉と呼ばれる断崖でも露頭が観察されるとのことであるが、交易品である可能性も考慮しなければならない。

④金属製品(第60図50～55、写真図版54)

青銅製品4点と、鉄製品2点が出土した。前者のうち種類の明らかなものには50の目貫と27の花瓶

があり、その他には54の円環状と、55の板状を呈する用途不明製品がみられる。後者の鉄製品には52の引手と53の鑿や楔とみなされる製品がある。

50は目貫である。極めて厚い山金地の表面に、琴柱二双を互いの脚部を重ねた状態で表現し、表面には焼付金による金の色絵を施している。金の成分分析の結果、互いの琴柱に施された含有量に相違が認められるため、焼金と青金の色調差のように金の量を意図的に調整して装飾効果を高める意図があったとも思感される。裏面のほぼ中央には、円柱状を呈した細長い山銅をこれ単体で釦付すること



第60図 金属製品・銭貨

により陽根を作り出し、その周囲に力金は付随させてはいない。

時期については、色絵技法に焼付金がいわれていることや、極めて厚い地金を用いていること、そして、力金を伴わない陽根とされていることなどから、16世紀までは下らないとみなされる。

なお、紋様が二重表現とされているから、腰刀拵など短い刀剣に掛けられていた装剣金具と類推されるとともに、陽根が付されていることから差表の目貫であることがうかがえる。さらに、石硯と同様に楽器の一部を表していることにより、所持者個人の好みを反映している可能性も指摘される。

51は花瓶である。漏斗形に大きく広がる口縁部のみが遺存する。器壁は口縁部附近が2mm前後と最も厚く、そこから頭部にかけては急に厚みを減じ、1mmにも満たない極めて薄い部分も確認されることから、轆轤挽き技法により仕上げられたと考えられるが、現状では薄錆に覆われているためその痕跡はうかがえない。

材質は、緑青が認められることから青銅または真鍮製と想定され、後者ならば器壁が極めて薄く加工されていることなどにより、古銅や宣徳と称される大陸からの輸入品となる可能性が高くなる。

さらに、その特徴的な形態から伝世品の中に類例を求めたところ、茶道具で言う尊式(把綿)花入と呼ばれる花器に相当することが判明した。これは、中国漢代の壺・觚・壘・尊と呼ばれる青銅製酒器を原形となり、のちの宋から明代にかけてはその形を写して仏具として製作されはじめたものである。列島内には鎌倉時代より仏具として輸入されはじめ、つづく室町時代には花生けとして転用されるようになり、現在の茶席では「真」の花入れと位置づけられ、最も格式の高い道具の一つとされている。

54は、断面が扁平な蒲錐形を呈する円環状の青銅製品である。用途は不明ながら、表裏面ともに平滑に仕上げられていることにより、桶などの容器に用いられる箍や帯金なども推測される。

55の板状を呈する用途不明製品は、三角形様をなす扁平なもので、三辺とも破断面のまま旧状を保っており、そのうえ、全体的に屈曲が激しく引きちぎられたような状態を呈す。よって、製品が否かを含め用途についてはまったく知る手掛かりがない。

52は鉄製の引手である。遺存状況の良好な側には、本体側に装着された環座金具の一部が錆着した状態で遺存している。引手部は平面形が蹠手となり、側面には、柁目状の筋が層状にも重なって明瞭に観察される状況より鍛造品と判断される。

時期については、出土状況などからは15世紀後半とみなされるが、本資料のみでは確定しがたい。このため、形状や大きさから筆筒などに使用された金具を想定して絵巻物や伝世品、民俗例などを参考としたが、15世紀代、これに類する金具を使用した筆筒がすでに出現していたとは考え難く、ならば別の製品に付されたものと捉えるか、あるいは寛永通寶が出土していることを勘案して、後世の付属金具が混入した可能性も含め考慮しておかねばならない。

53は、下方に向かってすぼまる用途不明の方柱状鉄製品で、先端部は丸く取められている。断面は長方形を呈し、頂部には外方にのびるような状態を呈しながら横方向に広がる部分が観察される。これを敲打によるまくれとみなすのならば、鑿あるいは楔などの工具とも類推される。

⑤ 銭貨(第60図56～89、写真図版54)

渡来銭と国内産の銅銭のほか寛永通寶が出土した。これらのうち、渡来銭には唐銭1点、北宋銭6点、明銭2点がみられ、このほか、錯付して判読不明なものを含めると計34点を数える。

これらを古いものから順に述べるならば、62の唐代に鑄造が開始された開元通寶(621年初鑄)が最も古く、続いて北宋段階では、草書体で表された74の淳化元寶(990年初鑄)が最も古く、続いて楷書体による銘文を鑄出す79の至道元寶(995年初鑄)、篆書体により文字を表す78の皇宋通寶(1039年初鑄)、

楷書体となる72の嘉祐通寶(1056年初鑄)、同じく楷書体表現の56の熙寧元寶(1068年初鑄)、篆書体による76の聖宋元寶(1101年初鑄)となる。

なお、錆化が進行し錢種不明となった57・61・75の3点は、非常に薄いことや、文字ばかりでなく縁や郭の鑄出も不鮮明となることから、列島内で鑄造された鑄写し錢錢あるいは模鑄錢の可能性が高い。

明錢には73の洪武通寶(1368年初鑄)と、77の永樂通寶(1408年初鑄)各1点がみられる。前者の背面右側、表面の「寶」字の裏側に相当する部分には、本例では判読できない文字が陽出されているが、これについては、伝世品などから類推して、二文字を縦方向に組み合わせて一文字とした「一錢」との表記がなされているものと察せられる。

銅錢には錆着したものを含め10点以上が確認される。踏み返し鑄造などを何度も繰り返し、矮小化と扁平化が著しく進行した段階のものである。当初よりこのような状態であったものが錆化の進行によってさらに脆弱化しているため、それぞれを分離することは難しい。したがって、観察できる範囲内での報告とはなるが、錢銘はもとより、表裏とも郭や縁が鑄出されたものも確認できない。

なお、曲輪2のS B02西側から一括で出土した76から88の13点は、これらを取り上げた時点では、紙綴り状の澆紙がそのまま腐朽せず方孔内に遺存して錢褶状をなし、そこには写真図版54の76から88に示すように、渡來錢4点と銅錢6点とがそれぞれ分けられた状態で一連とされていた。

89は寛永通寶の銅錢である。字形から新寛永に分類されるとともに、「寛」の13画目の跳ねが虎の尾状となる特徴的な書風から、元文元(1736)年に江戸、深川で鑄造が開始された十万坪錢、あるいは、同じく元文期に紀伊で鑄造されたものとみなされる。

参考文献

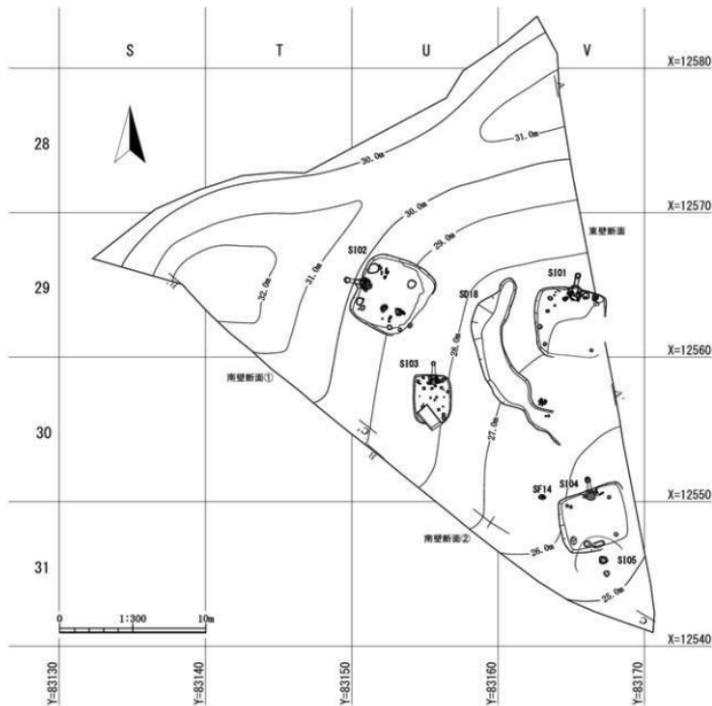
- 梶山秀雄 1996「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要』6 財団法人古代学協会
 永野和雄 1985「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第七十巻 第四号 日本考古学会
 徳留大輔 2013「日本出土の中国産青磁の動向—龍泉窯系青磁を中心に—」『平泉文化研究センター年報』
 国立大学法人岩手大学平泉文化研究センター
 木村孝一郎 2011「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『越前焼・常滑焼第10回山陰中世土器検討会
 山陰地方における越前・常滑系陶器』山陰中世土器検討会
 水澤幸一 2009「瓦器の相殺」『中世土器の基礎研究』22 瓦質土器の出現と定着 日本中世土器研究会
 立石聖志 2009「奈良・京都における瓦質土器出現の様相」『中世土器の基礎研究』22 瓦質土器の出現と定着
 日本中世土器研究会
 佐藤重聖 2006「瓦質土器の需要—大和における瓦質土器の展開と展開」『中世土器の基礎研究』Ⅺ 日本中世土器研究会
 小泉和子 1991「葦筒」『ものと人間の文化史』46 財団法人法政大学出版局
 藤澤良地 1991「古瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ 瀬戸市歴史民俗資料館
 秋田県教育委員会 2016「西坂戸遺跡—窪遺跡」『秋田県文化財調査報告書第501集』
 湊澤三郎 1984「新版絵巻物による日本常民生活絵引」全五巻 付録索引 神奈川大学日本常民文化研究所編 平凡社
 森島中良 1804頃『借字帖・香風來亭集』早稲田大学図書館所蔵

V 平成29年度の調査

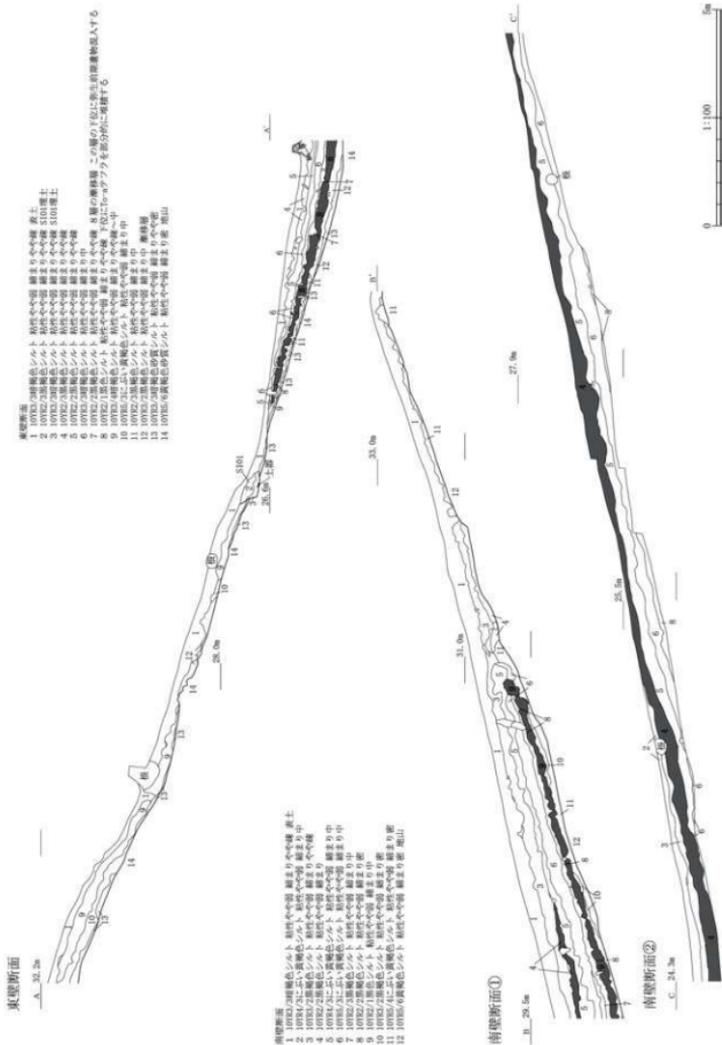
1 概 要

平成29年度の調査区は、遺跡範囲の最南端にある南東方向に傾斜する南向きの緩斜面で、主要地方道野田山形線を挟んで明内川へと下る箇所に位置する。調査区北側には東西に走る林道(赤線)が通っており、これによって谷状に地形が改変されている。本調査区の北西端にある最も高い箇所は、改変されて残った丘陵の一部と考えられ、ここから北東方向が土塁状に残存している。調査区の中央付近は小さな谷地形となっており、先述の土塁状に残存した丘陵部分も中央がやや窪んだ形状となっている。この小さな谷は南東方向に傾斜しており、古代の堅穴などはこれを挟んだ両側に構築されている。

第62図に、基本層序となる東壁・南壁断面を示した。斜面上位は層位が少なく、下位に向かって堆積層が厚くなっているのが分かる。旧地形が残存していた時から斜面の崩落が繰り返されており、傾斜の緩い箇所に堆積していったと考えられる。また、調査区中央付近は近年に耕作のため小規模に造



第61図 平成29年度調査全体図



第62図 東壁・南壁断面

成されており、東壁断面にあるS I 01竪穴住居跡は斜面下位が失われている。大半の部分は表土直下
が古代の遺構検出面で、南壁断面の4層黒褐色シルトがこれに当たる。東壁は、S I 01が耕作の影響
を受けていることから、南壁断面4層と同一層位は削平されたと考えられる。東壁断面8層の黒色シル
ト下位にはTo-aテフラが部分的に堆積する。これと同一層が南壁断面9層と考えられるが、遺物は
は出土していない。S I 05を含む弥生時代の遺物は、主に東壁断面7層から出土している。

平成29年度の調査から、弥生時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡1棟、古代の竪穴住居跡4棟、焼
土遺構1基、溝跡1条が確認され、弥生土器ビニール1袋、石器8点、土師器大コテナ2箱、土製
紡錘車7点、焼粘土塊1点、有孔石製品1点、刀子1点、琥珀3点が出土した。

本章では、調査内容を各遺構、各出土遺物の順で記載する。

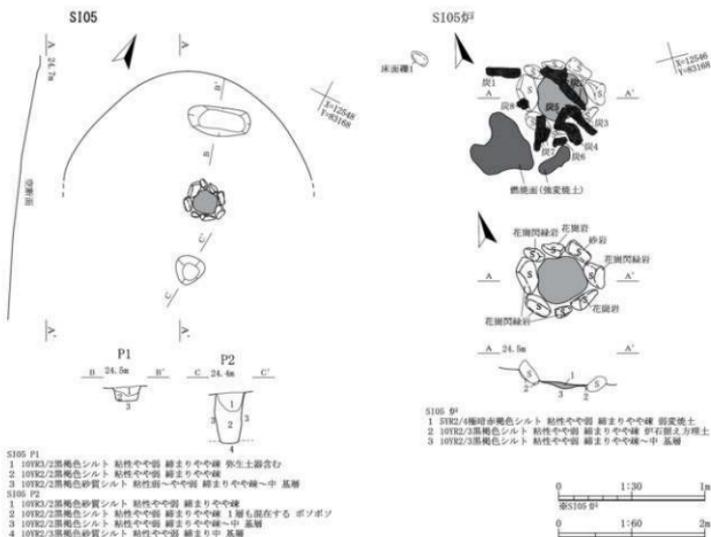
2 遺 構

(1) 弥 生 時 代

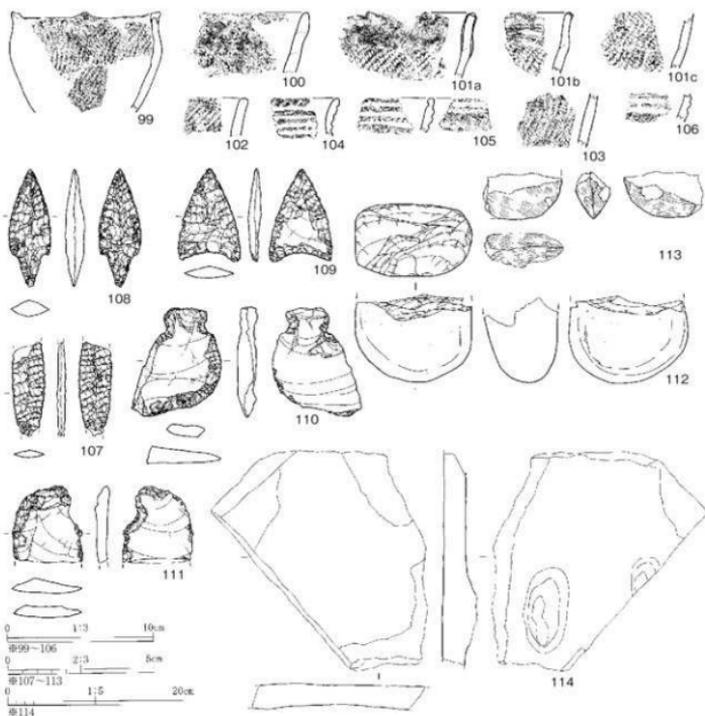
①竪穴住居跡

S I 05竪穴住居跡(第63図、写真図版37)

調査区南東隅のX=12548・Y=83168付近に位置する。南東向きに傾斜する緩斜面がやや平坦気味
になる地点で検出した。遺構の北半を7世紀代のS I 04竪穴住居跡に切られており、斜面下位は傾斜
に沿って壁がほとんど立たないため、竪穴状の若干の窪みと中央付近に確認された石囲炉により遺構
と認識した。規模・形状は、窪みの残存値から約3.4mの円形を呈すると見られる。遺構は前述の通
り後世の遺構に切られており、壁及び埋土はほとんど残存していないが、外傾しながら緩やかに立ち



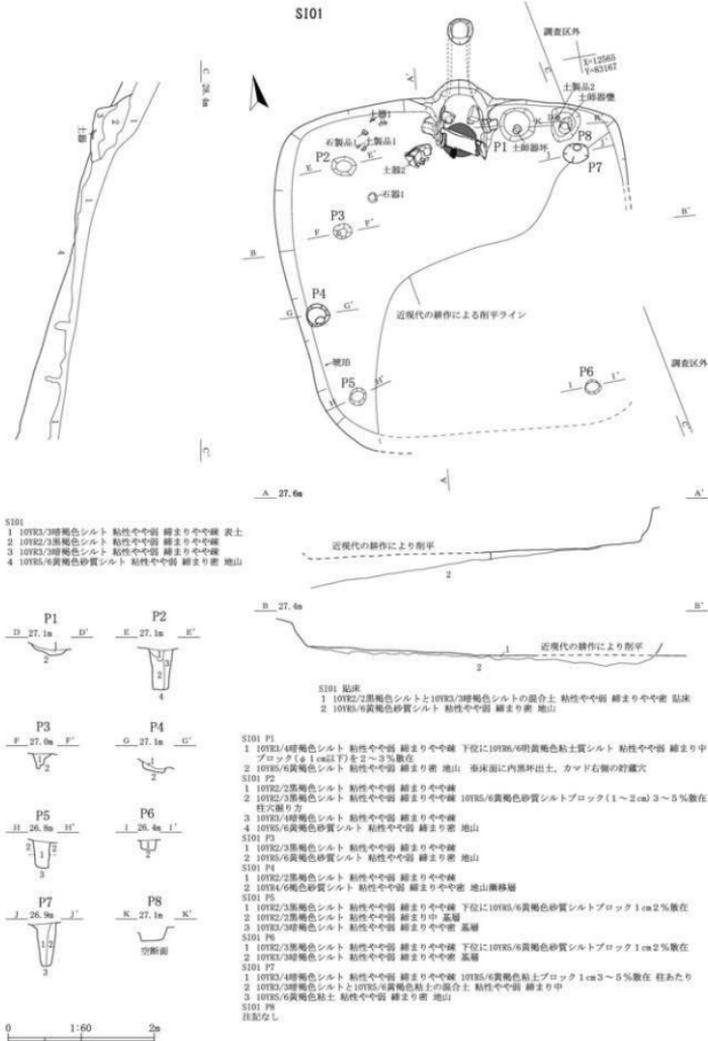
第63図 S I 05竪穴住居跡



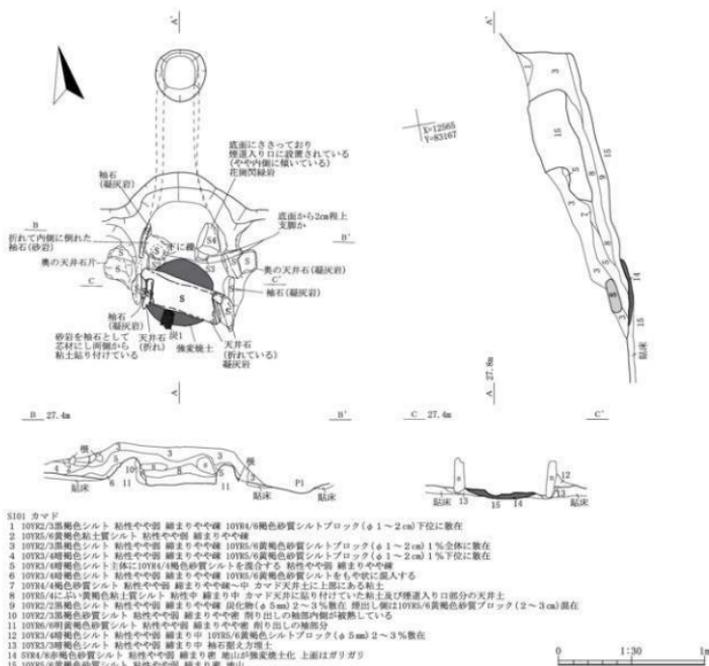
第64図 S105出土遺物

上が皿状の断面形を呈すると考えられる。床面は基本層序の南壁断面4層黒褐色シルトで、周面より堅く締まっている。埋土は黒褐色土主体と考えられ、炉付近には黒褐色土中に炭化材を多く混入する。床直上には強変焼土の広がり認められることから焼失した住居の可能性が高い。炭化材は炉燃焼面直上にも確認されることから、失火によって焼失、廃棄された住居と考えられる。床面中央に石囲炉1基を確認した。規模・形状は60×55cmの円形で、8個の花崗岩、花崗閃緑岩、砂岩からなる直角礫で周囲を囲んでいる。この中で、西端と東端の2個は20cmを超えるやや大きめの礫を配置している。内部には径34cmの円形を呈する弱変焼土が深さ約4cmに形成されている。床面から、柱穴状土坑2個を検出した。P1は深さ20cmの平面楕円形、P2は深さ70cmの平面円形で本遺構より新しい可能性もある。

床面から床直上を中心に、99～106弥生土器8点や111スクレイパー類が出土した。弥生土器は壺の破片を多く出土しており、弥生時代前期末～中期初頭の青木畑～谷起鳥式期に位置付けられる。



第65図 S101 竪穴住居跡(1)



第66図 S101堅穴住居跡(2)

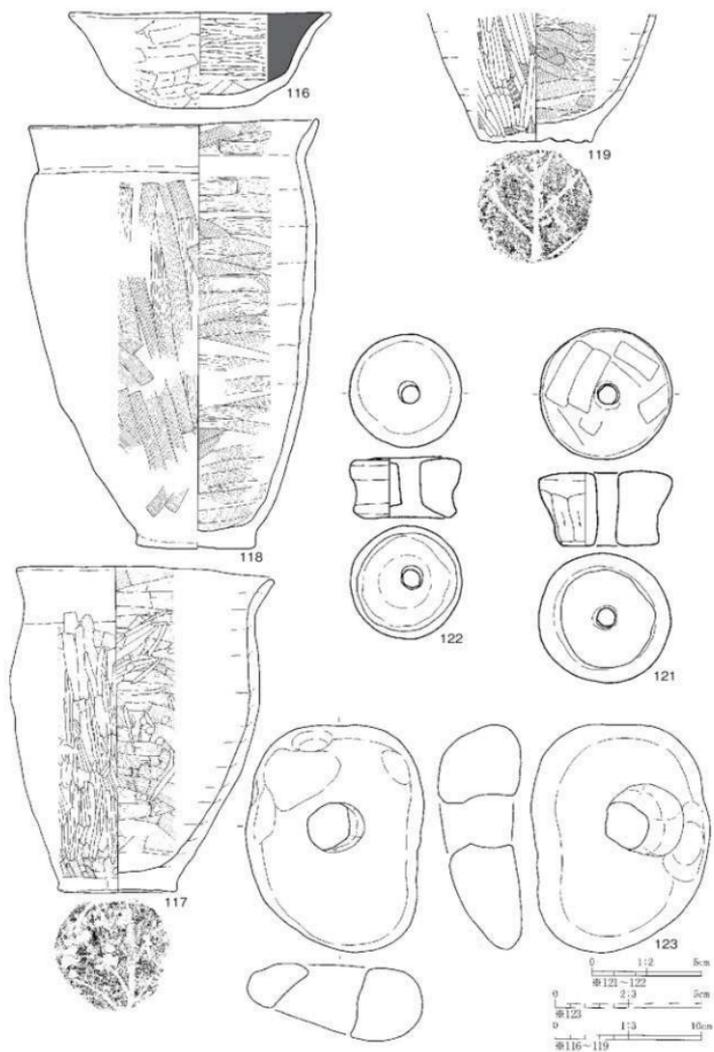
出土した土器の年代観から、弥生時代前期末~中期初頭に焼失、廃絶した堅穴住居跡と考えられる。

(2) 古代

①堅穴住居跡

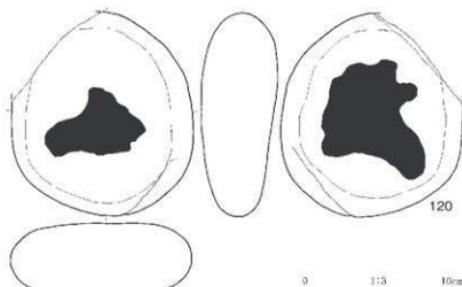
S101堅穴住居跡(第65・66図、写真図版38・39)

調査区東端のX=12565・Y=83167付近に位置する。調査区境界に接しており、東側をやや拡張して全体を検出した。規模・形状は、4.7×4.9mの隅丸方形を呈する。遺構は北壁約50cm、西壁約40cmが残存しており、斜面下側は現代の耕作で削平されている。埋土は、調査区際に設定した断面から2層に分けられる。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土で構成されており、直上には耕作土である表土層が堆積している。床面は黒褐色と暗褐色の混合土で貼床されており、平坦にするために斜面下側を厚く貼って構築した可能性がある。この床面から、柱穴状土坑6個と床面土坑2基を検出した。P2は55cm、P5は37cm、P6は14cm、P7は58cmの深さがあり、主柱穴と考えられる。また、北東隅からP1とP8の床面土坑を2基確認した。カマドのすぐ脇に位置するP1は径45cmの円形、その隣に



第67図 S101出土遺物(1)

あるP8は50×40cmの不整形円で、それぞれの底面から置いた状態の116土師器壺と117土師器甕、122土製紡錘車を出土している。北壁の中央にカマド1基を検出した。カマドは礫を並べ、隙間を粘土で塞いだ造りと考えられる。壁から作り出した袖基部から直線的に3～4個の礫を両側に並べて設置しており、この間には崩落した天井石を確認した。天井石は、間を空けて凝



第68図 S101出土遺物(2)

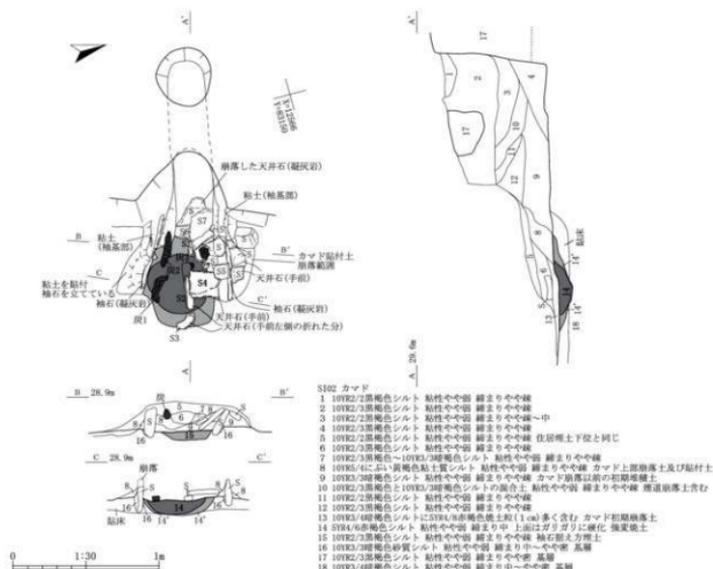
灰岩製の扁平礫2個を並列していたと考えられる。並列した天井石の間から燃焼面を確認でき、並んだ2個の直角礫を支脚に使用したと考えられる。燃焼面の大きさは径46cmの円形の強変焼土で、上面はガリガリに硬化している。煙道は釣り抜き式でこの燃焼面から徐々に立ち上がって煙出してL字に上部へ抜ける構造で、20×0.3mの規模で構築している。カマド燃焼面上から出土した炭化材について14C年代測定を行ったところ、較正年代で590calAD-636calADを得た(Ⅵ-1参照)。

前述の床面土坑から出土した116坏・117甕・122土製紡錘車の他に、カマド西側床面から倒れたまま出土した118土師器甕とその脇から出土した120黒色付着のある自然礫・121土製紡錘車・123有孔石製品、調査区際のトレンチから119土師器甕が出土した。

出土した土師器がいずれも非ロクロ成形であることや116坏の底部下半で屈曲する形状、年代測定の結果を勘案して7世紀中頃～後半に廃絶した竪穴住居と考えられる。

S102竪穴住居跡(第69・70図、写真図版40・41)

調査区中央北西側のX=12566・Y=83150付近に位置する。規模・形状は、5.2×<5.0>mの隅丸方形を呈する。斜面下側である南東壁は、耕作による影響で失われている。これ以外の壁の残存は良好で、北西壁60cm、北東壁24cm、南西壁38cmの急斜度で立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて11層で構成され、埋土上位の4層にはTo-aテフラ二次堆積層が堆積し、埋土下位の6層中にもブロックで混入している。堆積土は大半が斜面上位からの流入土で、開口していたP1にも流入している。床面に近い6・7層中には部分的に炭化材と焼土が認められることから焼失した可能性もあるが、分布状況にやや偏りがある床面南側には強変焼土が2箇所と炭化材の集中、カマド内の埋土と床面北側には炭化材の集中箇所が認められる。これらの炭化材について樹種同定を行ったところ、コナラ属コナラ節及びクリに同定されており、建築材として利用されたと考えられる(Ⅵ-2参照)。床面にはP1・2の床面土坑とP3～9の計7個の柱穴状土坑がある。床面土坑はいずれもカマドの両脇に構築されており、P1は0.87×0.67cm・深さ15cmの楕円形、P2は0.55×0.46cm・深さ6cmの円形である。計7個の柱穴状土坑はいずれも深さ約10～23cmで浅く、明確でない。北西壁の中央に、カマド1基を検出した。カマドは礫を芯材に用いた造りで、袖基部は壁からの作り出しとなっている。袖石及び天井石は凝灰岩製で、袖部に天井石となる扁平礫2個を渡していたと考えられる。天井石は折れてカマド内に落下した状態で確認しており、燃焼面との間に13層を挟んでいることから、使われなくなった後や間を置いて焼失し、崩落したと見られる。燃焼面の大きさは66×48cmに広がる略円形の強変焼土で、



第70図 S102竪穴住居跡(2)

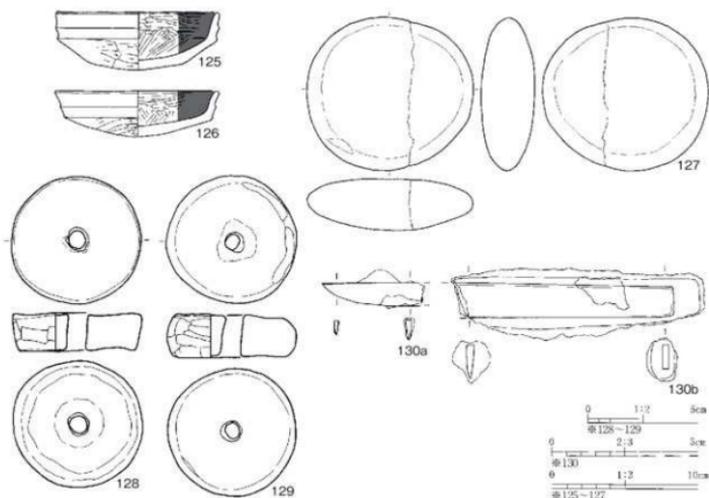
中央はガリガリに硬化している。煙道はこの燃焼面からほぼ水平に延びてL字状に立ち上がって上部に抜ける削り抜き式で、規模は1.2×0.26mのトンネル、煙出し部で75cmの深さがある。この煙道上部は、一部を残して大きく崩落して埋まっている。カマド内から出土した炭1について14C年代測定を行った結果、較正年代で673calAD-711calADを得た(W-1参照)。

床面を中心に125・126土師器坏、127扁平の自然礫、128・129土製紡錘車、130刀子が出土し掲載した。土製紡錘車2点は床面西側のP2周辺から出土、刀子や自然礫は床面南側のP6付近から確認した。

出土した土師器がいずれも非ロクロ成形であることや125・126坏の底部下半で屈曲する形状、年代測定の結果を勘案して7世紀後半に廃絶した竪穴住居と考えられる。

S103竪穴住居跡(第72図、写真図版42・43)

調査区中央南のX=12559・Y=83157付近に位置する。遺構南側に県生涯学習文化財課の試掘トレンチが入っており、これに切られている。規模・形状は、3.4×2.57mでカマドが設置される南北壁がやや短い隅丸長方形を呈する。壁の残存は良好で、北壁40cm、南壁20cm、東壁18cm、西壁38cmの急斜度に立ち上がる形状である。埋土は貼床も含めて7層で構成され、3層にTo-aテフラ二次堆積層が堆積、2層黒褐色土中には橙色バミス(白頭山テフラカ)が微量混入している。7層は黒褐色土主体の貼床ではほぼ平坦に構築され締まっている。床面から、柱穴状土坑9個を確認した。いずれも深さはないが、P6～9の4個が位置から主柱穴と捉えられる。北壁中央やや東寄りにカマド1基を検出した。



第71図 S I 02出土遺物

カマドは礫を素材として構築されており、隙間を粘土質土で埋めていたと考えられる。カマド天井石として使用されたと考えられる花崗閃緑岩の扁平礫は、構築材の粘土とともにカマド東側の床面へ人為的にまとめて置かれていた。そのため、カマド内部は上部が開放した状態で埋没しており、燃焼面直上には7・8層のカマド構築土が堆積している。煙道は比較的良好に残存しており、燃焼面から真横に列り抜かれ、煙出し部でL字に折れ曲がって上部に抜けている。煙道は、煙道上部の基層である14層が崩落した土とカマド構築粘土が互層となる堆積状況を示している。燃焼面は50×36cmの楕円形に広がっており、赤褐色の強変焼土化している。燃焼面直上から見つかったカマド炭1を採取し¹⁴C年代測定を行ったところ、較正年代で661calAD-690calAD(1σ)の年代測定値を得ている(VI-1参照)。

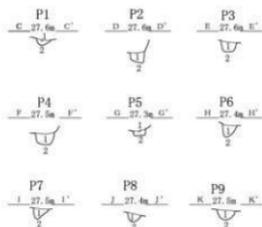
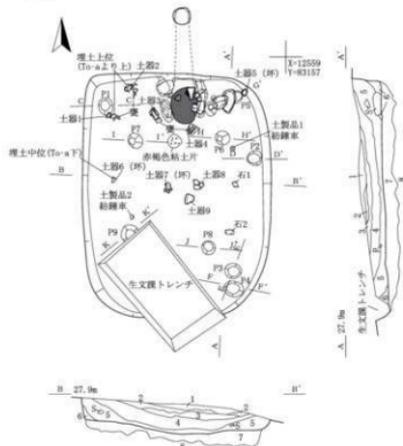
床面を中心に131-137土師器坏、138・139土師器甕、140土師器壺、141土師器甕、142磁石、143・144土製紡錘車が出土し掲載した。

床面からの出土遺物と、埋土中位に確認したToaテフラの堆積状況、カマド出土炭化物の年代測定値から、7世紀中頃～後半に廃絶した竪穴住居と考えられる。

S I 04竪穴住居跡(第74図、写真図版44・45)

調査区西側のX=12552・Y=83168付近に位置する。調査区南東端の斜面の低い位置で、やや傾斜が緩くなる部分で検出した。黒褐色土が厚く堆積しており、遺構の判別が難しく、遺構全体を掘り下げて床面が確認できた時点で住居と認識した。S I 05と重複しており、本遺構が新しい。遺構全体を掘り過ぎているが、断面ベルトから判断すると規模・形状は4.15×4.8mの南北壁がやや長い隅丸長方形を呈すると考えられる。壁は、斜面上部は良好に残存しており、北壁35cm、南壁33cm、西壁45cmで

S103



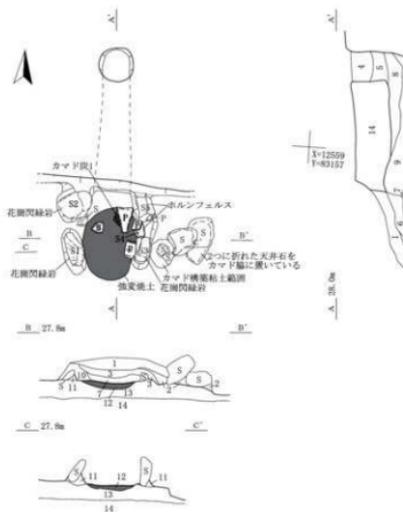
S103 P1~9

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

S103

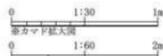
- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/4黄褐色シルト(土壌) 二次堆積層
- 10YR2/5黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/6黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/7黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/8黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/9黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬

S103 カマド

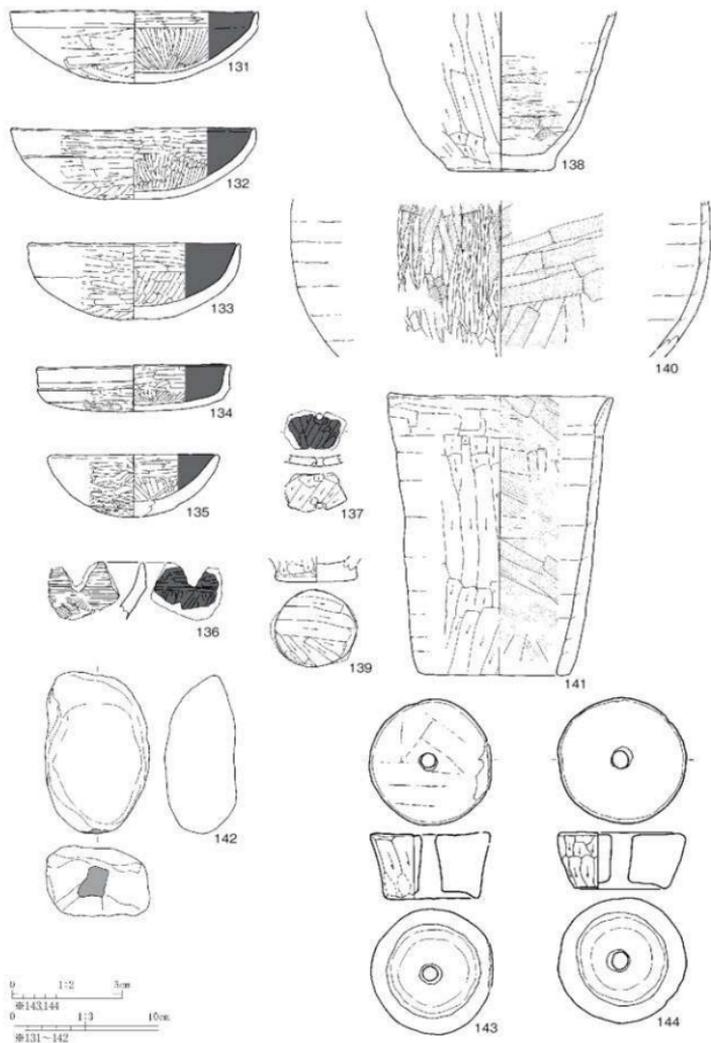


S103 カマド

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/4黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/5黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/6黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/7黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/8黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/9黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/10黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/11黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/12黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/13黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/14黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬



第72図 S103竪穴住居跡



第73図 S103出土遺物

2 遺構



S104

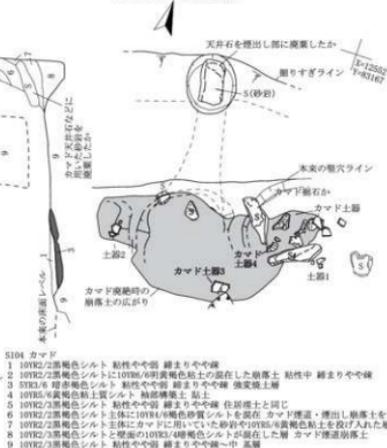
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 炭化植物(φ 5mm以下) 1%散在
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 炭化植物(φ 5mm以下) 2~3%散在
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬 炭化植物(φ 5mm以下) 2~3%散在

- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/2~3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬
- 10YR3/4に赤い黄褐色砂質シルト層に於ける10YR2/2黒褐色シルト
- 粘性やや弱 締まりやや硬 カマド跡土
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬~中 瓦葺
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬~中 高層
- 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや硬~中 高層 他地点で発生副産物混入する

S104カマド

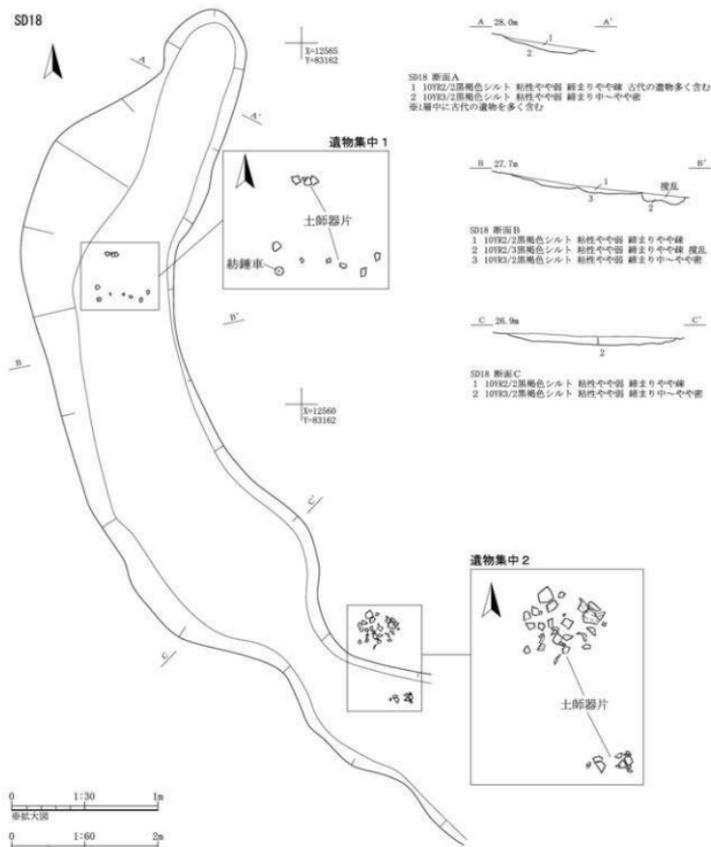


S104カマド崩落状況

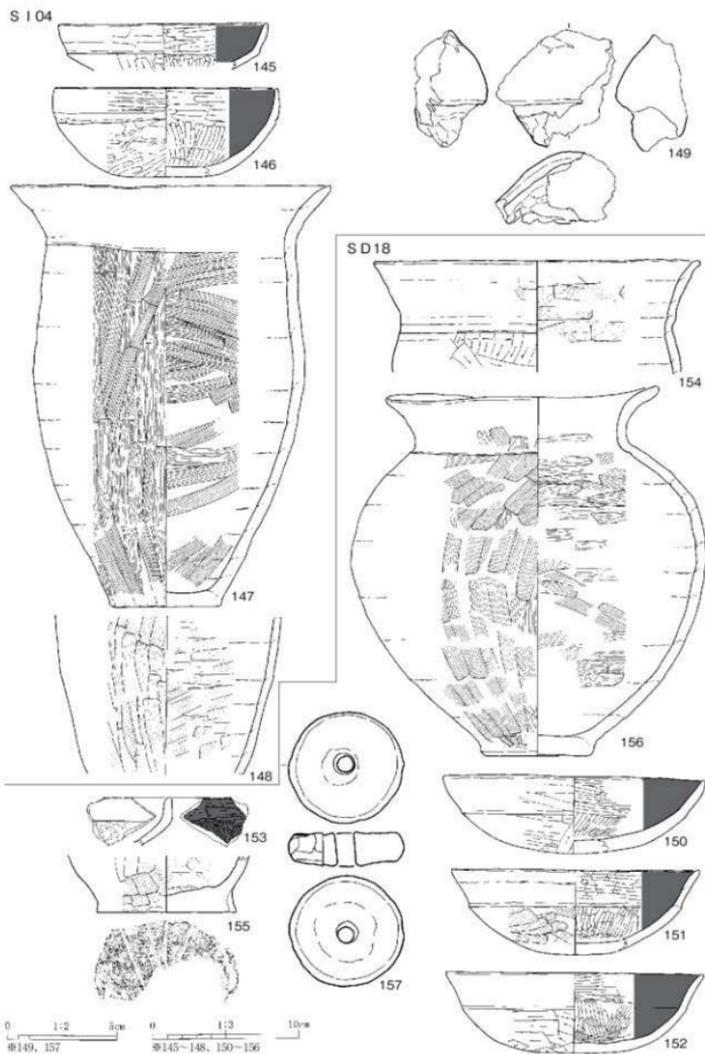


第74図 S104竈穴住居跡

外傾しながら急斜度に立ち上がる。埋土は、貼床も含めて12層で構成されており、埋土上位の5層にTo-aテフラ二次堆積層しており、埋没後しばらくした後に火山灰が堆積したと見られる。7層など埋土中～下位にかけての黒色土中には炭化物粒が含まれる。12層は黒褐色土で構成される貼床だが、埋土よりもやや締まっている程度で床面と捉え難いがカマドとはほぼ同レベルであることから判断した。床面から6個の柱穴状土坑を検出した。いずれも深さはないが、位置からP1・3・4・6の4個が支柱穴の可能性がある。北壁中央にカマド1基を確認した。煙出し部付近まで掘り過ぎてからカマドと認識したため残存部分からの推定に頼るが、刳り抜き式のカマドと考えられる。袖部は黒褐色土の



第75図 SD18清跡



第76図 S 104・SD18出土遺物

壁～床面に黄褐色粘土質シルトを貼り付けて構築しており、検出段階では全体にカマド崩落土が広がる状況であった。カマドの芯材として使用したと見られる扁平礫がカマド東側や煙出し部から見つかっていることから、意図的に破壊されたと考えられる。カマドの天井石と見られる礫をわざわざ煙出し部に廃棄したことを考えると、住居廃絶時に何らかの儀礼的な所作による可能性もある。崩落土の下には燃焼面があり、58×54cmの不整形に強変被熱している。煙道は上部を掘り過ぎたが、燃焼面からはほぼ水平にトンネルを掘り、L字に折れて煙出し部に繋がっている。煙出し部の底は掘り窪められており、雨水の侵入を防ぐ意図が感じられる。

カマド付近から出土した遺物を中心に、145・146土師器杯、147・148土師器甕、149焼粘土塊を掲載した。145・146はいずれも有段内黒杯、147は口縁に最大径を持つ長胴甕で、148も同じく内外面ハケメ調整で仕上げられている。

カマド周辺の出土遺物と、埋土上位に確認したTo-aテフラの堆積状況から、7世紀中頃～後半に廃絶した竈穴住居と考えられる。

②溝 跡

S D18溝跡(第75図、写真図版46)

調査区中央東寄りのX=12560・Y=83162付近に位置する。S I 01・02・03の間に挟まれるようにあり、地形が谷状に窪む場所に立地している。長さは約13m、幅は0.85～2.7mの範囲で確認されている。断面形は皿形で深さ12～13cm、埋土は黒褐色土の単層で自然堆積していると考えられる。

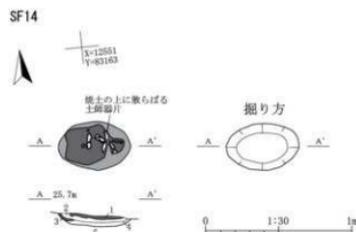
この中で、図に示した2箇所から遺物が集中して出土した。出土した150～153土師器杯、154・155・156土師器甕、157土製紡錘車のうち、156土師器甕が遺物集中2でそれ以外は遺物集中1からの出土である。150～153は有段内黒杯、154・155は非口クロの長胴甕、156は内外面ハケメ調整の有段の球胴甕である。出土状況から、156は現地地だがその他は上部にあるS I 02の床面遺物が雨水で流れ込んだ可能性がある。

遺構の位置と形状から、谷状の地形に雨水が流れ込んで出来た雨裂の可能性があり、自然流路と考えられる。出土遺物から考えると、周辺の住居と同時期に存在していたと考えられ、7世紀中頃～後半に帰属すると見られる。

③焼 土

S F14焼土(第77図、写真図版47)

調査区南東寄りのX=12551・Y=83163付近に位置する。S I 04から東に1m離れた、黒褐色土上面で検出した、50×34cmの楕円形に強変した焼土で、同規模の掘り方を持つ。元々掘り窪めた箇所まで火を焚いていたものに、使用や黒褐色土の流入によって堆積し、検出面に最終の焼土が形成されたと考えられる。焼土上面には、146土師器有段内黒杯の破片や土師器甕片が少量散在しており、S I 04埋



- S F14
- 1 10YR/6赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 強変焼土 上面に土師器破片
 - 2 10YR/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱
 - 3 10YR/6赤褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 形跡の焼土塊のみ
 - 4 10YR/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 灰化層(φ 5mm～1cm) 3%散在
 - 5 10YR/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 灰層

第77図 S F14焼土

土下位出土の破片と接合することから、S I 04と同じ7世紀中頃～後半に帰属すると考えられる。

3 出土遺物

(1) 弥生時代

① 弥生土器(第64図99～106、写真図版55)

8点を掲載した。いずれもS I 05及びその周辺から出土しており、竪穴住居の年代観と同じ弥生時代前期末～中期初頭の青木畑～谷起鳥式期に位置付けられる。99は小形甕形で口端に4単位の山形突起、口縁から胴部にかけて縄文L R斜位を施文する。100は鉢形で口縁は無文だが部分的に縄文L R縦位が施される。頸部に明瞭な区画はないが、窪ませて無文(横位ナデ)とする。胴部は口縁同様に縄文L R縦位を施文する。内面は横位ナデ。101は甕形で、接合しない101a～cの3破片に分かれる。口端は指頭による小波状縁、口縁無文帯(横位ナデ)、胴部は縄文L R斜位を施す。内面は横位ナデ。102は深鉢形または鉢形で、平縁の口端を成形、口縁に縄文L R斜位を施す。内面は斜位ナデ。やや焼成不良。103は深鉢形の胴部破片で、縄文L R縦位を施文する。内面は横位ナデ。104は甕形で平縁、口縁に重層する横走沈線を施す。内面は横位ナデ。105は甕形で、ナデもしくは縄文L R斜位が残る上に重層する横走沈線、口端内面に沈線一条を施す。内面は斜位ハケメ。106は甕形の口縁部破片で、口縁に重層する横走沈線、胴部は縄文L R斜位を施文する。内面は横位ナデ調整。(北田)

② 石器(第64・68・71・73図107～114、120・127・142、写真図版55～58)

11点を掲載した。107～114は弥生時代前期末～中期初頭の青木畑～谷起鳥式期に位置付けられ、120・127・142は7世紀中頃～後半に廃絶した竪穴住居から出土したものである。107は尖頭器もしくは柳葉形の無茎石鏃で基部部を折損している。108は有茎、109は凹基無茎の石鏃。110は刃部がやや斜位となる縦型の石匙。111は右側縁に刃部を有するサイドスクレイパーで、1/2折損。112は両極技法に関連すると考えられる石核で、亜円礫の自然面を残す。113は磨製石斧の刃部で、両刃石斧が刃こぼれた欠片と考えられる。120はS I 01床面から出土した自然礫で、正裏面に被熱痕か黒色範囲を有する。127はS I 02床面から出土した自然礫、142はS I 03から出土した敲石で、端部に敲打痕が残る。(北田)

(2) 古代

① 土師器(第67・71・73・76図116～119、125・126、131～141、145～148、150～156、写真図版56～60)

28点を掲載した。大半が遺構内から出土しており、竪穴住居の年代観と同じ7世紀中頃～後半に位置付けられる。出土遺構ごとに記載する。

< S I 01竪穴住居跡 >

116は非ロクロ成形の内黒環で、丸底から口縁に向かって外反して開く形状である。外面は縦位ケズリの後に、屈曲部より上を横位ナデで仕上げが凹凸があり粗い。内面は黒色処理で、横位ナデ後に屈曲部から上に横位ミガキを施している。117は非ロクロ成形の長胴甕で上半部が傾いた歪みのある器形である。外面は体部を縦位ハケメ調後に、縦方向に粗く雑なミガキを施す。口縁には調整痕がない。底面に木葉痕があり、やや窪んでいる。内面は縦位ハケメ後に縦位ミガキで粗く調整している。体部下半はハケメのみで、上半はミガキが多い。118も非ロクロ成形の長胴甕で、これも上半部が傾いた歪みのある器形である。外面は体部に縦位ハケメを施した後、頸部に段を作り出している。底面はナデ調整。内面は口縁から体部まで横位ハケメが認められる。119も非ロクロ成形の長胴甕だが、上半部を欠く。外面は縦位ハケメ後に粗い縦位ミガキを施す。底面には木葉痕が残っている。内面は弧状の横

位ハケメ調整。

< S I 02 堅穴住居跡 >

125・126はほぼ同形状の非ロクロ成形の内黒環で、丸底の底部から屈曲して直立気味に立ち上がる器形である。外面底部は横位ケズリを残し、屈曲部から口縁までは横位ナデによって2段となるように表現している。内面は黒色処理で、口縁から体部の屈曲までを横位ミガキ、その後これ以下を放射状にミガキを入れて調整している。口径は約11cmでほぼ同じ大きさとなり、調整方法も合わせて斉一性が高い。佐藤敏幸氏によれば、丸底の底部に体部で屈曲して口縁部が立ち上がる坏は、須恵器模倣を遡源として、型式変遷したもので、古墳時代中期に出現し、7世紀前半まで継続する器高の高い坏と、7世紀中葉から8世紀中頃まで継続する器高が低く口縁部が短い坏がある(佐藤2008)。これから、この2点の内黒環は後者に比定できると考えられる。

< S I 03 堅穴住居跡 >

131は非ロクロ成形の内黒環で、丸底の底部から頸部で屈曲して口縁部が短く直立する器形である。外面は体部から底部が横位ケズリ調整、頸部の屈曲に段を作っている。黒色処理された内面の体部から底部は放射状ミガキ、屈曲より上の口縁部は横位ミガキを施している。132は非ロクロ成形の内黒環で、丸底から緩やかに立ち上がる器形である。頸部に浅い段を有し、外面は段より下の体部から底部が横位ケズリ、上の口縁部が横位ミガキで仕上げられている。内面は黒色処理で、体部から底部を放射状にミガキ、口縁部は横位ミガキを施す。133は非ロクロ成形の内黒環で、丸底から緩やかに立ち上がる器形である。器厚がややあり、ずっしりとした質感がある。外面には不明瞭だが段が有り、口縁部から底部まで横位ミガキが施される。内面は黒色処理で、体部から底部は放射状、口縁部は横位ミガキ。134は非ロクロ成形の内黒環で、S I 02の125・126とほぼ同じ時期と見られる丸底の底部から屈曲して直立気味に立ち上がる器形である。外面底部は横位ケズリを残し、屈曲部から口縁までは横位ナデによって2段となるように表現している。内面は黒色処理で、体部から底部を放射状にミガキ後に、口縁部の屈曲を横位ミガキで仕上げている。135は非ロクロ成形の内黒環と考えられるが、内面の黒色処理は消えている。外面底部付近に段が有り、丸底から口縁にかけて緩く立ち上がる器形を呈する。外面は全体にケズリ後、底部以外に縦位ハケメ、その後段が付いた部分より上の口縁部から体部を横位ミガキして仕上げている。内面は黒色処理で、体部から底部にかけて放射状ミガキ後、口縁部を横位ミガキ調整している。136は非ロクロ成形の内黒環の口縁部から体部の破片で、おそらく丸底から緩やかに立ち上がり、段の部分で屈曲して口縁部がやや直立気味になる器形と考えられる。外面は段より下の体部が横位ハケメ、上の口縁部が横位ミガキとなる。内面は黒色処理で、屈曲部より下を縦位ミガキした後、口縁部に横位ミガキを施している。137は内黒環の底部破片で、貫通孔が穿たれている。貫通孔は内面から開けた後、外面からも開けて貫通させる予定がややずれてしまい、もう一度隣に開け直している。外面はケズリ、内面は黒色処理で放射状のミガキが認められる。138は非ロクロ成形の長胴甕で、上半部は失われている。外面は下から上への縦位ミガキ後に底部周辺を横位ナデ、内面は横位ハケメだが二次焼成により焼けはじけて不明瞭である。底部はナデ消されている。139は非ロクロ成形の甕の底部で、やや丸底気味である。残存部分を見ると、外面は上から下へのケズリで、底部もケズリが施されている。140は非ロクロ成形の球胴甕で、体部下半の破片である。外面は縦位ハケメ後に粗い縦位ミガキ、内面は下半が縦位ハケメ、その後上半に横位ハケメが施されている。141は非ロクロ成形の甕で、ほぼ完形である。頸部の段は不明瞭だが、体部が上から下への縦位ケズリ、その後口縁部が横位ナデされることから区画される。内面は横位ハケメ主体で最後に斜位ハケメが入っている。

＜S I 04 堅穴住居跡＞

145は非ロクロ成形の内黒環で、底部を欠いている。外面に段が有り、これから下の体部は縦位ケズリ、上の口縁部はヨコナデされる。内面は黒色処理で、屈曲部より下を縦位ミガキ、その後上の口縁部は横位ミガキが施される。146は非ロクロ成形の内黒環で、丸底から緩やかに立ち上がり、口縁部は内湾気味になる器形である。外面頸部に沈線状の段が有り、これから下の体部から底部にかけて横位ナデ後に粗い斜位ミガキ、上の口縁部は横位ミガキ、内面は黒色処理で、体部から底部にかけて放射状ミガキ後に口縁部は横位ミガキされる。147は非ロクロ成形の長胴甕で、口縁部に最大径を持つ器形である。頸部に段を有しており、これより下の体部は縦位ハケメ、内面も頸部より下は横位ハケメされる。底部はナデ消されている。148は非ロクロ成形の長胴甕の体部破片で、上半部と底部は失われている。外面は縦位ハケメ、内面は横位ハケメ主体で最後に斜位ハケメが入っている。

＜S D 18 溝跡・遺構外＞

150は非ロクロ成形の内黒環で、丸底から外傾しながら緩やかに立ち上がる器形である。頸部に段を有しており、これから下の体部から底部にかけて横位ケズリ、上の口縁部は横位ナデとなる。内面は黒色処理で、体部から底部にかけて放射状ミガキ調整後に口縁部は横位ミガキで仕上げている。151・152は非ロクロ成形の内黒環で、丸底の底部から屈曲部まで緩やかに立ち上がり、ここから口縁部が外反して開くほぼ同じ器形となる。屈曲部は段となり、これから下の体部から底部にかけては151横位ハケメで152が横位ケズリ、上の口縁部はヨコナデとなる。内面は黒色処理で、屈曲部より下は放射状のミガキ、その後口縁部は横位ミガキとなる。153は非ロクロ成形の内黒環で、口縁部から体部にかけての破片である。残存部分から推定すると、丸底から屈曲部まで緩やかに立ち上がり、ここから口縁部が直立する器形である。外面は屈曲部より下の体部が横位ハケメ、上の口縁部はヨコナデされる。また、内面は黒色処理で、体部に縦位ミガキ後、口縁部は横位ミガキされる。154は非ロクロ成形の長胴甕で、下半部は欠いている。おそらく口縁部に最大径を持つ器形で、外面頸部に段を有する。外面は体部に上から下方向の縦位ケズリ、内面は横位ハケメが施される。155は非ロクロ成形の長胴甕底部で、上半部は失われている。底部は外側へ張り出す器形となっており、張り出す部分は後から貼り付けられたと考えられる。外面は縦位ハケメ後に一部縦位ナデ、内面は横位ハケメ後に消しきれなかった輪積み部分に部分的なユビナデが施されている。底部には木葉痕が残る。156は非ロクロ成形の球胴甕で、ほぼ完形である。胴部上半に最大径を持つ器形で、器高は25.8cmである。頸部には段を有しており、外面体部は縦位ハケメで一部頸部にも認められる。内面は横位ハケメで輪積み部分を消している。

②土製品(第67・71・73・76図121・122、128・129、143・144、149、157、写真図版57・59・60)

8点を掲載した。121・122、128・129、143・144、157の計7点が土製紡錘車、157が焼粘土塊である。土製紡錘車のうち、121・122はS I 01、128・129はS I 02、143・144はS I 03、157はS D 16から出土しており、堅穴数に比べて出土量がやや多い特徴がある。121・122は断面滑車形、128・143・144は断面逆台形、129・157は断面円盤状となり、1遺構内にも断面形状が異なる紡錘車が存在する。

③石製品(第67図123、写真図版56)

123有孔石製品1点を掲載した。凝灰岩製で、自然に孔が通った礫を石製品として利用したと考えられる。用途は不明だが、石錘として使用した可能性もある。

④金属製品(第71図130、写真図版57)

S I 02から出土した130刀子1点を掲載した。折損した刃部の先端と基部がやや離れて出土した。

⑤琥珀(写真図版55・56・60)

3点出土し、掲載した。いずれも琥珀原石で、加工痕は認められない。115はS I 05、124はS I 01、158は遺構外出土である。(北田)

第3表 柱穴状ピット計測表

※P100-108-135-140-143-144の計6個は登録抹消

遺構名	座標	取掘(cm)				底面標高(m)	備考	
		上層		下層				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P 1	X=12715 Y=83065	49	38	36	18	32	52.636	S801
P 2	X=12714 Y=83066	60	47	10	9	57	52.606	S801
P 3	X=12719 Y=83066	54	51	38	32	20	52.736	S801
P 4	X=12721 Y=83063	33	31	17	15	31	52.812	S801
P 5	X=12718 Y=83067	31	23	14	12	14	52.852	S801
P 6	X=12719 Y=83067	31	25	18	17	17	52.760	S801
P 7	X=12719 Y=83063	36	23	15	14	20	52.884	S801
P 8	X=12718 Y=83066	33	22	19	16	16	52.792	S801
P 9	X=12717 Y=83062	36	24	18	16	12	52.872	S801
P 10	X=12715 Y=83070	51	49	29	20	37	52.926	S801
P 11	X=12761 Y=83081	40	39	24	20	53	46.812	S802
P 12	X=12760 Y=83081	59	47	43	36	53	46.782	S802
P 13	X=12759 Y=83083	65	59	11	10	61	46.667	S802
P 14	X=12759 Y=83085	79	45	41	22	92	46.427	S802
P 15	X=12758 Y=83087	60	36	50	21	67	46.661	S802
P 16	X=12758 Y=83089	47	33	24	19	73	46.582	S802
P 17	X=12756 Y=83088	61	50	35	25	74	46.607	S802
P 18	X=12754 Y=83088	65	52	54	39	80	46.545	S802
P 19	X=12752 Y=83087	46	39	33	26	66	46.711	S802
P 20	X=12750 Y=83086	51	47	39	30	68	46.709	S802
P 21	X=12751 Y=83085	53	42	32	18	76	46.639	S802
P 22	X=12751 Y=83083	41	37	22	21	72	46.674	S802
P 23	X=12752 Y=83081	46	38	28	17	70	46.709	S802
P 24	X=12752 Y=83079	40	36	19	18	63	46.724	S802
P 25	X=12750 Y=83077	53	41	35	26	61	46.773	S802
P 26	X=12754 Y=83075	57	51	29	24	72	46.747	S802

遺構名	座標	取掘(cm)				底面標高(m)	備考	
		上層		下層				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P 27	X=12753 Y=83073	78	51	33	22	80	46.692	S802
P 28	X=12756 Y=83073	55	46	25	29	73	46.844	S802
P 29	X=12758 Y=83074	78	62	41	32	41	47.029	S802
P 30	X=12760 Y=83074	52	41	41	31	33	46.975	S802
P 31	X=12759 Y=83077	50	43	25	21	58	46.886	S802
P 32	X=12759 Y=83079	50	49	36	31	59	46.787	S802
P 33	X=12758 Y=83083	62	58	42	25	52	46.735	S802
P 34	X=12758 Y=83083	65	56	33	29	53	46.758	S802
P 35	X=12757 Y=83085	58	48	22	18	76	46.577	S802
P 36	X=12756 Y=83085	54	53	34	31	92	46.698	S802
P 37	X=12754 Y=83086	59	51	26	23	75	46.575	S802
P 38	X=12753 Y=83086	72	50	29	21	86	46.520	S802
P 39	X=12753 Y=83083	112	48	28	24	84	46.471	S802
P 40	X=12754 Y=83081	71	49	37	23	73	46.605	S802
P 41	X=12754 Y=83080	46	40	36	24	49	46.791	S802
P 42	X=12755 Y=83078	63	46	30	26	64	46.738	S802
P 43	X=12756 Y=83076	79	46	41	15	76	46.715	S802
P 44	X=12755 Y=83076	70	50	57	16	74	46.751	S802
P 45	X=12746 Y=83080	39	31	30	26	47	46.808	S802
P 46	X=12758 Y=83072	64	36	39	29	26	47.261	S802
P 47	X=12757 Y=83073	92	61	64	43	41	47.178	S802
P 48	X=12760 Y=83073	86	55	58	33	41	47.117	S802
P 49	X=12749 Y=83089	27	25	13	12	50	46.937	S803
P 50	X=12749 Y=83091	26	24	14	12	11	47.000	S803
P 51	X=12748 Y=83093	26	26	16	13	42	47.011	S803
P 52	X=12747 Y=83095	26	25	18	17	45	46.999	S803

3 出土遺物

遺物名	座標	規模(m)				埋没深さ	底面積(m ²)	備考
		上層		下層				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P53	X=12745 Y=83094	28	18	12	9	48	47.073	S803
P54	X=12745 Y=83092	27	26	12	11	42	47.007	S803
P55	X=12746 Y=83090	34	26	18	14	39	47.103	S803
P56	X=12747 Y=83088	32	26	14	13	44	47.134	S803
P57	X=12755 Y=83071	22	20	13	9	-	-	S802
P58	X=12714 Y=83082	52	38	18	16	50	52.056	S805
P59	X=12711 Y=83087	40	39	17	10	17	52.458	S806
P60	X=12709 Y=83089	26	24	18	15	20	52.356	S806
P61	X=12707 Y=83089	30	22	10	10	10	52.574	S806
P62	X=12720 Y=83088	44	30	12	11	27	51.973	S805
P63	X=12710 Y=83083	41	35	16	16	79	52.242	S806
P64	X=12712 Y=83083	26	25	7	6	13	52.843	S806
P65	X=12721 Y=83090	32	32	17	16	41	51.710	S805
P66	X=12721 Y=83085	46	34	19	13	30	52.115	S805
P67	X=12720 Y=83090	38	32	11	11	28	51.907	S805
P68	X=12720 Y=83083	24	23	20	19	34	52.055	S805
P69	X=12712 Y=83091	19	19	9	9	39	51.779	S805
P70	X=12720 Y=83091	30	25	15	12	41	51.787	S805
P71	X=12717 Y=83063	27	24	9	8	43	52.661	S801
P72	X=12719 Y=83066	31	29	15	11	41	52.575	S801
P73	X=12716 Y=83066	43	36	10	9	27	52.746	S801
P74	X=12716 Y=83066	39	37	17	12	26	52.783	S801
P75	X=12718 Y=83066	50	38	22	15	26	52.662	S801
P76	X=12715 Y=83064	12	9	4	3	7	53.036	S801
P77	X=12717 Y=83064	20	16	13	10	9	52.929	S801
P78	X=12720 Y=83065	20	14	7	5	9	52.866	S801
P79	X=12720 Y=83066	36	29	12	9	31	52.580	S801
P80	X=12714 Y=83084	28	24	23	21	30	51.751	S805
P81	X=12721 Y=83064	24	20	7	5	18	52.893	S801
P82	X=12722 Y=83066	24	23	12	11	7	52.893	S801
P83	X=12720 Y=83081	26	34	24	22	52	51.985	S805
P84	X=12720 Y=83068	31	30	15	15	49	52.115	S805
P85	X=12718 Y=83080	26	34	22	21	40	52.250	S805

遺物名	座標	規模(m)				埋没深さ	底面積(m ²)	備考
		上層		下層				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P86	X=12716 Y=83079	33	31	23	21	40	52.338	S805
P87	X=12714 Y=83079	25	24	12	11	40	52.462	S805
P88	X=12713 Y=83080	27	23	9	8	51	52.440	S805
P89	X=12713 Y=83080	27	22	7	6	57	52.354	S805
P90	X=12711 Y=83089	43	33	20	18	50	51.979	S806
P91	X=12727 Y=83066	76	43	14	12	76	52.143	S804
P92	X=12728 Y=83067	31	30	16	14	64	52.219	S804
P93	X=12730 Y=83068	41	40	29	27	58	52.119	S804
P94	X=12732 Y=83068	28	31	26	21	70	52.219	S804
P95	X=12726 Y=83068	34	31	16	15	67	52.208	S804
P96	X=12727 Y=83068	31	28	16	16	80	51.960	S804
P97	X=12729 Y=83069	26	31	23	18	96	51.806	S804
P98	X=12731 Y=83070	34	29	18	17	96	51.774	S804
P99	X=12725 Y=83070	26	23	14	13	55	52.276	S804
P101	X=12730 Y=83071	40	31	22	17	42	52.075	S804
P102	X=12733 Y=83069	26	31	21	20	63	52.089	S804
P103	X=12736 Y=83070	54	41	23	22	66	52.031	S804
P104	X=12737 Y=83071	48	43	29	23	75	51.927	S804
P105	X=12735 Y=83071	41	33	18	17	73	51.848	S807
P106	X=12737 Y=83072	67	47	31	24	87	51.757	S807
P107	X=12739 Y=83072	33	30	21	17	73	51.869	S804
P109	X=12738 Y=83074	34	34	21	20	50	52.066	S804
P110	X=12739 Y=83071	46	39	25	22	82	51.798	S804
P111	X=12714 Y=83091	21	20	16	15	27	52.144	S805
P112	X=12714 Y=83089	38	32	18	13	64	51.788	S806
P113	X=12714 Y=83081	34	32	13	12	70	52.049	S805
P114	X=12712 Y=83082	29	28	21	21	45	52.431	S806
P115	X=12715 Y=83091	20	20	16	15	50	51.900	S805
P116	X=12725 Y=83071	28	27	16	14	63	52.200	S804
P117	X=12726 Y=83072	28	27	18	17	80	51.876	S804
P118	X=12728 Y=83073	27	26	15	14	57	52.009	S804
P119	X=12730 Y=83073	55	40	21	15	80	51.867	S804
P120	X=12731 Y=83074	87	56	41	32	77	51.884	S804

測点名	座標	風傾 (cm)				底面傾斜 (m)	備考	
		上流		下流				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P121	X=12734 Y=83075	66	55	28	27	86	51,806	SD04
P122	X=12735 Y=83076	56	49	30	17	58	51,970	SD04
P123	X=12737 Y=83076	50	48	30	17	69	51,858	SD04
P124	X=12734 Y=83073	30	28	15	12	71	52,030	SD04
P125	X=12726 Y=83073	32	27	17	16	61	52,000	SD04
P126	X=12737 Y=83074	30	26	19	15	28	52,342	SD04
P127	X=12729 Y=83075	44	38	25	24	64	52,029	SD04
P128	X=12731 Y=83075	34	31	22	21	58	52,028	SD04
P129	X=12733 Y=83076	42	38	22	19	78	51,843	SD04
P130	X=12735 Y=83077	70	48	39	32	70	51,898	SD04
P131	X=12737 Y=83077	59	42	30	16	71	51,839	SD04
P132	X=12735 Y=83071	48	43	25	22	81	51,853	SD04
P133	X=12735 Y=83070	44	29	38	21	42	52,223	SD04
P134	X=12735 Y=83073	34	27	30	17	12	52,013	SD04
P136	X=12735 Y=83073	34	32	20	20	7	52,098	SD04
P137	X=12706 Y=83083	36	31	18	14	56	51,894	SD06
P138	X=12735 Y=83072	87	61	26	20	92	51,351	SD07
P139	X=12735 Y=83074	36	30	17	16	88	51,302	SD07
P141	X=12734 Y=83073	48	44	17	16	78	51,448	SD07
P142	X=12734 Y=83076	74	46	16	11	89	51,259	SD07
P145	X=12722 Y=83080	21	20	12	9	38	52,200	SD05
P146	X=12722 Y=83081	25	25	17	14	32	52,260	SD05
P147	X=12740 Y=83089	51	50	21	20	65	51,615	SD07
P148	X=12735 Y=83075	51	51	12	10	86	51,286	SD07
P149	X=12732 Y=83078	57	52	17	17	79	51,376	SD07
P150	X=12733 Y=83078	56	48	20	16	98	51,183	SD07
P151	X=12732 Y=83080	65	56	23	18	94	51,177	SD07
P152	X=12742 Y=83072	30	29	12	10	69	51,548	SD07
P153	X=12741 Y=83074	75	65	15	14	107	51,144	SD07
P154	X=12731 Y=83082	56	43	17	15	86	51,296	SD07
P155	X=12731 Y=83082	86	63	12	9	112	51,280	SD07
P156	X=12731 Y=83080	40	33	10	8	81	51,315	SD07
P157	X=12737 Y=83086	33	32	24	20	45	51,109	SD07

測点名	座標	風傾 (cm)				底面傾斜 (m)	備考	
		上流		下流				
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P158	X=12738 Y=83082	80	66	16	15	101	51,086	SD07
P159	X=12740 Y=83079	69	64	42	41	32	51,291	SD07
P160	X=12741 Y=83080	60	54	16	14	75	51,348	SD07
P161	X=12739 Y=83080	152	70	18	18	99	51,148	SD07
P162	X=12739 Y=83083	59	56	17	14	68	53,329	SD07
P163	X=12736 Y=83086	19	18	8	8	29	51,178	SD07
P164	X=12736 Y=83085	32	25	10	8	29	51,444	SD07
P165	X=12730 Y=83083	38	27	28	15	57	51,343	SD07
P166	X=12740 Y=83074	24	23	12	12	35	51,819	SD07
P167	X=12744 Y=83074	23	23	14	12	31	51,802	SD07
P168	X=12746 Y=83074	23	20	6	5	52	51,528	SD07
P169	X=12730 Y=83083	23	18	14	12	53	51,340	P165+6
P170	X=12741 Y=83072	27	27	19	18	19	52,402	P130-2
P171	X=12708 Y=83083	68	65	19	18	85	52,188	SD06
P172	X=12730 Y=83080	56	47	19	18	38	51,868	SD05
P173	X=12718 Y=83091	51	47	24	24	48	51,844	SD05

第4表 H25・26陶磁器観察表(1~44)

観測No.	国	写別	出土地点	層次	破片数	着数 片数	種類	器種	残存位置	計測値(mm)		
										口径	底径	器高
1	53	48	曲輪1-SB01-04土器1下部平輪 曲輪1-SB01西側土器1下部 曲輪1-SB01土器1須知曲輪部	褐色土 褐色土 褐色土	1 1 1	3	陶器	陶	口縁-体 下半	<11.6>	-	(5.0)
2	53	48	曲輪1-SB04-P117付着 曲輪1-SB01 曲輪1-SB01西側 曲輪1-SB01西側 曲輪1-SB01西側 曲輪1-SB01-P1掘り方 曲輪1-SB01	褐色土 褐色土 (土器南側土中) 1層上(ハルト) 淡褐色土 淡褐色土 淡褐色土 遺物集中	1 1 1 1 1 1 1	9	陶器	陶	口縁-体 下半	11.4	-	(5.2)
3	53	48	曲輪1-SB04 曲輪1-SB01	遺物集中 遺物集中	5 10 21	42	磁器	陶反碗	口縁部- 底部	14.6	5.9	6.7
4	53	48	曲輪1-SB04土器1下部 曲輪1-SB01-P1 曲輪1-SB04	埋土 遺物集中	1 1 1	7	磁器	陶反碗	口縁部- 体部	16.0	(7.8)	7.9
5	53	49	曲輪1西側前面 曲輪1-SB01東半	上部層薄土中 1層上(ハルト)	1 1	2	磁器	無反碗	口縁-体 部	-	-	(3.4)
6	53	49	曲輪1-SB04東半 曲輪1-東端	褐色シルト 遺物直上	1 1	2	磁器	無反碗	底部	-	(5.8)	(4.1)
7	53	48	曲輪1-SB04付着 曲輪1-SB04付着	褐色シルト 遺物直上	1 1 13	16	磁器	陶香炉	口縁部- 底部	(7.5)	(3.6)	(6.2)
8	53	48	曲輪1-SB04付着	褐色シルト	17	17	磁器	水注	口縁部- 底部	4.1	3.8	6.9
9	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	11	11	磁器	小皿	口縁部- 底部	(9.9)	(3.2)	(2.9)
10	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	9	9	磁器	小皿	口縁部- 底部	9.5	3.2	2.6
11	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	6	6	磁器	小皿	口縁部- 底部	9.2	3.0	2.3
12	53	48	曲輪1-SB01 曲輪1東側前面	遺物集中 検出面	1 1	2	磁器	小皿	口縁-底 部	<10.0>	3.8	2.5
13	53	48	曲輪1-SB01 曲輪1-SB01-P1 曲輪1-SB01-04 曲輪1-SB01	褐色土 埋土 褐色土 遺物集中	1 1 1 1 1	6	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.8>	-	(2.1)
14	53	48	曲輪1-SB01-P1 曲輪1-SB01 曲輪1-SB01-P1 曲輪1-SB01-P1	埋土 遺物集中 埋土中(淡褐色或入土)	2 1 1 1	5	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.8>	-	(1.7)
15	53	48	曲輪1-SB01-04 曲輪1-SB04付着 曲輪1-SB01	褐色土 淡褐色細砂 遺物集中	1 1 1	3	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.4>	-	(1.5)
16	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	1	1	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.6>	-	(1.8)
17	53	48	曲輪1-SB01-04 曲輪1-SB04付着 曲輪1-SB04付着	表層 淡褐色細砂 検出面	1 1 1	3	磁器	小皿	口縁-体 下半	<10.4>	-	(1.9)
18	53	48	曲輪1-SB01-04 曲輪1-SB04付着	淡褐色細砂 淡褐色細砂	1 1	2	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.2>	-	(2.0)
19	53	48	曲輪1-SB04付着	淡褐色細砂	1	1	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.4>	-	(2.0)
20	53	48	曲輪1-SB06付着 曲輪1-SB04付着 曲輪1-SK24	褐色土 遺物直上 2層中埋土上(黒褐色或黒土)	1 1 1	3	磁器	小皿	口縁	<9.8>	-	(1.0)
21	53	48	曲輪1-P138	埋土上(或入土)	1	1	磁器	小皿	口縁-体 部	<11.8>	-	(1.7)
22	53	48	曲輪1-SB01 曲輪1-SB04東半 曲輪1-SB01	遺物集中 検出面 遺物直上	1 2 1	5	磁器	小皿	口縁-体 下半	<9.8>	-	(1.9)
23	53	48	曲輪1-SK24	2層中埋土上(黒褐色或黒土)	1	1	磁器	小皿	口縁-体 部	<9.8>	-	(1.3)
24	53	48	曲輪1-SB04付着 曲輪1-SB04付着	淡褐色細砂 淡褐色細砂	1 1	2	磁器	小皿	口縁-体 部	<10.1>	-	(1.1)
25	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	2	2	磁器	小皿	口縁-体 部	<10.6>	-	(1.4)
26	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	1	1	磁器	小皿	口縁-体 下半	-	-	(2.3)
27	53	48	曲輪1-SB01-04	褐色土	1	1	磁器	小皿	口縁-体 下半	-	-	(1.7)
28	53	48	曲輪1-SB01-04 曲輪1-SB01	淡褐色細砂 遺物集中	1 1	2	磁器	小皿	体下半- 底部	-	<3.9>	(1.3)
29	53	48	曲輪1-SB01	遺物集中	1	1	磁器	小皿	体下半- 底部	-	<3.4>	(1.0)
30	53	48	曲輪1-SB04付着	淡褐色細砂	1	1	磁器	小皿	体下半- 底部	-	<3.6>	(1.3)
31	53	48	曲輪1-SB01-04	褐色土	1	1	磁器	小皿	体下半- 底部	-	<3.8>	(1.1)

外観調整、施文など	内観調整、施文など	軸巻	構成	年代	生産地	備考	登録No.
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	天目	真好	15c 後半	中国	微塵黒系	18
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	天目	真好	15c 後半	中国	微塵黒系	17-47
回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 見込みみ印刷文	青磁	真好	15c 後半	中国	微塵黒系	9
回転ナデ 霜化した割花文	回転ナデ	青磁	硬質不良	15c 後半	中国	微塵黒系	10
回転ナデ 霜化した割花文	回転ナデ	青磁	真好	14c	中国	微塵黒系	48
回転ヘラケズリ	回転ナデ 見込みみ印刷文	青磁	真好	15c 前半	中国	微塵黒系	11
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	青磁	真好	15c 後半	中国	微塵黒系、成形後三足を磨り付け	12
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	青磁	真好	15c 後半	中国	微塵黒系、成形後肥子、注口を磨り付け	13
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	堅細真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	14
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	15
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	16
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ、輪調基	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	51
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	52
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	53
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	54
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	55
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	56
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	57
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	58
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	59
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	60
上段回転ナデ 下段回転ヘラケズリ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	61
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	63
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	64
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	73
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	66
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	68
回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	69
回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	70
回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	71
回転ヘラケズリ 底面露筋	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	福建晉江流域系	72

外部調査・論文など	内部調査・論文など	種類	状態	年代	生産地	備考	登録No
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	新田のみ陶磁、福徳寺陶江成城窯系	62
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	新田のみ陶磁、福徳寺陶江成城窯系	65
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	新田のみ陶磁、福徳寺陶江成城窯系	67
回転ナデ	回転ナデ	白磁	真好	15c 後半	中国	新田のみ陶磁、福徳寺陶江成城窯系	74
ナデ、岩根染髹表現 底部回転赤切痕	回転ナデ	鉄	真好	15c 後半	吉瀬戸	備前備年後遺品か古六、水鳥形、小皿を折り曲げて成形	19
回転ナデ、三足取り付け、下段露胎	回転ナデ、下段露胎	灰	真好	15c 後半	吉瀬戸	備前備年後遺品(15c 第2四半期)、成形後三足を取り付け	20
回転ナデ 底部回転赤切痕	回転ナデ	灰	模範真好	15c 後半	吉瀬戸	備前備年後遺品 - 古吉川5c 第2四半期 - 15c 中期	21-22
上位回転ナデ 底部ナデ	上位回転ナデ 底部ナデ	-	真好	15c 後半	在池か	通気孔あり	23
回転ナデ、底部附設露胎	回転ナデ	陶	真好	15c 後半	吉瀬戸	吉瀬戸後期(14c 末 - 15c 初)、根付惣茶碗	24
上位回転ナデ 下段タタキ	上位回転ナデ 下段タタキ	自然	模範真好	15c 前半 もしくは 15c 後半	大畑(山腰窯)	13c 前半まで種類、年代にズレあり、伝説品か。	25
白磁玉縁、上位回転ナデ 下段ナデ	上位回転ナデ 下段ユビオサエ・ナデ	無	真好	15c 前半	福前		26
白磁面取り、ヘラケズリ		無し	真好	15c 後半	在池か	手切り火鉢	49
白磁面取り、ヘラケズリ		無し	真好	15c 後半	在池か	手切り火鉢	50

第5表 H25-26石製品製表(45~49)

材料No.	図	写真	商品名	用途	形状	種別	色	寸法	重量	現存部位	遺跡	石質	産地	現存部位	長さ	幅	厚さ	年代	説明
45	57	52	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	2	2	3	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約1/2	11.33	7.25	0.23	1605	15c後半	全周に黒い帯状の痕跡あり
46	57	52	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	3	3	3	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約1/2	11.33	7.25	0.23	1383	15c後半	黒質を帯び、黒帯厚約1.41~4.2と厚さ異なる
47	57	52	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	6	6	6	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約1/2	11.33	7.25	0.23	3077	15c後半	片口付、内面は薄小片で覆われている(裏面有り)
48a	58	53	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	25	25	25	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約2/3	<107> <185>	123	3075	15c後半	98とセットの石、磨り跡が多少目立つ(裏面有り)	
48b	58	53	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	9	9	9	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約1/4	<413> <418>	<208>	6259	15c後半	97とセットの石、磨り跡が多少目立つ	
48c	59	53	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	4	4	4	11.33	7.25	0.23	不明	上部のみ	<108> <139>	652	15c後半	100とセットの石		
49a	59	53	産物1/SB04-P1870付 産物2/SB04-P1870付 産物3/SB04-P1870付 産物4/SB04-P1870付	産物2の両面 産物3の両面 産物4の両面	板石	24	24	24	11.33	7.25	0.23	不明	全体の約1/4	<308> <368>	59	2671	15c後半	98とセットの石、磨り跡が多少目立つ	

第6表 H25-26金属製品製表(50~55)

材料No.	図	写真	商品名	用途	形状	種別	色	寸法	重量	計測箇所(mm)		材質	年代	説明
										長さ(内径)	厚さ			
50	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	1	1	1	1.1	1.1	1.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立
51	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	2	2	2	2.2	2.2	2.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立
52	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	3	3	3	3.2	3.2	3.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立
53	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	4	4	4	4.2	4.2	4.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立
54	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	5	5	5	5.2	5.2	5.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立
55	60	54	産物1/SB04-P1870付	産物1の両面	円筒	6	6	6	6.2	6.2	6.2	青銅	15c後半	円筒、磨金、磨り跡目立

第7表 H25・26銭貨観察表(56~89)

種類No	国	写真	出土地点	層位	種類	方孔径(mm)			重量(g)	材質	初録年	備考	登録No
						外径	内径	厚さ					
56	60	54	曲輪1(第1期)・S807 北西側	盛上ノ硬化面(黄粉)直上	無華元寶	2.42	0.69	0.14	2.2	青銅	1068年	北宋、真書	91
57	60	54	曲輪1(第1期)・S807 北西側	盛上ノ硬化面(黄粉)直上	-	2.41	0.70	0.13	2.4	青銅	-	同説不可	92
58	60	54	曲輪1(第1期)・S807 中央部寄り	整備層ノ硬化面直上褐色土	〇〇通寶	-	-	0.13	0.6	青銅	-	同説不可、遺物がイント銭1	93
59	60	54	曲輪1(第1期)・S807 中央	整備層ノ硬化面直上黒褐色土	-	-	-	0.11	0.4	青銅	-	同説	94
60	60	54	曲輪1(第1期)・S807 (P138)	規土上段(流入土)	-	2.46	0.71	0.10	1.0	青銅	-	同説	96
61	60	54	曲輪1(第2期)・S806 北西側、S825	底面	〇〇通寶	2.48	0.73	0.12	1.9	青銅	-	同説不可	76
62	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	開元通寶	2.45	0.70	0.12	20.0	青銅	621年	唐、真書 77~87の11枚が同着	77
63	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同着しており同説不可	78
64	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同着しており同説不可	79
65	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同着しており同説不可	80
66	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	81
67	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	82
68	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	83
69	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	84
70	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	85
71	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	86
72	60	54	日曲輪文(第1期)・S839	底面直上	嘉祐通寶	2.45	0.72	0.14	3.0	青銅	1056年	北宋、真書	87
73	60	54	曲輪1・北東側	灰褐色シルト	洪武通寶	2.10	0.50	0.15	1.8	青銅	1368年	明、篆書、背面に「一貫」	32
74	60	54	曲輪1・S806付近	遺構面直上	淳化元寶	2.41	0.58	0.11	2.1	青銅	990年	北宋、行書	89
75	60	54	曲輪1・S806付近	遺構面直上	〇〇元寶	2.35	0.65	0.11	2.5	青銅	-	同説不可	90
76	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	崇寧元寶	2.45	0.70	0.15	3.4	青銅	1101年	北宋、篆書、33~39の13枚が同着していた	33
77	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	永寧通寶	2.45	0.55	0.15	3.5	青銅	1408年	明	34
78	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	阜寧通寶	2.45	0.60	0.15	3.6	青銅	1039年	北宋、篆書	35
79	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	至道元寶	2.45	0.60	0.40	4.0	青銅	965年	北宋、真書、301~cの3枚が同着(2枚は同銭)	36a
80	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	36b
81	60	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同説	36c
82	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	2.15	0.60	0.40	2.5	青銅	-	同銭、35a~cの3枚が同着	37a
83	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同銭	37b
84	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同銭	37c
85	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	1.90	0.60	0.60	1.6	青銅	-	同銭、36a~cの3枚が同着	38a
86	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同銭	38b
87	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	-	-	-	-	青銅	-	同銭	38c
88	-	54	曲輪2・S802西側	褐色土	-	1.40	0.55	0.15	0.8	青銅	-	同銭	39
89	60	54	北斜面上部曲輪1-2 北側	検出面(褐色土)	寛永通寶	2.00	0.60	0.10	1.7	青銅	1668年	新寛永	40

第8表 H25-26貝類・動物遺存体観察表(90)

種別No.	図	写尺	出土地点	層位	種類	数量	年代	備考	図録No.
90	51	54	鳥巻1(北20)	S23	貝殻下位部	648	15世紀末		105

第9表 H25-26縄文・弥生土器観察表(91~96)

種別No.	図	写尺	出土地点	層位	種類	形状	保存位置	計測箇所(cm)		外周溝幅・縄文文之	内周溝幅・縄文文之	年代	備考	図録No.
								口径	底径					
91	52	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	2	20	縄文土部	2/3	12.20	5.20	0.50	弥生時代前期	縄文時代前期	1
92	53	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	2	2	縄文土部	口縁	-	0.50	-	弥生時代前期	縄文時代前期	6-8
93	52	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	1	3	弥生土部	口縁	-	0.50	-	弥生時代前期	弥生時代前期	2
94	52	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	2	2	弥生土部	胴	-	0.60	-	弥生時代前期	弥生時代前期	3-5
95	52	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	1	1	弥生土部	口縁	-	0.50	-	弥生時代前期	弥生時代前期	7
96	52	55	北坪田T29(北20)	黒色土(Te-Cu上)	1	1	弥生土部	口縁	-	0.50	-	弥生時代前期	弥生時代前期	4

() : 共存器

第10表 H25-26石器観察表(97-98)

種別No.	図	写尺	出土地点	層位	種類	形状	産地	保存位置	計測箇所(cm)		自然面	年代	備考	図録No.	
									長さ	幅					
97	52	54	鳥巻1(北20)	黒色土	石錐	貝殻	北上山塊	穿孔	2.9	1.5	0.4	0.7	無し	弥生時代中	43
98	52	54	鳥巻1(北20)	黒色土	石斧	北上山塊	穿孔	4.4	4.0	1.3	0.2	0.3	有り	縄文時代中	46

第11表 H29弥生土器観察表(99~106)

種別No.	図	写尺	出土地点	層位	編年分類	種類	形状	保存位置	計測箇所(cm)		外周溝幅・縄文文之	内周溝幅・縄文文之	年代	備考	図録No.
									口径	底径					
99	64	55	S105	黒色土上部	3	8	弥生土部	口縁-胴	<0.2>	-	(口縁)	口縁-胴	弥生土部	弥生時代前期	29
100	64	55	S105	黒色土上部	3	8	弥生土部	口縁-胴	<0.2>	-	(口縁)	口縁-胴	弥生土部	弥生時代前期	29
101	64	55	S105	黒色土上部	2	2	弥生土部	口縁-胴	-	(口縁)	-	口縁-胴	弥生土部	弥生時代前期	30
102	64	55	S105	黒色土上部	3	3	弥生土部	口縁-胴	-	(口縁)	-	口縁-胴	弥生土部	弥生時代前期	31
103	64	55	S105	黒色土上部	10	14	弥生土部	口縁-胴	-	(口縁)	-	口縁-胴	弥生土部	弥生時代前期	32
104	64	55	S105	黒色土上部	1	1	弥生土部	口縁	-	(口縁)	-	口縁	弥生土部	弥生時代前期	33

() : 共存器, < > : 土器文様

国 号	所在地	出土地区	墓位	随葬品	種類	形状	内容	直径(mm)		内容	年代	備考
								口径	底径			
105	64	55	SH05 南水区南原町(5号丁)	黒土・黒色土	1	須生土器	裏	・	φ17	横文上段縁起	弥生前期末～中期初期 青木池～谷地川式	33
106	64	55	SH06 南水区南原町	黒褐色土(下の黒)	1	須生土器	裏	・	φ17	平縁、口縁に垂子状の縁起	弥生前期末～中期初期 青木池～谷地川式	34
107	64	55	SH07 南水区南原町(5号丁)	黒土・赤土	1	須生土器	裏	・	φ10	平縁、ナマリしは横文上段縁起が中心 ナマリする所は赤土	弥生前期末～中期初期 青木池～谷地川式	35
108	64	55	SH08 南水区南原町(5号丁)	黒土・黒褐色土	1	須生土器	裏	・	φ10	平縁外、口縁に垂子状の縁起、赤土 は横文上段縁起	弥生前期末～中期初期 青木池～谷地川式	36

第12表 H29石器類発表(107~114,120,127,142)

国 号	所在地	出土地区	墓位	種類	石質	産地	形状	内容	用途	数量	重量(g)	特徴	年代	備考			
															長さ	幅	厚さ
107	64	55	SH07 南水区南原町(5号丁)	黒褐色土	頁岩	北上山塊	短部・基部 折損	変形	無し	3.3	1.1	2.5	1.0	弥生前期末～中期初期 青木池～谷地川式	中年代	43	
108	64	55	SH08 南水区南原町	黒褐色土	頁岩	北上山塊	変形	変形	無し	4.1	1.5	0.8	2.8	有表段縁	中年代	46	
109	64	55	SH09 南水区南原町	黒褐色土	頁岩	北上山塊	変形	変形	無し	3.8	2.1	0.5	2.0	両面無表の段縁	中年代	47	
110	64	55	SH10 南水区南原町	黒土・中～下段	頁岩(砂)	北上山塊	変形	変形	有り	3.8	3.1	0.7	6.0	縦直石段	片方～中年代	48	
111	64	55	SH11 南水区南原町	黒褐色土(上段)	頁岩	北上山塊	変形	変形	無し	φ17	2.4	0.5	3.9	行割縁に片部を持つ高部	中年代	49	
112	64	55	SH12 南水区南原町	黒褐色土(上段)	頁岩	北上山塊	変形	変形	有り	φ11	6.0	2.5	38.5	両側縁に段縁する行割縁	中年代	50	
113	64	55	SH13 南水区南原町	黒褐色土の上段(片)	頁岩	北上山塊	変形	変形	無し	φ10	φ17	0.38	4.9	両方段縁の片部で片こぼれ した片方	中年代	51	
114	64	55	SH14 南水区南原町	黒褐色土(上段)	頁岩	北上山塊	変形	変形	有り	φ5.0	φ17.0	0.10	220.4	行割縁として段縁片部が有り 自然磨で仕込まれたもの	中年代(弥生中世) 代田式	55	
120	68	56	SH120 南水区南原町	黒褐色土	頁岩	北上山塊	変形	変形	有り	14.2	12.5	3.2	136.4	自然磨で仕込まれたもの 土、正真面に段縁片部が 残存有り	7c後半	黒色陶器有り	54
127	71	57	SH127 南水区南原町	黒褐色土	頁岩	北上山塊	変形	変形	有り	10.6	11.4	3.6	44.4	自然磨、自然磨片部が 残存有り	7c後半	中年代(弥生中世)	52
142	73	56	SH142 南水区南原町	黒褐色土	頁岩	北上山塊	変形	変形	有り	11.3	7.1	4.8	66.2	断面に段縁片部が 残存有り	7c後半	中年代(弥生中世)	53

(上) 現行原

第13表 H29土師高野跡表(116~119,125,126,131~141,145~148,150~156)

植込No.	区	宮内	出土地点	層位	層別	埋没 状態	形状	検出位置	口径 直径	高さ	外周調整・破文など	内周調整・破文など	年代	調査 時期
116	67	56	S81 溝北東東側 S81 P1	床面 埋没(土上の黒)	3	5	土師鈔 杯	碗状部	180	6.7	模造フズリ貝、口縁一部に土師紋が土師色に染み、腹径上部に口縁1/4ほど彫り込んで模造フズリ貝		7c後半 赤口方口	1
117	67	56	S81 P8	床面	2	2	土師鈔 長脚盤	碗状部	177	8.2	体部は模造ハナフナミのみに模造フズリ貝、体下部はハナフナミのみ、体上部はハナフナミのみに模造フズリ貝が多い		7c後半 赤口方口	2
118	67	56	S81	床面	49	49	土師鈔 長脚盤	碗状部	200	29.7	8.3	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	3
119	67	56	S81 S81B 溝北東東側	溝底 埋没(土上の黒) 2517~4	1	5	土師鈔 長脚盤	体下部一底面	150	7.8	6.0	模造ハナフナミ	溝口方 口、腹面 上迄のみ	4
125	71	57	S81 QNW S81 QNW S81 QNE S82	Toaより下層埋没土 Toaより下層埋没土上層下層	1	3	土師鈔 杯	口縁一底 部	<100>	4.0	口縁二面表裏、体下部一底面は模造フズリ、口縁が直立する		7c後半 赤口方口	5
126	71	57	S81 QNW S81 QNW S81 QNE S82	Toaより下層埋没土 Toaより下層埋没土 Toaより下層埋没土上層下層	1	7	土師鈔 杯	口縁一底 部	<110>	3.2	口縁二面表裏、体下部一底面は模造フズリ、口縁が直立する		7c後半 赤口方口	6
131	73	57	S81 QNW S81 S86 S81 S88 S81 QNW	Toaより下層埋没土上層下層 埋没 埋没 Toaより下層埋没土上層下層	2	1	土師鈔 杯	碗状部	170	6.6	5.0	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	7
132	73	57	S81 S89 S81 Wへルト S81 QNW	埋没(土上の黒) Toaより下層埋没土上層下層	1	3	土師鈔 杯	碗状部	<168>	6.6	6.6	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	8
133	73	58	S81 S87 S81 Wへルト	埋没(土上の黒) Toaより下層埋没土上層下層	1	13	土師鈔 杯	体上部一底面	<143>	6.6	5.3	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	9
134	73	58	S81 QNW S81 QNW S81 QNW S81 QNW	Toaより下層埋没土上層下層 Toaより下層埋没土上層下層 Toaより下層埋没土上層下層	1	2	土師鈔 杯	口縁一底 部	<133>	6.6	6.6	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	10
135	73	58	S81 S85 S81 Xへルト	埋没 埋没(土上の黒)	1	2	土師鈔 杯	口縁一底 部	(118)	<144>	<144>	模造ハナフナミ後に黒色土を含む	7c後半 赤口方口	11

図号No.	例	内容	出土地点	層位	出土状況	種類	形状	測定位置	測定値(mm)	注記	外部形状・断面文之	内部形状・断面文之	年代	備考	
136	73	56	S103 Q1W S103 Q1W カマド内底	Toaより下層黒褐色土 Toaより下層黒褐色土埋土下位	1 1	土器部 坏	口縁-体 部	環	-	<110>	有段口縁が僅やかに成立する。体一断面は楕円ハタメに口縁部は直しぎす。	褐色肌。断面は、断面位と身中位(口縁部)位と若干。	7c後半 身中口方口	12	
137	73	58	S103 Wベルト	Toaより下層黒褐色土埋土上位	1	土器部 坏	底面	環	-	-	水取の取柄に直交し、貫通孔を有する。筒孔は短縮のみ。貫通孔は筒孔から出ている(→)。底面はズレ。	黒色肌。直しぎす。	7c後半 身中口方口	13	
138	73	58	S103 Q1W カマド内底 S103 土壁 S103 Q1W	Toaより下層黒褐色土埋土下位 床面 Toaより下層黒褐色土埋土下位	2 15 19	土器部 片割 土器部 片割	体下手- 底面	長脚型 底面	-	7.5	<111>	体底口下から上への腹位がズリ、腹部小傾位ハタメが、唯けはじけで不明。	7c後半 身中口方口	14	
139	73	58	S103 ベルト	Toaより下層黒褐色土埋土下位	1	土器部 片割	体下手- 底面	長脚型	-	3.6	<17>	体部は上から下への腹位がズリ、腹部小傾位がズレ。	黒褐色土	7c後半 身中口方口	15
140	73	58	S103 Q1W S103 Q1W S103 Q1W S103 土壁 S103 Wベルト S103 Q1W S103 土壁 S103 Q1W	Toaより下層黒褐色土 Toaより下層黒褐色土埋土下位 Toaより下層黒褐色土埋土下位 床面 Toaより下層黒褐色土埋土下位 Toaより下層黒褐色土埋土下位	3 6 1 6 3 4	土器部 片割 土器部 片割 土器部 片割	体底	長脚型 体底	-	<109>	腹位ハタメ側に短い傾位と若干。	下側は楕円ハタメ、その腹上は楕円ハタメ。	7c後半 身中口方口	16	
141	73	58	S103 土壁 S103 土壁 S103 Q1W S103 カマド内土壁1	S103 土壁 床面 Toaより下層黒褐色土埋土下位 Toaより下層黒褐色土埋土下位 壁面以上	12 1 3	土器部 片割	底面	底面	15.4	<153>	口縁-体部は上から下への腹位がズリ、その腹口縁のみは楕円ハタメ。	楕円ハタメから傾位ハタメ。	7c後半 身中口方口	17	
145	76	59	S104 カマド内底	埋土上-中位	2	土器部 坏	口縁-体 部	環	<144>	<120>	有段口縁が僅やかに成立する。体一断面は楕円ハタメに口縁部は直しぎす。	体部断面と若干後に口縁部は直しぎす。	7c後半 身中口方口	18	
146	76	59	S104 遺物貯庫中 S104 土壁 S104 カマド内底	埋土中-下位 埋土上(中位) 埋土上位	8 1 15	土器部 片割 土器部 片割	口縁-底 部	底面	-	底面	<62>	有段口縁が僅やかに内湾する。体一断面は楕円ハタメに短い傾位と若干。	褐色肌。体一断面は長脚状と若干。その腹口縁のみは楕円ハタメ。	7c後半 身中口方口	19
147	76	59	S104 土壁 S104 カマド内底(土壁1) S104 カマド内底2 S104 カマド内底3	280口-4 埋土中-下位 埋土中 埋土上 埋土上(中位) 埋土上-中位 床面 床面	3 12 9 1 42 3 10	土器部 片割 土器部 片割 土器部 片割 土器部 片割	体底	長脚型 体底	22.1	7.6	20.3	断面は有段口縁部は上から下への腹位ハタメ。腹面はズレ。	7c後半 身中口方口	20	
148	76	59	S104 カマド内底 S104 カマド内底 S104 カマド内底	埋土下位 埋土上-中位 床面	3 1 1	土器部 片割 土器部 片割	体部下手	長脚型 体部下手	-	<110>	楕円ハタメ	楕円ハタメ	7c後半 身中口方口	21	

品目名	例	寸法	出土地点	部位	単位	数量	種類	形状	規格	寸法	重量(kg)	材質	備考	年代	出土層	
150	76	60	SD18 SD18 遺物集中	甕上(黒褐色土)上の黒 灰層	2 5	7 土師器	杯	口縁~底 部	口縁~底 部	<180> 底径	6.50	76 赤土	有段で口縁が傾斜しなから黒褐色土に落ちる。底径は約180mm、口縁は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	22
151	76	60	SD18	甕上(黒褐色土)上の黒 灰層	7	7 土師器	杯	口縁~底 部	口縁~底 部	<170> 底径	6.50	76 赤土	有段で口縁が傾斜しなから黒褐色土に落ちる。底径は約170mm、口縁は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	23
152	76	60	SD18 SD18 遺物集中	甕上(黒褐色土)上の黒 灰層	1 12	1 土師器	杯	口縁~底 部	口縁~底 部	<177> 底径	5.6	76 赤土	有段で口縁が傾斜しなから黒褐色土に落ちる。底径は約177mm、口縁は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	24
153	76	60	調査区(東側)付遺 物集中	遺物集中(上の黒褐色土層)	1	1 土師器	杯	口縁~底 部	口縁~底 部	<160> 底径	6.50	76 赤土	無段で口縁が傾斜しなから黒褐色土に落ちる。底径は約160mm、口縁は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	25
154	76	60	SD18 SD18 新編 C-5&T SD18	甕上(黒褐色土)上の黒 灰層	1 1	3 土師器	段脚盤	口縁~底 上半	口縁~底 上半	<224> 底径	6.70	76 赤土	有段で底径は上から下への傾斜が急激で、口縁は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	26
155	76	60	調査区(東側)付遺 物集中	黒褐色土 層(黒褐色土)上の黒 灰層	1	2 土師器	段脚盤	底径	底径	<95.0> 底径	6.50	76 赤土	底径が傾斜ナシで傾斜ナシ。底径は約95mm、底径は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	27
156	76	60	SD18 SD18 新編 C-5&T	甕上(黒褐色土)上の黒 灰層	1 1	62 土師器	段脚盤	底径	底径	183 底径	7.0	25.8 赤土	底径が傾斜ナシで傾斜ナシ。底径は約183mm、底径は傾斜ナシ。	76 赤土	遺物集中	28

第14表 H29土製品観察表(121, 122, 128, 129, 143, 144, 149, 157)

図番	国	寄附	市土地点	部位	磁質	磁種	用途	片断数(個)			重量(g)	調査年代	調査・発見など	年代	備考	図録
								長さ	幅	厚さ						
121	67	57	S01 土製品1	床面	4	土製品	磁種	変形	6.0	6.0	0.9	3.4	1197	新田河原町, ナズ瓦形, 側面に縦筋ナズリが浅くする	7c 後半	37
122	67	57	S01 F8	床面	1	土製品	磁種	変形	5.2	5.1	0.9	3.9	772	新田河原町, ナズ瓦形, 側面より面を覆ってている	7c 後半	38
128	71	57	S02 土西溝	床面	1	土製品	磁種	変形	5.9	5.9	0.9	1.8	76.0	新田河原町, ナズ瓦形, 側面にナズリ, 下面を中空	7c 後半	39
129	71	57	S02 土東溝	床面	1	土製品	磁種	変形	3.9	3.9	0.8	2.0	81.9	河原町, ナズ瓦形, 側面にナズリ	7c 後半	40
143	73	59	S03 土製品1	床面	1	土製品	磁種	変形	3.9	5.5	0.7	3.1	87.9	新田河原町, ナズ瓦形, 側面に全周する縦筋ナズリと 牛乳瓦で付いた縦筋あり, 下面を覆ってている	7c 後半	41
144	73	59	S03 土製品2	床面	1	土製品	磁種	変形	3.8	3.9	0.8	2.7	90.4	新田河原町, ナズ瓦形, 側面に全周する縦筋ナズリ, 下面を覆ってている	7c 後半	42
137	76	60	S03 遺跡奥中 土製品1	床面	1	土製品	磁種	変形	5.3	5.2	0.7	1.6	44.9	白根町, ナズ瓦形, 側面にナズリ, 側面は直線あり	7c 後半	43
149	76	59	S04 土ナズ瓦	床面	1	土製品	焼土土層	一部	5.4	3.4	-	3.1	46.5	不整石, 工具類有り	7c 後半	44

第15表 H29石製品観察表(123)

図番	国	寄附	市土地点	部位	種類	形状	材質	用途	片断数(個)			重量(g)	調査年代	特徴	年代	備考	図録
									長さ	幅	厚さ						
123	67	56	S01 石製品	床面	石製品	有孔石製品	凝灰岩	丸形・卵形磨石	変形	7.9	6.1	2.9	82.9	磨石	7c 後半	中土代(中室)一新在 代官第三瓦	56

第16表 H29金属製品観察表(130)

図番	国	寄附	市土地点	部位	種類	形状	材質	用途	片断数(個)	重量(g)	調査年代	特徴	年代	備考	図録	
																長さ
130	71	57	S02 Q5W	床面	金属	床面	方子	中央大銅	1	0.08	0.13	0.13	217	別部之基部の礎石, 先頭部が凸出し, 基部は右側部の内側部	7c 後半	37

第17表 H29焼石観察表(124, 115, 158)

図番	国	寄附	市土地点	部位	種類	形状	用途	年代	備考	図録
124	-	56	S01 東西溝	床面上	焼石瓦石	3.2	7c 後半	58		
115	-	53	S06	焼土土壁	焼石瓦石	127	7c 後半	39		
136	-	60	遺跡内東側 S01(4~5m)	焼土土壁	焼石瓦石	4.0	7c 後半	60		

() 残存部

() 焼石

VI 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

伏津館跡は、岩手県九戸郡野田村大字野田第 21 地割 79-1 ほか (北緯 40° 06' 38", 東経 141° 48' 28") に所在する。測定対象試料は、掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土坑、炭窯から出土した木炭の合計 15 点である (表 1)。

伏津館跡は中世城館で、時期は 15 世紀後半と考えられている。試料が出土した掘立柱建物跡、廃棄土坑はこの時期に属する。また、S I 05 竪穴住居跡は縄文時代晩期～弥生時代、S I 01～03 竪穴住居跡は 7 世紀後半、炭窯はこれらより新しい時期に推定されている。

(2) 測定の意義

試料が出土した建物跡の建築時期 (廃絶時期)、炭窯の使用時期、廃棄土坑の形成時期を明らかにし、城館の造営時期を検討する。

(3) 化学処理工程

- (a) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (b) 酸・アルカリ・酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (c) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (d) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (e) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (f) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- (a) δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (b) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(c) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(d) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、FD-1が $590 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-2が $670 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-3が $490 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-4が $950 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-5が $900 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-6が $510 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-7が $650 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-8が $550 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-9が $640 \pm 20\text{yrBP}$ 、FD-10が $710 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、FD-1が1319 ~ 1401cal ADの間に2つの範囲、FD-2が1285 ~ 1382cal ADの間に2つの範囲、FD-3が1420 ~ 1440cal ADの範囲、FD-4が1031 ~ 1151cal ADの間に3つの範囲、FD-5が1047 ~ 1167cal ADの間に3つの範囲、FD-6が1414 ~ 1431cal ADの間の範囲、FD-7が1290 ~ 1387cal ADの間に2つの範囲、FD-8が1329 ~ 1417cal ADの間に2つの範囲、FD-9が1295 ~ 1387cal ADの間に2つの範囲、FD-10が1272 ~ 1288cal ADの範囲で示される。建物跡出土試料は推定より若干古い年代値で、特にFD-10は古い値を示した。また、炭窯出土試料は推定と反して建物跡よりも古い値となった。

竪穴住居跡SI01、SI02、SI03から出土した試料3点(FD-11、12、15)の ^{14}C 年代は、1460 \pm 20yrBP (FD-11)から1300 \pm 20yrBP (FD-12)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古いFD-11が590 ~ 636cal ADの範囲、最も新しいFD-12が673 ~ 764cal ADの間に2つの範囲で示される。FD-11は古墳時代後期から終末期頃に相当する値で、推定とおおむね近いが、若干古い。FD-12、13は古墳時代終末期から奈良時代頃に相当し、推定と一致する(佐原2005)。

竪穴住居跡SI05から出土した試料2点(FD-13、14)の ^{14}C 年代は、FD-13が2490 \pm 20yrBP、FD-14が2510 \pm 20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、FD-13が760 ~ 551cal BCの間に3つの

1 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

範囲、FD-14 が 770 ~ 556cal BC の間に 4 つの範囲で示され、縄文時代晩期後葉頃に相当する (小林 2009、小林編 2008)。推定年代に含まれる結果である。

なお、今回測定された試料の年代については、次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された木炭は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、これらの木が死んだ年代は測定結果より新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新石器時代のはじまり 第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (‰)
IAAA-13336	FD-1	曲輪 1 S801 掘立柱礎物跡 (P10) 炭化材	木炭	AAA	-8.17 ± 0.37	590 ± 30	92.95 ± 0.24
IAAA-13337	FD-2	曲輪 1 S801 掘立柱礎物跡・塚溝 (西部)	木炭	AAA	-5.33 ± 0.36	670 ± 30	92.05 ± 0.25
IAAA-13338	FD-3	曲輪 1 S804 掘立柱礎物跡内・煎色灰・焼土混シト層	木炭	AAA	-23.53 ± 0.33	490 ± 30	94.11 ± 0.24
IAAA-13339	FD-4	SW01 煎色・焼土	木炭	AAA	-14.67 ± 0.36	950 ± 30	88.86 ± 0.26
IAAA-13340	FD-5	SW02 煎色・焼土	木炭	AAA	-25.12 ± 0.32	900 ± 30	89.37 ± 0.25
IAAA-14205	FD-6	曲輪 1 SK24 土坑・2 層中	炭化材 (木炭)	AAA	-14.56 ± 0.33	510 ± 30	93.87 ± 0.25
IAAA-14206	FD-7	曲輪 2 S802 掘立柱礎物跡 (伊崎・柱礎)	炭化材 (木炭)	AAA	-14.46 ± 0.27	650 ± 30	92.25 ± 0.27
IAAA-14207	FD-8	曲輪 1 S104 掘立柱礎物跡 (P123)・柱礎	炭化材 (木炭)	AAA	-22.64 ± 0.28	550 ± 30	93.35 ± 0.24
IAAA-14208	FD-9	曲輪 1 S104 掘立柱礎物跡 (P131)・柱礎	炭化材 (木炭)	AAA	-22.09 ± 0.29	640 ± 30	92.34 ± 0.23
IAAA-14209	FD-10	曲輪 1 S 自 05 掘立柱礎物跡 (R69)・焼土	炭化材 (木炭)	AaA	-23.58 ± 0.28	710 ± 30	91.50 ± 0.24
IAAA-172141	FD-11	S801 掘立住居跡 カマド燃地面土	炭化材 (木炭)	AAA	-25.43 ± 0.22	1,490 ± 30	83.38 ± 0.23
IAAA-172142	FD-12	S802 掘立住居跡 カマド内炭 1	炭化材 (木炭)	AAA	-28.44 ± 0.22	1,300 ± 30	85.10 ± 0.25
IAAA-172143	FD-13	S805 掘立住居跡 炉上炭 5	炭化材 (木炭)	AAA	-28.89 ± 0.22	2,400 ± 30	73.31 ± 0.21
IAAA-172144	FD-14	S805 掘立住居跡 炉上炭 7	炭化材 (木炭)	AAA	-25.98 ± 0.22	2,550 ± 30	73.18 ± 0.22
IAAA-172145	FD-15	S803 掘立住居跡 カマド炭 1	炭化材 (木炭)	AAA	-28.30 ± 0.23	1,320 ± 30	84.88 ± 0.25

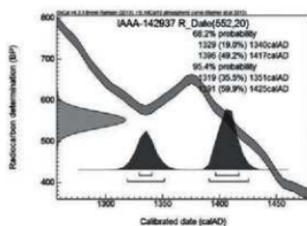
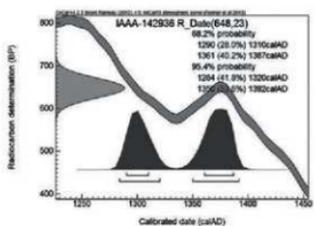
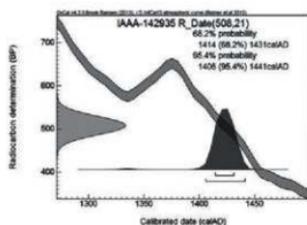
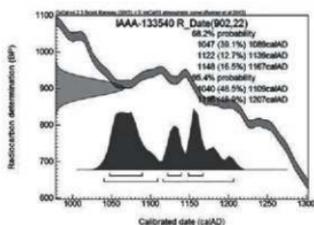
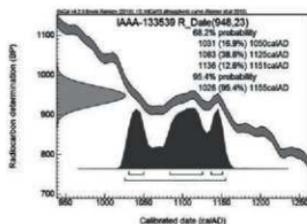
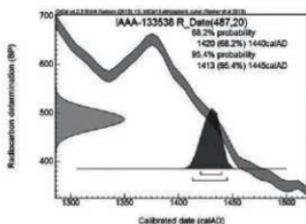
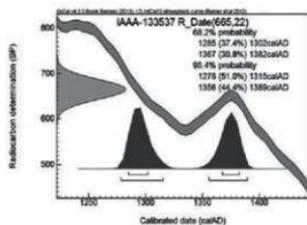
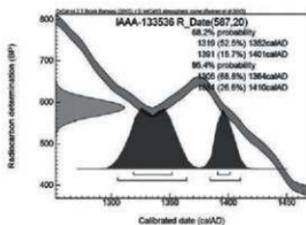
[I9605・#7125・#8800]

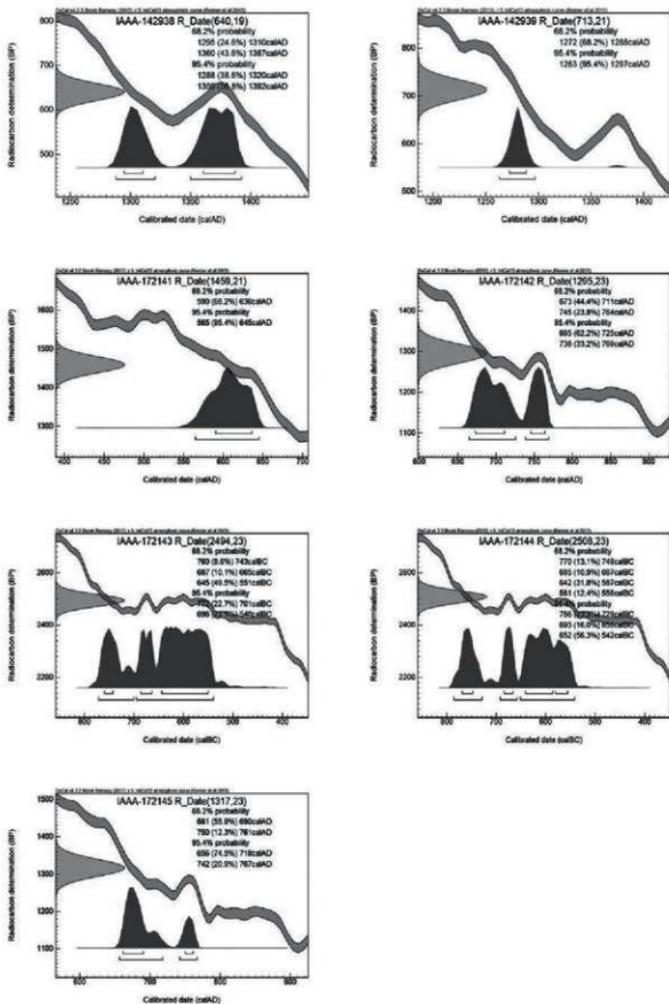
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133636	610 ± 20	92.73 ± 0.23	587 ± 20	1319calAD - 1302calAD (52.5%) 1391calAD - 1401calAD (15.7%)	1306calAD - 1364calAD (68.8%) 1384calAD - 1410calAD (26.6%)
IAAA-133637	670 ± 20	91.98 ± 0.24	665 ± 22	1288calAD - 1302calAD (37.4%) 1367calAD - 1382calAD (30.8%)	1278calAD - 1313calAD (61.0%) 1306calAD - 1389calAD (44.4%)
IAAA-133638	460 ± 20	94.39 ± 0.23	487 ± 20	1420calAD - 1440calAD (68.2%)	1413calAD - 1445calAD (65.4%)
IAAA-133639	940 ± 20	88.92 ± 0.25	948 ± 23	1031calAD - 1050calAD (16.9%) 1083calAD - 1125calAD (38.6%) 1136calAD - 1151calAD (12.9%)	1026calAD - 1155calAD (65.4%)
IAAA-133640	900 ± 20	89.35 ± 0.24	902 ± 22	1045calAD - 1088calAD (39.1%) 1125calAD - 1139calAD (12.7%) 1148calAD - 1167calAD (16.5%)	1040calAD - 1109calAD (48.5%) 1116calAD - 1207calAD (46.9%)
IAAA-142805	500 ± 20	93.96 ± 0.25	508 ± 21	1411calAD - 1431calAD (68.2%)	1406calAD - 1441calAD (66.4%)
IAAA-142906	640 ± 20	92.35 ± 0.26	648 ± 23	1290calAD - 1310calAD (28.0%) 1261calAD - 1287calAD (40.2%)	1284calAD - 1320calAD (41.8%) 1350calAD - 1392calAD (52.6%)
IAAA-142907	510 ± 20	93.80 ± 0.24	552 ± 20	1329calAD - 1340calAD (19.0%) 1396calAD - 1417calAD (49.2%)	1319calAD - 1351calAD (35.5%) 1391calAD - 1425calAD (49.9%)
IAAA-142908	590 ± 20	92.89 ± 0.22	649 ± 19	1295calAD - 1310calAD (24.6%) 1360calAD - 1387calAD (43.6%)	1288calAD - 1320calAD (38.0%) 1350calAD - 1392calAD (56.8%)
IAAA-142909	690 ± 20	91.77 ± 0.23	713 ± 21	1272calAD - 1288calAD (68.2%)	1263calAD - 1297calAD (65.4%)
IAAA-172141	1470 ± 20	83.30 ± 0.22	1439 ± 21	590calAD - 606calAD (68.2%)	565calAD - 645calAD (65.4%)
IAAA-172142	1350 ± 20	84.50 ± 0.25	1286 ± 23	673calAD - 711calAD (44.4%) 745calAD - 764calAD (23.8%)	665calAD - 725calAD (62.2%) 728calAD - 789calAD (53.2%)
IAAA-172143	2560 ± 20	72.72 ± 0.21	2494 ± 23	760calBC - 743calBC (8.6%) 967calBC - 965calBC (0.1%) 645calBC - 551calBC (49.5%)	772calBC - 791calBC (22.7%) 696calBC - 546calBC (27.7%)
IAAA-172144	2530 ± 20	73.03 ± 0.21	2508 ± 23	770calBC - 748calBC (3.1%) 885calBC - 667calBC (10.9%) 641calBC - 387calBC (41.8%) 581calBC - 556calBC (2.4%)	786calBC - 729calBC (23.2%) 693calBC - 668calBC (16.0%) 652calBC - 342calBC (66.2%)
IAAA-172145	1370 ± 20	84.30 ± 0.24	1317 ± 23	661calAD - 690calAD (55.9%) 700calAD - 761calAD (12.3%)	606calAD - 718calAD (74.5%) 743calAD - 787calAD (60.9%)

[参考値]

1 放射性炭素年代測定 (AMS測定)





[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

2-1 樹種同定

吉川純子(古代の森研究会)

伏津館跡は野田村大字野田第21地割に位置し、海岸線から西に約1400mの丘陵に立地している。本遺跡では弥生時代前期末葉～中期初頭および古墳時代末と見られる焼失住居跡から炭化材が検出された。弥生時代前期末葉～中期初頭と古墳時代末の炭化材はともに住居構築材の可能性が高いことから、各時期の住居構築材における木材利用状況を調査する目的で分析をおこなった。今回分析に供した試料は弥生時代前期末葉～中期初頭4点、古墳時代末6点である。炭化材は乾燥後に剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向に割りプレパラートに固定して実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で観察・同定をおこなった。弥生時代前期末葉～中期初頭および古墳時代末の焼失堅穴住居跡から出土した炭化材同定結果を表1に示した。

弥生時代の炭化材4点はクリとコナラ属コナラ節が2点ずつで同数であり、試料数はやや少ないが弥生時代の建築材としてクリとコナラ節を優先的に利用した可能性が高い。岩手県内の縄文～弥生時代住居から出土した建築材の可能性のある炭化材としては、縄文後期の馬立Ⅱ遺跡ではクリとコナラ節が、縄文晩期の曲田Ⅰ遺跡では炭化材のほとんどでクリを出土し(山田1993)、大日向Ⅱ遺跡でもクリが優占する(伊東ほか2012)など、クリを多用しコナラ節も優先的に選んで利用する傾向にある。

古墳時代末の炭化材6点はクリ4点、コナラ属コナラ節2点で、古墳時代においてもこれら2種が建築材として多用されていたとみられる。出土例としては時期をやや下るが奈良時代の久慈市源道遺跡や水沢市の石田Ⅱ遺跡などでは住居跡出土炭化材の大半がクリで次に多いのがコナラ節材となっていて(1993)、本遺跡の出土傾向と似ている。縄文時代以降の東北地方では近世頃まで建築材としてクリとコナラ節材の確認数がかなり多く、本遺跡はこの傾向と調和的である。

表1 伏津館跡から出土した炭化材の樹種

試料番号	袋番号	遺構	層位		時期	樹種
6	20	SI01	カマド燃焼面上	-	古墳末	クリ
7	21	SI02	床面	焼失住居上層材	古墳末	コナラ属コナラ節
8	23	SI02	床面	焼失住居上層材	古墳末	クリ
9	25	SI02	床面	焼失住居上層材	古墳末	クリ
10	29	SI02	カマド内	焼失住居上層材	古墳末	クリ
11	33	SI03	カマド内埋土	焼失住居上層材	古墳末	コナラ属コナラ節
12	34	SI05	炉上部	焼失住居上層材	弥生時代前期末葉～中期初頭	クリ
13	35	SI05	炉上部	焼失住居上層材	弥生時代前期末葉～中期初頭	コナラ属コナラ節
14	36	SI05	炉上部	焼失住居上層材	弥生時代前期末葉～中期初頭	クリ
15	37	SI05	炉上部	焼失住居上層材	弥生時代前期末葉～中期初頭	コナラ属コナラ節

以下に出土した炭化材の形態記載をおこなう。

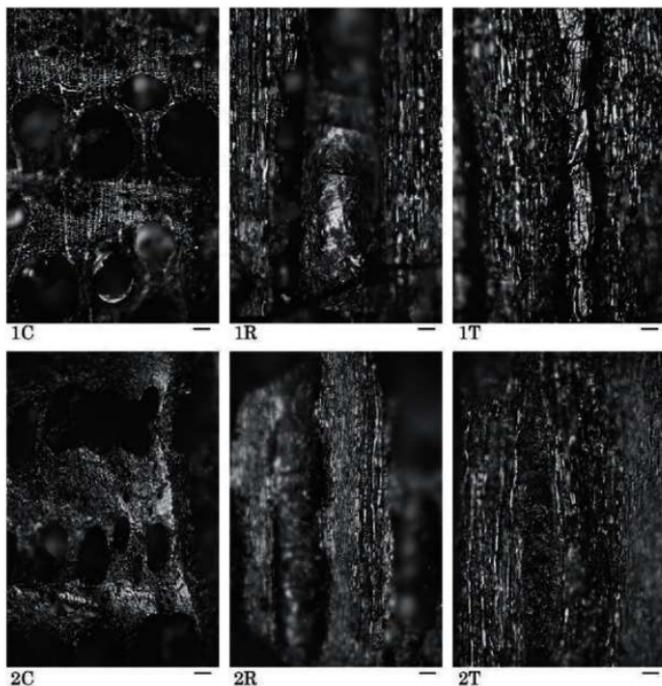
コナラ属コナラ節(*Quercus sect. Prinus*): 年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同性で単列と幅の広い複合型の広放射組織がある。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して薄壁の角張った小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同性で単列である。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社.

山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会. 242p.



図版1 伏津館跡出土炭化材の顕微鏡写真

1. クリ (SI02末面、袋25) 2. コナラ属コナラ節 (SI03カマド内埋土、袋33)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

2-2 樹種同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、伏津館跡より出土した炭化材について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

(2) 試料と方法

試料は、伏津館跡より出土した掘立柱建物の柱材の炭化材5点である。室町時代前半に位置づけられ、中世城館に関連する遺構から出土したものである。試料の詳細は結果表に記す。

樹種同定の方法は次のとおりである。まず、試料を割り折りして新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柀目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の断面を作製する。同定は、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 伏津館跡における樹種同定結果

No.	発No.	出土地点	層位	内容	結果(学名/和名)
1	9	SB02掘立柱建物跡(P40)	柱痕	柱材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
2	10	SB02掘立柱建物跡(P41)	柱痕	柱材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
3	12	SB04掘立柱建物跡(P121)	柱痕	柱材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
4	15	SB04掘立柱建物跡(P131)	柱痕	柱材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
5	134	SB04掘立柱建物跡(P10)	柱痕	柱材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面では道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸はだ木など広く用いられる。

(4) 所見

同定の結果、伏津館跡の掘立柱建物の柱材の炭化材は、すべてクリであった。

クリは重硬で保存性が良い材で、縄文時代から柱などの建築部材としての利用が多く、比較的良好に使われる樹木である。本遺跡でもクリの性質から、選んで柱材に利用したと考えられる。地域は異なるが、同時期の泉屋遺跡においてもクリの柱材が利用されている。クリは温帯に広く分布する落葉広

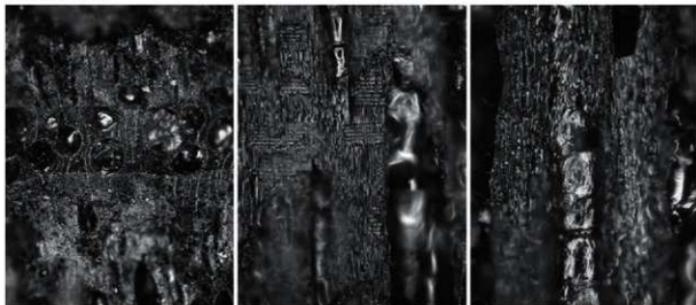
葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。また乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。遺跡周辺の植生を反映しており、地域的な用材または流通によってもたらされたと考えられる。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久(2012)木の考古学。雄山閣。p.449。
佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p.20-48。
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版。p.49-100。
高地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。p.296。
高橋利彦(1997)平泉町泉屋遺跡第15次調査出土材の樹種。泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 一関遊水地事業関連遺跡発掘調査。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集。財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。p.401-411。
山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会。p.242。

2 樹種同定

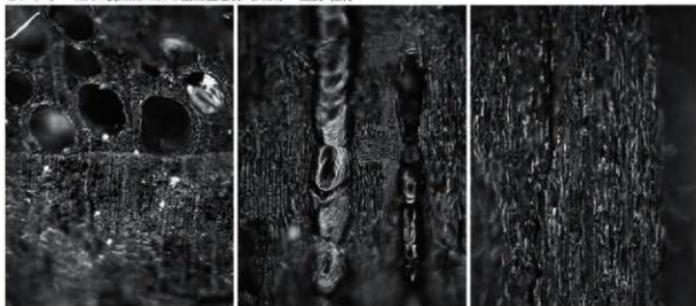
伏津館跡の木材



横断面 0.4mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
1. クリ №.2 袋№.10 SB02独立柱建物 (P41) 柱底 柱材



横断面 0.4mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
2. クリ №.3 袋№.12 SB04独立柱建物 (P121) 柱痕 柱材



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
3. クリ №.5 袋№.134 SB04独立柱建物 (P10) 柱痕 柱材

3 貝類・動物遺存体同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。また、歴史時代の遺跡の発掘調査が増加し、中・近世都市の発掘調査も増加し、食文化などの動物利用が明らかになりつつある。

(2) 試料

試料は室町時代の土坑SK24から出土した貝類及び貝類破片、動物遺存体である。

(3) 方法

同定は、試料を肉眼で観察し、現生標本、貝類図鑑(奥谷2000)を参考に、形態の特徴を比較して行った。

(4) 所見

貝類同定結果を表2に、動物遺存体同定結果を表3に示す。

表2 伏洋館跡における貝類同定結果

遺構名	検出層位	結果(学名/和名)		個数	左右	その他破片
SK24	埋土下位	Mytilidae	イガイ科	2	右1, 左1	648g
		Mytilidae?	イガイ科?	(++)	殻皮	
		Callista brevisiphonata	エゾワスレ	2	右1, 左1	
		Unknown shellfish	不明	5		

表3 伏洋館跡における動物遺存体同定結果

遺構名	検出層位	結果(学名/和名)		個数	部位/部分/左右	その他破片
SK24	埋土下位	Sus scrofa	イノシシ	3	上顎骨 M3 右	同一個体

1) 貝類

腹足綱の科・属・種不明が1点、二枚貝綱のイガイ科(右1左1)2点、エゾワスレ(右1左1)2点と同定された。また、イガイ科のものと思われる殻皮が複数確認された。イガイ科は殻頂が遺存しており、ムラサキガイ、イガイ、エゾイガイなどの可能性がある。

2) 哺乳類

イノシシと思われる上顎 M3(右)が1点同定された。

参考文献

奥谷喬司2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

3 貝類・動物遺存体同定

伏津館跡の貝類



1 イガイ科 (右・左)



5.0mm



2 エゾワスレ (右・左)



5.0mm

伏津館跡の動物遺存体



3 イノシシ (上顎骨 M3 右)

5.0mm

4 目貫の成分分析

公益財団法人元興寺文化財研究所
保存科学研究室

X線ラジオグラフィ像から、目貫は複数の部材からなると考えられ、部材により濃度が大きく違うように見える(図1右)。その違いが部材のどのような差異によるものか、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(日立ハイテクサイエンス EA6000VX)を用いて材質面から検討した。

エネルギー分散型蛍光X線分析法(XRF)は、試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する方法で、本測定では大気中で1.2×1.2mmのコリメータを用い、50kVの管電圧で100秒間行った。なお、X線管球はロジウム(Rh)である。

結果と考察

目貫の分析箇所aとb(図1)をXRFにて測定したところ、鉄(Fe)、銅(Cu)、銀(Ag)、金(Au)、水銀(Hg)を検出した(表1、図2・3)。銅素地に鍍金を施したものと考えられた。

aでは銅を強く金を弱く、bでは銅を弱く金を強く検出した。aよりbの方が厚い鍍金層であったため金、銅の検出強度に差ができたと考えられた。

金は銅よりX線を通しにくいいため、X線ラジオグラフィ像(図1右)の濃度の違いは鍍金層の厚さを反映したものと考えられた。

表1 XRF分析結果(検出強度)

Z	元素	元素名	ライン	分析箇所 a (cps)	分析箇所 b (cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	559.466	419.954	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	46984.735	12843.716	7.86-8.23
47	Ag	銀	K α	622.723	4367.626	21.84-22.37
79	Au	金	L α	38930.834	50393.855	9.51-9.90
80	Hg	水銀	L α	12829.343	18382.229	9.78-10.18

[分析箇所]



図1 目貫(A20140960 No.2)の分析箇所a、b(右: X線ラジオグラフィ像)

[スペクトル]

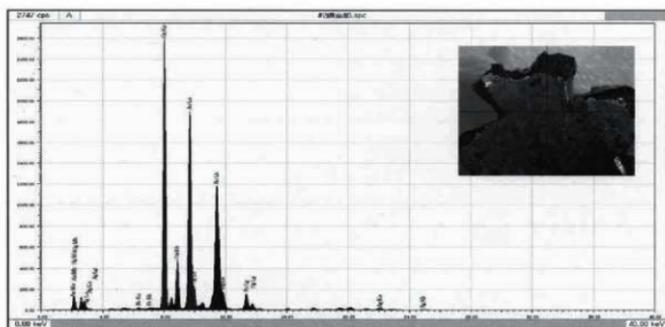


図2 伏津館跡出土目貫の分析箇所aのXRFスペクトル

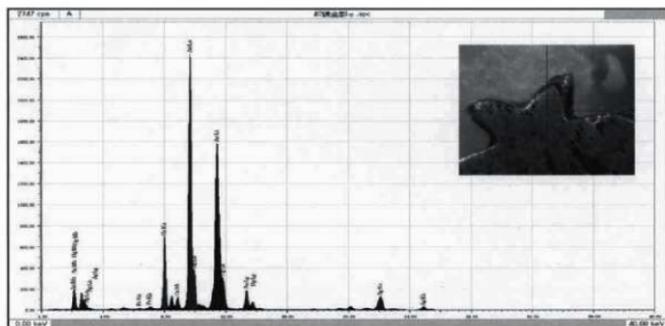


図3 伏津館跡出土目貫の分析箇所bのXRFスペクトル

(文責 川本耕三)

Ⅶ 総 括

1 縄文・弥生時代

3年にわたる調査から、縄文時代の陥し穴状遺構10基、弥生時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡1棟が確認され、縄文土器ビニール3袋、弥生土器ビニール1袋、石器10点が出土した。

縄文時代の遺構・遺物は、北側緩斜面と南側谷部で見つかっている。陥し穴状遺構は、北側緩斜面から1基、南側谷部から9基確認されており、いずれも溝状の平面形である。位置は、秋田川沿いの川筋や南側の谷筋に認められることから、水場に集まる獲物を狙って仕掛けられていると見られる。南側谷部の陥し穴状遺構の平面形と配列からは、SK 03～05、SK 06・07、SK 09・11、SK 10・19のセットが想定されることから、いくつかの時期に分けられるかもしれない。

また、北側緩斜面から出土した91の円筒下層d1式に比定される深鉢や、西斜面から出土した92後期中葉後半に比定される深鉢片からは、近接する調査区外に該期集落が存在する可能性を示唆している。

弥生時代の遺構・遺物は、北側緩斜面と南端南向き緩斜面のS I 05竪穴住居跡周辺から見つかっている。土器からは、S I 05竪穴住居跡周辺が弥生前期末～中期初頭の青木畑～谷起島式であるのに対して、遺物のみ出土の北側緩斜面は弥生中期後半の川岸場式と年代観にややズレがある。いずれも近接する調査区外に該期集落の存在が考えられ、特に竪穴住居跡の確認されている南端では、調査区東側の南向き緩斜面に竪穴住居が広がっていると見られる。

2 古 代

平成25年度の調査で北側緩斜面と南側谷部から11世紀後半の炭窟跡2基と、平成29年度の調査で南端調査区から7世紀中頃～後半に廃絶したと考えられる竪穴住居跡4棟、焼土1基、溝跡1条が見つかった。炭窟跡は出土遺物はなく、また形状が不整形と長楕円形、規模も異なることから異なる用途に用いるための炭作りが行われていたと考えられる。平成28年度に当センターが調査を行った野田村玉川の上代川遺跡からは、計40基を超える大型長楕円形の炭窟跡が確認されており、これから作られた炭は製錬工程に用いられたことが分かっている（未報告）。これから推測すれば、SW 02の長楕円形は製錬工程、SW 01の不整形はそれ以外の小炭を用いる小鍛冶などに使われたと考えられ、調査区外となる南側谷部の東側には、鉄生産に関連する遺構が点在している可能性がある。

平成25年度の調査で見つかった竪穴住居跡から土師器28点のほか、土製紡錘車など土製品が8点、刀子1点、琥珀3点が出土しており、土器の年代観から7世紀中頃～後半の狭い範囲に取まると考えられる。出土した坯は有段内黒で占められており、段が明瞭で、丸底もあるがやや平底風に変化している。段から下位にケズリを残しているものが多く、125・126・134のように口縁を直立気味に作って、さらに指でなぞってもう一段表現している形状の坯もある。甕は縦位のケズリ・ハケメで器面調整したものが大半で、頸部の段も明瞭である。140のように、ハケメ後に粗いミガキが入る場合もある。長胴甕は口縁に最大径を持ち、140・156のように胴部に最大径のある甕も含まれる。上記土師器の器形・器面調整から、諏訪沿岸の7～8世紀の土器について纏めた宇部氏の論考にある栗岡式の2期（7世紀中葉～後葉）の特徴に近似し、またAMS年代測定で示されたS I 01の590calAD-636calAD（ 1σ ・68.2%）、S I 02の673calAD-711calAD（ 1σ ・44.4%）、S I 03の661calAD-690calAD（ 1σ ・55.9%）とも概ね調和的であることから上記年代観が支持される。

3 室町時代

(1) 伏津館の変遷

第IV章第1項で述べた通り、伏津館は小さな曲輪を並べた簡素な戦時のための軍事的な城館である第1期から、大型の掘立柱建物を有する領内を支配するための居館である第2期へと変遷することが分かった(第78・79図)。

第1期では、最高所に第2期造成で削平されたであろう旧曲輪が存在すると想定され、下段には旧曲輪1～3や整地以前の曲輪2などが配置される。旧曲輪1と曲輪2の間には高さ約5mの切岸1が普請され、曲輪3から武者走り状遺構1が通路状に連結している。また、盛土・整地された旧曲輪1には掘立柱建物1棟が構築されており、失われた最高所にも物見櫓や小形の建物など作事遺構が存在した可能性がある(第78図)。

第2期に至ると、曲輪1の平場の拡張に伴い、最高所にあった旧曲輪(推定)を切り崩し、旧曲輪1～3を埋め立て、L字形に巡る土塁1の構築を行っている。これに合わせて、曲輪2も整地が進められている。曲輪1・2には大型の建物や付属する小型の建物が配置され、切岸1は防御機能を失い、連絡通路として利用されたと考えられる。曲輪2の大型掘立柱建物であるSB02は、四面庇付きで格付が高いことから、客人をもてなす迎賓館のような公的な施設という性格を持っていたと考えられる。これに対して、曲輪1は居住空間として利用されたと考えられ、SB01・04の大小建物やSB05・06の建物も領主の邸宅として使用されたと想定できる。曲輪1は居住空間、曲輪2は政治的な空間と位置付けられることから、2つの曲輪の関係は主郭・副郭という位置付けではなく、いずれも領主のいる主郭で、上段・下段という一つの空間と捉えることができる(第79図)。

曲輪1のSB01・04建物周辺からは多量の炭化物が認められており、この建物の焼失と城館の廃絶は密接に関わっていると考えられる。炭化した柱材のAMS年代測定では14世紀後半の年代値が多く示され(伐採年代)、炭化物・焼土範囲では15世紀前半の数値が得られていること、出土遺物の下限年代が15世紀後半であることから見て、この時期が城館の廃絶時期と位置付けられる。

江戸時代以降の野田地域は九戸郡の一部となるが、伏津館が営まれた室町時代後半は閉伊郡に含まれている(菅野2015)。この郡境の名残は、近世の野田通代官所が現在の久慈市宇部町に置かれていたことに見ることができる。16世紀前半までの史料では、八戸南部氏とその庶流の七戸南部氏、三戸南部氏、一戸南部氏が南部氏一族に認められており、このうち一戸南部氏が閉伊郡に勢力を拡大する。宮古市黒森神社の1539(天文8)年3月6日棟札に「大檀那南部源朝臣千徳二郎殿」があり、また、1501(文亀元)年に南部氏の一門一戸信濃守政英が、閉伊郡千徳城に転じた説があることから、少なくとも、16世紀前半までには一戸南部氏が閉伊郡に入っていたと推測される(岩手県1972)。

一戸南部氏が閉伊郡に入った時期と伏津館が廃絶した時期がほぼ重なることからみて、それまで伏津館を居城として野田地域を統治していた旧在地領主(館主不明)を、一戸南部氏の力を借りた閉伊郡内の新しい勢力である野田氏が滅ぼし、その後閉伊郡最北の抑えとして久慈郡を治める久慈氏と相対したのではないかと考察される。(北田)



第80図 曲輪2・SB02・03掘立柱建物の想定図

(2) 室町時代後半の出土遺物

第Ⅳ章第4項で、出土遺物の報告を行った。中世の遺物に限ってみるならば、個々の遺物には製作時期差がみられるものの、廃棄された時期は、永楽通寶の出土から15世紀初頭を廻り得ず、また、最も新しい陶磁器類の年代観から15世紀後半代であると位置づけられる。

さらに、この年代観について他方面から検証した場合、40の古瀬戸四耳壺や、51の唐物ともみなされる銅合金製花瓶は、わび茶隆興以前の喫茶文化の中で重用されたと位置づけられているため16世紀初頭以前となる可能性が高まり、それとともに、青磁碗の中いわゆる珠光青磁と称される同安窯系の製品が存在せず、龍泉窯系の製品のみで占められることもこの考えを支持するとみなしておきたい。

一方、自然科学的手法であるAMS法を用いた放射性炭素年代測定に依るならば、掘立柱建物の炭化柱材などの分析から得られ数値には15世紀中頃を示すものが多く、この値が建築部材を切り出した時期と捉え、その値に建物が構築され機能した時間幅を加算し、廃絶するに至った時期を15世紀後半とすることも可能となろう。これら二項目から得られた情報を加味することによって、遺物の年代観から得られた遺構の廃絶時期を15世紀後半とする見解に対し、より蓋然性が高められるものとする。

引き続きこれらの遺物が出土した地点や状況からうかがえる様相について述べる。埋没時期が遡るのは曲輪1(第1期)から出土した50の目貫である。これ単独で出土し、周辺からは刀剣類そのものや、その他の鉄製金具が出土していないことから、出処や堅木の柄に掛けられていたものが脱落した可能性が高い。

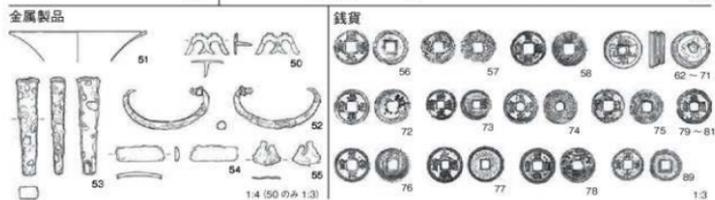
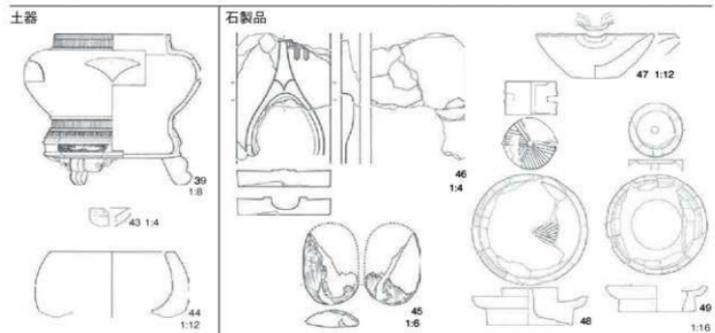
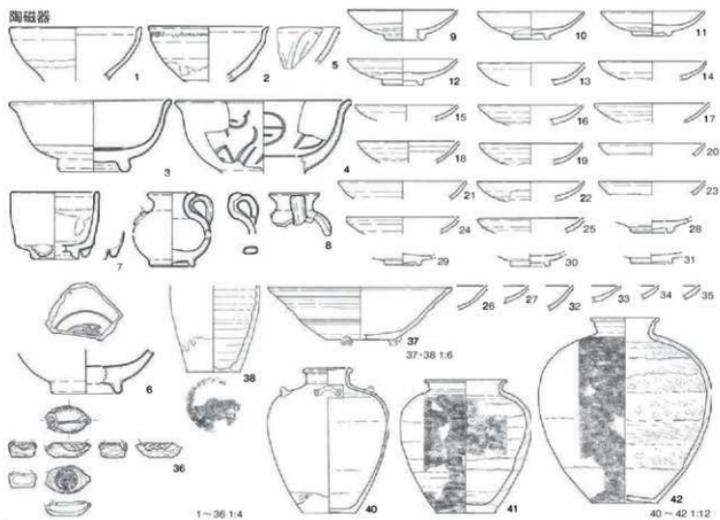
第2期では多種多様の遺物が出土したが、それらの出土位置と分布状況を整理することにより、これらが使用され、廃絶に至った過程をある程度推し量ることができる状況にあると考えられるため、その様相を以下のⅠからⅣ群に分けて記す。

Ⅰ群は、曲輪1南西側のS B01付属屋の南東隅から土塁南側裾部にかけての狭い範囲とし、Ⅱ群は、曲輪1北西側に位置するS B04掘立柱建物とS B01付属屋との間から北西側土塁の裾部にかけての区域、Ⅲ群は、曲輪1掘立柱建物S B04床面の中央からその北半部にかけての位置、Ⅳ群は、曲輪1のほぼ中央の空地とする。その他、局所的にまとまって出土するものや、単独で出土する例も数地点で確認された。

Ⅰ群は、遺物の集中度が最も高く、その内容も豊富である。輸入陶磁器では、3と4の青磁碗と、白磁小皿のほとんどの破片が含まれ、小皿の多くと、4の青磁碗を除いて接合する率も高い。二つの青磁碗は、群中の南側に偏って互いの破片が混在するような状態で出土し、中でも3は、ほぼ旧状をうかがえるまでに復原できたことから、この場所に一括廃棄された状況をとどめている可能性が高い。そして、4は、この場所以外の試掘トレンチなど、やや離れた地点からも破片が出土したため、廃棄後に原位置を移動した可能性も考慮され、また、これに起因して接合する破片が僅少となったとも考えられる。

なお、この群中出土遺物の特徴として、主に白磁小皿にみられる事象であるが、その露胎部分に煤などの炭化物が付着し、黒く変色している部分が観察されることがあげられる。附近の堆積層中には炭化物なども多く含まれていたため、廃棄された要因に火災が深く関与していることが推定される。つづいて陶器類では、42の越前焼の破片が北東側にまとまって出土する傾向にあったが、それらの一部は、そこからさらに北東側にも拡散して曲輪1全体に分布するような状況を呈し、最も離れたものでは曲輪1から曲輪2へと続く斜面の西側に寄った位置で出土した破片も確認された。

つづいて、41の大畑・松山腰窯産と推定される壺の破片は、集中部の北東側と、そこから西側に向かっ



第81図 室町時代の遺物集成

た土塁が北に屈曲する部分の裾部にかけてまとまる傾向にあったが、一部はそこから北東にも広がり、先の例と同じく、曲輪1全体に破片が散乱する状況であった。なお、38の古瀬戸梅瓶も、この一群の中に数点の破片が含まれていた。

石製品では48aから49bの石茶臼片が少量含まれ、特に細片となった擦り目部分の破片の出土が目立つ傾向にあった。

金属製品では51の花瓶が東部で出土したが、その状況は陶磁器類と同じく土塁裾部の崩落土内からではあったが、層位的にはそれらよりやや上位に埋もれていた。

Ⅱ群においては、他の破片の一部とともに40の古瀬戸四耳壺片の出土が目立った。位置的には先述の大畑・松山腰窯産と推定される壺片が出土した部分からさらに北東部にかけての部分で、一部はそれよりもさらに北東の土塁裾部にまで達していた。

Ⅲ群では、7の香炉と8の青磁水注が、S B04掘立柱建物床面において破砕されたような状態で出土した。しかし、ここでも廃棄後に移動した破片があったとみえ、香炉底部片の一つは、そこから離れた曲輪1北東側の平坦面において出土し、水注の底部片の一部にもやや離れた地点から出土するものがあった。

これら二個体は上記のとおりそのほとんどが床面直上の焼土層内から破片となって出土し、その一部は床面に食い入るような状態であったが、すべてにおいて顕著な被熱痕跡を確認することはできなかった。しかし、特徴的なのは、貫入に沿うようにして氷の如く砕けた破片の存在で、その大きさは極端なものでは1mm前後にまで細片化していた。この要因が何であるのかは不明だが、あるいは高温に晒された環境から急冷されるなどして生じる現象なのではとも推測している。なお、これら2点ほど極端ではないが、砕けたような状態の破片は、上記の3や4の青磁にも確認され、ここでも罹災痕跡をとどめていたことから、火熱に係わる事象である可能性はより高まるものとも考えられる。

さらに、同じⅢ群内のS B04掘立柱建物北西隅附近では、36の古瀬戸水鳥形水滴や、52の鉄製引手、54の円環状を呈した青銅製品も単独で出土している。

Ⅳ群は、曲輪1のほぼ中央部の空閑地において出土した遺物群を指す。これらはまた、破片が広範囲に散在する傾向が高いことも指摘できる。その代表は48a・bと49a・bの石茶臼で、大形の破片を中心とし、そこから遠方に向かうにしたがって小片となった破片が散乱し、その一部は、南西側土塁裾で検出されたⅠ群の遺物集中部にまで拡散する状態であったことは先述のとおりである。

陶器類では、37の古瀬戸鉞目付大皿が、ここから北東にかけての区域で口縁部と底部が2ヶ所に分かれて出土し、39の風炉もこれに重なる場所において各部位の破片が散乱した状態で出土した。金属器類では、53の鑿や楔とも推定される鉄製品や、55の用途不明の青銅製品がおのおの単独で出土している。

つづいて、局所的にまとまって出土した例には、1と2の天目茶碗と、45の温石、洪武通寶以外の銭貨がある。天目茶碗は、曲輪1土塁南西部でも小片が若干出土したが、大形の破片は、土塁の北側裾部を中心とし、そこから北東にかけての場所や、掘立柱建物S B01内からもその破片の一部が出土したため、この付近において廃棄されたものとみなされる。

45の温石は、曲輪1北側土塁裾部からS B01掘立柱建物附近より3片に分かれて出土し、うち2点は接合が可能であった。

また、銭貨類は、曲輪2・S B02西側から掘立柱建物側柱の柱穴隔、S K39墓坑底面から出土する傾向が高く、これらには単体で出土する例と、既述したとおり銭繒状に重なって出土する例もみられた。単独で出土したものには、5と6の青磁と、46の石硯、73の銭貨がある。5の青磁碗は曲輪1南斜面の崩落土上位から、そして、6の青磁碗は曲輪1南東側平坦面の際に近い地点から出土した。なお、

後者の近辺からは、73の洪武通寶も表土直下より出土している。さらに、石硯は曲輪2の掘立柱建物S B 02間仕切柱である柱穴P 45を主としその附近から数片に分かれた位置で出土した。

なお、これまでに述べた分布状況については、おのおの場所に保管されていた陶磁器類などが、城館の廃絶に伴って回収され、I群に一括廃棄されたとの解釈も成り立とう。しかし、ここでは白磁小皿の小片までもが集中して出土したことに加え、それらよりも大きな風炉の破片がほとんど含まれてはおらず、さらに、もっとも回収がたやすいと考えられる大形の石茶臼や石鉢片が存在しないことや、Ⅲ群の香炉と水注が破片とはなっていたものの、ほぼ原位置をとどめた状態でまとまって出土したことから、ここではその考えを採らない。

遺物の組成から見た場合には、唐物である天目茶碗や青磁碗などの輸入陶磁器や花瓶、さらには古瀬戸の祖母懷茶壺、最高級に位置づけられる風炉、そして、石茶臼の存在が刮目に値する。

これらの遺物は、列島内東端の北東北に居ながらにして、当時の式制に則った喫茶文化を嗜む人物の存在を証明するとともに、瀟洒な古瀬戸の鳥形水滴や石硯を併せ持つことにより書に対する素養、聞香炉にも使用できる小形の香炉を所持していたことから、香に対する心得まで有していたとも考えられる。そしてまた、目貫や石硯の意匠に琴の部品や琵琶を選択している事実からは、音曲にまで通じていた可能性をも否定できない。

これらは、当時の文化の中心であった京都などで、15世紀中頃に以降興隆した文化の枢要的要素を網羅しており、この人物が茶・書・香・謡などに対する造詣が深かったことを推測させるのに充分である。一方、越前焼は、当時主流であった珠洲焼の日本海沿岸流通経路を越え、そこからさらに津軽海峡を経て太平洋回りで搬入されたと想定される点において特異といえる。そして、秋田県大畑・松山腰置産と推定される壺は、陸路で奥羽山脈から北上盆地を経て北上山地を經由し、沿岸から海路で日本海に出てこの地にもたらされたとみれば、雄物川を下り、河口から日本海沿岸を伝い、そこからは越前焼と同じ海路をたどって搬入されたと推測する方がより効率的かとも推測されるが、いずれにしろ、これらの物品が広範な経路をたどってこの地にもたらされたことは明白である。

以上の事実から、今回の出土遺物は、この地において都の文化にも通ずる豊かな教養と財力とを兼ね備え、その地位と経済力とを駆使して取り揃えた調度を掌中に収めていた館主の存在を証左する具体的資料として非常に重要な意味を持つ。

(三好)

おわりに

足掛け3ヵ年にわたる調査で、縄文時代・弥生時代・古代・室町時代の遺構・遺物を確認した。特に、室町時代後半の15世紀後半に廃絶した単一時期の中世城館からは、残存良好な遺構と豊富な種類の遺物が出土し、2時期に変遷する城館の姿を捉えることが出来た。

今回の調査成果が、東日本大震災から復興する野田村の新しい歴史に寄与することを願います。

(北田)

参考文献

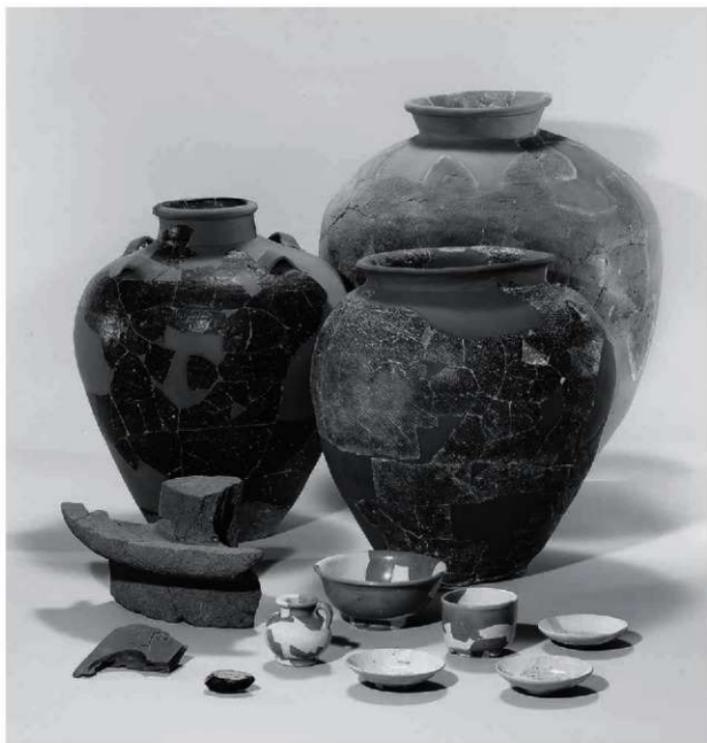
岩手県 1972 『岩手県史 第三巻中世篇下』

佐藤敏幸 2008 『社説地方における在地社会の変動と古代陸奥国の律令体制形成過程の研究』東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻博士課程学位論文

宇部剛保 2014 『報告5 糠部沿岸の7～8世紀の土器と集落』『岩手考古学会第46回研究大会(野田大会)北三陸の蝦夷・兼手刀』岩手考古学会

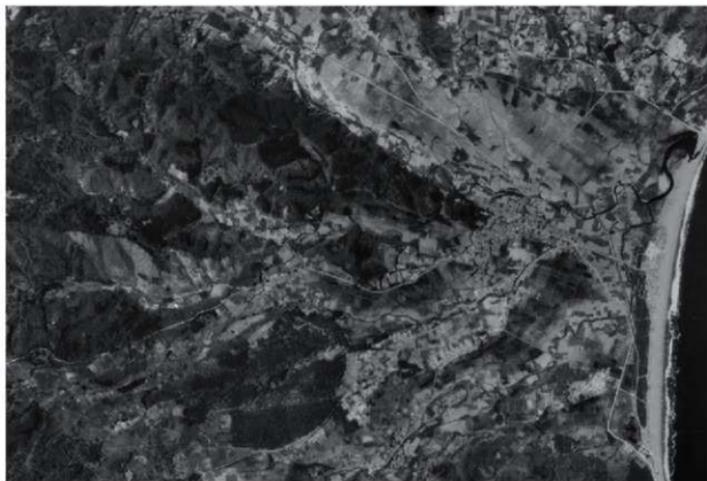
菅野文夫 2015 『戦国時代の久慈と糠部-野田氏一族の動向-』『野田村考古学フォーラムⅡ-中世の野田を考える-』野田村教育委員会

写真図版



室町時代の出土遺物





遺跡範囲全体（上が北）



遺跡範囲拡大（上が北）

写真図版1 米極東空軍撮影航空写真（昭和23年5月16日撮影）



灌跡範囲全体（上が北）



灌跡範囲拡大（上が北）

写真図版2 国土地理院撮影航空写真（昭和43年9月13日撮影）



伐採前風景（北から）



伐採前風景（曲輪1から西斜面を望む）



伐採風景（西斜面を北から望む）



伐採直後の曲輪1（北東から）



伐採直後の場1（東から）



雑物撤去した曲輪6・7（曲輪2から）



雑物撤去した西斜面と曲輪3（曲輪1南端から）



雑物撤去した切岸1（曲輪2東から）



全景（北から）



全景（北から）



全景（東から）



西边断面A（北東から）



南边断面B（北から）

写真図版4 土塁1（1）



土壘1断面C (北から)



曲輪1 東側盛土整地層断面D (南西から)



旧曲輪2・3 北側全景 (南西から)



曲輪1 東側盛土整地層断面F (西から)



旧曲輪2・3 南側全景 (北から)



曲輪1 南東側盛土整地層断面E (南西から)



曲輪1 盛土整地層断面G (東から)



曲輪1 (第2期) 北東隅斜面全景 (南から)

写真図版5 土壘1 (2)、曲輪1



完掘（北から）



遺物出土及び炭化物検出状況（北から）

写真図版6 SB 01 掘立柱建物跡（1）



焼土1 検出 (西から)



焼土1 断面 (西から)



P73・74 断面 (西から)



壁溝断面D (南から)



壁溝断面E (東から)



建物検出 (南から)



遺物出土及び炭化物検出状況 (南から)



青銅製花瓶出土状況 (南から)



実撮（北から）



実撮（北東から）

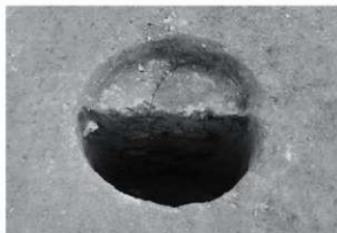
写真図版8 S B 04 掘立柱建物跡（1）



焼土 1 検出(北から)



焼土 1 断面(北から)



P 93 断面(西から)



P 106 断面(東から)



P 109 遺物出土状況(東から)



P 121 断面(東から)



P 130 断面(東から)



建物検出(南から)

写真図版 9 SB 04 掘立柱建物跡(2)



S K 35 全景 (北から)



S K 35 断面 (北から)



S K 36 全景 (北から)



S K 36 断面 (北から)



S K 37 全景 (南から)



S K 37 断面 (南から)



S K 38 全景 (南から)



S K 38 断面 (南から)

写真図版 10 S B 04 周辺の遺構 (1)



SD 11 全景 (南から)



SD 12 全景 (西から)



SD 13 全景 (南から)



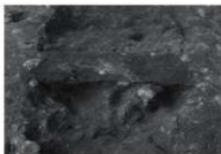
SD 17 全景 (南から)



SD 11 断面 (南から)



SD 12 断面 (西から)



SD 13 断面 (南から)

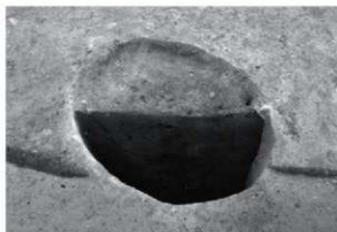


SD 17 断面 (南から)

写真図版 11 SB 04 周辺の遺構 (2)、SD 17 溝跡



全景（東から）



P 58 断面（南から）



P 59 断面（南から）



P 62 断面（北から）



P 63 断面（東から）

写真図版 12 S B 05・06 振立柱建物跡



P 68 断面 (北から)



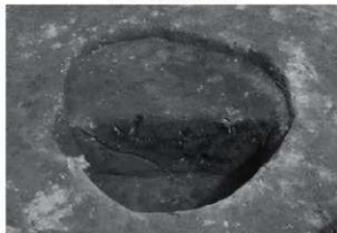
P 112 全景 (南から)



SK 24 全景 (南東から)



SK 24 断面 (南東から)



SK 27 断面 (西から)



SK 29 断面 (西から)



SK 31 全景 (西から)



SK 31 断面 (西から)

写真図版 13 SB 05・06 周辺の遺構



全景 (東から)



P 105 断面 (西から)



P 141 断面 (東から)



P 154 断面 (北から)



P 155 断面 (東から)

写真図版 14 S B 07 掘立柱建物跡



S K 41 全景 (西から)



S K 41 断面 (西から)



S K 41 桟土検出 (北から)



S K 42 全景 (東から)



S K 43 全景 (西から)



S K 43 断面 (西から)



S K 44 断面 (東から)



曲輪1 人力による表土掘削作業風景

写真図版 15 SB 07 周辺の遺構 (1)



S F 06 検出 (北から)



S F 06 断面 (南から)



S F 07 検出 (南から)



S F 07 断面 (西から)



S F 08 検出 (南から)



S F 08 断面 (西から)



S F 09 検出 (南から)



S F 09 断面 (南から)

写真図版 16 S B 07 周辺の遺構 (2)



S F 10 検出 (北から)



S F 10 断面 (南から)



S F 11 検出・断面 (北から)



平成 26 年度現地説明会の様子



S F 12 検出 (西から)



S F 12 断面 (西から)



S F 13 検出 (南から)



S F 13 断面 (南から)

写真図版 17 SB 07 周辺の遺構 (3)



P 147 全景 (西から)



P 147 断面 (西から)



P 152 断面 (東から)



P 160 断面 (西から)



P 162 全景 (北から)



P 163 断面 (西から)



P 164 全景 (西から)



P 164 断面 (西から)

写真図版 18 SB 07 周辺の遺構 (4)



S K 39 全景 (南西から)



S K 39 断面 (南から)



S K 39 銭貨出土状況 (北東から)



S K 40 断面 (南から)



古瀬戸水筒出土状況 (北から)



青磁香伊出土状況 (北から)



茶臼集中箇所出土状況 (南から)



青銅製目貫出土状況 (東から)

写真図版 19 S B 07 周辺の遺構 (5)、遺物出土状況



曲輪2 盛土整地層断面B (東から)



曲輪2 盛土整地層断面A (南西から)



曲輪2 盛土整地層断面A - B間 (南から)



曲輪2 盛土整地層断面A南側 (南西から)



曲輪2 切岸盛土造成の痕跡 (北西から)

写真図版 20 曲輪2



全景（東から）



先撮（南東から）

写真図版 21 SB 02 掘立柱建物跡（1）



P 15 断面 (北から)



P 18 断面 (東から)



P 36 断面 (北から)



P 37 断面 (東から)



P 44 断面 (西から)



P 45 石硯出土状況 (北から)

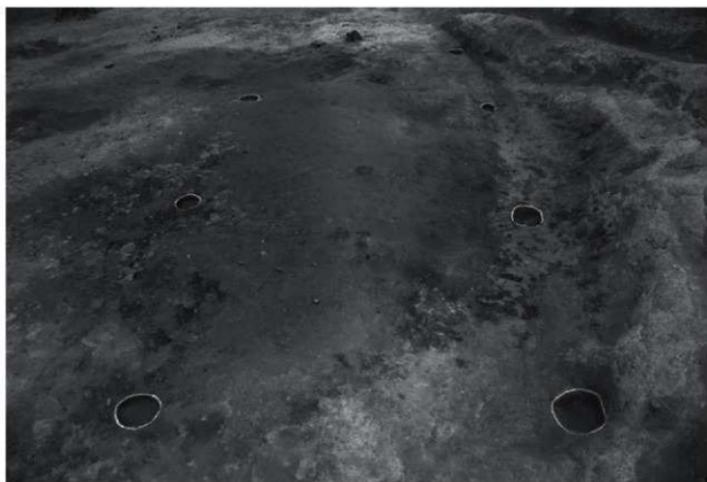


溝1・2南西隅完掘 (北西から)

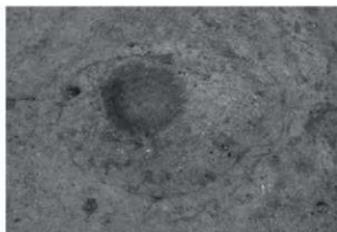


溝1 断面 (北から)

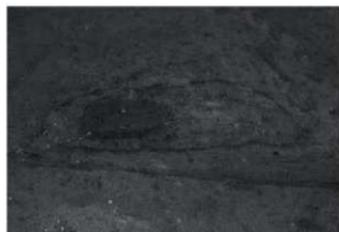
写真図版 22 SB 02 掘立柱建物跡 (2)



実撮 (西から)



焼土1 検出 (西から)



焼土1 断面 (西から)



焼土2 検出 (西から)



焼土2 断面 (西から)

写真図版 23 SB 03 掘立柱建物跡 (1)



P50 断面 (北から)



P52 断面 (北から)



P55 断面 (北から)



曲輪2完掘 (南西から)



SK08 断面 (北西から)

写真図版 24 S B 03 掘立柱建物跡 (2)、S K 08 土坑



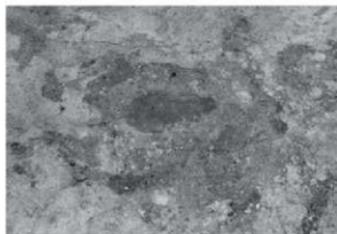
S K 12 検出 (西から)



S K 12 断面 (西から)



S K 13 断面 (西から)



S F 02 検出 (西から)



S K 14 検出 (西から)



S K 14 断面 (西から)



S K 20 断面 (北から)



切岸 1 根部崩落土茶臼片出土状況 (北から)

写真図版 25 曲輪 2 のその他の遺構



切岸1 全景 (北西から)



切岸1 縦断面 (北西から)



SD 03 全景 (東から)



SD 03 断面A (西から)



SD 03 断面B (西から)

写真図版 26 切岸1、SD 03 溝跡



全景（西から）



全景（南西から）

写真図版 27 SD 01 堀跡（1）、土塁 3



SD 01 断面A (西から)



SD 01 断面B (西から)



武者走り状遺構2全景 (西から)



土塁2全景 (西から)



土塁2断面A (南西から)



土塁2断面B (西から)



SK 21 全景 (南西から)



SK 21 断面 (南西から)

写真図版 28 SD 01 堀跡 (2)、土塁3、武者走り状遺構2、土塁2、SK 21 土坑



全景（西から）



断面C（東から）

写真図版 29 S D 02 堤跡



全景 (北西から)



西側全景 (北西から)



土壁1から曲輪3斜面断面E (南東から)



曲輪3崩落部分断面D (東から)



曲輪3崩落部分下側断面D (南東から)

写真図版 30 曲輪3



武者走り状遺構1（第1期）全景（西から）



武者走り状遺構1西端（第1期）全景（北西から）



武者走り状遺構1（第2期）断面A（北西から）



武者走り状遺構1（第2期）断面B（北西から）



武者走り状遺構1（第2期）断面C（北西から）



曲輪6全景（北西から）



曲輪7全景（南西から）



曲輪7南西側急斜面全景（北西から）

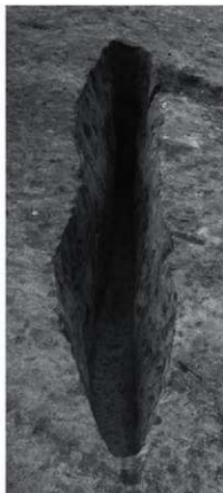
写真図版 31 武者走り状遺構1、曲輪6・7



S K 01 完掘 (南西から)



S K 06 完掘 (西から)



S K 07 完掘 (東から)



S K 09 完掘 (南東から)



S K 01 断面 (南西から)



S K 06 断面 (西から)



S K 07 断面 (東から)



S K 09 断面 (南東から)

写真図版 32 S K 01・06・07・09 陥し穴状遺構



S K 03 完掘 (南東から)



S K 04 完掘 (南東から)



S K 05 完掘 (北西から)



S K 11 完掘 (南東から)

写真図版 33 S K 03 ~ 05・11 陥し穴状遺構



S K 03 断面 (南東から)



S K 04 断面 (南東から)



S K 05 断面 (南東から)



S K 11 断面 (南東から)



S K 10 完掘 (東から)



S K 19 完掘 (東から)



S K 10 断面 (東から)



S K 19 断面 (東から)

写真図版 34 S K 03 ~ 05・10・11・19 陥し穴状遺構



SW01 検出 (北から)



SW01 断面 (北西から)



SW02 実掘 (西から)



SW02 断面 (南西から)



南側谷部基本層序 (東から)



南側谷部全景 (北西から)



南側谷部南斜面検出 (西から)



南側谷部雑物撤去作業風景 (北から)

写真図版 35 SW01・02 炭索跡、南側谷部基本層序ほか



土砂崩れ痕1 全景 (東から)



土砂崩れ痕1 断面 (東から)



土砂崩れ痕2 全景 (東から)



土砂崩れ痕2 断面 (東から)



中央埋没谷 全景 (南西から)



中央埋没谷 断面 (北西から)



曲輪1 北側急斜面崩落土核出 (北西から)



北側緩斜面 全景 (南西から)

写真図版 36 北側緩斜面の遺構



全景 (東から)



炉全景 (南から)



炉周辺炭化物出土状況 (東から)



P1断面 (東から)



作業風景 (東から)



全景（南から）



断面（西から）



カマド全景（南から）



P-1断面（南から）

写真図版 38 S I 01 竪穴住居跡（1）



カマド検出 (南から)



P 8 遺物出土状況 (西から)



床面遺物出土状況 1 (南から)



床面遺物出土状況 2 (南から)



埋土琥珀出土状況 (東から)

写真図版 39 S I 01 竪穴住居跡 (2)



全景（南東から）



断面（東から）



床面炭化物出土状況（南東から）



P 1 断面（北東から）

写真図版 40 S I 02 竪穴住居跡（1）



カマド全景 (南東から)



カマド燃焼面検出 (南東から)



カマド燃焼面断面 (南東から)



床面土製品出土状況1 (南から)



床面土製品出土状況2 (南から)

写真図版 41 S I 02 竪穴住居跡 (2)



全景（南から）



断面（南から）



カマド燃焼面検出（南から）



カマド煙道部断面（東から）

写真図版 42 S I 03 竪穴住居跡（1）



カマド全景 (南から)



床面遺物出土状況1 (西から)



床面遺物出土状況2 (東から)



床面遺物出土状況3 (東から)



床面遺物出土状況4 (南西から)

写真図版 43 S I 03 竪穴住居跡 (2)



全景（南東から）



断面（南から）



カマド崩落状況（南東から）



カマド煙出し部天井石出土状況（南東から）

写真図版 44 S I 04 竪穴住居跡（1）



カマド全景 (南から)



P 4 断面 (南から)



カマド周辺遺物出土状況1 (南東から)



カマド周辺遺物出土状況2 (南東から)



カマド周辺遺物出土状況3 (西から)

写真図版 45 S I 04 竪穴住居跡 (2)



全景 (南から)



断面A (南から)



断面B (南東から)



断面C (南東から)



北側底面遺物出土状況 (南東から)



南側底面遺物出土状況 (南から)



試験風景 (北から)

写真図版 46 SD 18 溝跡



S F 14 検出 (東から)



S F 14 断面 (南から)



調査区南壁断面1 (北から)



調査区南壁断面2 (北東から)



調査区南端断面1 (東から)



調査区南端断面2 (北東から)

平成 25・26 年度出土遺物 (1~98)

天目 (1・2)



1



2



3



4



7



8

青磁 (3~8)

白磁 (9~35)



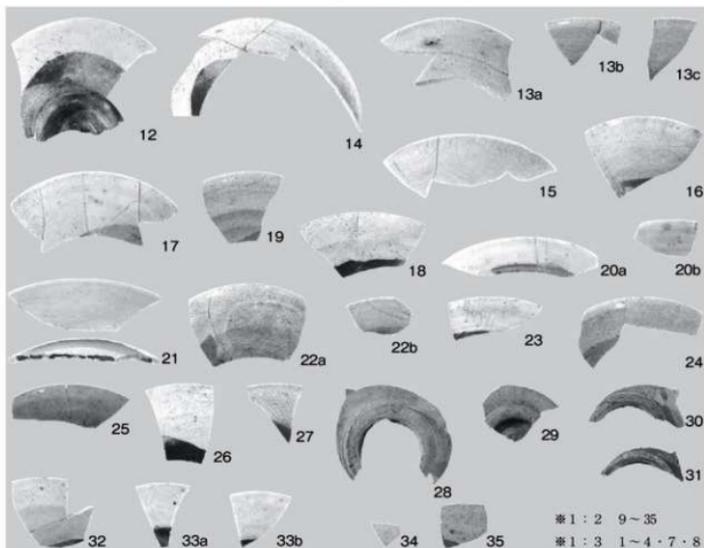
9



10



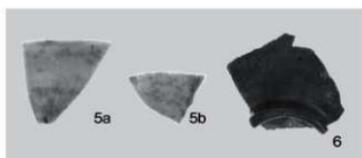
11



*1 : 2 9~35

*1 : 3 1~4・7・8

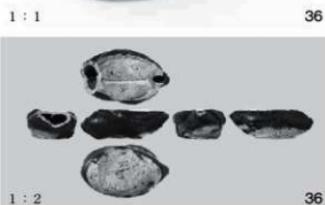
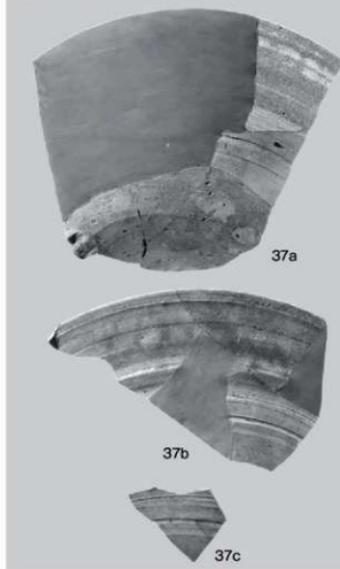
写真図版 48 平成 25・26 年度出土遺物 (1)



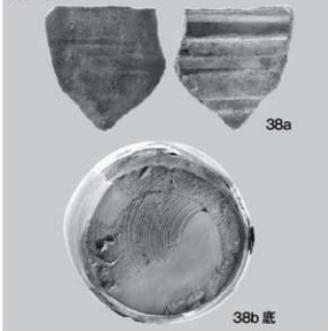
水滴 (36)



卸目付大皿 (37)



瓶子 (38)



火鉢 (43・44)



写真図版 49 平成 25・26 年度出土遺物 (2)

風炉 (39)



1 : 4

39

四耳壺 (40)



1 : 4

40

写真図版 50 平成 25・26 年度出土遺物 (3)

広口壺 (41)



1 : 4

41

無釉壺 (42)



1 : 5

42

写真図版 51 平成 25・26 年度出土遺物 (4)

石製品 (45 ~ 49)



45



46a



46b



47b



47a



47c

硯 (46)

石鉢 (47)



1 : 2



46a 1 : 3

47c

写真図版 52 平成 25・26 年度出土遺物 (5)

茶臼 (48)



1 : 4



48a 1 : 6

48b

茶臼 (49)

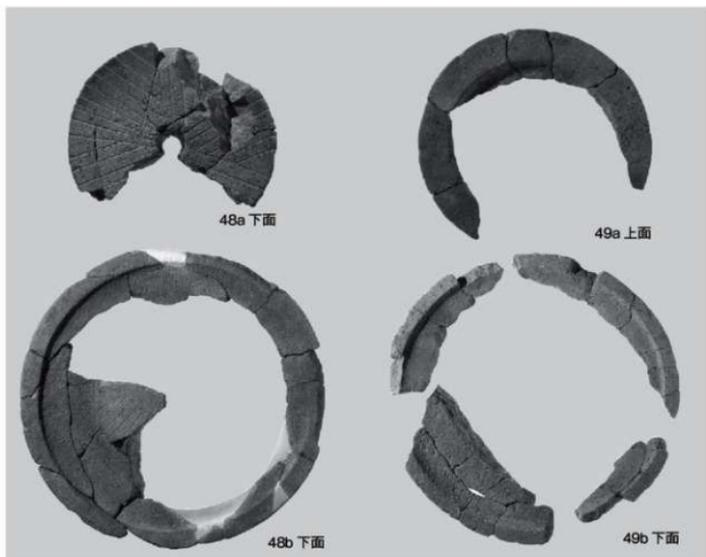


1 : 4

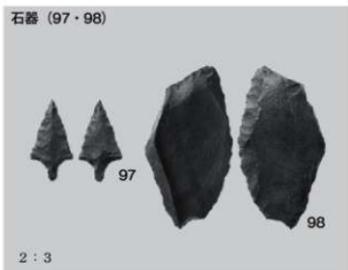
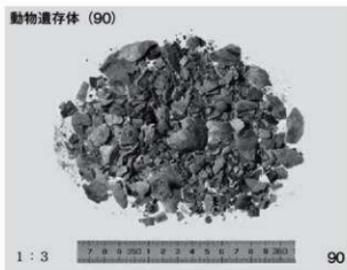
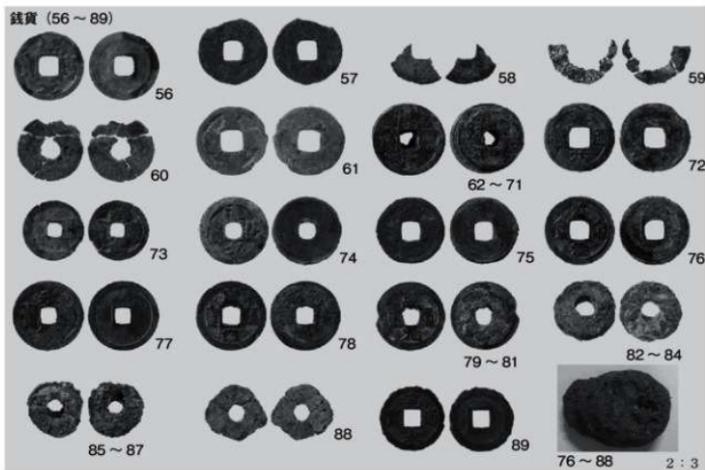
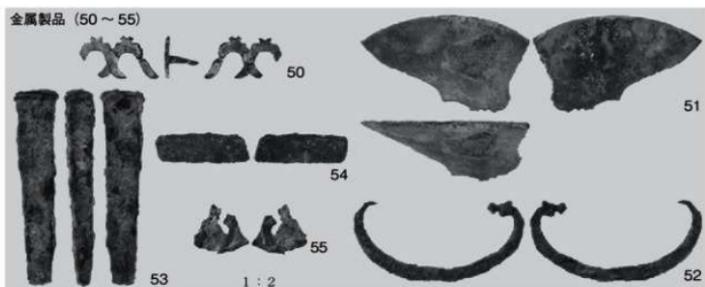


49a 1 : 6

49b



写真図版 53 平成 25・26 年度出土遺物 (6)



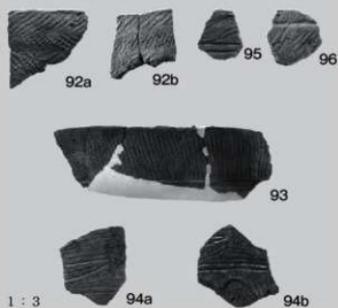
写真図版 54 平成 25・26 年度出土遺物 (7)



1 : 3

91

縄文・弥生土器 (91 ~ 96)

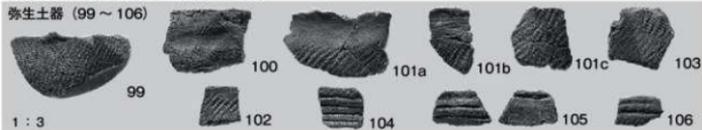


1 : 3

91

平成 29 年度出土遺物 (99 ~ 158)

弥生土器 (99 ~ 106)



1 : 3

石器 (107 ~ 114)



琥珀 (115)



1 : 3

115

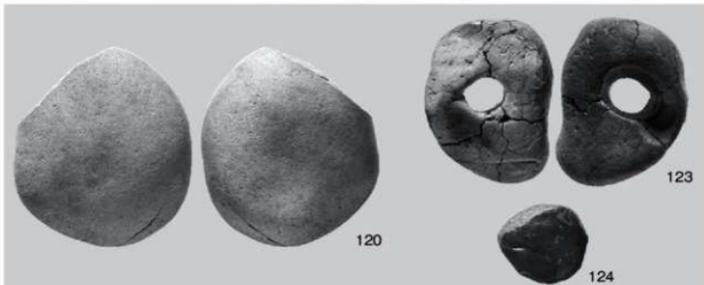


1 : 6 114

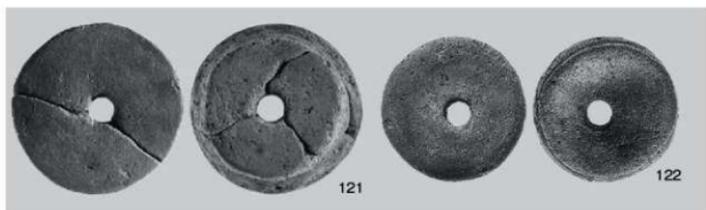
2 : 3 その他

写真図版 55 平成 25・26 年度出土遺物 (8)、平成 29 年度出土遺物 (1)

S I 01 竪穴住居跡 (116 ~ 124)



写真図版 56 平成 29 年度出土遺物 (2)



S I 02 壑穴住居跡 (125 ~ 130)



1 : 3

125



130a



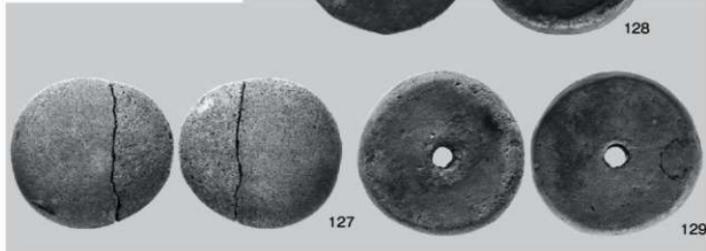
130b



126



128



127

129

S I 03 壑穴住居跡 (131 ~ 144)



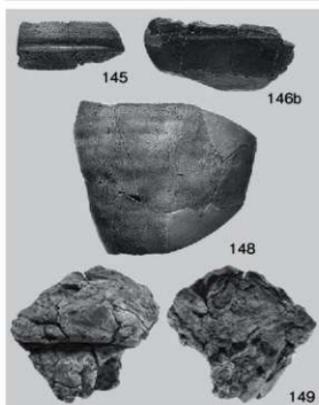
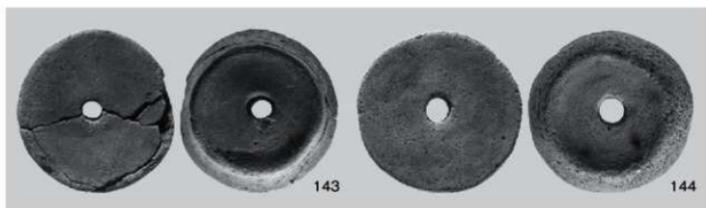
131



132



写真図版 58 平成 29 年度出土遺物 (4)



写真図版 59 平成 29 年度出土遺物 (5)



写真図版 60 平成 29 年度出土遺物 (6)

報告書抄録

ふりがな	ふしつだてあととはつちようさほうこくしよ							
書名	伏津船跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第695集							
編著者名	北田勲・三好孝一・伊藤武							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒0204853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2019年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
		緯度	経度					
ふしつだてあと 伏津船跡	岩手県九戸郡 野田村大字野 田第21地割 79-1ほか	03503	JG50-2353	40° 06' 38"	141° 48' 28"	2013.09.02～11.28	7,300㎡	三陸沿岸道 路施工に係 る発掘調査
						2014.04.10～08.18	7,000㎡	
						2017.10.16～12.07	850㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
伏津船跡	城船跡	縄文時代	陥し穴状遺構 10基	縄文土器 (前期末葉) 石器 (石鏃など)				
		弥生時代	竪穴住居跡 1棟	弥生土器 (前期末葉～中期初頭) 石器 (石鏃・石匙など)	南端調査区から確認した竪穴住居跡で、青木畑～谷起島式期の土器を出土している。			
		古代	竪穴住居跡 4棟 焼土 1基 炭甕跡 2基 溝跡 1条	土師器 土製紡錘車 有孔石製品 金属製品 (刀子) 琥珀	南端調査区から7世紀後半の竪穴住居跡4棟が確認され、明内川沿いの南斜面に集落が広がることが分かった。			
		室町時代	曲輪 7箇所 堀跡 2箇所 土塁 3箇所 切岸 1箇所 武者走り状 2箇所 独立柱建物跡 7棟 焼土 13基 土坑 27基 溝跡 15条 柱穴状ビット 167個	中国産陶磁器 (白磁・青磁・天目) 国産陶器 (古瀬戸水滷・鉢・瓶・壺、越前壺、産地不明壺、風埴、瓦貫鉢) 石製品 (石硯・温石・石鉢・茶臼) 金属製品 (日貫・花瓶) 銭貨 (浪米銭) 動物遺存体 (貝類)	15世紀後半に廃絶した城船から、計2期の大型の独立柱建物跡を有する領内を支配する在地領主の居館へと変遷する城船の様子が捉えられた。中でも、第2期は曲輪1・2で構成される主郭に四面庇付き掘立柱建物跡が建てられ、中国産の高価な陶磁器が多く出土するなど伏津館の在地領主としての力が強まったことが分かる。文献から館主を知ることはできないが、残された遺構・遺物から教養と財力を持った在地領主の姿がうかがわれる。			
要約	<p>三陸沿岸道路施工に伴い、3カ年で計15,150㎡の調査を行った。平成25・26年度に北側の中世城船、平成29年度に南側の弥生・古代集落の調査を行い、上記の遺構・遺物を確認した。</p> <p>特に15世紀後半に廃絶した中世城船は、遺構の残存も良好で多くの遺物が出土した。検出された普請・作事遺構から、第1期の小さな曲輪を並べた簡素な戦時のための軍事的な城船から、第2期の大型の掘立柱建物跡を有する領内を支配する在地領主の居館へと変遷する城船の様子が捉えられた。中でも、第2期は曲輪1・2で構成される主郭に四面庇付き掘立柱建物跡が建てられ、中国産の高価な陶磁器が多く出土するなど伏津館の在地領主としての力が強まったことが分かる。文献から館主を知ることはできないが、残された遺構・遺物から教養と財力を持った在地領主の姿がうかがわれる。</p> <p>今回の調査で、縄文時代は狩り場、弥生時代・古代は集落、室町時代は中世城船が運営されるなど時代背景に合わせて遺跡も大きく移り変わってきたことが分かった。大規模な普請と作事によって築かれた伏津館は、野田地域における室町時代後半(15世紀後半)の拠点的な中世城船と位置付けられる。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 695 集

伏津館跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成31年2月20日

発行 平成31年3月15日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号
電話 (0193) 71-1711
(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話 (019) 654-2235

印刷 第一印刷有限公司
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6-40
電話 (019) 646-6001

© (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019